

綿貫観音山古墳 I

墳丘・埴輪編

《本文・写真図版編》

1998

群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

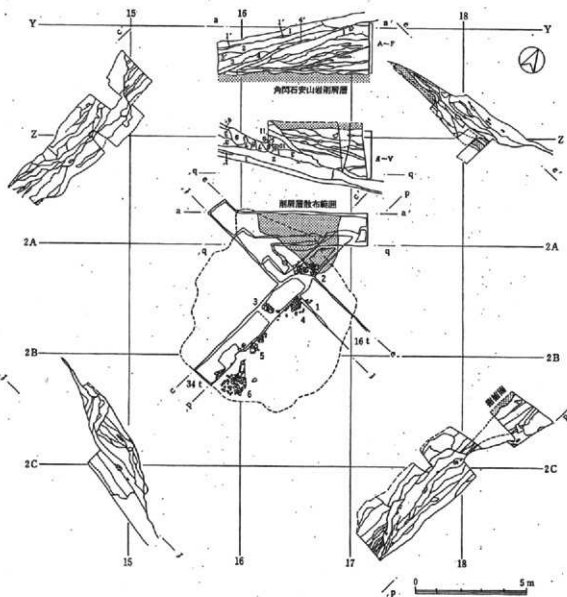
正誤表

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第242集

『綿貫観音山古墳Ⅰ』

例言 11 小野田哲憲→小田野哲憲
 101頁 10行 建築→建物
 103頁 第80図 土層中のNo.落ち→下記のとおり

- | | | |
|-----------|-------------------|----------------------------------|
| 1. 黄土 | 初期の年輪産時の層の黄土。 | A. 黒色土 |
| 1'. 黄土 | 初期の年輪産時の層の黄土。 | B. ローム |
| 2. 褐色土 | | C. 褐色土 |
| 3. 砂質褐色土 | | D. 褐色土とロームがとけあった状態。褐色が強い。 |
| 4. 褐色土 | | E. 褐色土とロームがとけなかった状態。褐色が弱い。 |
| 4'. 褐色土 | やや粗さを増す。 | F. 褐色土 Cよりもロームに多い土。ロームブロックを多く含む。 |
| 5. 褐色土 | ロームブロックを混入する。 | G. ローム下の褐色色階層ローム |
| 6. 褐色土 | ロームブロックを多量に混入する。 | |
| 7. 褐色土 | ロームブロックを多量に混入する。 | |
| 8. 砂質褐色土 | | |
| 9. 砂質褐色土 | | |
| 10. 砂質褐色土 | 褐色土・ロームブロックを混入する。 | |
| 11. 砂質褐色土 | ロームブロックを多量に混入する。 | |



第80図 風樹木墳実測図 (1:150)

綿貫觀音山古墳 I

墳丘・埴輪編

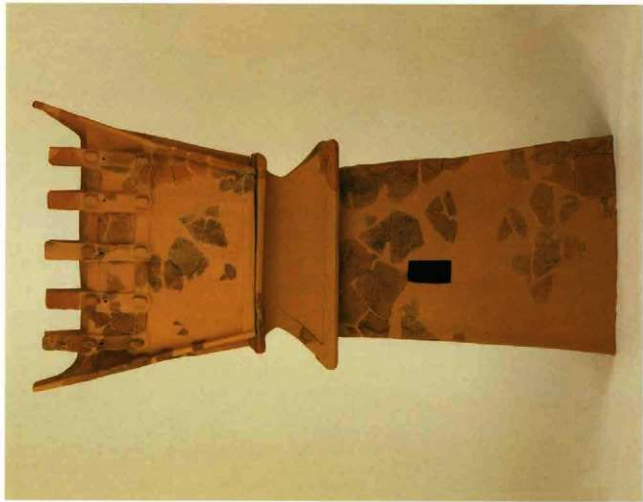
《本文・写真図版編》

1998

群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



馬形埴輪 (1745)



塔形埴輪 (1156)



男子人物埴輪 (1449)



女子人物埴輪 (1450)



女子人物埴輪 (1458)



男子人物埴輪 (1463)



男子人物埴輪 (1515)



女子人物埴輪の顔 (1459)



男子人物埴輪の顔 (1643)



盾持ち人 (1713)



盾形埴輪 (1289)



円筒埴輪

序

古代東国の一大中心地でありました上毛野国の群馬県は、多くの古墳が造られました。昭和10年に群馬県が古墳の所在を調査したところ、その数は8,234基にのぼりました。しかし第二次世界大戦後、その多くは農地として開墾され、また諸開発の対象となり消滅してしまいました。史跡観音山古墳も当初桑園として開発される予定でありましたが、昭和42、43年に関係機関により急速発掘調査されました。その結果、古墳の形態の優美さ、出土品の絢爛さが学術的にも、美術的にも全国的な注目を集めた古墳となりました。

関係機関の努力により古墳は保存されることになり、昭和48年には国史跡となりました。史跡指定と同時に古墳は公有地化され、昭和56年には県下初の「史跡公園」として開園され、広く県内外の人々に利用されています。また石室出土品は、昭和54年に国の重要文化財に指定されました。しかし古墳が史跡の指定等をうけたものの、発掘調査の成果を記録した報告書が諸般の事情により刊行されず、今日にいたりました。

群馬県教育委員会は、観音山古墳の学術上の重要性を鑑み、早期に調査報告書を刊行すべく計画を立て、当事業団に委託している過年度公共事業の平成5年度事業に観音山古墳を入れ、かつ関係者による「上野綿貫観音山古墳発掘調査報告書編集委員会」を発足させ、平成5年度より6年計画をもって報告書刊行事業をスタートさせました。

群馬県教育委員会より当事業を受託した当事業団では、関係機関、委員会等の指導を賜わりながら事業を進めました。膨大な発掘調査資料の内、まずは昭和42、43年の発掘調査、昭和51、52年度の史跡整備に伴う発掘調査資料の中から墳丘及び墳丘出土品資料の報告書刊行に着手し、5年間の歳月をかけて行いました。この度それが完了したので、ここに「綿貫観音山古墳発掘調査報告書」の第一分冊「墳丘・埴輪編」を上梓したく存じます。本編には「3人童女」を始めとするところの学術上貴重な人物、動物、器財等の埴輪が報告されており、来年度に刊行が予定されている第二分冊の「石室・遺物編」と共に、古代における東アジアの交流、我が国の古墳時代の研究等に大いに益するものがあると思います。

関係者の努力により発掘調査後30年余を経て報告書が刊行されましたが、この間報告書刊行に尽力された文化庁文化財保護部記念物課、同美術工芸課、東京国立文化財研究所、群馬県教育委員会、群馬県立歴史博物館、明治大学、発掘調査参加者、当事業団の関係職員等に衷心より感謝申し上げ、かつ本報告書が我が国の古代史解明に大いに活用される事を願ひ序とします。

平成10年3月25日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は綿貫観音山古墳（国史跡指定名称「史跡観音山古墳」）の発掘調査報告書である。
2. 編集にあたっては古墳の調査に関する内容の報告に留め史跡整備に関わる修理工事については別愛してある。これについては1981（昭和56）年に「史跡観音山古墳—保存修理事業報告書—」群馬県教育委員会が刊行されている。

3. 綿貫観音山古墳は、群馬県高崎市綿貫町観音山1572番他に所在する。

4. 本古墳の発掘調査は群馬県教育委員会が実施した。

5. 調査期間及び担当者は以下のとおりである。

第Ⅰ次 調査期間	1967（昭和42）年3月4日～3月17日
調査担当者	梅澤重昭（群馬県立博物館学芸員）
第Ⅱ次 調査期間	1967（昭和42）年7月25日～8月25日
調査担当者	大塚初重（明治大学文学部教授） 梅澤重昭（社会教育課主事補） 外山和夫（群馬県立博物館学芸員）
第Ⅲ次 調査期間	1967（昭和42）年11月20日～12月6日
調査担当者	第Ⅱ次調査に同じ
史跡 調査期間	1976（昭和51）年4月1日～1979（昭和54）年3月31日
整備 調査担当者	大塚初重（明治大学教授）（1976年度） 梅澤重昭（群馬県総務部管財課係長）（1976年度） 桜場一寿（文化財保護課保護主事）（1976～79年度） 大江正行（文化財保護課保護主事）（1976年度）
調査員	神保侑史（群馬県立吉井高校教諭） 清水久男（明治大学大学院生）

6. 本書の作成のための整理作業は、第Ⅲ次調査終了後の1969（昭和44）年2月19日～2月28日に遺物整理作業が実施された。また、1978（昭和53）年6月20日～1979（昭和54）年9月26日には埴輪の復元作業が実施された。この二度の作業を経て、群馬県埋蔵文化財調査事業団は群馬県教育委員会より委託を受け、1993（平成5）年4月1日～1998（平成10）年3月31日まで整理作業を実施した。なお、1993（平成5）年度には群馬県立歴史博物館において埴輪の復元作業が実施されている。

7. 本書の作成は、綿貫観音山古墳報告書刊行編集委員会の指導・助言のもと実施された。委員の構成は下記のとおりでである。

1995（平成7）年度編集委員会

委員長	大塚初重（明治大学教授）	副委員長	梅澤重昭（群馬大学教授）
委員	小林三郎（明治大学教授）	青木繁夫（東京国立文化財研究所）	
	外山和夫（群馬県立図書館）	桜場一寿（桐生女子高教諭）	
	高野賢行、赤山容造、平野進一、唐澤至朗（群馬県立歴史博物館）		
	中村英一、原田恒弘、神保侑史、小淵 淳、佐藤明人、徳江秀夫（事業団）		

荒畑大治、巾 隆之、津金澤吉茂、水田 稔、齊藤和之（文化財保護課）

1996（平成8）年度編集委員会

委員長 大塚初重（明治大学教授） 副委員長 梅澤重昭（群馬大学教授）

委員 小林三郎（明治大学教授） 青木繁夫（東京国立文化財研究所）

外山和夫（群馬県立文書館） 桜場一寿（桐生女子高教諭）

高野貫行、高橋久雄、岡部 央、唐澤至朗（群馬県立歴史博物館）

菅野 清、原田恒弘、神保佑史、小淵 淳、平野進一、佐藤明人、徳江秀夫（事業団）

土田 明、巾 隆之、津金澤吉茂、水田 稔、齊藤和之（文化財保護課）

1997（平成9）年度編集委員会

委員長 大塚初重（明治大学名誉教授） 副委員長 梅澤重昭（群馬大学教授）

委員 小林三郎（明治大学教授） 青木繁夫（東京国立文化財研究所）

外山和夫（群馬県立高崎青年の家） 桜場一寿（桐生女子高教諭）

荒畑大治、高橋久雄、岡部 央、唐澤至朗（群馬県立歴史博物館）

菅野 清、原田恒弘、神保佑史、小淵 淳、平野進一、佐藤明人、徳江秀夫（事業団）

土田 明・巾 隆之・津金澤吉茂・水田 稔・齊藤和之（文化財保護課）

8. 本書作成時の事業団組織及び担当者は以下のとおりである。

管理・指導 中村英一、菅野 清／近藤 功、原田恒弘／赤山容造／佐藤 勉、蜂巣 実、渡辺 健／
神保佑史／齊藤俊一、小淵 淳、巾隆之、佐藤明人

事務 担当 国定均、笠原秀樹、井上 剛／須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、高橋定義、
宮崎忠司、岡嶋伸昌

監 修 大塚初重、梅澤重昭

編 集 徳江秀夫

文章 執筆 梅澤重昭（群馬大学教授）第1章1～4、第2章、第6章1(2)・2(5)(6)・3

桜場一寿（群馬県立桐生女子高教諭）第1章5、第3章2、第6章1(1)

朽津信明（東京国立文化財研究所）第5章1

藤根 久・古橋美智子（パレオ・ラボ）第5章2

徳江秀夫 第3章1・2(2)～(4)、第4章、第6章2(1)～(4)

図版 作成 福島恵理子（事業団嘱託員）桑原恵美子、尾田正子、須田育美、八峠美津子、萩原光枝、
矢島三枝子、伊東悦子、池田美喜子、長岡美和子、高梨房江、高橋優子、下境マサエ、田
中曉美、高橋桂子、田子弘子、長沼久美子、伊藤淳子、岩淵節子、六本木弘子、戸神晴美、
佐子昭子、光安文子、千代谷和子、立川千栄子、南雲富子、木原幸子
（事業団整理補助員）

遺物 写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団係長代理）

遺物の 関 邦一（群馬県埋蔵文化財調査事業団主任）

科学的処理 土橋まり子（事業団嘱託員）小村浩一、小沼恵子、萩原妙子（事業団整理補助員）

受託 業者 鶴シン技術コンサル、鶴掘研、鶴パレオ・ラボ

9. 記録類及び出土遺物は群馬県立歴史博物館に保管してある。

10. 本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関から御助言、御協力を得た。御名前を記して感謝の意を表しま

す。(50音順、敬称略)

青柳泰介、大谷 猛 小田富士雄、志村 哲、高野貫行、土生田純之、山口 充、高崎市教育委員会、群馬県立歴史博物館

11. 調査、その後の整理作業にあたっては、明治大学考古学研究室をはじめとした諸大学関係者ならびに地元住民の方々には作業に従事していただくとともに多くの便宜を図っていただいた。厚く御礼申し上げます。調査参加者は下記の通りである。(50音順、敬称略)

第Ⅰ次調査

池田正男、大谷 猛、大山晃平、小野田哲憲、桜場一寿、重南和子、杉山彰梧、中沢貞治、長野隆子、那倉栄子、藤瀬禎博、藤田富士夫、増田 修、水田 稔、八木勝行、矢島俊雄

第Ⅱ次調査

小林三郎、池田正男、伊藤晋祐、大江正行、大河原英秋、大島納美子、大谷 猛、笠井康夫、清藤一順、小島聡子、小島かの子、桜場一寿、佐藤明人、杉山彰梧、関口 完、辻林 浩、外山政子、長谷部達雄、原田道雄、淵上善庸、水田 稔、山口 充、山田美津子、和田京子

第Ⅲ次調査

天野静江、綾 芳子、池田正男、石崎道子、稲葉由理、岩波康次、上田秀夫、江口千恵子、大島納美子、大谷 猛、笠井泰夫、菊池泰志、小松聡江、坂本厚子、桜場一寿、佐藤明人、佐藤玲子、篠永 定、島逸賢二、土屋ひろみ、中丸一郎、中村和子、中村史子、長野隆子、早川長子、松本喜久夫、水田 稔、山口充、李 光江

1969年資料整理

池田正男、大島納美子、大谷 猛、小島かの子、桜場一寿、佐藤明人、中村史子、山口 充

1970年資料整理

大塚初重、小林三郎、岩波康次、大谷 猛、金子眞土、小島かの子、桜場一寿、佐藤明人、中村史子、原田道雄、平野進一、山口 充、綿貫文子

1978年植輪復元作業

飯田美穂、浦 敏昭、大河原富子、小関由紀、小野田宏美、金子容子、栗原健一、小池岳明、小池みち子、小山ゆかり、鈴木洋子、都木理恵、鳥越紀美子、中江英明、福津ますみ、桃井里美、山根典子

凡 例

1. 遺構図は、『史跡観音山古墳—保存修理事業報告書—』で掲載した図面を多数再録している。
2. 遺構・遺物の挿図の縮尺は各図中表示した。他と異なるものについては随時縮尺を付した。
3. 遺物は通番を付して呼称した。この番号は実測図、遺物観察表、写真図版の番号と共通する。
4. 第4図は『群馬県史』通史編1付図と「上栗須寺前遺跡I」を参考して作図した。
第5図は国土地理院発行の25,000分の1の地形図を使用している。
第6図は津金澤吉茂・飯島義雄・大久保美加「群馬県高崎市岩鼻町「群馬の森」を中心とする地域の歴史について」『群馬県立歴史博物館紀要』2の図を一部修正して使用している。

目 次

口 絵	
序	
例 言	
凡 例	
挿図目次	
表 目 次	
写真目次	
抄 録	

第1章 経 過

1. 調査に至るまでの経緯	1
2. 1967(昭和42)年度調査—第Ⅰ次調査の経過	3
3. 1968(昭和43)年度調査—第Ⅱ次・第Ⅲ次調査の経過	3
4. 第Ⅰ～Ⅲ次調査出土遺物の整理・調査	6
5. 史跡整備の経過	10

第2章 立地・環境

1. 古墳の位置と保存状況	13
2. 周辺の地形	13
3. 井野川下流域の古墳分布	14

第3章 遺構に関する報告

1. 調査の方法	21
(1) 第Ⅰ次～第Ⅲ次調査	21
(2) 史跡整備	22
2. 確認された遺構	24
(1) 墳 丘	24
(2) 周堀・中堤	49
(3) 埴輪の配置状況	68
(4) その他の遺構	97

第4章 出土遺物について

1. 埴 輪	105
(1) 円筒埴輪	105
(2) 形象埴輪	209
① 家形埴輪	209

② 盾形埴輪	231
③ 髷形埴輪	246
④ 大刀形埴輪	247
⑤ 帽子形埴輪	249
⑥ 器種不明の器財埴輪	251
⑦ 人物埴輪	254
⑧ 人物埴輪—盾持ち人	328
⑨ 動物埴輪	339
⑩ 形象埴輪の基台部	368
⑪ 器種不明の形象埴輪	369
⑫ 小像	389
2. 土器類	390
3. その他の時代の出土遺物	402

第5章 分析

1. 綿貫観音山古墳等顔料試料分析結果報告	406
2. 埴輪の胎土材料	409

第6章 考察

1. 綿貫観音山古墳の埴丘	417
(1) 外形の構造	417
(2) 綿貫観音山古墳の設計・企画	427
2. 綿貫観音山古墳の埴輪群の造形とその祭祀表現	443
(1) 埴丘形態と埴輪配列	443
(2) 円筒埴輪の特徴	449
(3) 家形埴輪・器財埴輪の造形的特徴	451
(4) 馬形埴輪の造形的特徴	454
(5) 綿貫観音山古墳の埴輪祭祀	457
(6) 綿貫観音山古墳の埴輪生産地	472
3. まとめ	480

写真図版

遺物観察表	別冊
-------	----

挿図目次

第1図	縄文観音山古墳現形図(1:1,000).....2	第41図	史跡,19トレンチ(上)、2—西トレンチ実測図(1:150).....63
第2図	第1—田次調査発掘調査区配置図(1:1,000).....4	第42図	田次,IV・Vトレンチ、史跡,11—西トレンチ実測図(1:150).....64
第3図	史跡整備時発掘調査区配置図(1:1,000).....12	第43図	史跡,拡張5区(左)、25トレンチ(右)、田次,1トレンチ(右下)実測図(1:150).....65・66
第4図	縄文観音山古墳周辺の地形区分(1:75,000).....14	第44図	史跡,3—西トレンチ実測図(1:150).....67
第5図	縄文観音山古墳の位置と周辺の遺跡(1:25,000).....17	第45図	田次,前方部前面トレンチ人物埴輪(1643)出土状態図(1:30).....70
第6図	縄文観音山古墳周辺の古墳(1:6,000).....18	第46図	史跡,1—北トレンチ埴輪出土状態図(1:30).....70
第7図	発掘調査区配置図(1:1,000).....23	第47図	田次,前方部東側北側埴輪出土状態図(1:30).....71
第8図	田次,前方部前面トレンチ(上)、史跡,1—北トレンチ(下)実測図(1:150).....25	第48図	史跡,拡張3区馬形埴輪(1745)出土状態図(1:30)71
第9図	史跡,拡張3区実測図(1:150).....26	第49図	史跡,3トレンチ埴輪出土状態図(1:30).....72
第10図	史跡,拡張3区墳丘盛土層図(1:150).....27	第50図	田次,前方部東トレンチ埴輪出土状態図(1:30).....72
第11図	史跡,3—東トレンチ(上)、4—東トレンチ(下)、田次,前方部東側トレンチ(中)実測図(1:150).....29	第51図	史跡,拡張4区円筒埴輪出土状態図(1:50).....74
第12図	史跡,拡張4区実測図(1:150).....30	第52図	史跡,22トレンチ埴輪出土状態図(1:30).....75
第13図	田次,鞍部東側トレンチ実測図・史跡,拡張4区墳丘盛土層図(1:150).....31	第53図	史跡,1—南トレンチ埴輪出土状態図(1:30).....76
第14図	史跡,17トレンチ実測図(1:150).....32	第54図	史跡,2—東トレンチ埴輪出土状態図(1:30).....77
第15図	田次,後門部東側トレンチ(上)、史跡,22トレンチ(中)、2—東トレンチ(下)実測図(1:150).....33	第55図	田次,後門部西側(Bトレンチ、C—D区)埴輪出土状態図(1:30).....79・80
第16図	史跡,7トレンチ実測図(1:150).....34	第56図	田次,くびれ部西側(C—4・5区)埴輪出土状態図(1:60).....81
第17図	史跡,20トレンチ実測図(1:150).....35	第57図	田次,くびれ部西側(C—4・5区)南半埴輪出土状態図(1:30).....83
第18図	史跡,1—南トレンチ(上)、田次,後門部南側トレンチ(下)実測図(1:150).....36	第58図	田次,くびれ部西側(C—4・5区)北半埴輪出土状態図(1:30).....84
第19図	史跡,10トレンチ(上)、6トレンチ(下)実測図(1:150).....37	第59図	田次,くびれ部西側—前方部西側南側埴輪出土状態図(1:60).....85
第20図	史跡,19トレンチ(上)、2—西トレンチ(下)実測図(1:150).....38	第60図	田次,くびれ部西側—前方部西側南側埴輪出土状態図(1:30).....86
第21図	田次,北トレンチ実測図(1:150).....39	第61図	田次,くびれ部西側—前方部西側中間埴輪出土状態図(1:30).....87
第22図	史跡,拡張1区(上)、田次,鞍部西側トレンチ(下)実測図(1:150).....40	第62図	田次,くびれ部西側—前方部西側北側埴輪出土状態図(1:30).....88
第23図	史跡,拡張1区墳丘盛土層図(1:150).....41	第63図	史跡,拡張1区埴輪出土状態図(1:150).....90
第24図	史跡,11—西トレンチ実測図(1:150).....42	第64図	史跡,拡張1区埴輪出土状態図(1:30).....90
第25図	史跡,4—西トレンチ(上)、3—西トレンチ(下)実測図(1:150).....43	第65図	田次,前方部西北隅馬形埴輪(1733)出土状態図(1:30).....91
第26図	田次,前方部西側トレンチ(1:150).....44	第66図	田次,前方部墳頂部東側形埴輪(1156)出土状態図.....92
第27図	史跡,拡張2区実測図(1:150).....45	第67図	史跡,3トレンチ埴輪出土状態図.....93
第28図	史跡,拡張2区墳丘盛土層図(1:150).....46	第68図	史跡,1トレンチ、4トレンチ埴輪出土状態図.....93
第29図	田次,後門部墳頂部—上段各トレンチ実測図(1:150).....47	第69図	史跡,5トレンチ埴輪出土状態図.....94
第30図	田次,後門部墳頂部—上段各トレンチ実測図(1:150).....48	第70図	史跡,1トレンチ埴輪出土状態図.....94
第31図	史跡,1—北トレンチ実測図(1:150).....51	第71図	後門部墳頂部—上段埴輪出土状態図(1:100).....95
第32図	史跡,32トレンチ(上)、29トレンチ(中)、田次,Ⅲトレンチ実測図(1:150).....52	第72図	基塚1実測図(1:50).....97
第33図	史跡,24トレンチ(上)、26トレンチ(下)実測図(1:150).....53	第73図	基塚2実測図(1:50).....98
第34図	史跡,27トレンチ、28トレンチ、田次,Ⅶ・Ⅷトレンチ実測図(1:150).....54	第74図	基塚3実測図(1:50).....98
第35図	史跡,23トレンチ、田次,Ⅹトレンチ(1:150).....55	第75図	基塚4実測図(1:50).....98
第36図	史跡,3—東トレンチ(上)、5トレンチ(下)実測図(1:150).....56	第76図	史跡,拡張3区周堀内土埴実測図(1:50).....99
第37図	史跡,2—東トレンチ実測図(1:150).....57	第77図	建物遺構実測図(1:100).....100
第38図	史跡,21トレンチ(上)、7トレンチ(下)実測図(1:150).....59	第78図	井戸1実測図(1:50).....101
第39図	史跡,31・33トレンチ、田次,Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷトレンチ実測図(1:150).....60	第79図	井戸2実測図(1:50).....101
第40図	史跡,10トレンチ(上)、30トレンチ(左中)、35トレンチ(右中)、田次,Vトレンチ(下)実測図(1:150).....61	第80図	風例木炭実測図(1:150).....103
		第81図	風例木炭内埴輪出土状態図(1:30).....104
		第82図	円筒埴輪の部位模式図.....107
		第83図	前方部中央(前面)出土の円筒埴輪①.....117
		第84図	前方部中央(前面)出土の円筒埴輪②.....118
		第85図	前方部中央(前面)出土の円筒埴輪③.....119
		第86図	前方部東北隅出土の円筒埴輪④.....120

第87図	前方部東北隅出土の円筒埴輪②	121
第88図	前方部東北隅出土の円筒埴輪③	122
第89図	前方部東北隅出土の円筒埴輪④	123
第90図	前方部東北隅出土の円筒埴輪⑤	124
第91図	前方部東北隅出土の円筒埴輪⑥	125
第92図	前方部東側出土の円筒埴輪①	126
第93図	前方部東側出土の円筒埴輪②	127
第94図	前方部東側出土の円筒埴輪③	128
第95図	前方部東側出土の円筒埴輪④	129
第96図	前方部東側出土の円筒埴輪⑤	130
第97図	前方部東側出土の円筒埴輪⑥	131
第98図	くびれ部東側出土の円筒埴輪①	132
第99図	くびれ部東側出土の円筒埴輪②	133
第100図	くびれ部東側出土の円筒埴輪③	134
第101図	くびれ部東側出土の円筒埴輪④	135
第102図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑤	136
第103図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑥	137
第104図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑦	138
第105図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑧	139
第106図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑨	140
第107図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑩	141
第108図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑪	142
第109図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑫	143
第110図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑬	144
第111図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑭	145
第112図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑮	146
第113図	くびれ部東側出土の円筒埴輪⑯	147
第114図	後門部東側出土の円筒埴輪①	148
第115図	後門部東側出土の円筒埴輪②	149
第116図	後門部東側出土の円筒埴輪③	150
第117図	後門部東側出土の円筒埴輪④	151
第118図	後門部東側出土の円筒埴輪⑤	152
第119図	後門部東側出土の円筒埴輪⑥	153
第120図	後門部東側出土の円筒埴輪⑦	154
第121図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪①	155
第122図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪②	156
第123図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪③	157
第124図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪④	158
第125図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪⑤	159
第126図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪⑥	160
第127図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪⑦	161
第128図	後門部南側(後方)出土の円筒埴輪⑧	162
第129図	後門部西側出土の円筒埴輪①	163
第130図	後門部西側出土の円筒埴輪②	164
第131図	後門部西側出土の円筒埴輪③	165
第132図	後門部西側出土の円筒埴輪④	166
第133図	後門部西側出土の円筒埴輪⑤	167
第134図	後門部西側出土の円筒埴輪⑥	168
第135図	くびれ部西側出土の円筒埴輪①	169
第136図	くびれ部西側出土の円筒埴輪②	170
第137図	くびれ部西側出土の円筒埴輪③	171
第138図	くびれ部西側出土の円筒埴輪④	172
第139図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑤	173
第140図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑥	174
第141図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑦	175
第142図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑧	176
第143図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑨	177
第144図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑩	178
第145図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑪	179
第146図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑫	180
第147図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑬	181
第148図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑭	182
第149図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑮	183

第150図	くびれ部西側出土の円筒埴輪⑯	184
第151図	前方部西側出土の円筒埴輪①	185
第152図	前方部西側出土の円筒埴輪②	186
第153図	前方部西側出土の円筒埴輪③	187
第154図	前方部西側出土の円筒埴輪④	188
第155図	前方部西側出土の円筒埴輪⑤	189
第156図	前方部西側出土の円筒埴輪⑥	190
第157図	前方部西北隅出土の円筒埴輪①	191
第158図	前方部西北隅出土の円筒埴輪②	192
第159図	前方部西北隅出土の円筒埴輪③	193
第160図	前方部西北隅出土の円筒埴輪④	194
第161図	前方部墳頂部出土の円筒埴輪①	195
第162図	前方部墳頂部出土の円筒埴輪②	196
第163図	前方部墳頂部出土の円筒埴輪③	197
第164図	前方部墳頂部出土の円筒埴輪④	198
第165図	後門部墳頂部出土の円筒埴輪①	199
第166図	後門部墳頂部出土の円筒埴輪②	200
第167図	後門部墳頂部出土の円筒埴輪③	201
第168図	後門部墳頂部→上段出土の円筒埴輪①	202
第169図	後門部墳頂部→上段出土の円筒埴輪②	203
第170図	後門部墳頂部→上段出土の円筒埴輪③	204
第171図	後門部墳頂部→上段出土の円筒埴輪④	205
第172図	後門部墳頂部→上段出土の円筒埴輪⑤	206
第173図	周堀出土の円筒埴輪①	207
第174図	周堀出土の円筒埴輪②	208
第175図	家形埴輪①	211
第176図	家形埴輪②	212
第177図	家形埴輪③	213
第178図	家形埴輪④	214
第179図	家形埴輪⑤	215
第180図	家形埴輪⑥	216
第181図	家形埴輪⑦	217
第182図	家形埴輪⑧	219・223
第183図	家形埴輪⑨	221
第184図	家形埴輪⑩	222
第185図	家形埴輪⑪	223
第186図	家形埴輪⑫	224
第187図	家形埴輪⑬	225
第188図	家形埴輪⑭	226
第189図	家形埴輪⑮	227
第190図	家形埴輪⑯	228
第191図	家形埴輪⑰	229
第192図	家形埴輪⑱	230
第193図	透形埴輪①	232
第194図	透形埴輪②	233
第195図	透形埴輪③	234
第196図	透形埴輪④	236
第197図	透形埴輪⑤	237
第198図	透形埴輪⑥	238
第199図	透形埴輪⑦	239
第200図	透形埴輪⑧	240
第201図	透形埴輪⑨	241
第202図	透形埴輪⑩	243
第203図	透形埴輪⑪	244
第204図	透形埴輪⑫	245
第205図	透形埴輪⑬	246
第206図	透形埴輪⑭	248
第207図	大刀形埴輪	249
第208図	壺形埴輪①	250
第209図	壺形埴輪②	251
第210図	甕形埴輪①	252
第211図	甕形埴輪②	253
第212図	人物埴輪①	255

第213図	人物埴輪②	256
第214図	人物埴輪③	257
第215図	人物埴輪④	258
第216図	人物埴輪⑤	259
第217図	人物埴輪⑥	260
第218図	人物埴輪⑦	263
第219図	人物埴輪⑧	264
第220図	人物埴輪⑨	265
第221図	人物埴輪⑩	267
第222図	人物埴輪⑪	268
第223図	人物埴輪⑫	269
第224図	人物埴輪⑬	270
第225図	人物埴輪⑭	271
第226図	人物埴輪⑮	272
第227図	人物埴輪⑯	273
第228図	人物埴輪⑰	274
第229図	人物埴輪⑱	275
第230図	人物埴輪⑲	276
第231図	人物埴輪⑳	278
第232図	人物埴輪㉑	279
第233図	人物埴輪㉒	280
第234図	人物埴輪㉓	282
第235図	人物埴輪㉔	283・284
第236図	人物埴輪㉕	286
第237図	人物埴輪㉖	288
第238図	人物埴輪㉗	289
第239図	人物埴輪㉘	290
第240図	人物埴輪㉙	291
第241図	人物埴輪㉚	293
第242図	人物埴輪㉛	294
第243図	人物埴輪㉜	295
第244図	人物埴輪㉝	297
第245図	人物埴輪㉞	299
第246図	人物埴輪㉟	300
第247図	人物埴輪㊱	301
第248図	人物埴輪㊲	302
第249図	人物埴輪㊳	303
第250図	人物埴輪㊴	304
第251図	人物埴輪㊵	306
第252図	人物埴輪㊶	307
第253図	人物埴輪㊷	308
第254図	人物埴輪㊸	310
第255図	人物埴輪㊹	311
第256図	人物埴輪㊺	312
第257図	人物埴輪㊻	313
第258図	人物埴輪㊼	314
第259図	人物埴輪㊽	315
第260図	人物埴輪㊾	316
第261図	人物埴輪㊿	318
第262図	人物埴輪50	319
第263図	人物埴輪51	320
第264図	人物埴輪52	321
第265図	人物埴輪53	322
第266図	人物埴輪54	323
第267図	人物埴輪55	325
第268図	人物埴輪56	326
第269図	人物埴輪57	327
第270図	人物埴輪—盾持ち人(1)	328
第271図	人物埴輪—盾持ち人(2)	329
第272図	人物埴輪—盾持ち人(3)	330
第273図	人物埴輪—盾持ち人(4)	331
第274図	人物埴輪—盾持ち人(5)	332
第275図	人物埴輪—盾持ち人(6)	333

第276図	人物埴輪—盾持ち人(7)	334
第277図	人物埴輪—盾持ち人(8)	335
第278図	人物埴輪—盾持ち人(9)	337
第279図	人物埴輪—盾持ち人(10)	338
第280図	馬形埴輪①	340
第281図	馬形埴輪②	341
第282図	馬形埴輪③	342
第283図	馬形埴輪④	344
第284図	馬形埴輪⑤	346
第285図	馬形埴輪⑥	347
第286図	馬形埴輪⑦	348
第287図	馬形埴輪⑧	349
第288図	馬形埴輪⑨	350
第289図	馬形埴輪⑩	352
第290図	馬形埴輪⑪	353
第291図	馬形埴輪⑫	354
第292図	馬形埴輪⑬	355
第293図	馬形埴輪⑭	356
第294図	馬形埴輪⑮	357
第295図	馬形埴輪⑯	358
第296図	馬形埴輪⑰	360
第297図	馬形埴輪⑱	361
第298図	馬形埴輪⑲	362
第299図	馬形埴輪⑳	363
第300図	馬形埴輪㉑	364
第301図	馬形埴輪㉒	365
第302図	鳥形埴輪	367
第303図	形象埴輪の基台部①	369
第304図	形象埴輪の基台部②	370
第305図	形象埴輪の基台部③	371
第306図	器種不明の形象埴輪①	373
第307図	器種不明の形象埴輪②	374
第308図	器種不明の形象埴輪③	375
第309図	器種不明の形象埴輪④	376
第310図	器種不明の形象埴輪⑤	377
第311図	器種不明の形象埴輪⑥	378
第312図	器種不明の形象埴輪⑦	379
第313図	器種不明の形象埴輪⑧	381
第314図	器種不明の形象埴輪⑨	382
第315図	器種不明の形象埴輪⑩	383
第316図	器種不明の形象埴輪⑪	384
第317図	器種不明の形象埴輪⑫	385
第318図	器種不明の形象埴輪⑬	386
第319図	器種不明の形象埴輪⑭	387
第320図	器種不明の形象埴輪⑮	388
第321図	小像	389
第322図	外堀出土の須恵器(高崎市教育委員会調査時出土)	391
第323図	須恵器①	392
第324図	須恵器②	393
第325図	須恵器③	394
第326図	須恵器④	395
第327図	須恵器⑤	396
第328図	須恵器⑥	397
第329図	須恵器⑦	398
第330図	須恵器⑧・土師器	399
第331図	須恵器⑨・土師器	400
第332図	基坛3出土遺物	401
第333図	縄文土器	402
第334図	平安時代以降の土器	402
第335図	軟質土器・陶磁器	404
第336図	石遺物	405
第337図	試料の採集位置	408
第338図	史跡整備外部施設発掘図(1:1,000)	421

第339回	堆積土除去後の古墳(推定)(1:1,000)	422
第340回	墳丘および石室の構造(1:300)	425
第341回	墳丘部分盛土量計算基礎図	426

第342回	縄貫観音山古墳の墳丘平面企画図(1:1,000)	429
第343回	前方後円墳の墳丘平面企画図(1:3,000)	436
第344回	縄貫観音山古墳植輪配置(概念図)	445

表 目 次

第1表	年度別修理事業実績	11
第2表	周辺の道跡一覧表	19
第3表	形象植輪墳丘部位別出土一覧	96
第4表	全体形状を確認可能な円筒植輪一覧	108
第5表	円筒植輪口縁部径一覧	108
第6表	円筒植輪基部径一覧	108
第7表	古墳の部位名称と調査区	109
第8表	分析結果一覧	407
第9表	検討した植輪試料	409
第10表	植輪胎土中の粒子組成一覧表	410
第11表	植輪胎土中の粒子組成ダイアグラム	411
第12表	植輪胎土中の粘土および砂粒の特徴	414
第13表	墳丘計画表	418
第14表	周堀計画表	419

第15表	座標印横一覧表	426
第16表	観音山古墳墳丘・周堀の基準尺度計画値	427
第17表	保存修理時調査による観音山古墳墳丘各部位の計画値と 還元値	428
第18表	観音山古墳周堀の規模(第Ⅲ次発掘調査)	430
第19表	観音山古墳内堀計画値	431
第20表	観音山古墳の平面企画(設計)の各部位の数値	432
第21表	主要形象植輪出土部位一覧	444
第22表	群馬県出土の低位置実部植輪	450
第23表	縄貫観音山古墳植輪人物像群	470
第24表	井野川流域を含める前堀・倉賀野台地地域の前方後円墳の 系譜図	482
写真図版1	植輪胎土中の粒子顕微鏡写真	416

写真目次

P.L1	航空写真(上空北西から)
P.L2	史跡整備前(1968年)の縄貫観音山古墳(上空から)
P.L3	史跡整備後の縄貫観音山古墳(上空から)
P.L4-1	古墳遠景(井野川河川から)
4-2	墳丘全景(南東方から)
4-3	墳丘全景(南西方から)
P.L5-1	墳丘全景(南東方から)
5-2	墳丘全景(東北方から)
5-3	墳丘全景(南東方から)
5-4	墳丘全景(南西方から)
P.L6-1	史跡整備前の観音山古墳(東方から)
6-2	史跡整備後の観音山古墳(西方から)
P.L7-1	史跡整備後の観音山古墳(後円部)
7-2	史跡整備後の観音山古墳(前方部)
P.L8-1	史跡、前方部前面の調査(北から)
8-2	史跡、1トレンチ中段馬形植輪(1813)出土状態(東 から)
8-3	Ⅱ次、前方部前面トレンチ中段人物植輪(1643)出土 状態
8-4	Ⅱ次、前方部前面トレンチ中段人物植輪(1643)出土 状態
P.L9-1	史跡、拡張3区頂部から(南西方から)
9-2	史跡、拡張3区周堀部から(北東方から)
9-3	史跡、拡張3区中段馬形植輪(1745)出土状態(北 から)
9-4	史跡、拡張3区中段馬形植輪(1745)出土状態(東 から)
P.L10-1	Ⅲ次、前方部北東隅中段植輪出土状態
10-2	Ⅲ次、前方部北東隅中段植輪出土状態
P.L11-1	史跡、前方部東側部全景(東方から)
11-2	史跡、3トレンチ東側中段植輪出土状態(南方から)
11-3	史跡、3トレンチ東側中段馬形植輪(1762)出土状態 (南方から)
11-4	Ⅲ次、前方部東側トレンチ中段植輪出土状態(南東方

から)	
P.L12-1	史跡、拡張4区全景(東方から)
12-2	史跡、拡張4区中段円筒植輪出土状態(北方から)
P.L13-1	史跡、拡張4区中段円筒植輪出土状態(東方から)
13-2	史跡、拡張4区中段円筒植輪出土状態(北方から)
13-3	史跡、拡張4区中段円筒植輪出土状態(東方から)
13-4	史跡、拡張4区中段円筒植輪出土状態(西方から)
13-5	史跡、17トレンチ全景(北東方から)
13-6	史跡、17トレンチ中段植輪出土状態(南方から)
P.L14-1	史跡、22トレンチ全景(北東方から)
14-2	史跡、22トレンチ全景(南西方から)
14-3	史跡、7トレンチ全景(南東方から)
14-4	史跡、20トレンチ全景(南東方から)
14-5	史跡、10トレンチ全景(北西方から)
14-6	史跡、10トレンチ円筒植輪(0479)出土状態(東方 から)
P.L15-1	史跡、後円部西側全景(西方から)
15-2	史跡、19トレンチ全景(西方から)
15-3	史跡、19トレンチ円筒植輪出土状態(南東方から)
15-4	Ⅰ次、Dトレンチ植輪出土状態(西方から)
15-5	Ⅰ次、Dトレンチ植輪出土状態(西方から)
P.L16-1	Ⅰ次、Bトレンチ-C-II区植輪出土状態(北方から)
16-2	Ⅰ次、C-II区植輪出土状態(東方から)
16-3	Ⅰ次、C-II区植輪出土状態(東方から)
P.L17-1	Ⅰ次、B-I区人物植輪出土状態(西方から)
17-2	Ⅰ次、B-I区人物植輪出土状態(南西方から)
17-3	Ⅰ次、B-I区人物植輪出土状態(西方から)
17-4	Ⅰ次、B-I区前部植輪(1295)出土状態(西方から)
P.L18-1	Ⅰ次、C-II区人物植輪(1458)出土状態(西方から)
18-2	Ⅰ次、C-II区人物植輪(1458)出土状態(西方から)
18-3	Ⅰ次、C-II区人物植輪(1449)出土状態(南方から)
18-4	Ⅰ次、C-II区人物植輪(1449)出土状態(南西方 から)
18-5	Ⅰ次、C-II区人物植輪(1450)出土状態(北東方

- る)
- 18-6、I次、C-II区人物埴輪(1450)出土状態(北東方から)
- 18-7、I次、C-II区人物埴輪(1459)出土状態(西方から)
- 18-8、I次、C-II区人物埴輪(1459)出土状態(北方から)
- P.L.19-1、史跡、拡張1区全景(周堀部から)
- 19-2、史跡、拡張1区全景(墳頂部から)
- 19-3、史跡、拡張1区人物埴輪座持人(1713)出土状態(南方から)
- 19-4、史跡、拡張1区埴輪(0684他)出土状態(西方から)
- P.L.20-1、II次、C-4・5区埴輪出土状態(南方から)
- 20-2、II次、C-4区人物埴輪基部(1507・1514)出土状態(南東方から)
- P.L.21-1、II次、C-4区埴輪出土状態(南東方から)
- 21-2、II次、C-4区埴輪出土状態(西方から)
- P.L.22-1、II次、C-4区人物埴輪(1463)出土状態(西方から)
- 22-2、II次、C-4区人物埴輪(1463)頭部出土状態(東方から)
- 22-3、II次、C-4区人物埴輪(1463)上唇部出土状態(南東方から)
- 22-4、II次、C-4区人物埴輪基部(1507)出土状態(南東方から)
- 22-5、II次、C-4区人物埴輪基部(1514)出土状態(南東方から)
- P.L.23-1、II次、C-5区人物埴輪(1474)出土状態(南東方から)
- 23-2、II次、C-5区人物埴輪(1474)出土状態(西方から)
- 23-3、II次、C-5区人物埴輪(1515)出土状態(南方から)
- 23-4、II次、C-5区人物埴輪(1515)出土状態(北西方から)
- 23-5、II次、C-5区人物埴輪(1530)出土状態(南方から)
- 23-6、II次、C-5区人物埴輪(1530)出土状態(北東方から)
- P.L.24-1、II次、前方面西側中段トレンチ埴輪出土状態(南方から)
- 24-2、II次、前方面西側中段トレンチ埴輪出土状態(南方から)
- 24-3、II次、前方面西側中段トレンチ人物埴輪(1531)列出土状態(南方から)
- P.L.25-1、II次、前方面西側中段トレンチ人物埴輪出土状態(南方から)
- 25-2、II次、前方面西側中段トレンチ人物埴輪出土状態(南方から)
- P.L.26-1、II次、前方面西側中段トレンチ人物埴輪出土状態(南方から)
- 26-2、II次、前方面西側中段トレンチ人物埴輪出土状態(南方から)
- 26-3、II次、前方面西側中段トレンチ埴輪(1289)列出土状態(南方から)
- P.L.27-1、II次、前方面西側中段トレンチ埴輪出土状態(南方から)
- 27-2、II次、前方面西側中段トレンチ埴輪(1289)出土状態(西方から)
- 27-3、II次、前方面西側トレンチ埴輪(1387他)出土状態(南方から)
- P.L.28-1、史跡、拡張2区全景(頂部から)
- 28-2、史跡、拡張2区全景(北西方から)
- 28-3、史跡、拡張2区全景(北方から)
- P.L.29-1、II次、南方面西北側中段馬形埴輪(1733)出土状態
- 29-2、II次、南方面西北側中段馬形埴輪(1733)出土状態
- 29-3、II次、南方面西北側中段馬形埴輪(1733)出土状態
- 29-4、II次、南方面西北側中段馬形埴輪(1733)出土状態
- P.L.30-1、史跡、1トレンチ鞍部埴輪(南方から)
- 30-2、II次、前方面埴輪頂部家形埴輪(1156)出土状態(南方から)
- 30-3、II次、前方面埴輪頂部家形埴輪(1156)出土状態(南西方から)
- 30-4、史跡、5トレンチ埴輪出土状態(西方から)
- P.L.31-1、史跡、25トレンチ全景(南方から)
- 31-2、史跡、1トレンチ北側全景(南方から)
- 31-3、史跡、32トレンチ全景(南西方から)
- 31-4、史跡、29トレンチ全景(南方から)
- 31-5、史跡、24トレンチ全景(南方から)
- 31-6、II次、1トレンチ(南西方から)
- 31-7、史跡、26トレンチ全景(南西方から)
- P.L.32-1、史跡、27トレンチ全景(北方から)
- 32-2、史跡、28トレンチ全景(西方から)
- 32-3、史跡、23トレンチ全景(北西方から)
- 32-4、III次、VIIトレンチ土層堆積状況(北西方から)
- 32-5、III次、Xトレンチ土層堆積状況(南西方から)
- 32-6、III次、Iトレンチ土層堆積状況(南西方から)
- 32-7、III次、Xトレンチ全景(西方から)
- P.L.33-1、史跡、5トレンチ東側全景(東方から)
- 33-2、III次、IIトレンチ土層堆積状況(南西方から)
- 33-3、III次、IIIトレンチ全景(南東方から)
- 33-4、史跡、2トレンチ全景(東方から)
- 33-5、史跡、21トレンチ全景(西方から)
- 33-6、史跡、21トレンチ全景(西方から)
- 33-7、史跡、33トレンチ全景(西方から)
- 33-8、III次、Xトレンチ全景(南東方から)
- P.L.34-1、史跡、7トレンチ全景(南東方から)
- 34-2、史跡、31トレンチ土層(2206)出土状態(東方から)
- 34-3、III次、第IIトレンチ全景(南東方から)
- 34-4、史跡、20トレンチ全景(南方から)
- 34-5、史跡、1トレンチ全景(南方から)
- 34-6、史跡、20・1・10トレンチ(左側から)全景(後門部頂部から)
- P.L.35-1、史跡、30トレンチ全景(東方から)
- 35-2、史跡、6トレンチ全景(南西方から)
- 35-3、III次、Vトレンチ全景(南西方から)
- 35-4、史跡、19トレンチ全景(北方から)
- 35-5、史跡、2トレンチ全景(西方から)
- 35-6、III次、VIトレンチ全景(南西方から)
- 35-7、III次、VIIトレンチ全景(南西方から)
- 35-8、III次、IVトレンチ全景(南西方から)
- P.L.36-1、史跡、3トレンチ西側(西方から)
- 36-2、史跡、拡張5区全景(北方から)
- P.L.37-1、史跡、拡張1区風倒木架全景(西方から)
- 37-2、史跡、風倒木架内部埴輪出土状態(北方から)
- 37-3、史跡、風倒木架内部埴輪出土状態(東方から)
- 37-4、史跡、風倒木架内部埴輪出土状態(南東方から)
- 37-5、史跡、風倒木架内部埴輪出土状態(西方から)
- 37-6、史跡、風倒木架内部埴輪出土状態(東方から)
- 37-7、史跡、風倒木架内部埴輪出土状態(東方から)
- P.L.38-1、史跡、基壇1-1埋没状況(西方から)
- 38-2、史跡、基壇1-1全景(西方から)
- 38-3、史跡、基壇1-2全景(西方から)
- P.L.39-1、史跡、基壇4全景(東方から)
- 39-2、史跡、基壇4全景(北方から)
- 39-3、史跡、基壇4遺物出土状態(北方から)
- P.L.40-1、史跡、10トレンチ建物遺構(北方から)
- 40-2、史跡、7トレンチ井戸(北東方から)
- 40-3、III次、前方面北東側石倉出土状態
- 40-4、III次、前方面北東側板敷(2268)出土状態
- 40-5、史跡、拡張3区ピット全景(西方から)
- 40-6、史跡、拡張3区ピット全景(西方から)

- P.L.41-1. 田次, くびれ部西側C-4・5区の調査風景
41-2. 田次, 前方部西側中段トレンチの調査風景
41-3. 田次, C-4区の調査風景
- P.L.42 円筒埴輪
P.L.43 円筒埴輪
P.L.44 円筒埴輪
P.L.45 円筒埴輪
P.L.46 円筒埴輪
P.L.47 円筒埴輪
P.L.48 円筒埴輪
P.L.49 円筒埴輪 (前方部中央 (前面)・東北隅出土)
P.L.50 円筒埴輪 (前方部東北隅出土)
P.L.51 円筒埴輪 (前方部東側出土)
P.L.52 円筒埴輪 (前方部東側・くびれ部東側出土)
P.L.53 円筒埴輪 (くびれ部東側出土)
P.L.54 円筒埴輪 (くびれ部東側出土)
P.L.55 円筒埴輪 (くびれ部東側・後門部南側 (後方) 出土)
P.L.56 円筒埴輪 (後門部南側 (後方) 出土)
P.L.57 円筒埴輪 (後門部東側出土)
P.L.58 円筒埴輪 (後門部西側出土)
P.L.59 円筒埴輪 (くびれ部西側出土)
P.L.60 円筒埴輪 (くびれ部西側出土)
P.L.61 円筒埴輪 (くびれ部西側出土)
P.L.62 円筒埴輪 (くびれ部西側出土)
P.L.63 円筒埴輪 (前方部北西隅出土)
P.L.64 円筒埴輪 (前方部西側出土)
P.L.65 円筒埴輪 (前方部西側・鞍埴部頂部出土)
P.L.66 円筒埴輪 (前方部頂部出土)
P.L.67 円筒埴輪 (後門部頂部上段出土)
P.L.68 円筒埴輪 (後門部頂部上段・甕埴出土)
P.L.69 円筒埴輪の製作技法 (口縁部の形状)
P.L.70 円筒埴輪の製作技法 (口縁部・突帯の形状)
P.L.71 円筒埴輪の製作技法 (透孔の形状・基底部の特徴・補修痕)
P.L.72 円筒埴輪の製作技法 (ハケメの特徴)
P.L.73 円筒埴輪の製作技法 (ヘラ掻き)
P.L.74 形象・家形埴輪 (1156)
P.L.75 形象・家形埴輪 (1156)
P.L.76 形象・家形埴輪 (1156)
P.L.77 形象・家形埴輪 (前方部各所出土)
P.L.78 形象・家形埴輪 (1188・1189)
P.L.79 形象・家形埴輪 (後門部埴頂部・上段出土)
P.L.80 形象・家形埴輪 (後門部埴頂部・上段出土)
P.L.81 形象・家形埴輪 (後門部埴頂部・上段出土)
P.L.82 形象・家形埴輪 (後門部埴頂部・上段出土)
P.L.83 形象・盾形埴輪 (1295)
P.L.84 形象・盾形埴輪 (1290-1294)
P.L.85 形象・盾形埴輪 (1289)
P.L.86 形象・盾形埴輪 (前方部〜くびれ部出土)
P.L.87 形象・盾形埴輪 (くびれ部〜後門部出土)
P.L.88 形象・新形・大刀形埴輪
P.L.89 形象・帯子形埴輪 (1387・1393)
P.L.90 形象・器財埴輪
P.L.91 形象・人物埴輪唐持ち人 (1711)
P.L.92 形象・人物埴輪唐持ち人 (1710)
P.L.93 形象・人物埴輪唐持ち人 (1713)
P.L.94 形象・人物埴輪唐持ち人
P.L.95 形象・人物埴輪唐持ち人 (1712・1714)
P.L.96 形象・人物埴輪 (1419-1427・1434)
P.L.97 形象・人物埴輪 (1437他)
P.L.98 形象・人物埴輪 (1449)
P.L.99 形象・人物埴輪 (1449)
P.L.100 形象・人物埴輪 (1449)
P.L.101 形象・人物埴輪 (1450)
P.L.102 形象・人物埴輪 (1450)
P.L.103 形象・人物埴輪 (1450他)
P.L.104 形象・人物埴輪 (1458)
P.L.105 形象・人物埴輪 (1458)
P.L.106 形象・人物埴輪 (1458)
P.L.107 形象・人物埴輪 (1458)
P.L.108 形象・人物埴輪 (1458)
P.L.109 形象・人物埴輪 (1458)
P.L.110 形象・人物埴輪 (1459)
P.L.111 形象・人物埴輪 (1459)
P.L.112 形象・人物埴輪 (1463)
P.L.113 形象・人物埴輪 (1463)
P.L.114 形象・人物埴輪 (1463)
P.L.115 形象・人物埴輪 (1473他)
P.L.116 形象・人物埴輪 (1474)
P.L.117 形象・人物埴輪 (1474)
P.L.118 形象・人物埴輪 (くびれ部西側出土)
P.L.119 形象・人物埴輪 (1462他)
P.L.120 形象・人物埴輪 (1515)
P.L.121 形象・人物埴輪 (1515)
P.L.122 形象・人物埴輪 (1515)
P.L.123 形象・人物埴輪 (1531他)
P.L.124 形象・人物埴輪 (1530・1533)
P.L.125 形象・人物埴輪 (後門部西側出土)
P.L.126 形象・人物埴輪 (くびれ部西側出土)
P.L.127 形象・人物埴輪 (くびれ部西側・前方部西側出土)
P.L.128 形象・人物埴輪 (1643)
P.L.129 形象・人物埴輪 (前方部西側・中央 (前面)・西北隅出土)
P.L.130 形象・人物埴輪 (1678他)
P.L.131 形象・人物埴輪 (2107他)
P.L.132 形象・馬形埴輪 (1733)
P.L.133 形象・馬形埴輪 (1733)
P.L.134 形象・馬形埴輪 (1733)
P.L.135 形象・馬形埴輪 (1745)
P.L.136 形象・馬形埴輪 (1745)
P.L.137 形象・馬形埴輪 (1745)
P.L.138 形象・馬形埴輪 (1757)
P.L.139 形象・馬形埴輪 (1762他)
P.L.140 形象・馬形埴輪 (前方部西北隅・東北隅・東側出土)
P.L.141 形象・馬形埴輪 (前方部西側・北西隅・北側出土)
P.L.142 形象・馬形埴輪 (前方部中央 (前面) 出土)
P.L.143 形象・馬形埴輪 (前方部東北隅・東側・くびれ部東側出土)
P.L.144 形象・馬形・鳥形埴輪
P.L.145 形象・基台部
P.L.146 形象・基台部
P.L.147 形象・器種不明
P.L.148 形象・器種不明
P.L.149 形象・器種不明
P.L.150 形象・器種不明
P.L.151 須置器
P.L.152 須置器
P.L.153 須置器
P.L.154 須置器
P.L.155 須置器・土師器
P.L.156 軟質土器・陶磁器・織文土器
P.L.157 石造物

報告書抄録

ふりがな	わたぬきかんのんやまこふん
書名	綿貫観音山古墳Ⅰ
副書名	墳丘・埴輪編
巻次	第1巻
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大塚初重・梅澤重昭・桜場一寿・朽津信明・藤根久・古橋美智子・徳江秀夫
編集機関	群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	1998, 3, 31

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
綿貫観音山古墳 <small>わたぬきかんのんやまこふん</small>	高崎市綿貫町 字観音山 <small>たけがきしりょうけんまち あづまの観音山</small>	10202	1001— 00366	36°18'15"	139°06'49"	19670304	137㎡	桑園開発
						19670314		
						19670725	537㎡	
						19670825		
						19671120	383㎡	
						19671206		
						19760401	3,784㎡	史跡整備事業
						19790331		

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
綿貫観音山古墳	墳墓	古墳時代	前方後円墳	円筒埴輪、形象埴輪(家・盾・ 大刀・帽子・人物・馬・鳥)、 須恵器、土師器 貨銭、鉄製品、須恵器 板碑、五輪塔	全長97m、6世紀 後半の築造
	墳墓	平安時代	墓域1基		
	墳墓	中世			
	墳墓	近世	墓域		
	生活址	近世 不明	溝 井戸、建物遺構		

第1章 経 過

1. 調査に至るまでの経緯

総貫観音山古墳は、高崎市総貫町に所在する全長97.5mの墳丘をもつ前方後円墳である。烏川に合流する井野川の合流点から約2.0km遡った右岸の河崖縁寄りの地に占地している。この観音山古墳の発掘調査が行なわれた1968（昭和43）年頃までは、付近は現在のように住宅地や工業団地などの開発も及んではおらず、純農村地帯の景観を保っていて、水田と桑畑が広がる平野に籬籬が生い茂る雑木林に覆われた墳丘を良く残していた。

1962～1965（昭和37～40）年にかけて、群馬県立博物館（現県立歴史博物館の前身）は、観音山古墳のある総貫町に分布する古墳の一つ不動山古墳の発掘調査を群南村（1965（昭和40）年9月に高崎市に合併）の協力を得て実施している。この調査は、土砂採取のため破壊、削平された前方部の調査を主目的とし、埴輪円筒列と造り出し施設の調査を行っているが、あわせて、井野川下流域に分布する古墳の測量調査を悉皆的に実施している。この調査の期間中の1964（昭和39）年から1965（昭和40）年にかけて、観音山古墳の墳丘を覆う雑木林が地元農家によって伐採されたので、その機会をとらえて、1965（昭和40）年3月に墳丘測量調査を実施し、200分の1縮尺の墳丘実測図を作成した。ところで、この観音山古墳墳丘部の雑木林の伐採は、当時、岩鼻農業協同組合に加盟する農家が設置することになった稚蚕共同飼育場の稚蚕飼育用桑園を観音山古墳を開墾して造成しようという目的のためであった。そして、この造成計画は、文化財保護行政サイドとの調整を考慮されることなく、関係農家の要望の趣くまま進められていたことから、県立博物館の調査が、期せずして関係開発サイドと文化財保護行政サイドとの最初の接点となるとともに、後の観音山古墳発掘調査の下地をつくることとなった。

かくして、観音山古墳の地元農家による“稚蚕飼育用桑園造成計画”は、文化財保護行政の緊急案件として対策が迫られることとなり、群馬県教育委員会と高崎市教育委員会は、地元農家を中心とする事業者に対する当該事業の工事中止を指示するとともに、事業計画の変更を要請した。以降、発掘調査にいたる1968（昭和43）年3月まで、関係各方面との協議、調整が繰り返し行なわれ、観音山古墳の保存に向けて対策が模索された。しかし、当時の文化財保護行政をめぐる社会的環境は、開発諸事業が各地で進展する高度経済成長期にあり、わが国の産業構造はいちぢるしい変貌を遂げており、農業問題を取り上げてみれば、農家の農業経営の改善が迫られていたから、地域社会においてもきわめてきびしい状況を呈していた。観音山古墳の保存に対する地元関係農家の総意は、当面する稚蚕共同飼育用桑園を確保するためには、観音山古墳に桑園を造成することは止むなしという立場であり、保存にたいして否定的であった。

1965（昭和40）年の春、稚蚕共同飼育用桑園の確保を迫られていた地元関係農家は、桑園造成のために墳丘部にブルドーザーを入れて、開墾に着手しようとしたが、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会の要請に従って中止している。再び、1967（昭和42）年の春、今度は薬剤散布による籬籬の枯滅化を進めるとともに、桑苗の植付けを試みている。その意図するところは、墳丘を現状の状態で桑園化するということにあったようである。ここにおいて、墳丘各所に散見される埴輪破片から、その樹立、配置が確実視される埴輪類と主体部の位置、構造を確認し、遺構の現状を保存するために必要な調査を実施することが“桑園造成計画”に対応する手段として避けられないものとなった。

群馬県教育委員会と高崎市教育委員会および、地元関係農家は、協議を重ねるなかで、観音山古墳の

2. 1967 (昭和42) 年度調査

調査を実施し、その結果を踏えて「桑園造成事業」の見直しを検討するとともに、古墳の保存計画を策定するという事で調整がはかれた。1967 (昭和42) 年12月19日、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会および、地元関係農家の代表者は、高崎市役所群南支所において、観音山古墳発掘調査の実施計画を協議した。

ここに、観音山古墳の発掘調査は、群馬県教育委員会と高崎市教育委員会が発掘主体者となり、調査の実務を群馬県立博物館が担当して、1968 (昭和43) 年3月4日から3月17日までの14日間を当てて実施することが決定した。そして、この調査事業については、群馬県教育委員会が1967 (昭和42) 年度文化財保護費から国庫補助事業として事業費30万円を計上し、実施すること、調査期間中の調査員の宿所を高崎市群南支所に設けることが了解された。

2. 1967 (昭和42) 年度調査

— 第Ⅰ次調査の経過

第Ⅰ次調査は、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、地元関係農家の三者協議決定方針にもとづいて、1968 (昭和43) 年3月4日から3月17日までの14日間を当てて実施された。発掘担当者、現場作業の責任者には、群馬県立博物館学芸員梅澤重昭があたり、発掘調査員として、明治大学考古学研究室から派遣された学生13名および、県内出身の考古学専攻学生3名をもって構成する調査団を組織した。期間中の調査団員の宿所を高崎市役所群南支所に設けて実施した。組織および、関係者については、例言を参照されたい。

調査は、すでに作成してある墳丘実測図(200分の1)に基づいて、墳丘の原形、および、埴輪類配置の状況を明らかにすることを第一の目的とし、主体部施設の種類とその位置確認を第二の目的として、作業に着手した。しかるに、主体部横穴式石室が確認されるに及んで、その保護対策を進める必要から主体部石室を開口し、石室内部の調査にあたった。しかしながら、石室内部は未発掘の状態を保ってほ

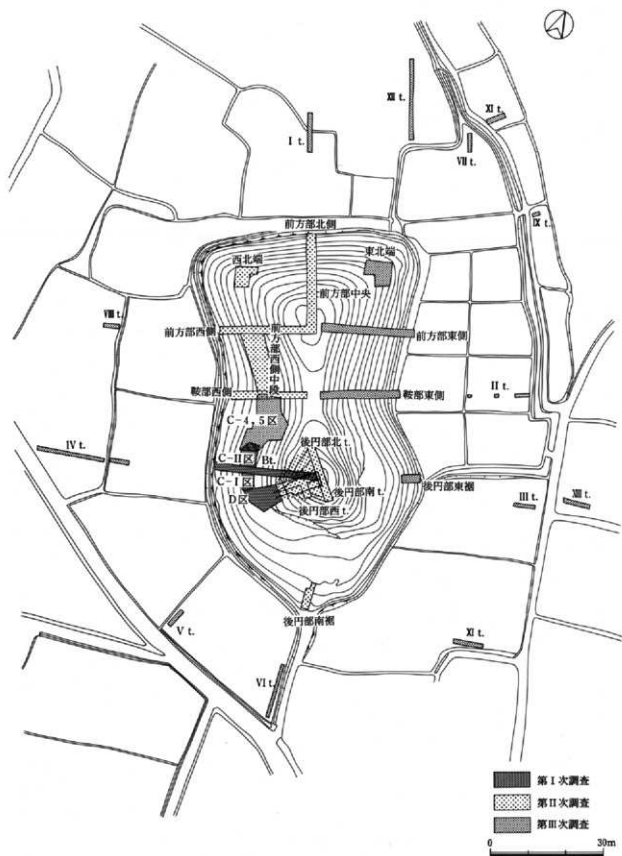
いたものの玄室右壁中央部を中心に崩壊、天井石も玄室を覆う3石のうち中央位の第2石が左側壁を支えるかたちで落下していたことから、玄室左側壁寄りから奥壁左半部分の露出床面に散在する遺物類の調査を進め、取り上げを行ったが、調査期間および、調査費の制約から全体にわたる調査を次年度事業として計画することとして、終了している。

3. 1968 (昭和43) 年度調査

— 第Ⅱ次・第Ⅲ次調査の経過

1967 (昭和42) 年度事業として実施した第Ⅰ次調査は、後円部西側中段部分の埴輪列と主体部横穴式石室内の一部に止まったが、古墳の保存状態は、後円部後方部の削平箇所(桑園)と石室右壁部の崩壊があるものの、古墳は盗掘等の被害を受けておらず、きわめて良好に保たれていたことが明らかとなった。ここに、調査を完結させ、遺構・遺物の保全を図るとともに史跡指定、史跡整備に向けて、保存計画を策定するために、古墳全体の調査を実施するべく、群馬県教育委員会は、1968 (昭和43) 年度文化財保護事業に観音山古墳緊急発掘調査事業を補正計上することとなった。

1968 (昭和43) 年度、この年に群馬県教育委員会は、社会教育課の文化視聴覚係で対処して来た文化財保護行政を分掌する係を独立させ、文化財保護係を発足させている。観音山古墳発掘調査事業は、文化財保護係が最初に取り組むことになった新規事業となったわけで、4月から調査計画を検討し、緊急調査の立案等事務的な作業に入った。文化庁との協議を進め、国庫補助事業(文化財保存修理事業)として決定し、180万円の事業費が補正予算で措置(九月補正)されることとなった。これにより、1968 (昭和43) 年度発掘調査は、主体部横穴式石室の全体調査、墳丘頂部および、中段平坦面に配置されている埴輪類の配列状態の解明、周堀園繞状態と兆域範囲の確認を目的として実施することとし、その調査実施の時期を、主体部横穴式石室と前方部位の墳丘、埴輪類調査を夏期に、後円部西側中段平坦面に配列する



第2図 第I～III次調査発掘調査区配置図 (1:1,000)

3. 1968 (昭和43) 年度調査

埴輪人物群からくびれ部方向に配列が想定される埴輪の調査と、埴丘裾部、周堀部および、兆城範囲確定のためのトレンチ掘削による調査を、水田の水が溢れる秋期に実施する。さらに、出土遺物類の整理調査を県立博物館で年を越した1969 (昭和44) 年2月期に実施することとなった。

1968 (昭和43) 年度調査の実施にあたっては、その調査体制を組織するにあたって、明治大学考古学研究室の全面的な協力をいただいている。発掘担当者に同研究室大塚初重教授を迎え、県立博物館学芸員外山和夫が加わり、この年度から社会教育課文化財保護係へ転出した梅澤重昭と3名で担当することとし、他に明治大学考古学陳列館職員小林三郎氏の協力を仰ぐとともに、発掘調査員に明治大学文学部史学地理学科考古学専攻生22名 (例言参照) の参加を得て調査団が組織された。なお、1968 (昭和43) 年度の第1次調査に参加した県内学生も任意参加した。

6月～7月上旬、大塚・梅沢両担当者は、調査実施方針、期間等について協議し、夏期の調査を7月25日から8月16日の23日間とすること、調査団の調査期間中の宿舎を地元綿貫町普賢寺総代の諸氏の全面的な協力をいただいている同寺とすることとした。今はその多くの方が物故されている普賢寺総代諸氏の協力が、1967 (昭和42) 年度調査事業以降、史跡指定および、史跡指定地の公有地化、保存整備事業にいたる観音山古墳文化財保存修理事業の遂行に大きく貢献されたことをここに明記しておく。同時に、主体部横穴式石室部の調査にあたっては、崩壊している天井石を取り除く工事が不可欠であり、その工事については高崎市、信澤工業株式会社に発注することを決定した。

(1) 第II次調査 1968 (昭和43) 年度1期調査

1968 (昭和43) 年度夏期の調査を、観音山古墳発掘調査の回次に照らして第II次調査とする。

第II次調査は、当初計画では7月25日 (木曜) から8月16日 (金曜) の23日間 (実動日数20日) とし

たが、梅雨明けが遅れ、天候不順が続いたこと、石室天井石の撤去工事が難行したことにより、大幅に延期し、8月25日まで、32日間にわたって実施した。この調査期間中の8月19日には、三笠宮殿下の発掘現場のご見学を賜っている。

(2) 第III次調査 1968 (昭和43年度2期調査)

埴丘および、周堀部の調査は、1968 (昭和43) 年11月20日から12月6日まで16日間をあてて実施した。埴丘部分の調査は、埴丘裾部位置の確認と、埴丘傾斜面の確認および、埴丘中段平坦面に配列されている埴輪類の検出を目的とした。周堀部の調査は、その範囲と形状を把握することを主目的としたが、また、古墳兆城の広がり进行を明らかにすることを兼ねた。

第III次調査も、第II次調査次の調査体制をもって構成したが、調査員には明治大学文学部史学地理学科考古学専攻の学生30名 (例言参照) が参加し、期間中の宿舎も普賢寺に設置した。

埴輪類の調査は、第I次調査・第II次調査時において、後門部埴頂部で、家・鶏・盾等が確認されており、前門部埴頂部からも家が確認され、調査を終えていることから、第I次調査で配列状態が明らかになった後門部西側部中段平坦部のCトレンチ内で検出された人物群からくびれ部方向に向けて配列が想定される人物群の検出と、前門部東北隅部中段平坦部を中心とする人物群・飾馬群の検出を主目的とした。その結果、埴丘中段平坦部に配置された埴輪類は、後門部西側から前門部西北隅部にかけて、ほぼ全域を調査の対象とすることが出来、前門部前中段平坦部の埴輪類は、両隅部の発掘区を拡大して進めることとした。他の部位については、埴丘斜面は埴丘裾部位置の確認をも兼ねて垂直方向に設定したトレンチ内での検出に努めた。第III次調査で新たに設定し、調査を行った個所は、後門部西側部からくびれ部にかけての発掘区(鞍部)、前門部東北隅部中段平坦部の発掘区(前門部北東中段トレンチ) 前門部頂部とくびれ部から埴丘東側部に設定したト

ンチ（前方部東側トレンチおよび、くびれ部東側トレンチ）である。

一方、周堀部調査は、墳丘裾部の内側堀肩の位置と外縁堀肩の位置を検出して、実測図上でその規模・形態を復元すること、および、周堀の種類（空堀か湛水堀か）を確認するための周堀内堆積土層の検出をトレンチ発掘で進めた。基本的には墳丘主軸線の延長線上の前方部前面（Iトレンチ）と後円部後方（VIトレンチ）、後円部中心位から主軸線に直角に交わる線上の墳丘東側方向（IIIトレンチ）と同西側方向（IVトレンチ）、墳丘東側くびれ部から直角に延びる方向（IIトレンチ）、前方部中心位に直交する西側方向（VIIIトレンチ）、後円部中心から西側斜め方向（Vトレンチ）、前方部東側東北隅外縁部位（VIIトレンチ）の発掘区を設定、周堀外縁部堀肩部を中心に発掘作業を行った。周堀内堆積層の検証は、IIトレンチにおいて実施した。その結果、前方部前面（Iトレンチ）と後円部中心に直角に交わる線上（IIIトレンチ・IVトレンチ）の発掘区で、中堤・外堀部の存在を確認することが出来た。

4. 第I～III次調査出土遺物の整理・調査

観音山古墳の発掘調査において発見された遺物類は、各次の調査が終了した時点で群馬県立博物館（富岡市一ノ宮）に搬入、保管された。そして、遺物発見届の提出は1967（昭和42）年度・1968（昭和43）年度とも各発掘調査終了後に手続きが進められた。

これら出土遺物類の整理・調査は、資料の量が膨大であること、特に石室内出土遺物類のうち錆化・腐蝕の激しい鉄製品を中心とする金属製遺物類の保存科学措置などに対処するため、1968（昭和43）年度調査の一環として実施した整理・調査のあと、数年次にわたって調査・保存修理事業が継続して進められた。なお、遺物類の整理・修復作業は1975（昭和50）年以降、1979（昭和54）年10月に開館した群馬県立歴史博物館の展示資料に供用する目的で進められた。以下、埴輪類を中心にその経過を概記する

こととする。

(1) 石室内出土遺物類の整理・調査

調査にあたっては、1968（昭和43）年度発掘調査の体制、組織を継続するかたちで、発掘担当者のもと、明治大学考古学陳列館小林三郎氏、明治大学文学部史学地理学科考古学専攻学生（例言参照）の参加を得て、県立博物館において実施した。なお、同調査期間中の宿舎は、群馬県立社会教育館（富岡市一ノ宮）に設置された。

調査は当初、石室内発見全遺物を対象とし、遺物類付着の土砂等の清掃、実測図作成写真撮影を目的として計画したが、実測図作成は、土器類を除いて、金属製品の剣製水櫃、武器・武具類、装身具類、馬具類を対象に進めた結果、挂甲小札を除く、全遺物の実大実測図の作成を完了した。写真撮影は、土器類を含み、ほぼ全遺物について完了した。

(2) 埴輪類・土器類の整理・調整

埴輪類の整理については、1968（昭和43）年度の遺物整理・調査の対象から除外し、群馬県立博物館の事業の一環に組み入れて実施することとした。水洗、注記、接合作業は、石室内出土遺物の整理・調査を終了した後、1969（昭和44）年3月頃から適時実施した。作業を進めるにあたっては、考古学を専攻する学生を臨時雇用したが、その中心となったのは平野進一、山口充の2氏であった。1970（昭和45）年度において埴輪類の水洗・注記等は大半を完了し、一部の接合・復元作業も進められた。同時に、石室内出土遺物のうち整理・調査が未着手で残されていた須恵器類を主とする土器類の接合・復元が進められ、実測図も作成された。これらの一連の作業が進められるなかで、1969（昭和44）年12月25日～12月30日の6日間は集中的に学生7名を臨時雇用して作業の進展をはかった。

(3) 石室内出土遺物類の保存科学調査

石室内出土遺物類のうち、土器類を除く金属製品の多くは、錆化・腐蝕が進行しており、また、残存

木材なども腐蝕・壊失の危険に直面していることから、その保存措置は緊要であった。当時、保存科学分野での金属製品・腐蝕木材等の保存技術は模索試行の段階にあったが、当該遺物類は保存科学の観点から積極的に保存措置を講じる必要性が生じていた。その方針を策定するため、1971（昭和46）年2月11日、12日の両日にわたって東京国立文化財研究所保存科学部、江本義紀、樋口清治、青木繁夫氏の調査を要請し、当面对応すべき処置方法等について指導助言を受けた。同時に、遺物類のうち残存木材の樹種鑑定および、ガラス材成分分析などのサンプリング調査を千葉大学理学部亘俊治氏、国立科学博物館山内 文氏、小田幸子氏に依頼、実施した。その結果、馬具類の居木、木芯鉄張地の木材質が桂材、銀装大刀皮皮装飾の粒子がガラス材ではなく菅実を用いたものである等、興味ある所見が示された。

(4) 遺物類の国有化と重要文化財指定

観音山古墳出土遺物類のうち、石室内出土遺物は、1971（昭和46）年度において一括国の保有になった。将来、群馬の森公園内に建設が計画されている新博物館に所蔵、活用するべく、県への現物譲与を文化庁に陳情しての上のことで、国保有にあたっては、当該遺物の全てを群馬県に貸与、地元で保管するという方針が決定した。

1982（昭和57）年6月5日付をもって、観音山古墳出土遺物類は、埴輪類を除いて重要文化財の指定を受けた。

(5) 石室内出土遺物類の保存措置

東京国立文化財研究所の指導のもとに、国保有となった石室内出土遺物類のなかで、錆化・腐蝕の進行しているものについての保存科学上の措置は、1972（昭和47）年度において具体化した。群馬県庁内旧衛生研究所棟地下室の一室を作業室として使用し、武器・武具類、馬具類の鉄製品の真空含浸法による樹脂固形による保存措置が行われ、文化財保護係長塚越甲子朗、文化財保護主事石川正之助が実務

を担当した。また、金銅製品、銀製品などの主要遺物類については、東京国立文化財研究所において青木繁夫技官が担当した。これらの保存措置を完了した遺物類は、新博物館開設まで、県庁内群馬の森建設室収蔵庫に保管された。

(6) 人物埴輪群の修理・復元

発掘調査時、県立博物館に収蔵された遺物類のうち、埴輪類については、一部が修理されたが、ほとんどは手つかずの状態であった。新博物館（群馬県立歴史博物館）の開設（1979（昭和54年）10月16日）に向けて、観音山古墳出土遺物類の展示構想もまともになり、その必要から、埴輪類のうち主要な人物像について修復作業を群馬の森建設室が行うこととなり、1977～1979（昭和52～昭和54）年度に実施し、先に復元されていた男子胡坐像（魂）と女子膝坐像（巫女）、女子立像（御食持）の3体のほか、三人童女像・盛装男子像・挂甲武人像・農夫像（馬子）等を完全復元したが、他は未着手のまま残された。

調査日誌

第1次調査

第1日、3月4日(日) 午前、群馬支所で、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、群馬県立博物館の各担当職員及び発掘調査員全体のミーティングを開催。調査計画にもとずき、調査の目的、日程、役割分担を決定。昼食後午後1時、現地に到着。ただちに作業に就く。墳丘主軸線上に後門部頂部を中心にAトレンチ。後門部中心から主軸線に直行するBトレンチ。後門部西側中段平垣部分にCトレンチを設定。墳丘部分の掘削、後門部西側部を中心とする発掘区設定のための墳丘掘削に着手。Bトレンチ（幅2m）は墳丘頂部まで設定。Cトレンチは、Bトレンチを挟んで両翼に延ばすかたちで、2mグリッド単位で設定する。A・B・C各トレンチの設定後、ただちに搬入式を行い、Bトレンチ、Cトレンチ1区（2×4m）の発掘に入る。

第2日、3月5日(月) Bトレンチ、Cトレンチの発掘を3区幅成で行う。墳丘（後門部西側部）の表土被覆状態を墳丘保存状態の確認。及び、中段平垣面に配置が想定される埴輪列の検出を目的として作業を進める。特に、CトレンチではBトレンチの所見から中段平垣面の幅が4.0～5.0mであることが推定され、Cトレンチの発掘範囲を広げる。B-1区（中段位2×3m）、B-11区（中段位上方2×4m）、B-111区（中段位下方2×4m）、C-1区（Bトレンチ南側3×3.5×7mの台形）、C-11区（Bトレンチ北側、2×4m）、C-111区（11区延長上2×3m）を発掘区とする。

第3日、3月6日(火) 前日設定の各発掘区での作業を進める。午後C-111区延長上にDトレンチ（3×4m）を設定するとともに、Dトレンチ内側の土段墳丘部分において、ボーリング探索をした結果、礫石状の石積みを確認。同地点に1×3mの試験ピットを設定し、露出したところ主体部横式石室築造入口部石であることが

第1章 経 過

確認される。C-II区・C-III区において輪軸人物像の存在が明らかになる。

第4日、3月7日(木) C-II区・C-III区・C-III区の調査を進めるとともに、Dトレンチを拡張し、主体部横穴式石室奥前面の平坦面の発掘を進める。午後、各トレンチの位置関係を100分の1実測図で作成する。順輪軸の配列は、B-I区・C-II区・C-III区に、すなわち、後門部西側部からくびれ部に向かって人物群が配置されていることが確認となった。D区には拡張区とも確認されず、後道前部には配置されていないことが確認された。

第5日、3月8日(金) C-II区の輪軸配列を露出。Bトレンチの北壁セクション図作成。D-拡張区での後道出入口部の現状状態を抽出、実測する。各発掘区の様子を行う。

第6日、3月9日(土) 新たにB-II区上方のB-IV区～B-VI区を発掘。墳頂からの崩落の輪軸、須臾礫片が見られるが、瓦石の存在は認められない。瓦石は施設されない墳丘であることが明らかとなる。午前からD-拡張区の後道部の清掘、実測。午後からC-II区・C-III区の輪軸出土状態の実測を進める。夕方、県教育委員会の文化財担当・職員及び社会教育主事現場を視察、主体部横穴式石室の調査について協議する。今後の保存措置を図る上で、調査は必要と決定し、石室内部の調査計画を固める。

第7日、3月10日(日) C-II区の輪軸出土状態の実測を継続。B-IV区～VI区の北壁セクション図を作成する。石室部調査は、後道出入口の原石の埋蔵石を除去しながら進めることとし、後道出入口から約4.0mまで除去する。後道出入口の側壁は川原石であるが、奥に向って角閃石安山岩礫石積みとなり、天井石は牛灰砂岩割石であることが確認された。

午後、県教育委員会担当者と石室開口部の警備等について打合わせ、夜間警備のため、現地に警備することと決定する。

第8日、3月11日(月) B-I区・C-II区・C-III区の輪軸の取り上げと、石室部調査の2班編成で作業を進める。午後、後道内の埋蔵石の大部分が除去され、石室内部へ通じ支室奥の大体の様子が判明する。側壁は角閃石安山岩礫石材をレンガ積み状に構築しているが、右壁の大部分が崩壊し、天井石3つの中央の1石が左側壁にもた掛ける状態で落ちおり、左側を支えるようにして、左側壁から奥壁に向って空間を保っていることが判明した。遺物類は左側壁に沿って存在し、支室手前部分には馬具類と思われる金銅製品と、その奥方に往甲小孔類が埋れ落ちた土製品等とともに存在していることが確認できた。現状を撮影し、作業を終る。夜、10時過ぎまで警備を行う。午後、県文化財関係者の視察、夕方、新開者の取材がある。

第9日、3月12日(火) C-II区・C-III区の輪軸の実測、撮影と取り上げを完了するとともにC-I区・D区の輪軸の実測図作成を進める。各トレンチの埋戻し作業を進めるとともに高崎市、信濃工業株式会社、信濃巴氏氏の好意でベルトコンベアへの無償貸与の提供を受けて、埋戻し作業が進行する。石室内部の調査は遺物配置図と撮影に終日通ずる。なお、石室壁石調部を立て掛ける状態でも残った大刀1点と土器類があることが作業開始時の判明、高崎警察署の現場検証を受ける。夜明けのため、後道部に警備する。以後石室内調査の終了時まで続ける。

第10日、3月13日(水) 予定した輪軸の調査大詰めを迎える。石室内の調査は、遺物配置図の作成と取り上げを平行して進める。文化財保護委員会記念物課、亀井正道調査官の視察がある。

第11日、3月14日(木) 墳丘部の調査は墳丘東側～北側及びその周囲の測量を2班に分けて実施する。石室内調査は、支室奥等りの往甲小孔、及び鉄線類の散布範囲の遺物配置図の作成を遺物を取り上げながら進める。

第12日、3月15日(金) 墳丘部の調査は墳丘側部の地形測量と埋戻し作業・石室内の調査は、昨日の作業の継続で主に重要な遺物の配置図を固化し、取り上げ、下の遺物の抽出に努めるという作業の繰り返しを続ける。

第13日、3月16日(土) 石室部の調査は、往甲小孔、及び鉄線類の散布範囲の調査は、調査期間内に完了することは作業量から見て不可能と判断されることから主に重要な土製品(鏡・青銅製物・

花弁形雲珠等と往甲の一部と切り)の取り上げにとどめて、その部分の現状の配置図を作成し、打ち切り。大部分は、二次の調査に引継ぎにすることにする。午前中に遺物取り上げの作業を中止し、二次の調査に備えて、遺物の保管作業を行うとともに石室内の調査機材を撤収し、後道出入口部の封鎖・埋戻しを午後にかけて行う。

正午より、県教育委員会、高崎警察署、県立博物館関係者、地元青雲寺総代、絹貫町区長等、群馬支所に来賓より、調査経過説明会を行い、続いて、今後の調査計画について協議し、1963(昭和38)年度事業で継続して実施する方針を了承する。一方、午後3:00より、青雲寺において、地元関係者を中心とする発掘調査報告会を行う。

第14日、3月17日(日) 午前中、発掘調査期間中に支出した経費等の精算事務を行う。昼食を兼ねて調査団の解散式を行う。午後、遺物類を県立博物館に搬送する。

第II次調査

第1日、7月25日(木) 午後一時、午前、調査団宿舎に入る。調査機材点検、ミーティング。午後、作業開始、石室工事用機械も搬入される。

第2日、7月26日(金) 3班編成で作業開始。第1班、後道部開口作業。第2班、後門部頂部発掘作業。第3班、前方部測量を担当。午後1時より関係者集り鎮座祭挙行する。

第3日、7月27日(土) 台風4号の影響、作業は昨日の継続。しかし、午後、悪天のため現場保安の作業を中止し、他の作業中止。

第4日、7月28日(日) 雨のため石室内の作業(倒壊実測、撮影)のみ、他の作業は休止。

第5日、7月29日(月) 午前、石室内作業を継続。午後、後門部主軸線方向にトレンチ設定、発掘着手。他に後道部側壁部実測を進める。

第6日、7月30日(火) 午前中、石室調査のみ、他は宿舎で待機。午後、3班で昨日の作業を継続する。石室の作業は午後3:00頃から補強作業に入る。工事用砂利、足場搬入される。

第7日、7月31日(水) 5班編成で作業を始める。石室部、後道部入口前面、後門部頂部の作業の他、前方部測量にトレンチ設定、頂部と頂部西側斜面での輪軸配列の抽出に当たる。

第8日、8月1日(木) 4班編成で、石室前面中段平坦部の輪軸類抽出 後門部頂部トレンチ 後門部頂部主軸線の発掘及びセクション図作成、前方部西側トレンチの発掘を進める。業者による石室内の補強作業はほぼ完了。後門部後方に撮影用ヤングラ設置。

第9日、8月2日(金) 3班編成で後門部頂部の掘削、前方部西側トレンチの発掘、新たにくびれ部頂部に主軸線から直下するくびれ部西側トレンチを設定、発掘に入る。後門部に掘削工事用バックホー入る。

第10日、8月3日(土) 3班で昨日の作業を継続。後門部頂部の輪軸類は半径約8.0mの範囲に散布し、おとりに石室部材確認される。墳頂部中央付近1.5mの深部に大発掘。

第11日、8月4日(日) 後門部作業は、天井石上の積土除去作業、バックホーで排土を続ける。くびれ部西側トレンチの発掘、セクション図作成。午後、新たに前方部西側中段位にトレンチを設定、発掘に着手。

第12日、8月5日(月) 3班編成で作業を続ける。後門部石室上横土の排除、前方部西側中段トレンチ、新たに設定の前方部前面主軸線トレンチの発掘。石室天井石と裏込めは序舞出する。

第13日、8月6日(火) 午前中、後門部石室天井石、裏込めの実測、全員で行う。午後、前方部西側中段トレンチ 前方部前面主軸線トレンチの発掘。午後から石室天井石除去工事用設備の構築作業が始まる。

第14日、8月7日(水) 石室天井石除去工事用設備構築作業のため、保安要員を預け他は前方部各トレンチの作業を進める。前方部頂部を拡張、取付機材が搬出される。

第15日、8月8日(木) 前日の作業を継続、終了進める。

第16日、8月9日(金) 前日の作業を継続する。石室天井石除去

工事用設備構築作業完了。明治大学考古学研究室杉原在介教授、角川源義氏等の現地視察あり。

第17日、8月10日出 前部各トレンチの作業を継続するが、午後中止(台風7号の影響)。石室天井除去工事は、玄室天井石3石のうち中央位の第2石を除去移動、第3石の移動準備で終る。

第18日、8月11日出 作業休止する。
第19日、8月12日出 5層編成で作業を進める。前部部頭部、前部西側中段トレンチ 前部西側トレンチ くびれ部西側トレンチの発掘及び実測図作成、新たに前部西側北隅中段トレンチを設定、発掘に着手する。石室天井石の除去作業は第1石を完了し、第3石に取りかかる。

第20日、8月13日出 作業は5層編成、前日の補強作業に入る。
第21日、8月14日出 作業の主力を石室部に投入、石室内の補強材の除去、埋戻し土の搬入作業を進める。前部部の作業は、前部部頭部トレンチを完了、前部西側中段、前部西側北隅中段トレンチの作業を進める。

第22日、8月15日出 3層編成で石室内埋戻し土の搬入作業の他、前部西側中段、前部西側北隅中段の各トレンチの作業を進める。午前文化庁並み調査官視察。

第24日、8月16日出 玄室右壁の崩壊懸念材の除去作業。須重部検出されはじめる。前部部作業は昨日の継続。

第25日、8月17日出 玄室右壁の崩壊懸念材の除去作業。須重部検出作業へ進む。前部部トレンチの作業は、測量、発掘順取り上げ作業、終了した所から埋戻しをはじめる。

第26日、8月18日出 主体部調査のため、A・B 2班を編成、時定作業(8:00～16:30、12:30～20:00の勤務)に入る。前部西側中段トレンチの発掘取り上げを終え、前部各トレンチの作業は埋戻しに入る。玄室奥部右壁寄りに副葬品が検出されはじめる。

第27日、8月19日出 墳丘部の予定の調査を終了し、調査は石室床面清掃と副葬品検出に集中する。午後後遺部調査を再開する。午前中、青森博士の視察。午後三笠宮殿下のご見学を賜わる。

第28日、8月20日出 A班・B班交替で玄室床面の清掃、副葬品の検出を進める。

第29日、8月21日出 主体部石室の2班交替の調査体制を止めて、午前は発掘、午後から副葬品類の出土状態の実測作業に入る。他は墳丘各部の発掘区の埋戻し、整理に入る。

第30日、8月22日出 主体部石室内の作業は副葬品類の出土状態の実測図作成を進める一方で、実測済み遺物類の取り上げを開始する。午後4時より後遺部前で普賢寺住職による慰霊供養を行う。
第31日、8月23日出 主体部石室内の副葬品類の取り上げ、実測をくり返し進める作業を終日行う。墳丘部の作業は撤収作業に入る。

第32日、8月24日出 主体部石室内の作業を続ける。撤収作業は前日の整理に入る。午前中、銀行において主要出土遺物の公開、午後、普賢寺において地元一般に公開する。後、その一部を泉立博物館に搬送する。

第33日、8月25日出 最後まで残った石室内遺物類出土状況実測と取り上げ作業は連日小休、放逐を最後に午前中に終了する。石室部分の埋戻し土を石室天井石除去工事の業者と打ち合わせる。除去天井石はもどきずに、板材で玄室部分を覆い、その上に埋戻土をすることとする。午後1時過ぎまでにすべての作業を終える。午後2時、調査宿舎を引き上げる。なお、主体部石室部の埋戻し作業は、後日3日間を要して工事業者の責任のもとに実施された。また、現地からの出土遺物類(宿舎普賢寺に保管)の泉立博物館への搬入も8月28日に、他の使用機材等の撤収とともにに行ない、第II次調査の全作業を完了した。

第III次調査

第1日、11月20日出 午前、発掘打合せ。午後より作業に入る。前部前頭部1トレンチの調整及び墳丘部および周縁を含めた地形測量を前部東側部から始める。

第2日、11月21日出 墳丘東側部分の測量、後部部西側くびれ部の発掘区講士

第3日、11月22日出 前日からの作業を継続する。

第4日、11月23日出 前部東側トレンチ、くびれ部東側トレンチ、西側トレンチの発掘、午後から前部東側北隅中段トレンチの発掘に着手

第5日、11月24日出 くびれ部西側中段トレンチ、前部東側北隅中段トレンチ、前部東側トレンチの発掘、くびれ部西側中段トレンチは、後部部西側中段トレンチからくびれ部にかけての発掘人物像配列を追求するために設定。

第6日、11月25日出 前部東側トレンチ、前部東側北隅中段トレンチ、西側くびれ部中段トレンチの発掘を進める。

第7日、11月26日出 前部東側トレンチ、前部東側北隅中段トレンチ、西側くびれ部中段トレンチの発掘を進める。西側くびれ部中段トレンチで武人頭部、同台部検出はじまる。

第8日、11月27日出 前部東側北隅中段トレンチ、東側くびれ部部頭部トレンチ、前部東側トレンチ、西側くびれ部中段トレンチの発掘を進める。

第9日、11月28日出 墳丘部の調査は前日からの継続作業新たに周縁部の調査に着手。西側くびれ部中段トレンチの埋戻しは一回判別に記列していることが判明する。周縁部調査は、IIトレンチ、IIIトレンチ、IVトレンチ、Vトレンチを設定発掘する。

第10日、11月29日出 前日の調査作業員午前で終業。午後から後半の調査作業員が入る。西側くびれ部中段トレンチ、前部東側北隅中段トレンチと、周縁部のII-3区 6区 7区 8区、I-1区 IV-2区の各トレンチの発掘を進める。IV-2区で外縁検出する。後部部東部部、同南側部の確認のためトレンチを設定する。

第11日、11月30日出 前日からの作業を継続して行う。

第12日、12月1日出 墳丘部調査は、西側くびれ部中段トレンチ、前部東側北隅中段トレンチの発掘終了段階に入り、実測図撮影を進める。後部部南側部トレンチの発掘は須重部埋戻しのため埋戻し。周縁部の調査は、第X、第XI、第XIIトレンチを新たに設定。第I～第VIIトレンチの作業は掘削、撮影一部埋戻しに入る。全体地形図に各発掘区を記入する。

第13日、12月2日出 墳丘部での調査は西側くびれ部中段トレンチの実測、後部部南側部のトレンチ地埋の調査を進める。周縁部の調査は、各トレンチの掘削と撮影が終了次第埋戻しを進める。

第14日、12月3日出 西側くびれ部中段トレンチの掘削、撮影を終了、後部部南側部掘削完了、周縁部の調査は、第II、第III、第V、第VII、第VIII、第IX、第XIの各トレンチ埋戻し完了、他は埋戻しを残して掘削、撮影を完了。前部東側北隅中段トレンチ、前部東側トレンチの埋戻し完了。

第15日、12月4日出 西側くびれ部中段トレンチ周縁部遺物の取り上げをほぼ終了。周縁部確認のため、後部部東方外縁部にて第XIIIトレンチを設定、発掘、掘削を完了する。第I、第VI、第XIの各トレンチ、墳丘部の後部部東側部、西側くびれ部中段トレンチの埋戻しを行う。

第16日、12月5日出 遺物類と記録類の整理を行う。

第17日、12月6日出 西側くびれ部中段トレンチの残った発掘部の調査を完了、周縁部第IV、第XII、第XIIIの各トレンチの埋戻しを午前中に完了、西側くびれ部中段トレンチ及び後部部南側部トレンチの埋戻しはブルドーザーを入れる。周縁部北西部の測量を補完する。午前中全作業を終了、器材・テントを撤収する。午後宿舎の後かたづけをして、調査体制を解散する。

5. 史跡整備の経過

史跡整備に至る経過

観音山古墳の保存修理事業は1976(昭和51)年度から1981(昭和56)年度の6カ年を要し、国庫補助を受けて県の直営で実施された。

1968(昭和43)年の発掘調査で、観音山古墳は葦石のない土盛りだけの墳丘に二重の周堀が囲繞し、墳丘中段には大型人物埴輪群があり、後円部に開口する巨大な横穴石室からは金銅製品を中心に膨大な遺物が出土した。しかし、石室は大きな破壊を受けており、墳丘も後円部に大きな改変を受けていることがわかった。

1971(昭和46)年度から1975(昭和50)年度の5カ年でほぼ全域(18,908.92㎡)の用地買収による公有地化が図られるとともに、1973(昭和48)年4月には国史跡に指定され、保存と活用が図られることとなった。

1976(昭和51)年からの保存修理事業にあたっては、南方1kmの県立歴史博物館に、観音山古墳出土品が展示され、観音山古墳は博物館の屋外展示としての性格を持つこととなった。また、保存修理に伴う発掘調査により復元の修理が可能であることがわかり、できるだけ忠実に整備することとなった。具体的には石室の半解体修理、墳丘および周堀の盛土・切土による整形、人物埴輪の復元の配列、墳丘・中外堤の張り芝、周堀部の砂利敷きなどである。周堀部は自由に歩けるようにし、墳丘と中堤には敷石による園路を設けた。また、便益施設として、便所、東屋、水飲み場、ベンチ、説明板などを設置した。修景にあたっては文化財の学習の場として史跡の保存を図りつつ、親しみやすく落ち着いた雰囲気公園として大いに活用されることを願い、植栽等についても配慮した。当時は全国的にも100m級の前方後円墳の全面的修理の事例は少なく、ましてや大形横穴式石室の解体修理は初例であった。暗中模索の状態から始まった修理事業であったが、多くの関係者の協力によって事業は完了した。現在多くの人々が見

学を訪れ、観音山古墳は大いに活用されている。以下、修理工事と併行して調査を実施した1978(昭和53)年度までの整備の経過を記す。なお、1979(昭和54)年度以降は工事が主体になるので表にゆずる。

1976(昭和51)年度

保存修理のための発掘調査を実施するにあたり、詳細な現況図の作成を行った。経年により既調査の基準杭は失われていた。発掘調査は外形の規模と形状を把握するため、後円部では放射状に、全体では墳丘主軸に平行ないし直交にトレンチを設定し、形状の複雑な墳丘くびれ部および、前方部両隅などは平面発掘を行った。墳丘裾部は水路が掘られ、裾部の形状把握を困難にした。全体的にはほぼ復元数値を得られる成果が得られた。

1977(昭和52)年度

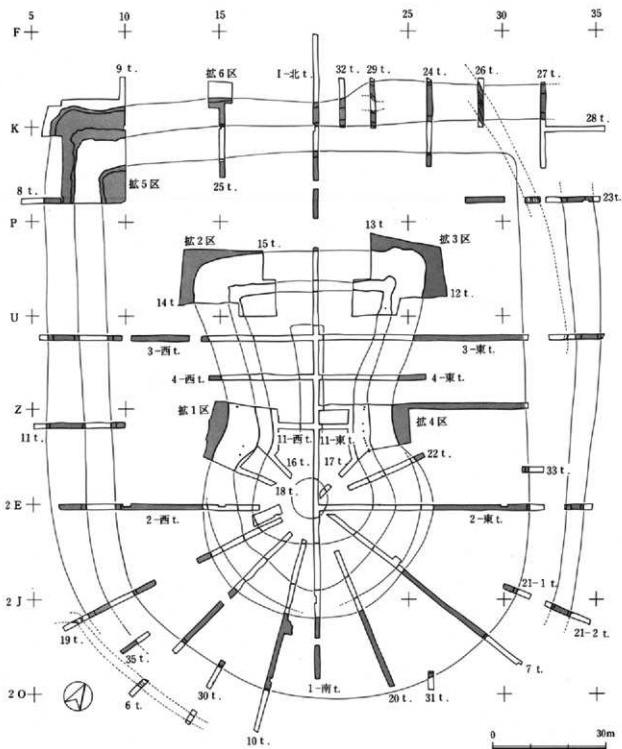
横穴式石室の半解体工事を実施した。後円部上段墳丘(墳丘中段面)に構築された石室は玄室壁を角閃石安山岩の切組積みとしており、玄室に架かる天井石3石は42年調査で墳丘鞍部に移動してあった。そのため側壁の破壊はより一層進行していた。石室を露出させるに際し、後円部上段丘の絶ち割りおよび、石室裏込めを調査した。玄室と羨道については現況実測図を作成し、壁石面に固体番号とメッシュを記し、裏込石とともに解体していった。また裏込石外縁に作業用の溝を穿ち、構築状況を調査した。羨道は河原石の乱石積みで、やや変形しているが目地と天井部の補強で現況を保てることが確認された。

1978(昭和53)年度

石室復元工事に先立ち、壁石の組み合わせ、床石下に落ちている遺物調査、基礎地業の調査、玄室平面図作成などを行った。石室根石は角閃石安山岩切石で厚さ約50cmの河原石(砂利)地業の上に直接載っている。地業石は石室全体に施設されるのではなく、壁石と裏込めの下だけに置かれ、石室中央はローム土を甲羅状に盛り上げていた。壁石は脆弱化したり割れているものが多く、樹脂で接着・含浸し、補強を行った。しかし崩壊し不足する数も多く、これは榛名山麓から岩塊を入手し加工して設置した。

第1表 年度別修理事業実績

年度	調査	設計	工事	その他
1976 (昭和51) 年度	<ul style="list-style-type: none"> 考古学調査 墳丘・周堀部の規模、形状確認調査 			<ul style="list-style-type: none"> 地上現形測量 50,000㎡ S. = 1 : 100 国家座標組込 発掘調査概報 I
1977 (昭和52) 年度	<ul style="list-style-type: none"> 考古学調査 石室裏込め、被覆 石室地盤調査 石材強度敷けん 現状構造物調査 石室クラック調査 石室崩壊石調査 	<ul style="list-style-type: none"> 横穴式石室半解体工事設計 	<ul style="list-style-type: none"> 横穴式石室半解体工事 裏込め土除去工 石室内仮補強工 	<ul style="list-style-type: none"> 工事監理 古墳模型製作 全体模型 S. = 1 : 200 墳丘模型 S. = 1 : 100 調査・整備概報 II
1978 (昭和53) 年度	<ul style="list-style-type: none"> 考古学調査 壁面、壁石、天井石、地栗石、出土物、平面実測等の調査 被覆土締固め試験 	<ul style="list-style-type: none"> 横穴式石室保存修理設計 外形整備設計 古墳修理完成予想図 	<ul style="list-style-type: none"> 石室保存修理工事 壁石再積み上げ工 裏込め石積み上げ工 羨道部補強工 天井石補強工 	<ul style="list-style-type: none"> 工事監理 壁石用材入手 調査・整備概報 III
1979 (昭和54) 年度			<ul style="list-style-type: none"> 石室保存修理工事 天井石再架構工 被覆土積み上げ工 電気配線工 墳丘整備工事 墳丘盛土工 整形工 芝貼り工 園路工 市道・用水路付替工事 	<ul style="list-style-type: none"> 工事監理 整備概報 IV
1980 (昭和55) 年度			<ul style="list-style-type: none"> 中堤整備整備工事 園路工 芝貼り工 植栽工 利用施設工事 東屋 便所 説明板 ベンチ、水飲み場 水道引き込み工 	<ul style="list-style-type: none"> 工事監理 維持管理
1981 (昭和56) 年度			<ul style="list-style-type: none"> 周堀整備工事 砂利敷き整地工 利用施設工事 埴輪設置工 外堤部整備工事 植栽工、櫓設置工 駐車場設置工事 	<ul style="list-style-type: none"> 工事監理 埴輪レプリカ製作 保存育成団体設立 維持管理 保存修理報告書刊行 竣工式(開園)・整備概報 IV



第3図 史跡整備時発掘調査区配置図 (1:1,000)

第2章 立地・環境

1. 古墳の位置と保存状況

観音山古墳は、高崎市総貫町の地に位置する。総貫町の集落の西北位、現在の高崎市営総貫住宅団地の東北に隣接する地を占めて位置している。地方主要道前橋～長瀬線に高崎市柴崎町方面から開通した国道354号線バイパスが合流する曲節交差点から東南方向約400mの畑地内に現在は史跡観音山古墳として保存整備され、芝生に覆われた墳丘を眺望できる。付近は、近くに住宅地や工場団地の造成も進んでいるが、周縁域には及んでいない。ただ後円部後方の南側から東南側にかけて、周堀部に張り出す形で民家の敷地がかつての古墳兆域内に入り込んでいる以外は、周堀部外堤部の残存地形に従うかたちで、市道が南側と東側にかけて敷設されているぐらいで、土地の著しい変容は受けてはいない。墳丘部も桑園が存在した後円部後方の削平部分を除けば、調査が行われた1968（昭和43）年頃まで墳丘の損壊箇所は他にほとんど認められず、また、周堀部も水田・畑地として残存し、きわめて保存状態の良好な姿をとどめていた。ちなみに、後円部後方の桑園化されていた部分は、かつては、本古墳の名称ともなった観音信仰の堂祠が営まれていた。

こうした状態で存在した観音山古墳が位置する地は、井野川右岸の河崖縁に延びる微高な地形を呈していて、標高約73m、ほとんど起伏の見られない平坦地である。井野川が烏川に合流する地点から約2.0km遡った付近を占めて位置している。

2. 周辺の地形

観音山古墳の位置する高崎市東方から前橋市南部・佐波郡玉村町域にかけて広がる前橋台地の平野は、ほぼ井野川下流域を挟んで二分される。西方の倉賀野台地と東方の前橋玉村台地である。この前橋

台地の地形については、洪積世（更新世）後期における浅間山の火山活動によって発生した火山泥流の氾濫による堆積層と考えられている。前橋泥流層とされるその堆積層内埋没木の放射性炭素（C14）の年代測定ではB.P. 24,000年±650年の測定値が得られている。その流出範囲は渋川市付近を要点として榛名・赤城の裾野末端線に囲まれた部位を南方に拡げて、南端は烏川に終わる広大な地域を占めている。井野川は、この火山泥流層台地に流出する榛名山南麓に源を発する河川で、台地を浸蝕して南下し、下流域を西の倉賀野台地、東の前橋玉村台地に二分している。現在は、その前橋玉村台地の西縁を画するかのように流路を取って、高崎市島野町付近から烏川に合流する同市八幡原町付近まで、左岸に高さ3.0mから5.0m内外の河崖を連ねている。こうした左岸の河崖にたいして、右岸の河崖は高さ2.0m～3.5mと小規模である。左岸に比して下流の高崎山下大類町付近から河崖地形を発達させている。一方、倉賀野台地東縁を画する河崖地形は、高崎市高岡町方面から流路を取る粕川に沿って形成されているが、それが、井野川左岸の河崖に対応する発達を示しているのは、柴崎町付近から始まり栗崎町を経て、岩鼻町に至り、その先で烏川左岸の河崖に終わる間である。この井野川左岸と粕川右岸の河崖線の間隔は1.2km～1.5kmであり、その間には一段低位の沖積平野が井野川寄りに微高地形を連ね、その西側に粕川に向かって沖積地化を強めた低湿な地形を発達させている。そして、その平野は井野川上流域に向かって、同川が形成する榛名山東南麓に発達する扇状地末端の沖積平野へと続いている。

このような地形形成を示す井野川下流域において、観音山古墳のある付近は、1970～1973（昭和45～48）年には西南位の地に高崎市営総貫住宅団地が造成され、1985（昭和60）年には東北位にあたる井野川下位面にも総貫工業団地が造成されている。



第4図 綿貫観音山古墳周辺の地形区分 (1 : 75,000)

しかしながら、観音山古墳発掘調査の行われた1968 (昭和43) 年の頃までは、桑園と水田が広がる純農村地帯の景観を良く残していた。そうしたなかにあつて、南方500m離れた地には広大な敷地を擁して旧陸軍岩鼻火薬製造所があり、その敷地内には、1882 (明治15) 年の同製造所開設以来、残置森林が繁茂する平野林を形成して来た。井野川下流域に連なる微高地にはかつて平野林が各所に広がっていたといわれている。観音山古墳の周辺の桑園を主とする畑地も長い年時を経て平野林を開墾してのものであったことが推定される。現在、県立公園「群馬の森」としてその一部が造成された旧岩鼻火薬製造所敷地内の残置森林は、シラカシ、ナラ、ハンノキ、ケヤキ、エノキ、ムクノキ、スギ、マツなどの樹種が繁茂する混生林である。それに加えて竹・篠類も繁茂しており、自然林に還った林相を呈している。

この旧岩鼻火薬製造所敷地内の残置森林に見られる植生こそ、観音山古墳が占地する井野川河産縁の微高地域に広がっていた往時の自然景観であり、その平地林を拓くかたちで、集落が営まれ古墳が造営され、分布していたものと推定される。

3. 井野川下流域の古墳分布

井野川下流域に分布する古墳は、『上毛古墳総覧』によれば、左岸にあたる前橋市玉村台地の周縁域には旧京ヶ島村7基、旧滝川村8基、玉村町下郷地区1基、の計15基が、粕川下流右岸にあたる倉賀野台地の東縁には、大畑村栗崎地区6基、岩鼻村栗崎から岩鼻台新田にかけ2基が分布し、その南方は島川北岸沿いに分布域を拡げ、倉賀野町東方に5基が集計されている。この二つの分布域に挟まれる形で、

3. 井野川下流域の古墳分布

井野川の右岸に延びる微高地には、旧岩鼻村綿貫から岩鼻、すなわち現在の綿貫町から、日本原子力研究所高崎研究所敷地内から県立公園群馬の森公園敷地内に古墳分布域が広がっており、22基が集計されている。昭和初年まで合計48基の古墳が知られていたことになるが、勿論この古墳数が、井野川下流域に造営された古墳の絶対数ではない。旧岩鼻火薬製造所敷地内に分布する古墳のほとんどは、軍事機密地域であったことから当該古墳調査から除外されている。また、最近では、大類町敷地内に造成された高崎情報園敷地内の発掘調査で約30基の古墳址が確認されている。実数は「上毛古墳総覧」掲載古墳数を大幅に上回る分布であったことは間違いない。

(1) 井野川下流左岸域の古墳分布

これら井野川域に分布する古墳のうち、主要な古墳について見ると、左岸地域には、元鳥名將軍塚古墳（前方後円墳・全長91～96m）が、観音山古墳から北方約1.9mの地にあり、現存する古墳としては、その南方の上滝町慈眼寺境内を中心に下滝町にかけて、一つの密集地域が南北約800mにわたって分布している。12基が確認されるが、その内には慈眼寺1号墳（円墳・径約3m、竪穴式系）の古式様相を呈する古墳を含めて滝川村2号墳（前山）古墳（前方後円墳・全長60m、横穴式石室）、伊勢山南古墳（前方後円墳・横穴式石室か）の50～60mクラスの後期前方後円墳2基がある。元鳥名將軍塚古墳を中核とする前期古墳群の形成と滝川村2号古墳等の前方後円墳を中核とする後期古墳群の形成が認められる。前者古墳群の形成においては、滝川村2号古墳付近の井野川河崖縁に石田川期遺物の散布が認められているので、周溝墓群の存在も考慮に入れるべきであろう。後者古墳群については、三果塚頭柄頭等を出土する古墳があり、特に前山古墳の主体部横穴式石室がT字形床面プランを示す構造であることが注意され、群馬県地方における横穴式石室導入期段階からの形成になる古墳群であることが推定される。將軍塚・上滝古墳群として把握出来る古墳群形成を示している。

この將軍塚・上滝古墳群の南方には、下滝町から下齊田町にかけて、分布の過疎地域が存在する。下齊田町には円墳の分布域が存在したが、そのほとんどは平夷されており、詳でない。齊田古墳群として把握して置くことにする。

井野川左岸河崖縁域において、最も古墳群の密集分布が認められるのは、高崎市八幡原町から玉村町下郷にかけての鳥川合流点を中心とした地である。下郷天神塚古墳（前方後円墳・全長80～90m、竪穴系）下郷10号墳（前方後方形周溝墓全長・42m）などの前期古墳・周溝墓群の分布がある一方で、後期古墳群の濃密な分布が広がっている。その中核に位置付けられるのは、若宮北古墳（帆立貝形墳・全長46.3m、舟形石棺）と推定されるが、八幡原町内鈴塚古墳（円墳・径10m、横穴式石室）からは、鈴鏡・鉄鏡等が出土している。下郷・八幡原古墳群として把握することにする。

井野川下流左岸域の古墳群形成は、將軍塚・上滝古墳群と下郷・八幡原古墳群が、前橋・玉村台地西半の地の古墳時代の地域形成が進展、変容するなかで主流的な形成を示しているが、その初期の段階にあっては、元鳥名町鈴ノ宮周溝墓群も出現している。

(2) 粕川右岸域の古墳分布

井野川左岸の前橋・玉村台地に対応する粕川右岸の倉賀野台地東縁の地に分布する古墳は、柴崎町敷地内と岩鼻台新田町敷地内に認められるが、分布は疎である。群集分布が認められるのは、鳥川北岸に寄った倉賀野町東南域から岩鼻町にかけての地域である。その分布域の中心を占める地の地名をとって、大応寺古墳群として把握されるが、その主流は後期群集墳である。

柴崎町敷地内には、正始元年銘三角縁神歌鏡を含む鏡4面を出土している蟹沢古墳（円墳・径10数m、粘土槨）があり、その地は、観音山古墳西北約1.5kmにある。付近には、古式の様相を示す浅間山古墳（円墳・径約30m）が現存する。この柴崎町敷地内から南方にかけては、柴崎町にかけての集落遺跡が分布し、高崎市立矢中中学校敷地内からは、古墳時代前期遺

跡が確認されている。柴崎町から栗崎町、台新田町にかけて広大な範囲にわたって遺跡の存在が推定される。この分布域の南方、台新田町から岩鼻町には、現在2基の円墳が存在し、その1基は岩鼻天神山古墳（径約27m）である。倉賀野台地の古墳分布は烏川寄りの地に集中する傾向が顕著に認められる。その台地の東縁を境とする粕川の流域を背景に、井野川下流右岸の古墳群が分布している。

(3) 井野川下流右岸の古墳分布

観音山古墳の北方約3.7kmの高崎町大野町・高崎情報団地内に中規模帆立貝形古墳2基を含む古墳群の存在が確認され、左岸河原縁に分布する古墳は、上流に分布域を拡げていることが推定され、分布が集中しているのは、観音山古墳の分布する綿貫町地内から、岩鼻町地内の旧岩鼻火薬製造所敷地、現在の日本原子力研究所高崎研究所敷地の西半部から県立公園「群馬の森」の西半部、正面ゲート付近にかけて約1,000mにわたる地である。観音山古墳北方では常盤・曲師地内に古墳の存在が伝えられているが、群集墳としてのものではないらしい。観音山古墳北方約500mの地には、集落遺跡の拡がり認められ、その一部には平安時代に比定される寺院遺構の一部が確認されている。この井野川下流右岸に分布する古墳群は現存する古墳の分布する地の地名を採って綿貫古墳群とすることにする。

綿貫古墳群の主流をなしているのは、4基の前方後円墳で、その最北位に前方部を北面して位置するのが観音山古墳である。ちなみに綿貫古墳群の分布域の北界は観音山古墳であり、その北方には分布の拡がり認められない。最南位には前方部を南面する岩鼻二子山古墳（全長115m、主体部朝貫式長持石棺）が存在した。観音山・二子山両古墳の距離は700m（後円部中心間）である。この700mの間隔を等間隔に分割するあたりで、北側に普賢寺裏古墳（全長70m、壑穴系露塚?）が、南側に不動山古墳（全長94m、朝貫式長持形石棺）が前方部を西面して占地している。これら4基の前方後円墳が継ぎ的な構成を示すものであろうことは明らかであるが、観音山

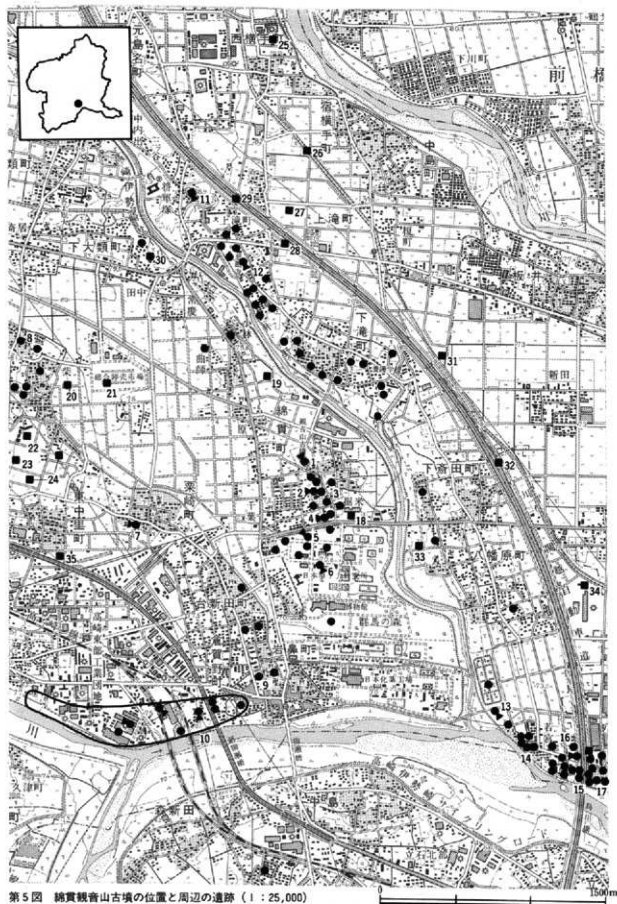
古墳のみ横穴式石室を主体部とする点において画期を認められるものである。

この4基の前方後円墳の近縁に分布する古墳のなかには、岩鼻村第12号墳（全長43m）の帆立貝形古墳があり、不動山古墳陪塚と断定できる岩鼻村第16号墳（径30m、後円部後方主軸線上）がある。さらには、初期馬具類（鉄地金銅張f字形響）・挂甲小札を出土した普賢寺東古墳（径約30m川原石積み壁面赤色塗彩石室）があり、これも不動山古墳の陪塚的位置を占めている。観音山古墳後円部南側の主軸線上位にも外堀外縁部に縦覧漏古墳（円墳・径約30m、壑穴系?）が存在する。この古墳の南方、50mには普賢寺裏古墳の北位置にやや大形墳丘の岩鼻村第20号墳（円墳・径27m横穴式石室）が存在した。綿貫町内に分布する円墳群は不動山古墳東北方位から、観音山古墳の南方位にかけて存在し、1964（昭和38）年代まで7基が残存した。また、不動山東方の地には河原縁辺の台地上を占めて集落遺跡の拡がり認められ、現昭和病院敷地内からは古墳時代中～後期の住居跡が発見されている。

綿貫古墳群の円墳群は、粕川の流路に接する現在の県立「群馬の森」の正面ゲート付近から芝生広場付近で、30基内外が存在したと推定される。その形態をとどめる1基が現存している。これらの古墳からのも推定される古墳1基の調査図と出土遺物が旧火薬製造所時代に保管され、一部が県立歴史博物館に収蔵されている。角四石安山岩加工材使用の横穴式石室の古墳であること、遺物類が後期古墳に通有な直刀・鉄鏃類であることから見て、後期群集墳であり、それらが、井野川西方に拓ける粕川流域の沖積地を背景に成立した村落社会の遺構になるものであることがうかがえる。

綿貫古墳群は、井野川下流の小地域にとどまることなく、おそらくは井野川を挟んで前橋・玉村台地の西半域と粕川右岸の倉賀野台地地域をも圏域に含め、井野川流域に地域圏を形成した首長の墳墓群と、それに寄生するあたりで形成された周辺村落社会の墳墓群として理解される構成を示している。

3. 井野川下流域の古墳分布



第5図 綿貫観音山古墳の位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)



1. 観音山古墳
2. 総寛彌れ古墳 (現存)
3. 総寛岩鼻村20号墳
4. (推定) 岩鼻村18号墳
5. 総寛彌れ古墳
6. 普賢寺裏古墳
7. (推定) 岩鼻村21号墳
8. 総寛岩鼻村17号墳
9. (推定) 岩鼻村18号墳
10. 総寛岩鼻村16号墳
11. 不動山古墳
12. 総寛岩鼻村14号墳
13. 総寛岩鼻村12号墳
14. 総寛岩鼻村13号墳
15. 総寛岩鼻村10号墳
16. (推定) 岩鼻村7号墳
17. 二子山古墳
18. 総寛岩鼻村11号墳
19. 総寛彌れ古墳 (現存)
20. 総寛岩鼻村8号墳
21. (推定) 岩鼻村5号墳
22. 総寛岩鼻村9号墳
23. (推定) 岩鼻村4号墳

第6図 総寛観音山古墳周辺の古墳 (1 : 6,000)

3. 井野川下流域の古墳分布

第2表 周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
1	綿貫観音山古墳	綿貫町字観音山1572	本報告の古墳	
2	背賀寺裏古墳	綿貫町字新米西1569	全長70mほどの前方後円墳で、前方部は西面する。墳形が後円部高に比して前方部高の低い形状を呈することから、比較的古い時期の築造が想定されているが、埴輪・土器など年代決定の視視となる資料が得られていない。	1
3	背賀寺東古墳	綿貫町字新米西1567	直径30～40mの規模を有した円墳であったと推定される。主体部は横穴式石室であった可能性が指摘されている。鉄地金銅製の「円筒板付巻、埴甲の出土が知られる。本古墳同様の古墳が観音山古墳から不動山古墳までの間に散見される。周辺に副葬品、副土器など5基の古墳の築造が確認されている。	2
4	不動山古墳	綿貫町字金廻1272-1	全長94m、前方部を西面させる前方後円墳である。削平された後円部墳頂には全長34cmの舟形石棺の棺蓋が露出している。中腹を狭み前形の周堀が二重に圍繞する。北側のくびれ部には方形の造り出しが設けられ、円筒埴輪列に区画された内部から土師器・土器が出土している。出土埴輪から5世紀後半の築造を考えられる。	2
5	綜覧岩鼻村12号墳	綿貫町字金廻1236	全長43mほどの前方後円墳と想定されるが現在は消滅している。	1
6	岩鼻二子山古墳	綿貫町字二子	現在は消滅するが全長約115mほどの前方後円墳であったと推定される。後円部から2基の舟形石棺の出土が伝えられるがその内の1基は東京国立博物館に収蔵されている。副葬品は五神四獣鏡、鉄斧、鉄鏃、直刀、石製硬道具が知られる。5世紀後半の築造と考えられる。	3
7	飯玉神社古墳	柴崎町字宮原609	全長30mほどの前方後円墳とされるが改変が著しい。円筒埴輪が散見する。	4
8	柴崎蟹沢古墳	柴崎町字宮原602	1909（明治42年）に削平される。墳丘、主体部とも形状が判然としないが10数mの小型古墳であったとされる。「正始元年」銘三角縁四神獣鏡、三角縁三神三獣鏡、内行花文鏡2面、鉄斧、鉄鏃、土師器が出土している。4世紀の築造と考えられる。本古墳の東側には浅間山古墳が現存する。また、南西約300mの位置で砂内遺跡の調査が実施され3基の円墳が検出されている。	5
9	岩鼻坂上北遺跡 S Z 1	岩鼻町字坂上北	直径9.7mの円墳である。7世紀初頭の築造か。	6
10	大志寺古墳群・大志南古墳群	倉賀野町下町字乙、大志寺・乙大志南側	烏川左岸の字乙大志寺から字乙大志南側地内にかけて約1500mの範囲に形成された大志寺群である。東端は岩鼻町地内および、綜覧岩鼻村1号墳などの大型円墳が形成されている。綜覧では前方後円墳4～6基を含む162基の古墳が確認されている。現在は両岸が通行し、現存する古墳はその数を著しく減少させている。	4
11	元島名將軍塚古墳	元島名町字將軍塚162	井野川左岸上に位置する。墳丘長91～96mの規模を有する前方後円墳である。後円部に存した主体部は粘土層と推定され、小型仿製四神鏡1、雲文石鏡1、鉄刀、刀子、鉾が副葬され、他に勾玉など玉類の出土が伝えられている。墳丘をめぐる不整形な周堀からは底部穿孔孔壺形土器やS字状口縁付埴輪が出土している。	7
12	綜覧渡川村2号墳	下滝町字境内26	全長60mを越す前方後円墳である。主体部は後円部に構築された横穴式石室の横穴式石室である。大刀、馬具をはじめ多数の副葬品を出土する。6世紀後半の築造と考えられる。本古墳の周辺、井野川左岸には多数の古墳が群生する。本古墳の北側、慈眼寺境内には円墳3基が現存し、その様相から前期の築造と想定されている。	2
13	若宮八幡北古墳	八幡原町字若宮2145	全長46.3mの規模の帆立貝式古墳である。南南東を向く前方部の西側には造り出し部が付設されている。墳丘の周囲には周堀帯を伴う周堀が一周する。主体部は舟形石棺で、早くから珠文鏡、直刀、鉄鏃、碧玉製管玉、ガラス小玉の出土が知られている。調査で中腹面を圍繞する円筒埴輪列を検出したほか、男女人物、素持人、家、盾、馬、犬、鹿等多種の形象埴輪が出土した。5世紀後半の築造と考えられる。	8
14	若宮A号墳	八幡原町字若宮2028	残存規模が径16×14mの円墳である。主体部に結晶片を模倣積みし、胴裏にブロンを有する横穴式石室を有する。6世紀後半の築造である。若宮八幡北古墳から若宮古墳群、下滝遺跡の間には本古墳をはじめ鈴鹿古墳など多数の円墳の存在が知られており、この間に間断なく古墳が築造されていたと考えられる。また、これらの古墳とともに前期の壱佐住居の存在が認められ、古墳群形成以前は居住地として利用されていたことがわかる。	2
15	若宮古墳群	八幡原町字若宮	壱佐系小石塚を主体部に有する円墳6基、墳丘を有さない壱佐系小石塚20基が検出された横穴式石室を主体部に有する円墳11基と合わせ長期にわたり古墳群が形成されている。	9
16	下滝天神塚古墳	玉村町大字八幡原	全長80～90mの規模を有した前方後円墳と推定されるが、現存しない。後円部の一部が調査され、墓石、周堀が検出された。特殊器台の系譜を引く埴輪、底部穿孔孔壺形土器、土師器の壺・S字状口縁台付埴輪が出土している。4世紀後半の築造と考えられる。近接して築造された前方後円墳、方形周溝墓との関連が注目されている。	10
17	下滝遺跡	玉村町大字八幡原	古墳時代4世紀の方形周溝墓27基、円形周溝墓2基、壱佐系小石塚2基、埴輪館1基、土坑16基、全長40mの前方後円墳 S Z 42が検出されている。また、壱佐式住居3軒も発見されている。6・7世紀になると周辺も含め横穴式石室を主体部に有する円墳群が形成され、14基が調査されている。	10
18	瀬米前遺跡・不動東遺跡	綿貫町字瀬米前	瀬米前遺跡では5～6世紀の住居40軒を検出した。不動東遺跡では古墳時代前期・後期の壱佐住居をそれぞれ2軒検出している。5世紀後半の講から格子印目文を施した土師質土器の埴を出土している。	11

第2章 立地・環境

No	遺跡名	所在地	遺跡の内容	文
19	縄貫遺跡	縄貫町、古新田町	古墳時代前期の住居6軒・方形周溝墓2基、後期の住居を検出した。字小林前では土壌の遺構に伴う瓦葺建物址が検出され、寺院と考えられている。重弁蓮華文の軒瓦や斜格字文の軒平瓦などを含む瓦が多量に出土している。	12
20	柴崎熊野前遺跡	柴崎町字熊野前	埴坂土の中位にAs-Cが堆積する河川跡が検出され、大量の土器とともに石製勾玉・管玉、ガラス製小玉、大足をはじめとした木器が出土した。	13
21	下大類遺跡	下大類町字沢沢・柴崎町字二本木	微高地上から古墳時代前期、平安時代の竪穴住居20軒を検出した。	14
22	矢中村東遺跡	矢中町字村東	古墳時代前期の方形周溝墓を検出する。その他にA ₁ -B下水田、溝、灌漑遺構を検出する。出土遺物では「物部私印」の銅印が特記される。	15
23	矢中村東B遺跡	矢中町字村東	古墳時代前期の全長27mの前方後型周溝墓、2基の方形周溝墓が検出される。	16
24	矢中村東C	矢中町字清水・柴崎境	古墳時代前期の方形周溝墓11基と円形周溝墓1基を検出する。	14
25	西横手遺跡群	西横手町字西免・萩原町字沖	古墳時代前期の周溝墓、古墳時代前期～中期の水路、Hr-FA下面の水田を検出した。	17
26	宿禰手三渡川遺跡	宿禰手町字三渡川	古墳時代の遺構としてはHr-FP下面とHr-FA下面の水田址を検出した。	18
27	上滝五反畑遺跡	上滝町字榎町北	古墳時代の遺構としてはHr-FA下面の水田とAs-C混土層上面および、その下面から水田址を検出した。前期の住居1軒も検出している。	18
28	上滝五反畑遺跡	上滝町字五反畑	榎町北遺跡と同時期の水田址を検出している。	18
29	上滝遺跡	上滝町字	古墳時代前期・後期、奈良時代の住居を検出した。	19
30	下大類蟹沢遺跡	下大類町字蟹沢	古墳時代～平安時代の住居、建物址と考えられている番列状遺構が検出された。それとともに円墳1基が検出され、円筒埴輪、人物・馬・大刀等の形象埴輪が出土している。	20
31	上滝社宮司	上滝町字	古墳時代前期の土塚が検出されている。井戸の可能性も考えられる。近接して滝川C遺あり、溝から前期の土層を出土している。	21
32	下青田遺跡	下青田町字小芝・熊野	古墳時代前期の竪穴住居3軒とともに方形周溝墓1基を検出する。その他に奈良・平安時代の住居なども存在する。	22
33	灰塚遺跡・灰塚II遺跡	八幡原町字灰塚	古墳時代～平安時代に至る竪穴住居を検出する。それとともに直径35mほどの円墳1基を出す。周堀内から出土した土師器高杯・杯・壺、須恵器製の椀から5世紀中葉か後葉の築造と考えられる。	6
34	八幡原大鼻・稲荷遺跡	八幡原町字	古墳時代後期を中心に25軒の住居を検出する。	23
35	東中里遺跡	東中里町字架崎境	Hr-FPの二次洪水堆積層下水田、A ₁ -B下水田が検出されている。	6

引用文献

- 津金澤茂・飯島義男・大久保美加「群馬県高崎市岩鼻町「群馬の森」を中心とする地域の歴史について」群馬県立歴史博物館紀要」第2号 1981
- 群馬県史編さん委員会「群馬県史」資料編3 1981
- 石島和夫「東国古墳時代の研究」1994
- 群馬県「上毛古墳総覧」1938
- 東京国立博物館「東京国立博物館館録目録古墳遺物篇（関東II）」1983
- 高崎市教育委員会「岩鼻坂上北遺跡、八幡原灰塚II遺跡、飯塚新田西・雁田遺跡、高崎市内水田遺跡一覽」1994
- 高崎市教育委員会「元島名将軍塚古墳」1981
- 高崎市史編さん専門委員会原始古代部会「若宮八幡北古墳の埴輪」『高崎市史研究』4 1995
- 高崎市教育委員会「高崎市八幡原町若宮古墳群第二次調査概況報告」1975
- 群馬県教育委員会「下郷」1980
- 不動山東遺跡調査会「不動山東遺跡」1986
- 高崎市教育委員会「縄貫遺跡」1985
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「平成8年度事業概要県立高崎高等養護学校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 柴崎熊野前遺跡」1997
- 高崎市教育委員会「矢中村東C遺跡」1988
- 高崎市教育委員会「矢中村東遺跡」1984
- 高崎市教育委員会「矢中村東B遺跡」1985
- 高崎市教育委員会「西横手遺跡群（II）」1990
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「平成8年度事業概要北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査事業」1997
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「八幡原A・B、上滝、元島名A」1981
- 高崎市遺跡調査会・高崎市教育委員会「下大類蟹沢遺跡」1993
- 高崎市遺跡調査会「上滝社宮司東・青田北遺跡、下滝高井前・赤城遺跡」1990
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団「下青田・滝川A遺跡、滝川B・C遺跡」1987
- 高崎市教育委員会「八幡原大鼻遺跡・稲荷遺跡」1983

第3章 遺構に関する報告

1. 調査の方法

(1) 第1次～第3次調査

第1章でその経過を述べたように、第1次調査は、稚蚕飼育場設置に伴う桑園造成計画により、本古墳を開墾するという開発行為に対応するため実施されたものである。そのため、墳丘の形状・規模、埴輪をはじめとした外部施設の把握、埋葬主体部の形態・位置の確認などがその目的とされた。また、それらの成果を持って、その後の本古墳の保存対策を講ずるためのものでもあった。

調査は、1965（昭和40）年に群馬県立博物館が作成した1/200の墳丘実測図を基礎にして調査区の設定がおこなわれた。調査は、緊急を要するものであったこと、表土層の除去、墳丘盛土の断ちわり、遺物の検出作業のすべてを人力によるため、その規模を限定する必要から、後円部の墳丘西半分を主対象にトレンチ法で実施することが立案され、開始された。

第1章の内容と重複する点があるが、その経過を具体的に述べると、調査区は、墳丘主軸（任意に設定）に平行するAトレンチを、後円部西側墳丘面に主軸線に直交する幅2mのBトレンチを設定した（以下、調査区の設定位置は第2図を参照）。Bトレンチは、調査の進展に伴い、墳丘の立面形状を追求するため、中段周辺から墳丘の墳頂部方向と墳丘裾部方向へそれぞれ拡張され、最終的には墳丘西側を長さ27mにわたり立ち断るかたちとなった。

墳丘中段面には、埴輪の樹立状況を把握することを目的としたCトレンチを、Bトレンチと交差するようにその両側に配置し、Bトレンチの南側をC-1区（2×4m）、北側をC-2区（3×6m）と細分、呼称した。

本古墳の内部主体については、甘楽町笹ノ森古墳など群馬県内所在古墳の事例を参考に、西側に開口する横穴式石室の存在が想定された。このことに基

づき石室開口部の位置を確認することを目的としたDトレンチ（3×4m）を設定した。この調査区は、中段面側に開いた台形状を呈するものであった。

第1次調査の結果、古墳の遺存状態が極めて良好で、中段面上には、埴輪列が原位置で確認できること、主体部の横穴式石室は、右側壁が崩壊していたものの未発掘で、おびただしい数の副葬品は、古墳構築当初の状態を残したままであることが判明した。このため、古墳の保存措置を講じ、史跡指定を実現することを目的とした調査の必要性とその方法が検討された。

第2次調査では石室内部の調査にその主体がおかれた。調査は、将来の石室修復に備えるための精査が必要とされた。そのため、崩壊した天井石の除去がなされた。これに先立って後円部部分の墳丘測量を実施、1/100の平面図が作成された。さらに、石室の調査に先立ち、後円部墳丘部上の埴輪樹立状況および、墳丘盛土の堆積状況を確認するため、石室の主軸と平行して1本（後円部中央トレンチ）、これと直交する方向に2本のトレンチ（後円部南北トレンチ・後円部西トレンチ）を設定した。その後、後円部全体の面的な調査（石室上部・石室上部S・羨門北の各調査区の設定）を経て、石室調査へと移行していった。

前方部および、くびれ部においては墳丘の状況を把握するために、墳丘主軸に直交する幅2mのトレンチが設定された（前方部西側トレンチ、鞍部西側トレンチ）。この他にも前方部墳頂部、前方部北西隅中段など墳丘上の主要部分に調査区を設定した。その他の墳丘部における調査としては、前方部西側中段面に前方部西側トレンチと鞍部西側トレンチを接続するかたちで、長さ15m、幅5mの範囲の調査区が設定された。この調査区は、Cトレンチに続く墳丘西側中段面部分の構造および、そこに樹立される埴輪列の状況を追求することが目的であった。

第3章 遺構に関する報告

第Ⅲ次調査では墳丘東側部分および、墳丘裾部各所の調査により、墳形の確定、墳丘構築面の状況把握がなされた。さらに、くびれ部西側中段面の長さ約13.8m、幅7mの範囲の調査を実施することにより(C-4・5)、石室開口部から前方部西側に至るまでの中段面とそこに樹立された埴輪列の状況が連続して確認できた。

また、この時の調査で、周堀外縁の位置を確認し、周堀部の規模・形態を把握することを目的に幅2mのトレンチが13箇所を設定され調査が実施された。これは、史跡指定のための範囲確定の基礎資料を得ることを目的とされたものでもある。

記録についての、実測図は、平面図を平板測量と簡易造り方測量で、立・断面図は簡易造り方測量で作成した。土層断面図、埴輪の出土状態は、1/10、1/20で、その他随意、状況に応じて適当な縮尺で図化した。レベルは後円部墳頂部にBMを設定し、この点からの相対レベルが記録されている。

写真は、35mmモノクロ写真、6×9・6×6・4×5判・ガラス乾判モノクロ写真、35mmカラーリバーサル写真をその都度使い分けて、撮影している。

最終的には墳丘上に27の調査区が設定され、その調査面積は約800㎡となった。周堀の調査面積は13のトレンチの合計が約120㎡である。

(2) 史跡整備

史跡整備の調査の目的は、史跡環境整備事業を進めるにあたり、必要なデータを得る目的で実施したものである。そのため、発掘はトレンチ法を基本とし、平面発掘は必要最小限の範囲にとどめ、古墳構築以後に堆積した表土層の被覆状態を明らかにし、墳丘盛土表面の残存状況と周堀部の掘り方の形状を把握することを第一の目的とした。

発掘調査に先立ち、現形図作成を実施した。本古墳の外形測量は、第Ⅰ次～Ⅲ次調査時(墳丘1/100、外周1/200)と史跡指定後の公有地化時(1/300)の2回おこなわれているが、史跡整備事業着手時にはそれらの測量杭が全て失われていた。そのため、新規に国家座標に組み込んだ大縮尺の現形図(1/100)

を作成(第1図の原因)し、これに基づいて調査計画を立案することとなった。現形図はトラバナー比1:32020で8ポイントの大トラバナーを一周させ、周堀部、墳丘部については各々小トラバナーを閉合させた。派生を含めてポイント総数は52点である。また、発掘調査および、整備の基準として古墳主軸を中心とする座標系を設定した。古墳主軸(任意)を中心に5m毎に区分しグリッドを設定、南北方向をアルファベット(A~Z・2A~)、東西方向を算用数字で表した。グリッド名は北西隅の番号を用いた。そのうち、2E-20をはじめとする7点はトラバナー観測点と一致させた。例えば座標のU-20は、国家座標の第IX系東西-67621.044、南北+34049.947に、2E-20は東西-67596.919、南北+34006.153にあたる。主軸は座標北からN-28°50'42"Wである。

発掘範囲は最小限にとどめるため、幅1.5mのトレンチを要所に設定することを基本とした。また、墳丘および、周堀の屈曲する部分については平面発掘によって形状把握に正確を期した。

実測は、全ての発掘区について平面図(墳丘0.2m、外周0.1mコンター、1/50)と土層断面図(1/20)を作成した。写真は35mmのモノクロ・カラーリバーサル、6×9モノクロ写真を撮影している。

墳丘には計18本のトレンチと前方部両隅とくびれ部の両側の4区画を拡張した(第3図参照)。

周堀は計25本のトレンチと中堤西北隅に拡張5区を設定、北辺の一部を拡張した拡張6区とともに面的な調査をおこなった。

その結果、第Ⅰ次～第Ⅲ次調査の際に得られた、墳丘、周堀の形態・規模に補足・修正を加えることとなり、これらのデータを基礎に、史跡環境整備が実行された。また、前方部東北隅中段面の円形埴輪の樹立、あるいはくびれ部東側中段面の円形埴輪列など埴輪樹立の新知見も得ることができた。

一部未公有の外堀部まで含めた古墳面積約24,750㎡(公有面積18,908.92㎡)に対し、発掘総面積は3,784㎡で、それぞれの面積比は15.3%(公有地との比率20%)となる。

2. 確認された遺構

(1) 墳丘

現況図からは、全長101m、後門部径57m、前方部61mの数値が得られる。しかし堀部には墳丘上方からの崩土と天明3年降下の浅間山軽石が寄せかけられ、用水路もめぐっている。そのため原形とはかなり異なった数値が表れていると考えられた。高さについては、後門部が前方部より0.5m高く水田面から9mを計る。

I～III次調査では8本のトレンチの他、石室と埴輪調査のために後門部墳頂部、石室入り口から前方部側部にかけての中段面、前方部両隅の中段面の各所に発掘区が設けられた。しかし整備にあたり墳丘全体の形状を把握するには数値が不足していた。新たに幅1.5mのトレンチ25本と前方部両隅および、くびれ部両側の4カ所を平面発掘し、確認作業をおこなった。本項では保存修理の成果を主に記す。

前方部中央（前面）（史跡、I—北トレンチ・II次、前方部北トレンチ）

前方部頂で長さ10.7mの平坦面を確認した。本調査では家形埴輪が出土している。史跡調査でも家形埴輪の小片の散布が認められ、築造当初の面がさほど削られていないことが確認できた。

前方部前面は途中に幅3mの中段を設けている。外方へ8度の下り傾斜をもつ。中段は墳丘を圍繞するがここは最高所にあり、埴輪からの高さは4.65mある。埴輪基部が外端から1.26m内側にあり、周辺に馬形埴輪片が分布する。

下段墳丘法面は29度30分の傾斜で直線的に埴輪にいたる。埴輪は盛土法面と同傾斜で地山を1.1m削り込んだローム層に置く。この位置は周堀底にあたる。したがって内堀の立ち上がりはそのまま墳丘を構成することとなる。一方、前方部頂から鞍部にかけてはなだらかに移行するようであるが、U列から後門部方向へ24.4mと32.5mに傾斜変換点がみられる。この間8.1mが鞍部ということになる。

前方部東北隅（史跡、拡張3区、II次、前方部東北隅）

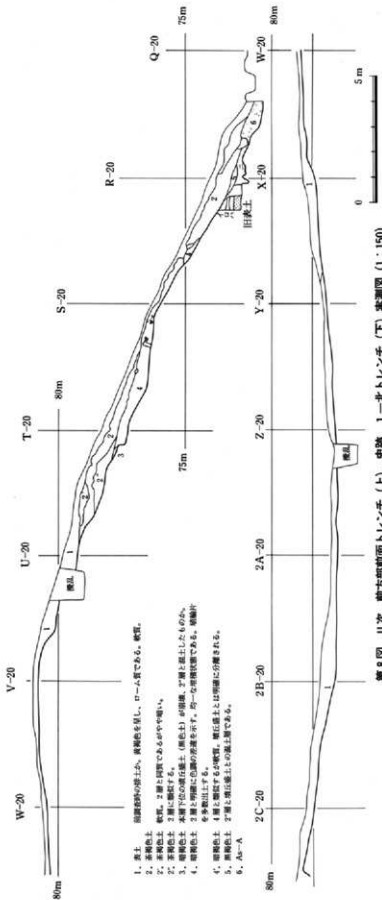
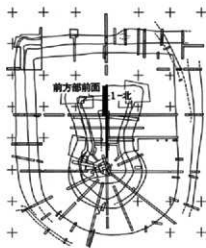
II次調査では小範囲を調査し、埴輪馬を1体検出しているが、形状把握は未確認であった。史跡調査ではこの範囲を含め、前方部東北隅の上段墳丘から内堀にいたる形状把握を目的に361㎡を調査した。T列に12トレンチ、23列に13トレンチを設定し、その間を拡張調査したものである。

上段墳丘の隅部は第II次調査で倒れていたが、等高線の流れからT—23付近で屈曲すると考えられる。上段墳丘裾は隅部の高さ76mであるが、前方部前面に高まり、くびれ部方向へ低くなる傾斜をもつ。中段の幅は3m内外である。

T—23からは埴輪馬が頭部を前方部（東）に向けて出土した。円筒埴輪列は明らかにできなかったが、破片の散布は認められた。

下段墳丘は高さ75.6mから72.1mの間で構成され、埴輪から1.2m上位に旧地表面がある。そのため、黒色旧地表土層が厚さ0.3mの帯状に墳丘下部を一周し、これと相似形に埴輪がなだらかな曲線をもつてめぐることになる。また堀部に沿って3本の溝が^{註1}めぐり、内側の溝は浅間軽石(As—A)で埋没しており、外方へ順次新しくなる。おそらく、天明期をさほど溯らない時期に周堀を水田化するに際し、水路として施設され、その後の軽石降下や墳丘土の崩落で埋没・開削を繰り返した結果であろう。隅部裾を切っているのは天明期の溝のみであり、他の溝はもっと高い位置のため遺構面まで達していない。また隅部裾を構成する周堀底との傾斜変換点は地山を削り出し、As—A埋没溝の外方にまでのび、まるみをもっている。このことから隅部のまるみは築造当初から構成されていることが明らかとなった。

本発掘区では盛土のほとんどがローム土を主体としており、黒色土の使用は比較的少ない。崩壊しやすい隅部の構築にあたっての配慮であろうか。なお、下段墳丘側部下方(T—25付近)の傾斜がきついの後世の耕作による削平であることを断面図が示している。

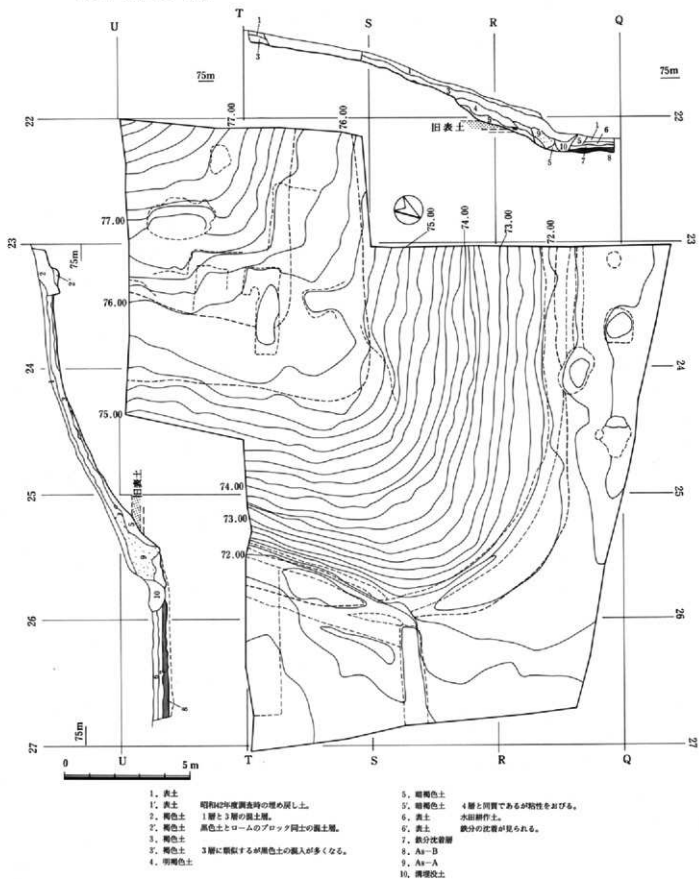


1. 黄土 旧黄土の頂上から、黄褐色を呈し、ローム質である。硬質。
2. 黄褐色土 硬質。2層と同質であるがやや軟い。
3. 赤褐色土 硬質。2層に類似する。
4. 黄褐色土 本層下の旧黄土（赤褐色土）の頂上と混じり、2層と同質である。横断断面を多数抽出する。
5. 黄褐色土 1層と類似するが軟質。紅褐色土とは明確に分離される。
6. 赤褐色土 2層と同質土上の黄土層である。

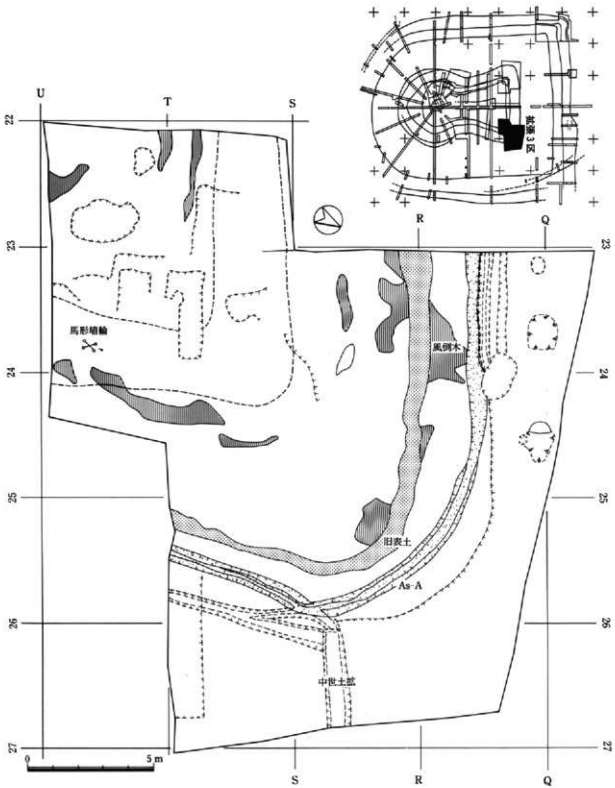
2. 確認された遺構

第3図 Ⅱ次、前方部前面トレンチ(上)、史跡、1—北トレンチ(下) 実測図(1:150)

第3章 遺構に関する報告



第9図 史跡、拡張3区実測図 (1:150)



第10図 史跡、拡張3区墳丘盛土層図 (1:150)

第3章 遺構に関する報告

註1 天明3(1783)年浅間山降下軽石

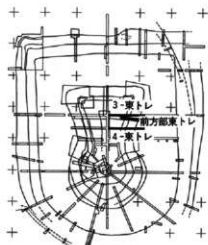
前方部東側部(史跡、3-東トレンチ・4-東トレンチ、Ⅲ次、前方部東トレンチ)

前方部東側部の形状を把握するため、墳丘主軸(20列)と直交位に3本のトレンチを設定した。史跡調査の3-東トレンチは前方部頂から東側方へ、4-東トレンチは3-東トレンチから12mくびれ部よりを設定した。Ⅲ次調査の前方部東トレンチは3-東トレンチからわずかにずれて設定したものである。

3-東トレンチは主軸から2.53mで上段墳丘斜面に移行する。頂部縁辺には円筒埴輪片と器種不明の形象埴輪小片が分布する。上段墳丘斜面は擾乱による若干の凹凸がみられる。傾斜角度は19度内外である。中段は20列から16.5mの位置からほぼ水平に形成され3mの幅をもつ。高さは東北隅部より0.34m低い。そのほぼ中央から馬形埴輪片が集中して出土した。下段墳丘は24度強の傾斜をもち、地山を1.3m整形して墳裾にいたる。下段墳丘盛土厚は2.6mである。墳裾はAs-A軽石を覆土とする溝によって0.7mほど削られている。

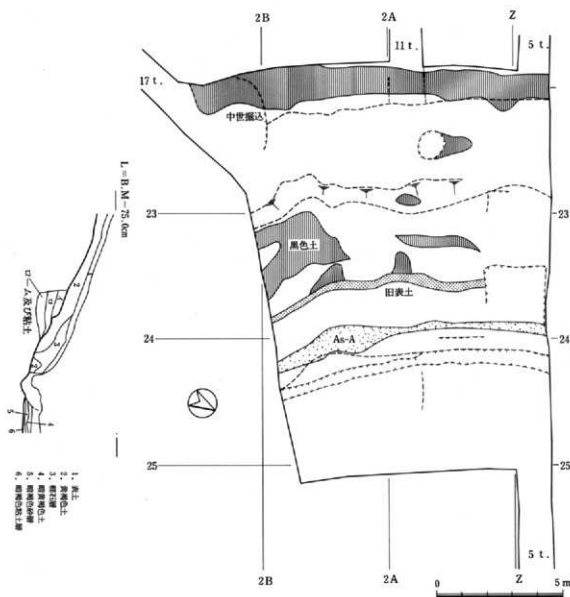
中段の検出にあたっては土層に疑問が生じた。そこで上段墳丘裾部を切断し、盛土状態を調査した。上層は約1mの厚さでローム・黒色・褐色土粒を均一に含む層、以下へ黒色土、ネローム主体層となる。ところがトレンチの対応する断面で、盛土下0.4mから土師器坏と1片の埴輪片が出土したのである。これを包含する層は黒色土でレンズ状体積を示し、下層のローム主体層とは明確に識別できる。そのため中段面の堆積土(3層)ではないかとの疑いをもったが、As-Bを含まないこと、下面を墳丘面とした場合、中段が奥へ入り込み過ぎること、当該層がへ層に対応し、上下層もそれぞれト・ネ層に対応することがわかった。したがって同層と直上層は墳丘土と判断される。盛土中から出土した土師器坏と埴輪片は採取土の中に混入したまま運搬されたものであろう。

4-東トレンチは3-東トレンチとくびれ部との



間を確定するために設定した。堆積土が厚く遺存状態は良好であった。頂部は20列から2.4mで傾斜をはじめ、同位置には3-東トレンチ同様埴輪片の分布が認められた。小片が多く器種は不明である。上段墳丘はくびれ部へ狭まる位置にあるため傾斜角は23度ときつい。また中段と接する位置では40度の急角度をもって明瞭な屈曲をしめす。中段面は外縁が崩壊し正確な幅を計測できないが、下段墳丘傾斜角から判断すると3.4m前後となる。埴輪が認められないのはこのためであろう。下段墳丘も傾斜角は25度ときつい。見かけ上の墳裾はAs-Aで埋まる位置であるが、本来はこれより1.2mほど外方と考えられる。地山整形高は1.2mである。墳裾直上の堆積土は灰褐色粘質土でその上にAs-Aがのる。周囲では相当する位置にAs-B層が堆積する。このことから灰褐色土は墳丘中段面に一般的に認められるAs-B層下の4層暗褐色土(墳丘直上層)と年代的に相当すると考えられる。

註2 浅間降下軽石で天明元年(1108)年説が有力(新井1979)



第13図 II次、鞍部東側トレンチ実測図・史跡、拡張4区墳丘盛土層図 (1:150)

2 m) に孤の変換点が認められる。換言すれば、前方部が幅を減じつつびれ部にいたり、やや後円部方向へ幅を増す位置にあたるといえる。

5 および、11 トレンチの頂部には埴輪片の分布が認められる。このことによって前方部頂から鞍部にかけて埴輪の樹立が確実になった。

上段墳丘の傾斜は20度と緩やかである。これは鞍部頂が前方部頂より1.8 m 低いにもかかわらず、上段墳丘裾がX-2 m 列からほぼ同じ幅でくびれ部にいたるためである。

中段面は上段墳丘傾斜と明瞭に変換する。外縁は崩壊しているが推定幅3 m である。これから0.4 m 内側に中段と相似する曲線で円筒埴輪列が認められた。調査区内での確実な樹立は11本で遺存状態は良好とは言えない。円筒列の内側に接して平底の須恵器瓶が出土している。下段墳丘は26度の勾配でそのまま周縁にいたる。地山整形高は1.3 m である。

本区の盛土は下段墳丘と上段墳丘下部に黒色土の多用が認められる。特に上段墳丘裾部を帯状にめぐる黒色盛土層は下段墳丘下部を構成する黒色地山層

第3章 遺構に関する報告

に類似した景観をしめす。

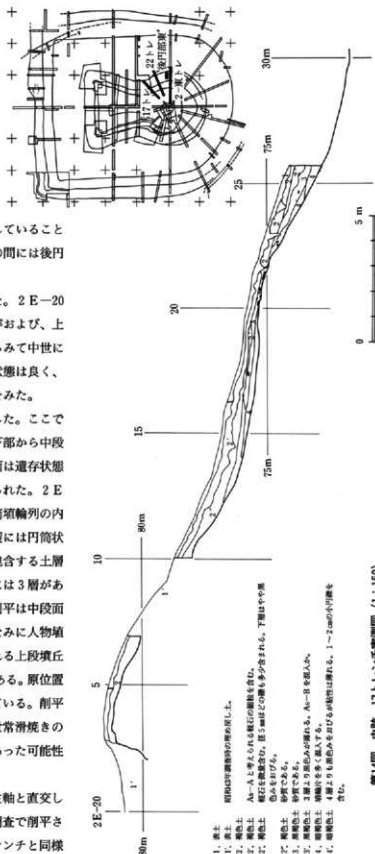
くびれ部東側～後円部東側（史跡、17・22・2一東・7トレンチ・Ⅲ次、後円部東掘トレンチ）

ここで述べる4本のトレンチは後円部頂の2E-20列から放射状に設定し、後円部東側部の形状を確認したものである。東側部は上段墳丘が削平され、中段部が異常に広がっている。また墳裾も耕作によって変形していることが確認された。なお下段墳丘と周堀との間には後円部堀を巡るテラス状遺構が検出された。

17トレンチはくびれ部方向に設定した。2E-20からの距離12.3mと19.2mの間に削平がおよび、上段裾部は明確でない。削平は堆積土からみて中世に溯るとみられる。中段面は比較的遺存状態は良く、拡張4区に図示した円筒埴輪列の出土をみた。

22トレンチは方向角67度30分に設定した。ここでも17トレンチから続く削平が上段墳丘下部から中段面上4mにおよんでいる。ただし中段面は遺存状態が良好で2本の円筒埴輪の樹立が認められた。2E-20から19.9mの位置である。また円筒埴輪列の内側2.7mに人物埴輪頭部が出土した。周辺には円筒状埴輪片の分布が濃密である。これらを包含する土層は標準堆積土の4層であり、その上層には3層がある。したがって本トレンチにおいても削平は中段面には達していないことがわかった。ちなみに人物埴輪頭部の出土位置は、全体から想定される上段墳丘裾線の外方0.9mにあり、中段面直上である。原位置をさほど移動していない可能性を示している。削平面は堅くしまっており、上層からは中世常滑焼きの破片が出土している。何らかの施設があった可能性が高い。

2一東トレンチは後円部中央に墳丘主軸と直交して設定した。後円部頂は本調査の石室調査で削平され、上段墳丘下部は17トレンチと22トレンチと同様の削平がみられた。上段墳丘下部の削平は中段面にはまではおよばないが、上段墳丘裾線は明確でない。



第14図 史跡、17トレンチ実測図(1:150)

第3章 遺構に関する報告

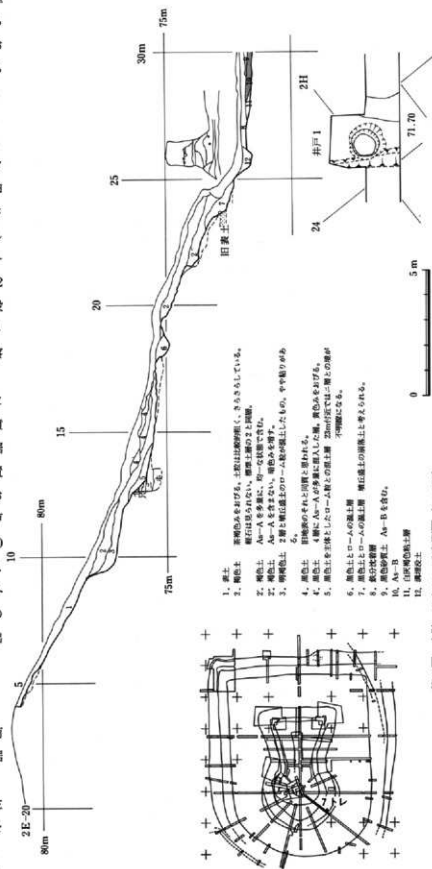
2 E-20から17.5mに形象埴輪台部が出土した。近くから武人埴輪の腕が出土しており、形象台部の外方2.5mからは円筒埴輪が出土している。埴裾は溝に切られているが、汀線帯が明瞭に確認できた。下段埴丘の傾斜と水平なテラス状を呈する汀線帯との屈曲位置は図上で容易に復元できる。地山を1mほど削り出して埴裾を置き、そこからローム土の水平面(汀線帯)が3.2m続き、さらに0.3mほどの段をもって周堀にいたる。22トレンチでも同様な状況が観察された。

7トレンチは後円部東南に設定した。上段埴丘下部と埴裾の攪乱が著しい。特に埴裾は変換点として確認した位置から3m内側にまで耕作がおよんでいる。同所からは井戸遺構が検出された。2 E-20から13.1mに上段埴丘裾、27.4mに埴裾がある。また埴裾外方1.8mに変換点があり、この間はロームの平坦面が造り出されている。

註3 第51図参照(埴輪出土図)

後円部南側(史跡、20・1—南トレンチ、Ⅲ次、後円部南裾トレンチ)

20トレンチは、後円部頂主軸に対し157度30分の開きをもって南東方向に設定した。中世の削平が中段にまでおよ



1. 表土
2. 黒色土 埴輪の色を覆う。土質は砂質粘土、さらさらしている。埴輪は認められない。黒色土層の2と同層。
3. 褐色土 Ab-Aを多量に、均一な状態で含む。
4. 褐色土 Ab-Aを含まない。埴輪の色を覆う。
5. 明色土 2層と埴丘頂上のローム状が混じったもの。やや脆いがある。
6. 黒色土 埴輪の色と同層と思われる。
7. 黒色土 4層にAb-Aが少量に混入した。黄色みを帯びる。
8. 黒色土 5層と埴丘頂上のローム状が混じったもの。均一な状態で埴輪の色を覆う。
9. 黒色土 6層と埴丘頂上のローム状が混じったもの。均一な状態で埴輪の色を覆う。
10. 黒色土 7層と埴丘頂上のローム状が混じったもの。均一な状態で埴輪の色を覆う。
11. 白砂質黒色土
12. 黒色土

第16図 史跡、7トレンチ発掘図(1:150)

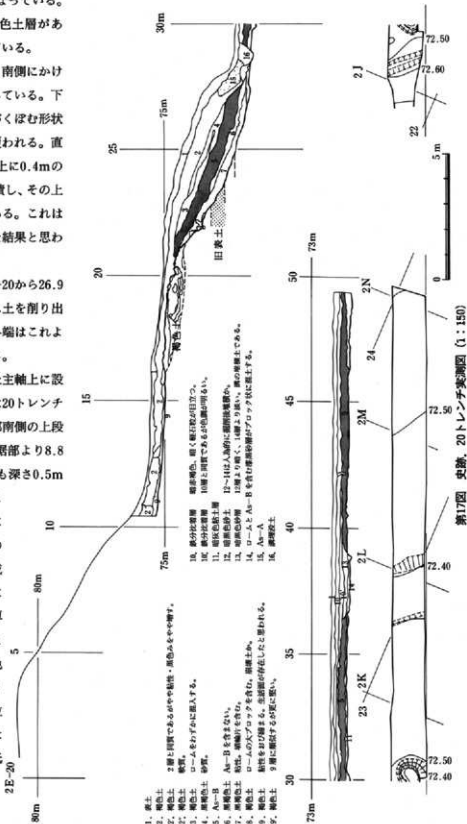
んでいる。このため中段盛土面は後門部東側より0.3m低くなっている。直上には0.1mほどの褐色土層があり、強く踏み固められている。

同面は後門部東側から南側にかけての広い平坦面を造出している。下段墳丘盛土断面は中位がくぼみ形状をなし、厚い堆積土に覆われる。直上に暗褐色粘質土、その上に0.4mのAs-B主体の3層が堆積し、その上層1mが盛土崩壊土である。これは中段盛土を削平移動した結果と思われる。

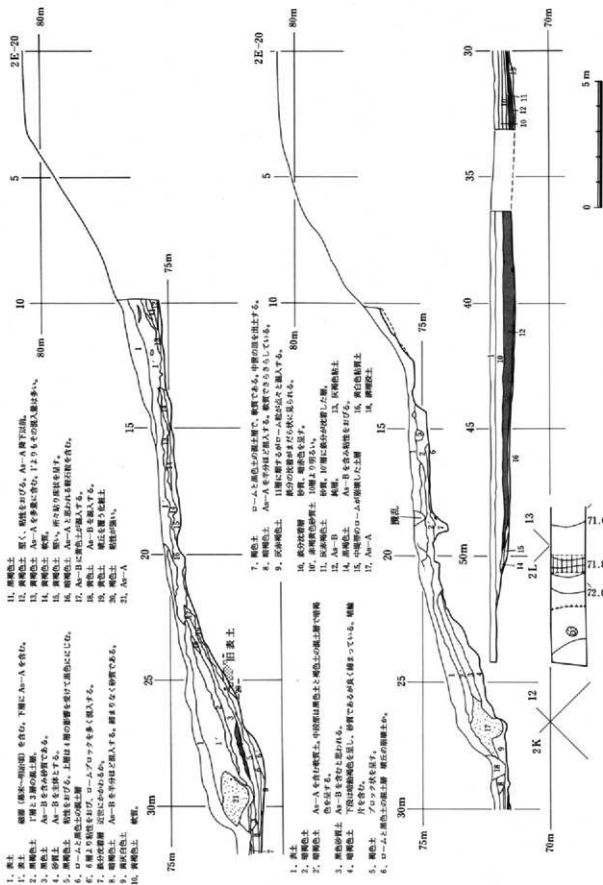
現状での墳裾は2E-20から26.9mの位置にあり、ローム土を削り出した平坦面(汀線帯)外端はこれより3.85m外方に位置する。

1-南トレンチは墳丘主軸上に設定した。堆積土の状況は20トレンチに類似している。後門部南側の上段墳丘の削平は推定した裾部より8.8m内側におよび、中段面も深さ0.5mほどが削られている。この排土は下段墳丘法面に移動され、周囲外からの「馬入れ」の路体を構成している。厚さは2.2mに達する。下半には0.3m厚で3層が堆積し、これと墳丘面との間には暗褐色粘質土がある。墳裾は2E-20から29.72mの位置にある。地山黒色土は前方部前端より0.3m低く、墳裾も0.52m低い。

後門部西側(史跡、10・6・19・2-西トレンチ、



第17図 史跡、20トレンチ実測図(1:150)



第19図 史跡、10トレンチ(上)、6トレンチ(下)実測図(1:150)

I次, Bトレンチ)

5本のトレンチを設定した後門部西側は、東南側からの続きで上段墳丘が著しく変容している。2一西トレンチにいたり、ようやく原形を確認できた。

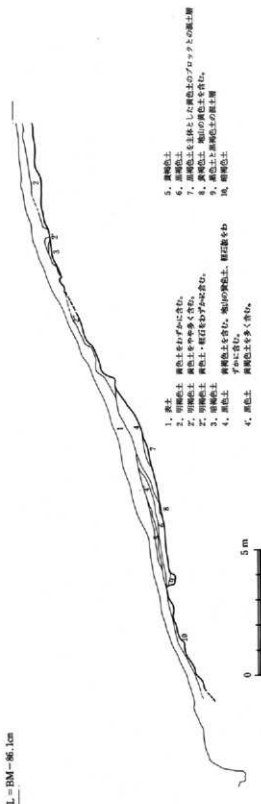
後門部は標高80.54mである。中段面は約0.5m削平されており、埴輪列と上段墳丘および、下段墳丘の変換点は不明である。したがって同部の形状は埴裾の数値とくびれ部の形状から推定せざるをえない。

10トレンチの上段墳丘の破壊は後門部頂の2E-20から10m以内にまでおよび、中段面での削平の幅は11.7m以上になる。同面からは建物の柱穴が検出された。また6トレンチ削平面から検出されたピットからは中世の土師質皿が出土している。

南西部での埴裾は原形図でも明らかなように後世の削平が著しく、As-Aを埋土とする溝で切られている。ローム土がテラス状に巡る汀線帯外縁はそれより外方に位置するため、破壊がおよばず、ほぼ正円で巡ることが確かめられた。2E-20からの距離はおおむね30m前後である。これに対し埴丘裾は10および、2一西トレンチが28.7m、6および、19トレンチが27.3mと若干の差が生じる。また10トレンチ裾部は堆積土の状態から原形を良く保っていると考えられるが、汀線帯は明らかではない。裾部は周堀底より0.2m低く明確な屈曲をなす。

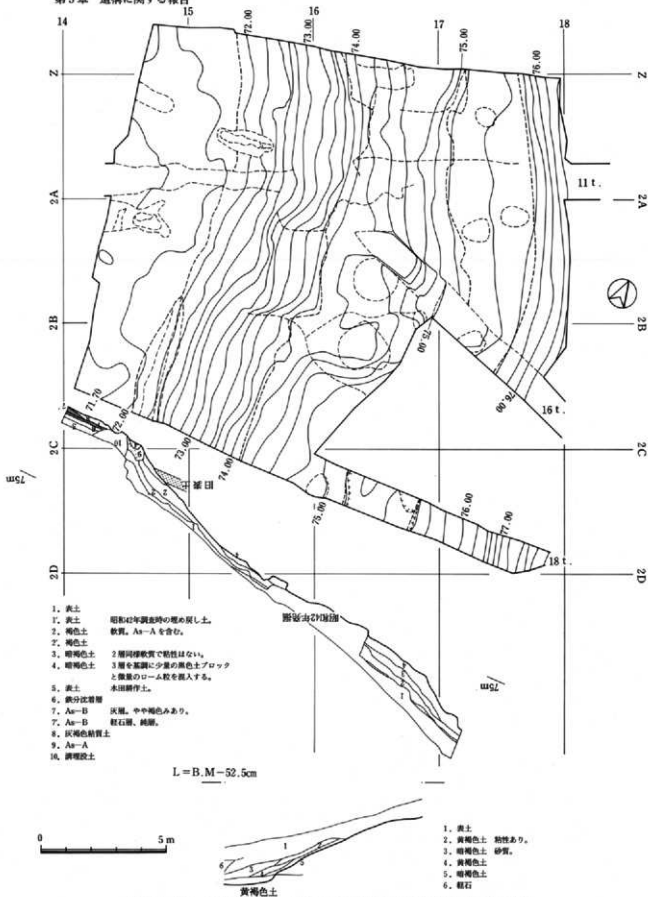
19トレンチは石室南方近くに設定したため、中段奥で石室地薬石の検出をみた。現状ではこれの外方0.3mほどしか盛土に覆われていないが、本来は2mほどの盛土があったものと考えられる。

2一西トレンチは墳丘主軸に直交して設定した。中段部にI次調査のBトレンチが重複するが、他の攪乱は受けていない。中段面は10および、6トレンチより0.5m高い。このことから後門部中段面は現状面より0.5m高く、その幅はおおよそ3.6m近似で巡るものと推定される。埴裾は地山である黒色土とローム土を1.1m削り出し、0.9m幅の汀線帯を造り出している。対応する2一東トレンチでの裾部の状況と地山レベル、埴裾の位置など良く一致している。

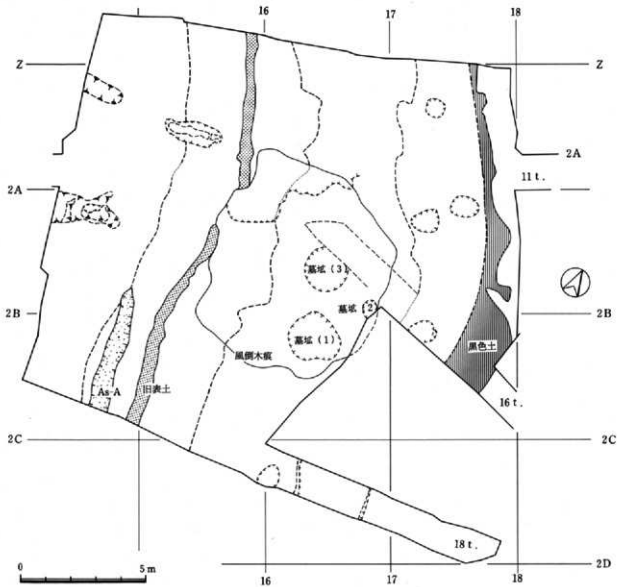


第21図 I次, Bトレンチ発掘面 (1:150)

第3章 遺構に関する報告



第22図 史跡、拡張1区(上)、II次、鞍部西側トレンチ(下)実測図(1:150)

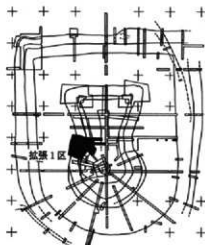


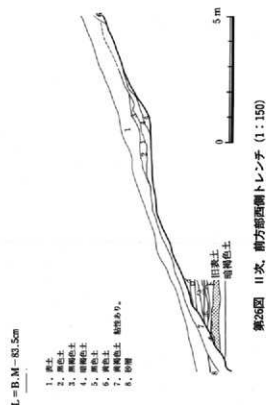
第23図 史跡、拡張1区墳丘盛土層図 (1:150)

くびれ部西側 (史跡、拡張1区、11-西トレンチ)

鞍部からくびれ部西側にかけての状況を把握するため、墳丘主軸と直交して鞍部の2A列に11-西トレンチ、後円部頂2E-20からくびれ部方向に18・16トレンチを設定し、さらにこれを拡張して平面的に形状を確認した。面積は246㎡である。対応する東側と同様、曲線で構成されることがわかった。11-西トレンチ上端は鞍部にあたり、11-東トレンチと合わせ5.95mの幅をもつ。現状は外端が崩れており馬の脊状を呈するが、当初は平坦に造成されたものであろう。上段墳丘法面は21度の直線的な勾配であるが、下端近くで急傾斜となり中段面と明瞭な屈曲をなす。同部分の形状は第II次調査で確認したところであり、くびれ部から前方面側部の特徴的な造作と考えられる。

中段面からは第II次調査で人物埴輪列を検出している。外縁は崩れて





第26図 II次, 前西部四側トレンチ (1:150)

分で、後部方向へ延長すると石室壁体上半に一致する。この傾斜面の下端は16列+2.3mにあり、外方へは平坦となる。角閃石安山岩層とは16cmの間層がある。出土位置は後部下段墳丘盛土の下端線を鞍部方向へ延長した、くびれ部下段墳丘盛土下にあたる。また石室修理工事に伴う調査においては、奥壁に向かって左方の裏込め土に直斜面が確認された。このことからこの傾斜面は石室構築にかかわる作業路と考えられる。

前西部四側(史跡、4-西トレンチ、3-西トレンチ、II次, 前西部西トレンチ)

史跡調査では前西部四側の形状を確認するため、墳丘主軸に直交して2本のトレンチを設定し、調査を実施した。II次調査時のトレンチは3-西トレンチより1mほどくびれ部より平行して設定されたものである。確認した形状は、全体的には対応する東側と類似する。

4-西トレンチはX列に設定した。全体に遺存状況は良好である。頂部外端は20列から3.88mにあり、

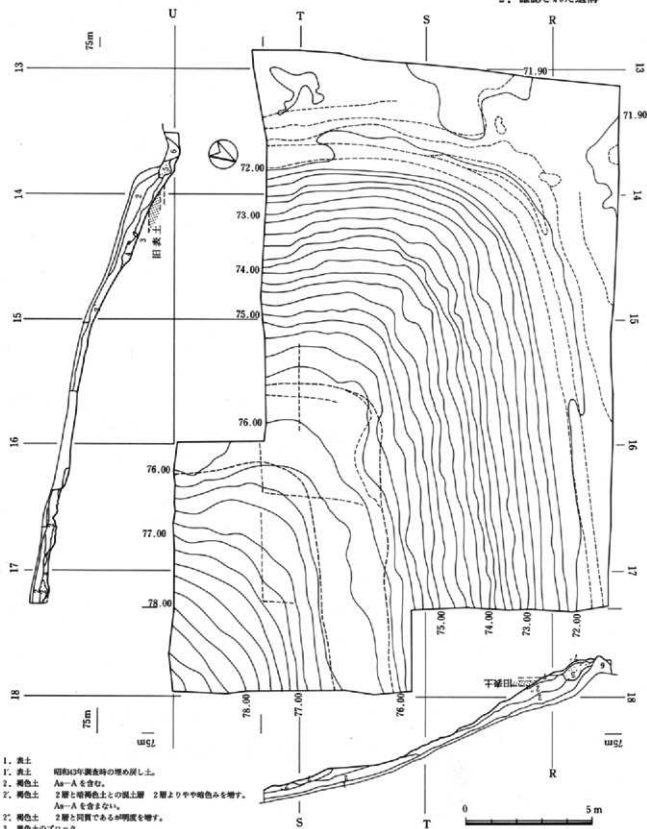
4-東トレンチで判明した東方分を合わせると頂部幅は6.25mとなる。上段墳丘傾斜角は21度で東側の23度より緩い。中段面は上段墳丘傾斜と明瞭な変換をしめし、やや外方へ下る平坦面を形成する。幅は東側と同じ2.4mである。下段傾斜角も東とはほぼ同じで24度30分を計る。裾部は盛土と同じ傾斜で地山を1m掘り下げ、そのまま周堀に移行する。地山黒色土面は東より0.1m低い。裾部での墳丘幅は47.18mである。これを中分すれば中心は20列の西方0.86mとなる。これは頂部幅の中分点と20列との差0.76m、上段墳丘裾間の幅25.0mの中分点との差1.1mと近似する。このことから墳丘前部は立面形においても左右対称を意図したことが推測される。したがって調査用に設定した20列は本来の古墳の主軸線より前部でやや東へずれて設定した可能性が生じた。

3-西トレンチは前西部頂から西側へ設定したもので3-東トレンチに対応する。墳丘断面は整った直線で構成される。現状での墳頂の幅は8.29mとなる。上段墳丘傾斜は東側よりきつく23度30分となる。中段面は幅3.18mとひろい平坦面を造る。同面には既調査はおよんでいなかったが、埴輪の樹立は認められなかった。下段墳丘の傾斜も東側よりややきつく26度となる。地山を1.1m削り出し、東側より0.2mほど浅く周堀底に移行する。同部位での墳丘幅は55.19mである。東側に比べ墳丘法面が急傾斜なのは、中段面の幅を広げ、埴輪列を囲繞するための造作と考えられる。

前西部西北隅(史跡、拡張2区、II次, 前西部西北隅)

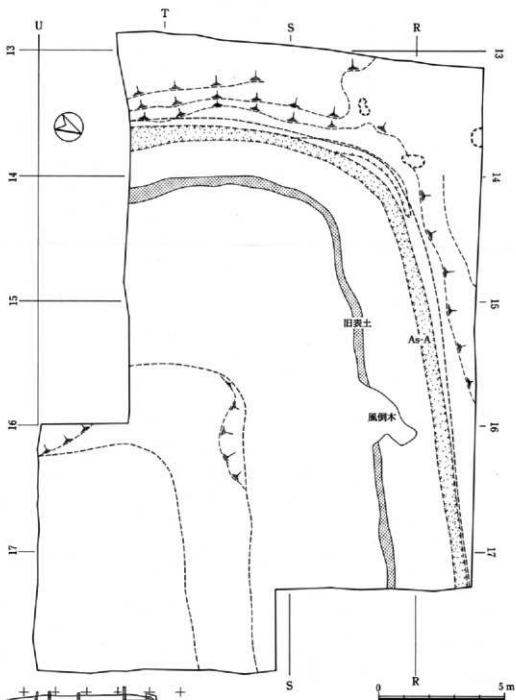
本発掘区は前西部四側部T列に設定した14トレンチと前西部前面17列に設定した15トレンチに挟まれた隅角部を平面発掘したものである。調査は上段墳丘下部から周堀にかけての361.2m²である。この調査によって、本区は東北隅部の形状と同様であることがわかった。したがって観音山古墳の墳丘屈曲部はいずれも緩やかな曲線をもって構成されていることが判明した。

2. 確認された遺構



1. 黄土
- 1'. 黄土 昭和10年調査時の埋の戻し土。
2. 褐色土 As-Aを含む。
- 2'. 褐色土 2層と暗褐色土との混土層 2層よりやや暗色みを増す。As-Aを含まない。
- 2''. 褐色土 2層と同質であるが明度を増す。
3. 黒色土のブロック
4. 黒色土のブロックと褐色土との混土層 黒土崩落土の可能性が高い。ロームブロックも混入する。
- 4'. 黒色土のブロックと褐色土との混土層 4層よりも明るく砂質である。
5. As-A
6. 清浄灰土
7. 暗褐色土 粘性あり、ロームブロックは含まれない。
- 7'. 灰褐色土 水成で白色、粘性をおびる。

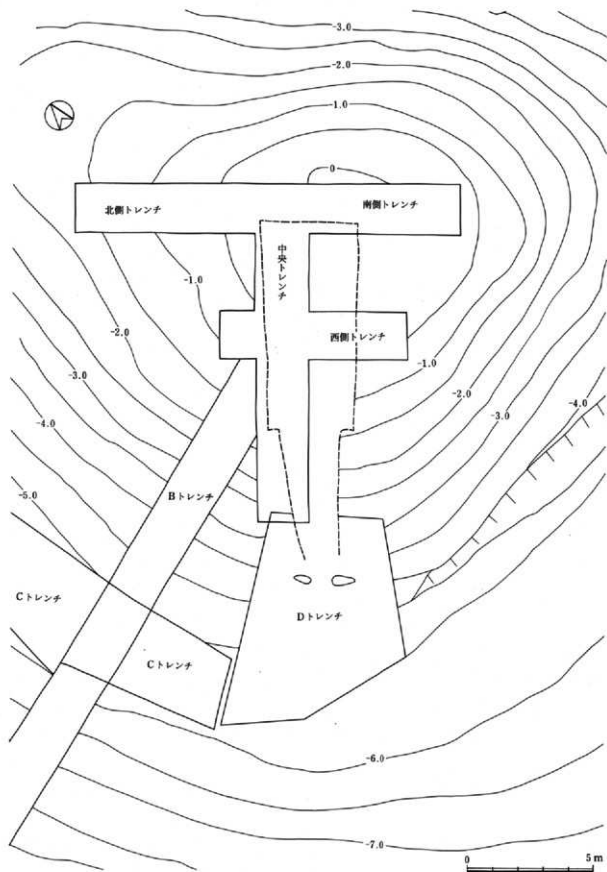
第27図 土跡、拡張2区実測図 (1:150)



第28図 史跡、拡張2区填丘盛土層図 (1:150)

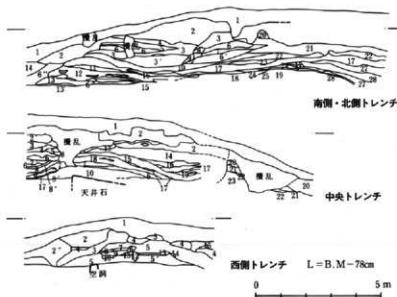
上段填丘の稜線はかなり崩落がすすみ不明瞭であるが、中段と接する裾線はT-16付近で屈曲することが確かめられた。同位置の高さは東北隅部と同じく標高76.20mで、前方部頂からは4.7m下位にある。

中段の幅は側部で3m、前面で2.7mである。中段面はわずかに外方へ傾斜している。また大きくみるとくびれ部へは



第29図 II次、後円部墳頂部～上段各トレンチ実測図 (1:150)

第3章 遺構に関する報告



西側トレンチ

1. 黄土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土
11. 暗褐色土
12. 暗褐色土
13. 暗褐色土
14. 暗褐色土
15. 暗褐色土

南側・北側トレンチ

1. 黄土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土
11. 暗褐色土
12. 暗褐色土
13. 暗褐色土
14. 暗褐色土
15. 暗褐色土
16. 暗褐色土
17. 暗褐色土
18. 暗褐色土
19. 暗褐色土
20. 暗褐色土
21. 暗褐色土
22. 暗褐色土
23. 暗褐色土
24. 暗褐色土
25. 暗褐色土

中央トレンチ

1. 黄土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土
11. 暗褐色土
12. 暗褐色土
13. 暗褐色土
14. 暗褐色土
15. 暗褐色土

西側トレンチ

L = B. M. - 78cm



中央トレンチ

1. 黄土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土
11. 暗褐色土
12. 暗褐色土
13. 暗褐色土
14. 暗褐色土
15. 暗褐色土
16. 暗褐色土
17. 暗褐色土
18. 暗褐色土
19. 暗褐色土
20. 暗褐色土
21. 暗褐色土
22. 暗褐色土
23. 暗褐色土
24. 暗褐色土
25. 暗褐色土

西側トレンチ

13. 黄褐色土
17. 黄褐色土
14. 黄褐色土
16. 暗褐色土
15. 暗褐色土
17. 暗褐色土
16. 暗褐色土
21. 暗褐色土
22. 黄褐色土
23. 黄土
24. 黄土
25. 暗褐色土
26. 暗褐色土
27. 黄土
28. 暗褐色土
29. 暗褐色土
30. 黄褐色土
21. 黄褐色土
23. 暗褐色土
14. 黄土
15. 黄褐色土
17. 暗褐色土
16. 暗褐色土
18. 暗褐色土
19. 暗褐色土
20. 黄褐色土
21. 黄褐色土
23. 暗褐色土
24. 暗褐色土
25. 暗褐色土

第30図 Ⅱ次、後円部墳頂部～上段各トレンチ実測図 (1:150)

徐々に低くなり、前端部中央には高くなる傾向をもつ。第Ⅱ次調査では隅内部分から埴輪馬が出土したが、史跡調査では何ら認められなかった。

下段墳丘は比較的良好な状態が検出できた。裾部下端線は東北隅と同じく72mの等高線がめぐる。地山の整形高は1mである。そのため検出した墳丘面

には地山黒色土層が裾線と相似形に帯状にめぐる。前方部最大幅は62.3mを測るが、裾線に重複する近世溝で若干の変容が看取され、原形は64m近い幅だったと推定される。

また前方部前面はわずかに膨らみをもっている。隅内部分を直線で結んだときの前面中央の出は上段墳

丘頂で0.89m、墳裾下端部で0.65mとなる。

盛土はローム土が主体で黒色土の使用は認められない。黒色土を多用した東北隅部とは対称的である。

後円部頂および、上段墳丘（史跡、石室調査区、II次、墳丘頂部トレンチ）

II次の石室調査は崩落している天井石を除去して実施した。これに伴い、石室主軸線上とこれに直交する奥壁および、玄室中央の3カ所にトレンチを設定した。また整備に伴う石室半解体調査においてもII次調査のおよんでいない石室主軸上の石室背後および、盛土掘削に伴う要所にトレンチを設定し、土層の観察をおこなった。

南側、北側トレンチは墳丘主軸より23度ほど西に偏して後円部頂部に15m×2mで設定し、頂部から2.7m掘り下げた。トレンチ底は石室最奥の天井石直上に達する。盛土層は天井石を直接覆う厚さ50cmほどの淡黄褐色粘土のうえに、ローム土を主体に一部黒色土を混ぜ、5cm～20cm厚で水平に堆積するのを基本としているが、大きくみると、5～6層を1単位にし、厚さ1m、長さ3～4m程のブロックごとに盛土しているごとくである。トレンチ北端は後円部中心から12mの位置にあり、敷部との接合状況を確認するにはいたらなかった。

中央トレンチでは奥から2番目の天井石が露出した。奥の第1石と手前の第3石より上面が低いためか白色粘土を蒲葺状に厚く被覆している。盛土は全体としては玄室中央から周辺へブロックごとに順次寄せかけるように盛っているようである。このことは西側トレンチでも看取される。

以上は石室天井石以上の状況である。

石室天井石以下の上段墳丘盛土については、石室裏込め被覆土の傾斜面に対し、ローム土を主体に水平ないしは内下がりに盛り土する。上半の状況とは趣を異にする。裏込め被覆土傾斜面との分離を防止し、かつ盛土の強度を図ったためと考えたい。石室との関係については「石室編」で詳述する。

(2) 周堀・中堤

1965年作成の墳丘測量図（第2図）にもその地割が見られるように、第1次調査開始前、墳丘の周囲には水田が囲繞しており、周堀の存在が想定された。これらの水田の幅は部分毎に異なり、前方部北側では約4m、前方部西側では18m、同東側では24m、後円部後方では最小幅が15mであった。その後の土地利用の変更により、地割の変更を伴い、水田の畦畔と周堀の縁部が必ずしも一致していないが、盾形の周堀が墳丘を取り巻いていたであろうことが充分推定できた。水田の外側は畑地で、水田面との比高は0.3～0.7mで、東側部分ではその差が大きい。

周堀の調査は、第三次調査時に、周堀の幅、形態、規模、範囲を確認するために、要所に幅1mのトレンチを13本設定し実施された（第2図参照）。その結果、周堀は中堤を挟む盾形の二重堀であることを確認した。

この時点で、内堀の幅は前方部前面で28m後円部後方で25m、側面部は前方部で東面とも25m、後円部中心位で東西とも28mと推定された。中堤幅は前方部で8.5m内外、後円部後方で8m、後円部側面の西側で7m内外、東側で10.5mで、外堀内縁が東側部分で張り出し外堀幅を狭めているとされた。外堀の幅は、前方部前面で11.4m、後円部側面は西側11.5m、東側5mと推定された。

史跡整備時の調査では第三次調査で二重の周堀が囲繞することが判明したのを受けて、これらの正確な資料化を意図した調査計画が策定された。そのため墳丘から周堀にかけて連続するトレンチを設定し、さらに必要な部分について派生するトレンチを設定した。特に、北西隅については平面発掘を実施し、内堀の外縁、中堤、外堀の内外縁の屈曲する状態を把握した。また、私有地についても遺構の存在が予想される箇所については借地をして、調査をおこなった。

また、1983（昭和58）年度には高崎市教育委員会が古墳北側地区の園場整備事業に起因する調査を実施した際、史跡指定区域外に調査区を設定している。

第3章 遺構に関する報告

調査区は前方部西側側面部に2箇所〔「納貫遺跡」24・25トレンチ〕、東側側面部に1箇所(26トレンチ)および、東北隅に1箇所(1トレンチ)の合計4箇所であり、いずれも外堀の掘り込みが確認されている。

周堀内の堆積土の基本層序は、上層から1. 表土(水田、あるいは畑地耕作土)、2. 鉄分凝集の酸化層、3. As-B、4. 青灰色粘質土の4層に大別が可能で、これに個々の箇所異なる土層が堆積するといった状況がみられた。

史跡整備時に周堀・中堤に設定したトレンチは29本である。以下、各所の調査成果を第三次調査、史跡整備時の調査あわせて説明する。

北辺中央(史跡、1トレンチ)

前方部北辺には、史跡整備時に前面中央に1トレンチを設定した。そして、北西隅の屈曲部に設定した27・28トレンチまでの間に32・29・24・26の各トレンチが配置され外堀の状況確認がおこなわれた。また、第三次調査時には1トレンチの西側に平行してIトレンチが、29トレンチと24トレンチの間、25ライン近くにⅡトレンチが設定されている。

1-北トレンチは主軸20列北辺に設定した。下段は29度20分の傾斜で直線的に墳頂に至る。内堀はローム層を掘り込み、底面を水平に造出する。深さは墳丘下の地山平均高73mを基準にすると1m、現表土からは0.9mである。幅については墳丘側での立ち上がりは墳頂と一致し、内堀の立ち上がりはそのまま墳丘も構成することになるため、便宜上、墳頂から外縁立ち上がりまでを計測する。幅は26.13mである。外縁は25度の傾斜で明瞭に立ち上がる。

中堤は内堀外縁に挟まれた部分から成り、6.85mの幅をもつ。上面はローム層で標高72.90mである。墳頂でのローム層上面は72.84m、地山黒色土上面は73.11mである。このことから地山が北方へ高くなる傾向があるにしてもなお中堤面がローム層上面に近いことを示唆している。なお周堀内からは中堤の盛土崩壊土らしいものは認められなかった。

内堀の堆積土は、上層から⑤表土、⑥暗褐色砂質

土、⑦As-B主体の黒色砂質土が水平に堆積し、外縁立ち上がり部底に⑧灰褐色粘質土がレンズ状に堆積する。外堀は⑤層、⑦層の下に⑧層に近い暗褐色粘性土、⑨黄褐色粘質土が水平堆積する。

外堀もローム層を掘り込んで造成されるが、底面は内堀より0.3m高い。確認面からの深さは0.6mである。底面は水平で、幅6.1mを測る。両縁は緩やかに立ち上がる。

なお、外堀の外縁より北側部分もF列まで掘り下げ、精査を行ったが耕作の影響がおよんでおり、周堀帯等の施設を確認することはできなかった。

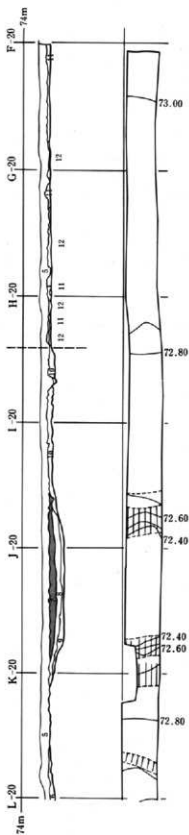
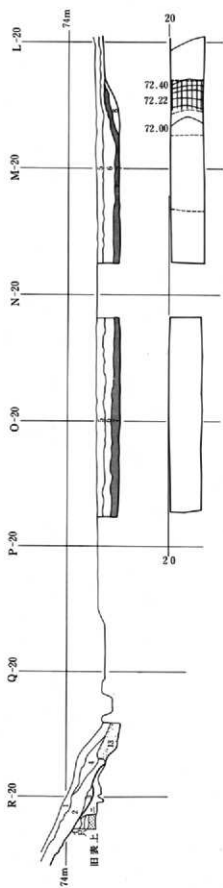
北辺外堀(史跡、32・29トレンチ・第三次、Ⅱトレンチ)

1-北トレンチの東方8.5mと15mに設定した。32トレンチでの外堀幅は7.3mとやや広くなるが、底面幅は1-北トレンチと同じく4mである。両縁立ち上がりは12~17度と緩やかである。ただし、下端の深さ約0.2mの立ち上がり部分は垂直に近く整形され明瞭な形状を示す。②層黒褐色土直下の③層にはAs-B純層がレンズ状に堆積する。

29トレンチは特異な形状を呈す。全体で11.7mの幅をもち、中央に幅2.6mの掘り残り部分をもつ。北側の掘り込みの幅は3.9m(トレンチ西壁)~5.4m(東壁)、南側は3.9m(トレンチ西壁)である。ともに内外縁の立ち上がりは緩やかである。幅が急に広がることから、この辺りで外堀外縁が一部張り出し、堀幅を広げることが想定される。なお、②層As-Bは掘り残り部の上面、張り出し部を含めて全面に堆積し、両堀とも同じ層序を示す。

Ⅱトレンチは29トレンチの東方10m、史跡整備時の25列とほぼ同位置に設定された。中堤、外堀の規模を確認した。内堀外縁の立ち上がりは約20度である。中堤の幅は8m内外で24トレンチの所見とほぼ同規模である。

外堀の幅は11.4m、深さ0.4mである。断面形は緩やかな立ち上がり成し、29トレンチにみられた掘り残り部は存在しない。



1. 赤土
2. 赤褐色の砂土、赤褐色を呈し、ローム質、軟弱。
3. 赤褐色土、やや粘性を有し、締まる。
4. 赤褐色土、軟弱、やや粘性を有し、締まる。
5. 赤土

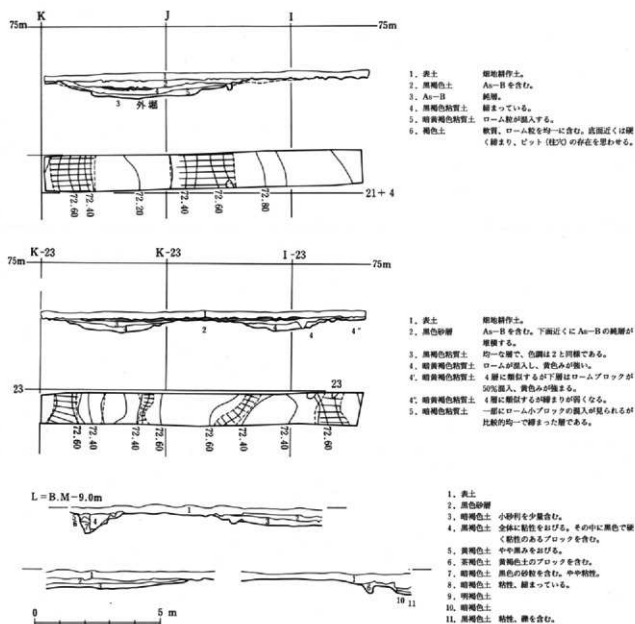
6. 赤褐色の砂土、上部5層下に薄く(Ae-A)が入る。
7. Ae-B
8. 赤褐色の砂土、締まっている。
9. 赤褐色の砂土、上部と同質、表面はやや褐色を帯びる。
10. 赤褐色の砂土、上部5層下に薄く(Ae-A)が入る。
11. 赤褐色の砂土、少し粘性を含む。(耕作上下の腐植土)
12. ローム腐植層 (ツフトローム)
13. Ae-A

10. ローム腐植土、上部の暗褐色土の混入、表面は暗褐色を呈す。軟弱。
11. 赤褐色の砂土、少し粘性を含む。(耕作上下の腐植土)
12. ローム腐植層 (ツフトローム)
13. Ae-A



第31図 史跡、I-1北トレンチ実測図 (1:150)

第3章 遺構に関する報告



第32図 史跡、32トレンチ(上)、29トレンチ(中)、Ⅲ次、Ⅱトレンチ実測図(1:150)

北辺周堀(史跡、24・26トレンチ・第Ⅲ次、IX・VIIトレンチ)

24トレンチは、29トレンチの東方9m、26列に設定した。内堀外縁はL列+1.8mの位置で34度の角度をもって立ち上がる。墳丘方へ延長すると前方部東北隅部(拡張3区)にあたり、この間の内堀幅は24.3mとなる。堆積土は立ち上がり部に④褐色粘質土があり、底面の地山は白黄色を呈す。

中堤幅は8.5m、高さは標高72.84mである。拡張

3区に接する13トレンチ検出の墳丘地山ローム面より0.07m低いだけである。このことから中堤の造成にあたってはローム上面を露出させたものと考えられる。外堀は29トレンチの幅より若干狭いものの10.2mの幅をもつ。断面形は船底状を呈し、底面と緩やかに立ち上がる法面との区別は明瞭でない。最深部は中央にあり、内堀より0.16m高い。層序は①層表土、②As-Bを主体とする黒色砂質土、③褐色粘質土の順である。

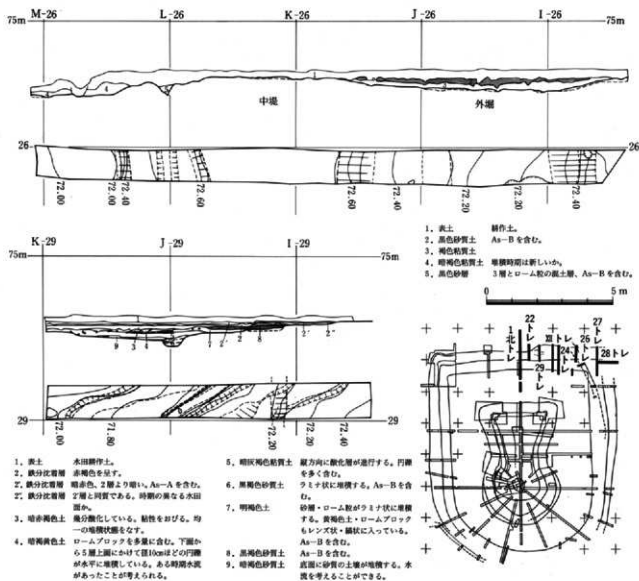
2. 確認された遺構

26トレンチは、24トレンチ東方12mの29列に設定し、外堀の検出を試みた。同所は古墳北方から12mの幅で帯状に連なる水田のほぼ中央に位置している。調査の結果、外堀の遺構は一部を残して溝によって破壊されていることが判明した。外堀外縁の立ち上がりはI+0.5mにあり、As-Bを主体とする⑦層を堆積土としている。底面は24トレンチより0.26m低い。溝状遺構は水田の地割と一致し、幅は約5m、深さは外堀底よりさらに0.28m低い。堆積土は上半を①水田耕土とし、下半は砂礫層となる。溝の北東辺には一段深い溝が付設される。断面での規模は幅1m、深さ0.3mでU字状を呈す。底面からは円

筒埴輪片が少量出土した。なお、この溝は南方に設定した23トレンチの3本の調査区の中央、23-2トレンチへ連続している。

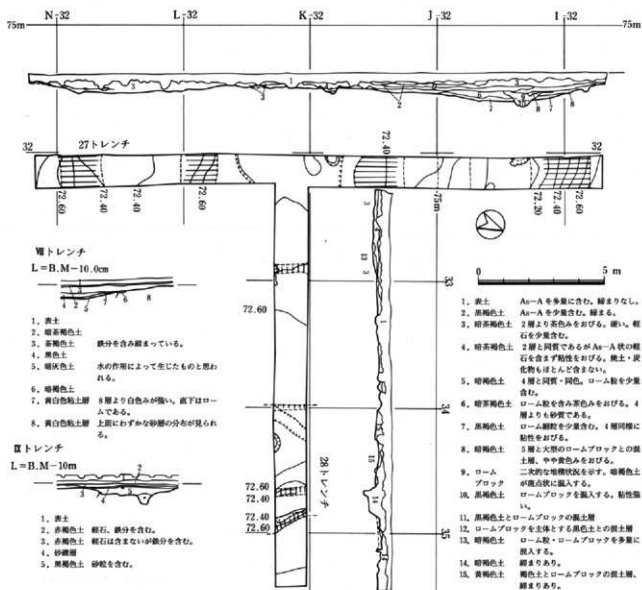
IXトレンチは24トレンチと同様、帯状に連なる水田部分に設定したトレンチである。史跡整備時のK-29区内に位置する。他トレンチでは中堤にあたる地点であるがローム質黄色土を掘削した溝遺構を検出した。上縁の幅3.6m、深さ0.65mである。

VIIトレンチは東北隅部分の内堀外縁の立ち上がりを確認する目的で設定された。史跡の24トレンチの東方10m、座標上の2M-27・28区内にあたる。掘り込みの深さは約0.6m、約15度の角度で立ち上がる。



第33図 史跡、24トレンチ(上)、26トレンチ(下)実測図(1:150)

第3章 遺構に関する報告



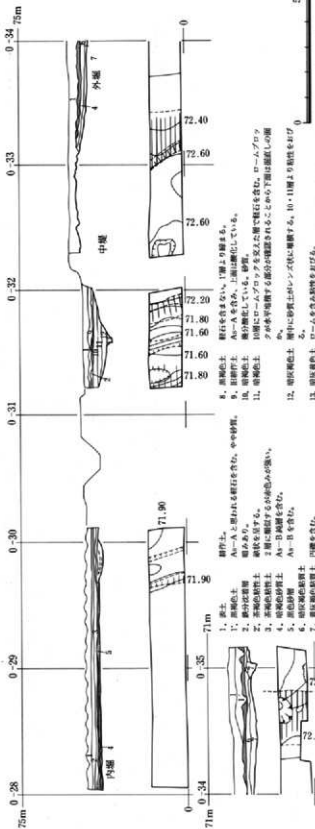
第34図 史跡、27トレンチ、28トレンチ、Ⅲ次、Ⅶ・Ⅸトレンチ実測図 (1:150)

外堀東北隅 (史跡、27・28トレンチ)

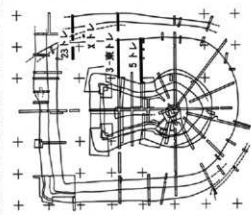
主軸と平行位33列に27トレンチ、直交位K列に28トレンチを設定した。27トレンチ北半に北辺外堀が認められた。形状は24トレンチとよく似ている。断面形は浅いU字状を呈し、底面と立ち上りの境界ははっきりしない。幅は9.15m、深さは中央で0.92m、外縁立ち上がり部との比高は0.63mである。堆積土は①表土、③As-B純層、④暗褐色粘質土と続き、最下層は黒褐色粘質土となる。外堀中央のピットからは第331図の土器器臺(2215)が細片となって一括出土した。

28トレンチのローム上面は、若干凹凸が認められるものの外堀と認められる遺構はない。K-34区内に溝状遺構が検出された。堆積土中からは第330・331図の須臾器(2192, 2200~2205)、土器器(2212~2214、2216・2217)が出土した。以上のことから史跡調査時には北辺外堀は27トレンチ東方で終息し、東辺外堀は28トレンチより南方から始まるかと判断された。

ところが、1978(昭和53年度)の高崎市教育委員会が設定した『縄貫遺跡』Ⅰトレンチにおける面的な調査の結果、外堀の東北隅部分は底面が浅くなり、ブリッジ状を呈するものの断絶する状態にはならな



第25図 史跡、23トレンチ、III次、Xトレンチ (1:150)



第26図 史跡、23トレンチ、III次、Xトレンチ (1:150)

いことが判明した。ここではこの結果を採用し、外堀の形状についての認識を一部変更したい。

東辺周堀 (史跡、23・3-東・5トレンチ第三次、Xトレンチ)

23トレンチは28トレンチの南方20mのO列に、3-東トレンチはその35m南方のV列に設定し、東辺の内・外堀の確認をおこなった。5トレンチは墳丘鞍部から東方へ延長し、内堀の範囲を確定しようとしたものである。3本のトレンチによって外堀の位置は確認することができたが、内堀外縁は明らかにできなかった。

この5トレンチの位置にはIII次調査の時点でIIトレンチが設定され、断続する3本のトレンチが掘削され内堀の状況が確認された。

また、23トレンチの南方7m、史跡の座標P-31区内にはXトレンチが設定され、IXトレンチと同様の目的で水田部分の調査がおこなわれ、溝状遺構が検出された。上幅4.6m、深さ約0.75mで埋没土の下層の堆積状態は流水の影響がうかがえる。

8. 赤褐色土 鉄屑を含む。1層より厚まる。
9. 黒褐色土 A-1-Aと覆われる層を含む。中や砂質。
10. 黒褐色土 層が厚くなる。
11. 赤褐色土 層が厚くなる。A-1-B内層を含む。
12. 赤褐色土 A-1-B内層を含む。
13. 赤褐色土 内層を含む。

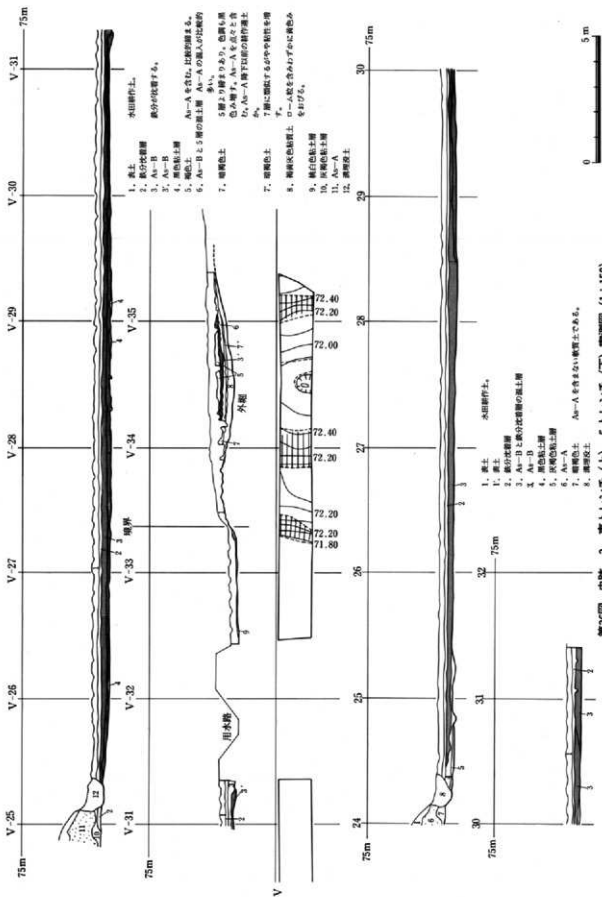
1. 灰土
2. 赤褐色土 鉄屑、磁石を含む。
3. 赤褐色土 鉄屑を含む。
4. 赤褐色土 鉄屑を含む。
5. 赤褐色土 鉄屑を含む。
6. 赤褐色土 鉄屑を含む。
7. 赤褐色土 鉄屑を含む。

7. 赤褐色土 鉄屑、磁石を含む。
8. 赤褐色土 鉄屑を含む。
9. 赤褐色土 鉄屑を含む。
10. 赤褐色土 鉄屑を含む。
11. 赤褐色土 鉄屑を含む。
12. 赤褐色土 鉄屑を含む。

1. 灰土
2. 赤褐色土 鉄屑、磁石を含む。
3. 赤褐色土 鉄屑を含む。
4. 赤褐色土 鉄屑を含む。
5. 赤褐色土 鉄屑を含む。
6. 赤褐色土 鉄屑を含む。
7. 赤褐色土 鉄屑を含む。

1. 灰土
2. 赤褐色土 鉄屑、磁石を含む。
3. 赤褐色土 鉄屑を含む。
4. 赤褐色土 鉄屑を含む。
5. 赤褐色土 鉄屑を含む。
6. 赤褐色土 鉄屑を含む。
7. 赤褐色土 鉄屑を含む。

L=B.M-10.0m



第36図 史跡 3-東トレンチ (上)、5 トレンチ (下) 発掘面 (1:150)

2. 確認された遺構

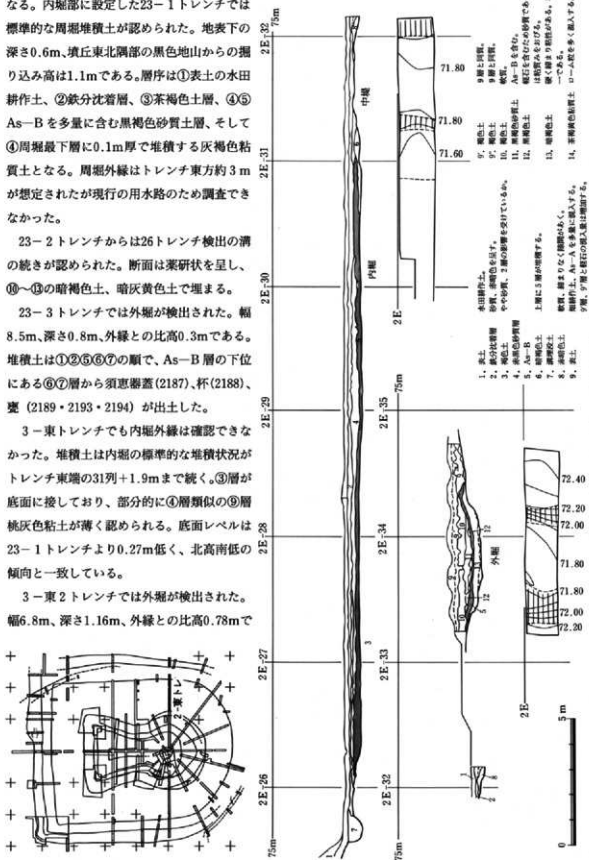
23トレンチは断続する3本のトレンチからなる。内堀部に設定した23-1トレンチでは標準的な周堀堆積土が認められた。地表下の深さ0.6m、墳丘東北隅部の黒色地山からの掘り込み高は1.1mである。層序は①表土の水田耕作土、②鉄分沈着層、③茶褐色土層、④⑤As-Bを多量に含む黒褐色砂質土層、そして④周堀最下層に0.1m厚で堆積する灰褐色粘質土となる。周堀外縁はトレンチ東方約3mが想定されたが現行の用水路のため調査できなかった。

23-2トレンチからは26トレンチ検出の溝の続きが認められた。断面は葉研状を呈し、⑩~⑬の暗褐色土、暗灰黄色土で埋まる。

23-3トレンチでは外堀が検出された。幅8.5m、深さ0.8m、外縁との比高0.3mである。堆積土は①②⑤⑥⑦の順で、As-B層の下位にある⑥⑦層から須恵器蓋(2187)、杯(2188)、甕(2189・2193・2194)が出土した。

3-東トレンチでも内堀外縁は確認できなかった。堆積土は内堀の標準的な堆積状況がトレンチ東端の31列+1.9mまで続く。③層が底面に接しており、部分的に④層類似の⑨層桃灰色粘土が薄く認められる。底面レベルは23-1トレンチより0.27m低く、北高南低の傾向と一致している。

3-東2トレンチでは外堀が検出された。幅6.8m、深さ1.16m、外縁との比高0.78mで



第37図 史跡、2-東トレンチ実測図(1:150)

第3章 遺構に関する報告

ある。断面は弧状を呈す。表土下0.5mには③As-Bの純層がレンズ状に堆積する。北方からの水田下に認められた溝は、本トレンチ以南では認められない。

5トレンチは31列+1.5mまで調査したが、内堀堆積土が続くのみで、外縁立ち上がりは全く認められない。周堀の検出長は34.93m、墳丘くびれ部東裾の地山の黒色土からの掘り込み高は1.25mである。

東辺周堀（史跡、33・2-東・21トレンチ、第三次、Ⅲ・Ⅷトレンチ）

3本のトレンチによって、後円部東辺の周堀の形状を確認した。2-東・21トレンチは中堤上を市道が縦貫するため二本に分割して調査をおこなった。

2C列に設定した33トレンチでは、31列+1.65mに内堀外縁が認められた。この位置を20列と平行に北上させた位置では、5・3トレンチいずれでも立ち上がり部を検出できなかった。中堤と内堀との比高は0.3mである。これは中堤上面が削平され、水田と化しているためである。周堀立ち上がり部には③As-B層の下に④灰黒色粘土層が堆積する。

33トレンチの南方10mに2-東トレンチを設定した。33トレンチとはほぼ同列位置に外縁が検出された。その結果、後円部東側部の内堀幅は25.4mと判明した。底面の掘り込みは墳丘東裾部の黒色土から1.35m下位にあたる。③層As-Bは底面附近に堆積している。また、外堀は、9.65m幅の中堤を挟んで東方桑畑下で確認された。幅は北方から較べ4.55mと狭くなるが、断面形は逆台形に近いしっかりした形状を呈す。堀底上0.3mには⑤As-B層がレンズ状に堆積する。底面のレベルは内堀より0.25m高く、北方23トレンチ外堀底より0.52m下がる。外縁および、中堤との比高は0.79~0.62mである。

21トレンチは、2E-20からの方向角112度30分に設定し、内堀外縁と外堀を確認した。内堀外縁立ち上がり角は緩やかで明瞭な法面は認められない。後円部中心からの距離は58.25mである。中堤幅は9.85mで2-東トレンチでの規模と同じになる。外堀は2-東トレンチと似た形状を示すが、上幅5.2mであ

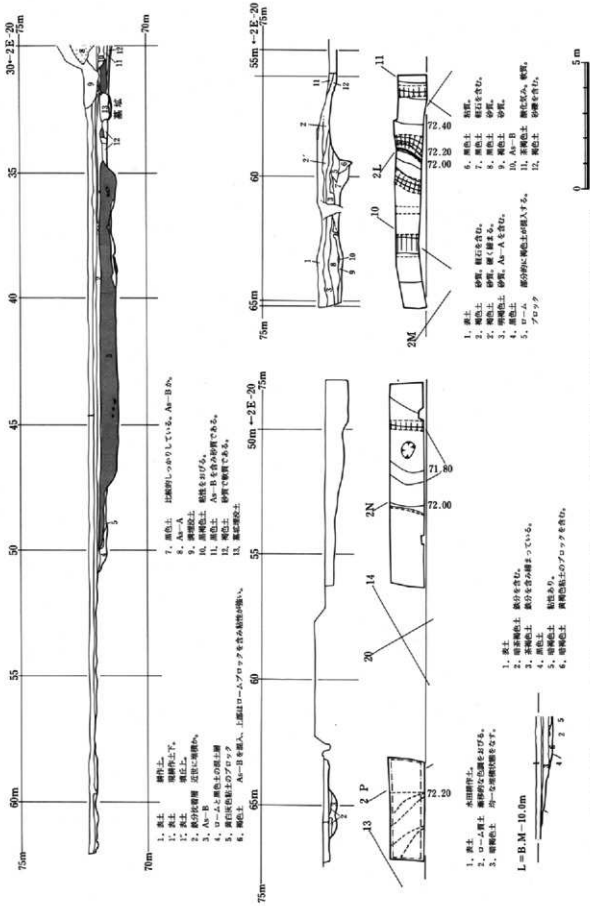
る。底面は逆に0.37m高くなる。東辺外堀が自然傾斜と同じく南下下がっているにもかかわらず、本トレンチで浅くなるのは、次に述べる17トレンチと、中堤を縦走する市道側溝調査の所見と一致するとはいえる。

Ⅲトレンチは2-東トレンチの南方2mに位置し、Ⅲ次調査時に後円部東側の内堀外縁部を確認するために認定した長さ5mのトレンチである。外縁の立ち上がりは舟底状を呈し、10度前後である。比高は0.55m前後である。

Ⅷトレンチは2-東トレンチの南側に位置し、Ⅲトレンチとあわせ中堤の幅、外堀の規模を把握する目的で設定されたものである。結果、外堀の幅は6.6m前後、断面形は深さ0.7mの舟底形であった。中堤の幅は10m前後と推定された。

南東辺周堀（史跡、7・31・20・1-南トレンチ、Ⅷトレンチ）

7トレンチは市道と民家とのなす隅角部へ向け方向角128度15分で設定した。墳裾は2E-20から29.2mにあり、これを掘開した現裾部端には素掘りや平面円形の1号井戸が穿たれる。内堀底は地山から1.4mの深さで掘り込まれほぼ水平に整形される。現水田面からの深さは0.7mである。堆積土は①表土、②鉄分沈着層、③As-Bと標準的な層序を示す。外縁立ち上がりは2E-20から57mにある。この位置での内堀幅は27.8mとなり、2-東トレンチから後円部の墳丘形状と相似形の円弧を描き始めることがわかる。立ち上がり下の0.15mほどは掘り込みが若干深まり④暗褐色粘質土が堆積する。中堤面は水田化に伴う削平によって堀底との比高は0.45mとなる。中堤幅は11.7mまで確認した。その外方は市道のため調査できなかったが、1979（昭和54）年に道路側溝設置が計画されたため、事前調査を実施した。その結果、2M列以南には外堀を認めることができなかった。このことから東辺外堀は、21トレンチと7トレンチの間で跡切れることが確認できた。21-2トレンチでの外堀が幅を減じ浅くなる事実もこれ



7. 褐色土 土層のしっぺりしている。Ab-Bのみ。
8. Ab-A
9. 溝状遺構
10. 溝状遺構 断面をおびる。
11. 褐色土 Ab-Bを含む砂質である。
12. 褐色土 砂質で断面である。
13. 褐色土

1. 赤土 水田耕作土。
2. 赤土 耕作土下。
3. 赤土 耕作土上。
4. Ab-B
5. Ab-E
6. Ab-Bと褐色土の境界線
7. 赤土
8. Ab-Bを含む、上層はロームプロットを含む範囲が強い。

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

1. 赤土
2. 赤土
3. 赤土
4. 赤土
5. 赤土
6. 赤土
7. 赤土
8. 赤土
9. 赤土
10. 赤土
11. 赤土
12. 赤土

第40図 史跡、10トレンチ (上)、30トレンチ (左中)、35トレンチ (右中)、川次、Vトレンチ (下) 実測図 (1:150)

第3章 遺構に関する報告

を補強することになる。

31トレンチでは後円部後方の立ち上がりを確認した。2 E-20から54.9m南東方にあり2 N-26の位置にある。堆積土の層序は他のトレンチ立ち上がり部分と同じである。下端から第331図の土師器杯(2206)が出土した。

20トレンチは後円部後方、2 E-20からの方向角157度30分に設定した。南方に民家があるため2 E-20から49.35mまでトレンチを設定し、墳裾から21.25mまで内堀の掘り込みを検出した。墳裾の黒色土の地山からの比高は約1.7mである。底面はほぼ水平の状態である。堆積土は他のトレンチとほぼ同様であるが、端部に②暗灰色粘土層の堆積が認められた。立ち上がり部に通有に認められる土層であることから外縁にきわめて近いことがわかる。墳裾、2 E-20から30mの位置に井戸2を検出している。

20列に設定された1-南トレンチでも2 N-20+2 mまで調査を実施したが外縁は確認できなかった。トレンチ内には不整形の掘り込みが認められる。

Ⅱトレンチは後円部の南東方、史跡の座標上の2 M-27・28に位置し、内堀外縁の立ち上がり状況が求められた。中堤の比高は0.5m前後である。

南西辺周堀(史跡、10・30・6・35トレンチ、第Ⅲ次、V・VIトレンチ)

後円部の南西辺、2 E-20からの方向角194度から243度で間に存在する周堀の確認のため、史跡整備時に4本のトレンチを設定した。また、Ⅲ次調査時にV・VIの2本のトレンチが設定されている。

10トレンチは墳丘から延長し、後円部後方の内堀を確認した。外縁立ち上がりは2 E-20から51.35mにあり、内堀の幅は22.48mである。墳裾外方2 K-18には①層、黒色砂質土層上面から掘り込まれた二基の墓壇1が検出された。

また、2 E-20から34.5mの外方13.1mの間は周堀底がさらに0.45m掘り込まれている。底面は平坦であるが、平面形は不整で東方20トレンチまでおよぶ規模をもつ。堆積土は①層が厚く存しており、少

なくともAs-B降下以前の造成であることがわかる。外縁上端の標高は72.0mに内堀底面との比高は0.38mである。中堤幅は11.7mまで確認した。本トレンチ外方には外堀が存在しない可能性が高い。

30トレンチは市道を挟んで2本設定した。内堀外縁から中堤幅6.3mまでを確認し、その外方10mにトレンチを設定したが外堀は認められない。

6トレンチの内堀外縁は2 E-20から51.30mにあり、20度の傾斜で精美に立ち上がる。比高0.45m、内堀の幅は19.25mで、10、19トレンチよりもややその規模を減じる。外堀はこれの外方13.3mに認められた。幅が1.6mと極端に狭くなっているのは19トレンチからの縮小傾向の結果とみられる。深さは0.3m、As-Bを含む黒褐色土が堆積する。

35トレンチは市道舗装工事に伴って調査をしたものである。外堀内縁は2 E-20から62.30mにあり19・6トレンチの外堀位置と同一線上にある。

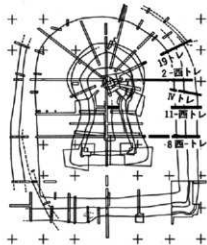
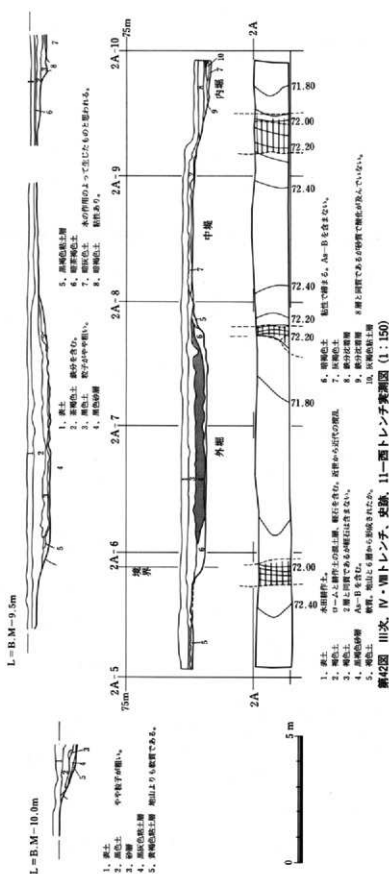
以上のことから、外堀外縁は2 E-20を中心とする同一円周上にあり、幅のみを減減する。その分だけ中堤幅が増すことになる。この傾向は東辺外堀の南端と対応しているといえる。外堀の消滅位置は6トレンチのわずか東方と考えられる。

VIトレンチは10トレンチの東方5m前後にその走向をほぼ等しく設定されたトレンチで、内堀の外縁立ち上りを確認するためのものである。外縁の立ち上りの角度は約30度、深さ0.6mであった。中堤はその南方12.2mまで確認したが外堀は確認できず、水田耕作土下に性格不明の落ち込みが検出された。

Vトレンチは6トレンチの北西4mに位置する。内堀外縁立ち上りを確認するために設定された。0.5mの比高があった。

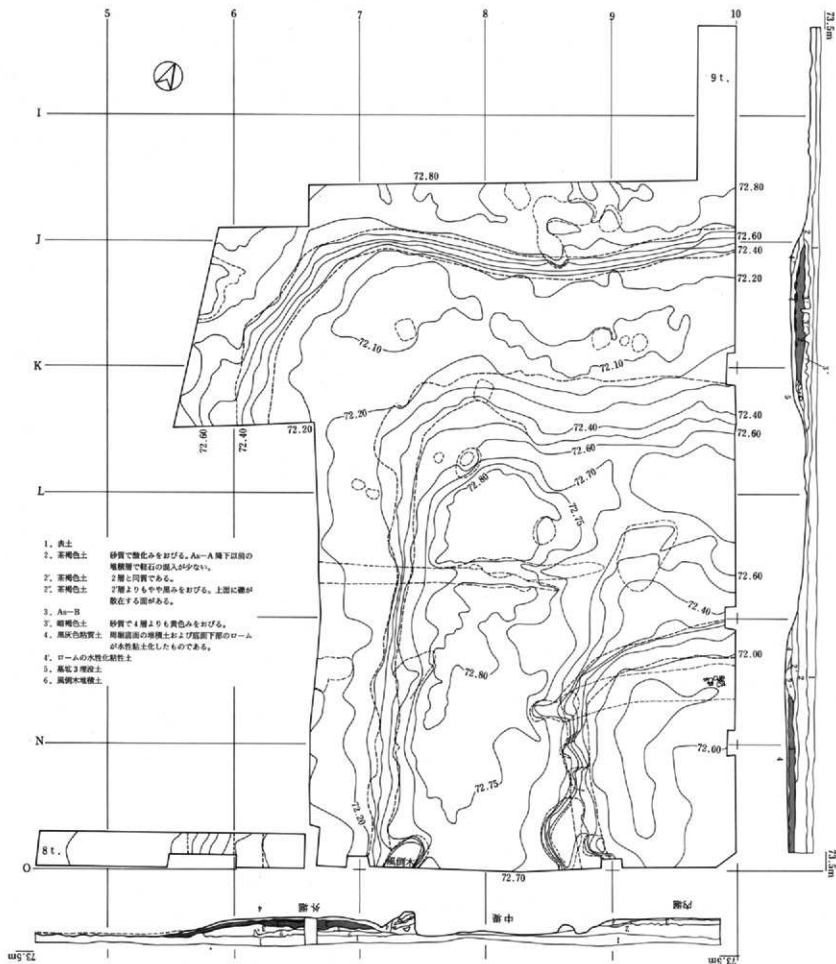
西方周堀(史跡、19・2-西・11-西・3-西・8トレンチ、第Ⅲ次、IV・Ⅷトレンチ)

後円部から前方部西方にかけて5本のトレンチを設定し、内外の堀の状態を確認した。東辺と比較し、整然とした構成であることが注意される。

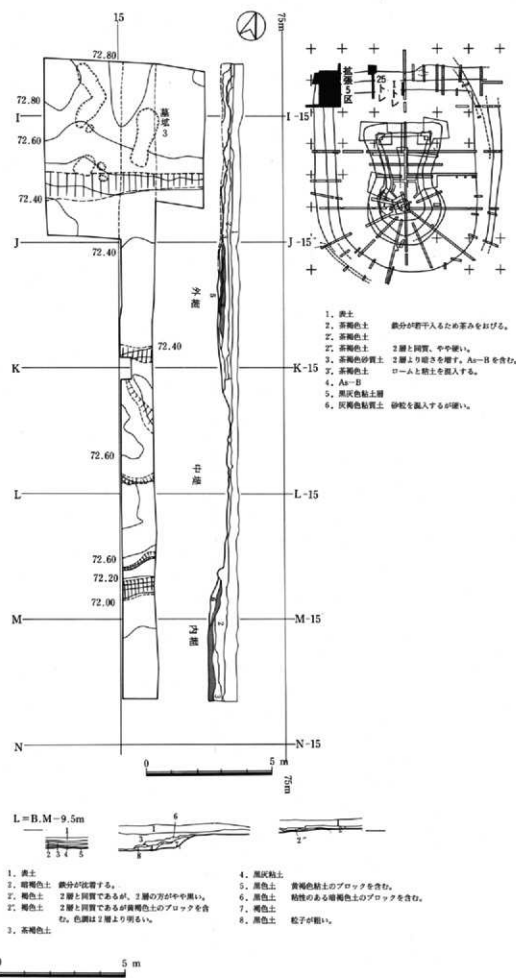


19トレンチは3本のトレンチにより内堀・中堀の規模、外堀の有無を確認した。内堀幅22.55mをもって、2E-20から53.20mの位置で立ち上がる。中堀幅は7.8mで西側中堀の平均を示す。外堀は断面形がU字状を呈す。④黒色砂層下にはAs-Bの純層が認められる。

2E列、2-西トレンチからO列、8トレンチ(拡張5区の南端)80mの間は、ほぼ直線の周堀線で構成される。内堀外縁は2-西トレンチで2E-20から52.90m、8トレンチでO-20から56.20mとなる。つまり墳丘主軸20列に対し、内堀外縁線は80mの間で3.3mひらくことになる。中堀の幅は鞍部西方の11-西トレンチが7mとやや狭いが、他は7.8m前後で一定している。この間における内堀底・中堤面・外堀底のレベルは北方へ0.3~0.4m高まる。墳丘築造面の傾向と一致するといえる。外堀幅は11-西トレンチで10.20mと広いものの、他は8.1~8.2mの間で一定している。底面は水平で立ち上がりの傾斜面との変換は明瞭である。特に2-西トレンチ外堀は他所とは逆に内堀より0.05m深く、しっかりした掘



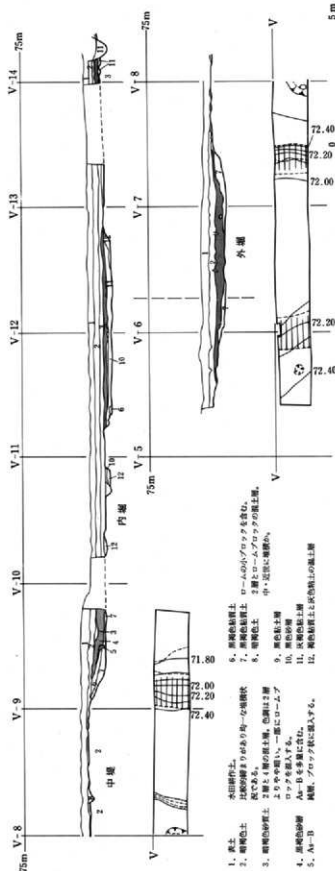
1. 表土
2. 茶褐色土 砂質で礫化みをおびる。Aa-A層下以前の埋積層で転石の混入が少なく、2層と同質である。7層よりもやや混みをおびる。上面に礫が散在する層がある。
3. Aa-B 砂質で4層よりも黄色みをおびる。
4. 黒灰色粘質土 埋積層面の埋積土および居室下部のロームが赤褐色土化したものである。
5. ロームの水性化粘着土
6. 黒粘土埋積土
7. 黒粘土埋積土



1. 表土
2. 茶褐色土 礫が散在するため茶みをおびる。
3. 黒粘土 2層と同質、やや細かい。
4. 茶褐色粘質土 2層より混みを増す。Aa-Bを含む。
5. 黒粘土 ロームと転石を混入する。
6. 黒灰色粘土層 砂質を混入するが薄い。
7. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
8. 黒粘土 2層と同質であるが黄褐色のブロックを含む。色調は2層より明るい。
9. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
10. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
11. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
12. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
13. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
14. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
15. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
16. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
17. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
18. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
19. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。
20. 黒粘土 2層と同質であるが、3層の泥がやや多い。

第43図 史跡、拡張5区(左)、25トレンチ(右)、Ⅲ次、Ⅰトレンチ(右下)実測図(1:150)

2. 確認された遺構



第44図 史跡 3—西トレンチ実測図 (1:150)

り込みを呈する。填丘地山との比高は内堀で1.25m、中堀で0.55m、外堀で1.18m、内外の堀の底面の比高は0.1m前後で外堀の底面の方が高い。

3—西トレンチの内堀中央部分は幅8mにわたり周辺より0.3m深い掘り込みをもつ。底面には灰褐色粘土と黒色粘土が堆積し、これをほぼ直接④層As-B層が覆っている。10トレンチ内堀の掘り込み遺構と同様の性格を有すと考えられる。

IVトレンチは後門部の中心から西方、ほぼBトレンチを延長した方向に長さ4.5mと18mの2本のトレンチが設定された。内堀外縁の立ち上がりは20度、上半はやや緩やかとなり10度前後となっている。また、この立ち上がり底面には幅0.6m、深さ0.3mの断面U字形の溝が平行して存在した。

Vトレンチは填丘上の前部西トレンチを延長し、史跡3トレンチ西トレンチとほぼ同位置に設定されていた。内堀外縁の立ち上がりを確認した。立ち上がりの角度は約20度、掘り込みの深さは約70cmであった。

北西隅隅堀 (史跡、拡張5区)

8トレンチと9トレンチに挟まれた466㎡を発掘した。調査区の平均長は南北27.5m、東西17mで内堀外縁線は西辺からの延長と北辺からやや内彎気味に至る線とがまるみをもって接続し前部西北隅のあり方と一致している。Rは比較的小さい。隅角部内堀は周辺より深く、立ち上がり上端の標高は72.5m、底面の比高は0.5mである。西辺外堀は8トレンチ辺りからやや内方へ狭まり、北辺と接合する。隅はややまるみをおびる。北辺外堀は隅部直前でいったん内側へ張り出す。そのため中堀隅外縁は突出気味になる。外堀幅は隅部で8.1mである。底面は水平に保たれるが立ち上がりは緩やかである。外堀底は内堀底よ

第3章 遺構に関する報告

り0.2m高く位置する。周堀内の堆積土は内外堀とも同じ層序を示す。底面に④黒灰色粘土が薄く堆積し、これを③層が厚く覆う。特に外堀には③層下にAs-Bのアッシュが認められる。中堤は6.8~8.0mの幅をもち、最高所は標高72.80mを示す。

外堀内のJ-K・K-7区内に長軸長0.9mの長方形の掘り込みがある。いずれも黒色砂質土が堆積しており深さは0.1~0.2mである。10列堀内K-10区内に墓塚5が検出された。また区内には東西位L列・M列内に幅1.0~1.5mの2本の溝が走る。いずれもAs-B堆積以降の所産である。

北辺周堀（史跡、25トレンチ）

拡張5区と1-北トレンチの中間15列に設定した。J-15以北、外堀外縁部は東西方向に拡張し南北7.0×東西6.4mの平面的な調査を実施した。3地点を結んだ内堀外縁線は墳丘前部前縁線と良く一致し、内堀幅は26m前後となる。しかも10・15・20列の内縁線は直線となる。これに対し、外堀内縁および、外縁線は15列で1.55~1.6m突出外彎する。堀幅は20列方向へ狭まる。これは内外両縁線の走行の違いに因る。その差が中堤幅に加わり、本トレンチでは8.8mの広さとなる。しかも外縁は23列で外反拡大する形状を示す。外堀の幅は7.30m、深さは約0.3mであった。内堀の墳丘形状との合致性に比べ、外堀の不規則性が看守される。なお外堀外方I-14・15で③層As-B降下前の墓塚3が検出された。

史跡1-北トレンチの西方約5mには第三次1トレンチが設定されていた。

(3) 埴輪の配置状況

第1次から第三次調査および、史跡整備時において墳丘各所に設定した調査区からは多数の埴輪が出土している。その出土量は、第1次から第三次調査時が、本書作成時には既に復元作業が終了し、群馬県立歴史博物館に展示されていた形象埴輪8体と円筒埴輪2体を除いて、遺物収納箱(63×39×19cm)10箱分、史跡整備時出土が遺物収納箱(62×42×15

cm)150箱分であった。

なお、第三次調査時に周堀の状況を把握するために設定された13の調査区からは埴輪、その他の遺物は全く出土していない。これに対し史跡整備時には周堀内からも多数の埴輪が出土しているが、これらの大半は墳塚間近の内堀からの出土である。墳丘上に樹立されていたものが転落、埋没したものと考えられる。少量ではあるが内堀外縁寄り、あるいは史跡整備時に墳丘北西方面の中堤部分を平面調査した拡張5区から埴輪が出土している。中堤の遺存状況からはその地点に埴輪を樹立していたことを判断することは困難である。調査が全面におよんでいないため断定することはできないが、現時点では藤岡市七興山古墳や群馬町保渡田八幡塚古墳の中堤で検出されたような埴輪を集散的に配置したり、列状に樹立させるような状況は想定し難いものと考えられる。

原位置出土の埴輪

原位置出土の埴輪は極めて少量であった。円筒埴輪で原位置からの出土が確認できたのはくびれ部東側の中段面である。史跡整備時の拡張4区では長さ12mの調査区内から形象埴輪の基台部1本(1862)を含む11本の円筒埴輪の基台部を検出した。この部位における中段面の幅は約1.5mで、埴輪列は中段外縁から墳丘寄り0.4mの位置に、くびれ部の形状に則して樹立されていた。また、設置の間隔は、1.6mに5本の割合であることが確認できる。以上の状況は、本古墳における円筒埴輪の配置状況を復元するにあたり、その算定の基礎となっている。

形象埴輪は横穴式石室が開口する後円部西側から前方部西側にいたる中段面で、人物埴輪10体、盾持ち人2体、盾形埴輪1体、人物埴輪と考えられる形象埴輪の基台部3体の合計16体の樹立を原位置で確認した。これらは石室開口部から約12mの位置に配置された男子人物(1449)、これと対面する位置の女子人物(1450)、さらに同一の台座に座る3人の女子人物(1451)である。男子人物(1449)の背後(石

室寄り)には詳細な原位置は確認できないが左脇に弓を携え、鞆を背負う男子人物3体が配置されている。女子人物の背後(くびれ部寄り)には人物埴輪が列状に配置されていた。その中で原位置を確認したものは、基台部(1868)、盛装した全身表現の男子人物(1463・1474・1507・1514)、甲冑を装着した全身表現の男子人物(1515)、鞆を肩に担ぐ人物(1530・1533)、基台部(1604・1609)、盾(1294)、盾持ち人(1710・1711)である。この他に前方部前面中央からは人物埴輪(1643)が、前方部東側の中段面から人物埴輪の下半部(1661)が出土しており、いずれも馬形埴輪と近接する。前方部西北隅から馬形埴輪(1733)、東北隅から馬形埴輪(1745)が出土している。

以下、墳丘各所の埴輪の出土状況について、部位ごとに記述していく。

前方部中央(前面)(第Ⅱ次、前方部北トレンチ・史跡、1-北トレンチ)

前方部の前面には第Ⅱ次調査時および、史跡整備時の1トレンチが設定され、墳丘主軸線に沿って墳丘各段の調査が実施されている。

この地点の中段面の幅は第8図にみられるよう史跡調査時にS列+1m～S列+3mの間3.0mであることが確認されている。1813は馬形埴輪の脚部である。中段外縁から1.26m内側で、トレンチ西壁の断面にかかって出土した。北側にやや倒れた状態ではあるが墳丘面に下端をおき直立きみに出土している。断定はできないが原位置出土の可能性をもっている。下端寄りに蹄の変形を意味する円形の透孔の位置が東側方向であることを重視すれば頭部、鼻先を西側に向けて馬形埴輪が樹立していたと推定される。この脚部の北側、約1m四方の範囲からはいずれも馬形埴輪の破片が出土している。第296図1794の頭部破片に代表される個体で1794～1812・1814～1829に至る頬、鞍、尻繫、肢間、鈴などの破片からなる。ただし、1813とはやや焼成、色調が異なる点がある。中段面から10cmほど浮いて土層中から出土

している。

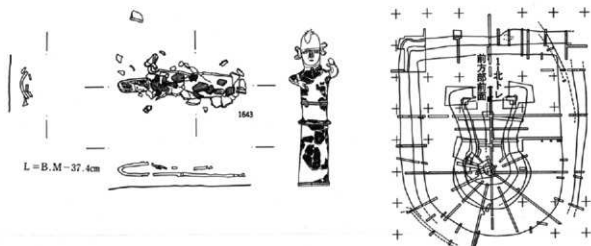
形象埴輪としてはこの馬形埴輪の他に、人物の耳環(1645)、人物の着衣裾部(1647)は器種不明であるが大径であり、器財あるいは双脚の人物埴輪の基台部とも考えられる破片(1909)、盾(1311)、帽子(1388)が出土しているが原位置を確認することはできなかった。家(1173)はZ-20区内からの出土である。墳頂部から上段墳丘面を転落したものと思われる。円筒埴輪は原位置からの出土は無かった。資料化したものも細片が多く、0001が基底部から3段の残存、0002、0003は基底部の破片である。

第Ⅱ次調査では中段面の南北方向の主軸線からやや西側寄りで男子人物埴輪(1643)が頤を右側に向け横倒した状態で出土している。原位置にあると考えられる。胴部の上位はその後攪乱を受けているが、中段面に接する部分は原状を保っていた。

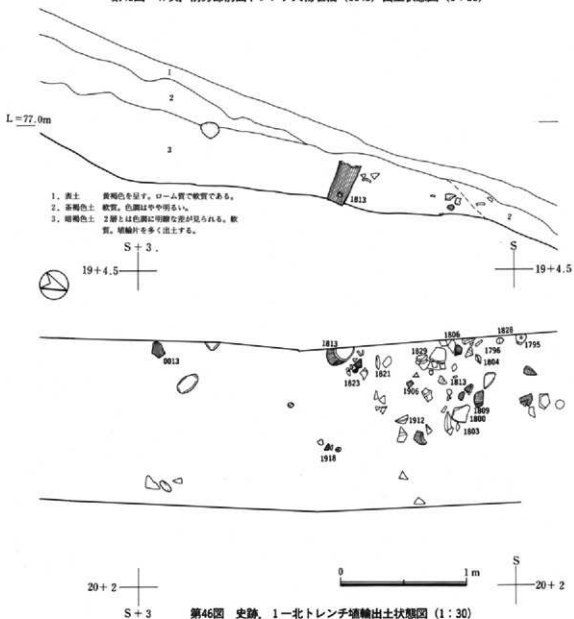
その他に人物埴輪の顔か(1644)、馬形埴輪(1819・1822・1824・1815)、基台部の基部破片(1859)、鳥(1854)、器種不明(1904・1907・1908・1911～1918)などが出土している。

前方部東北隅(第Ⅲ次、前方部東北隅・史跡、拡張3区)

第Ⅲ次調査の際に中段面の隅部を中心にL字状の調査区が設定され、一部上段面の裾部までその範囲がおよんだ。隅部から側面にかけては中世の所産と考えられる石敷遺構により変更されていたが、隅から前方部前面中央寄り、史跡調査時のS-22区内にあたる中段面上に2.5×2.0mの範囲で埴輪が濃密に散布しており、形象埴輪の人物埴輪の顔(1648)、耳環(1656)、馬形埴輪、鞍(1838)、尻繫(1837)、基台部(1857・1858)が出土した。馬形埴輪は脚部(1854・1832～1835)の破片がみられ、原位置に近い地点からの出土と考えられる。これらとともに馬形埴輪(1851)が出土している。この資料は従来の認識では人物に付属する鷹と考えられていたもので、この存在を根拠に前方部東北隅中段面上に鷹匠埴輪の樹立がいわれていたものである。また、近接

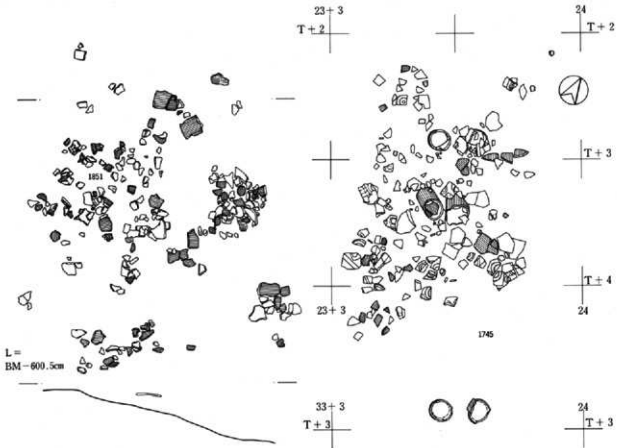


第45図 II次、前方部前面トレンチ人物埴輪 (1643) 出土状態図 (1:30)

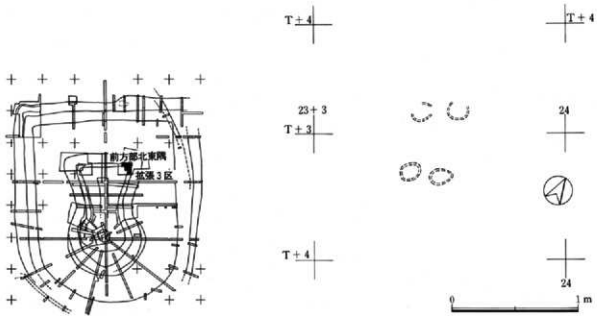


第46図 史跡、1-N北トレンチ埴輪出土状態図 (1:30)

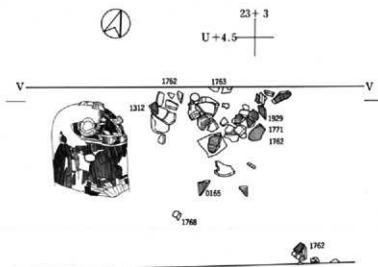
2. 確認された遺構



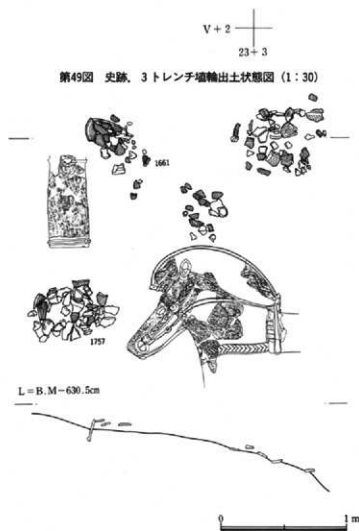
第47図 Ⅲ次、前方部東北隅出土状態図 (1:30)



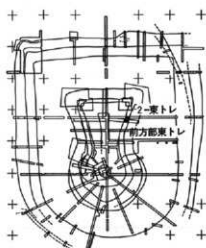
第48図 史跡、拡張3区馬形壇輪 (1745) 出土状態図 (1:30)



第49図 史跡、3トレンチ墳輪出土状態図(1:30)



第50図 Ⅲ次、前方部東トレンチ墳輪出土状態図(1:30)



して円筒埴輪片も出土しており、0094は朝顔形埴輪である。

史跡整備時の調査区拡張3区は中段面の隅をはじめ、上段墳丘の下半から下段墳丘の墳丘裾部に至るまでの広範囲におよんだため、各所から埴輪が出土している。その中でT-23区内の中段上から馬形埴輪が原位置を保って出土しており、第Ⅲ次調査分と合わせ前方部前面から隅部を経て側部へと列状に馬が樹立されていたことが明らかになった。

調査時の所見によると出土状態は頭部をN-14度-Eに向け、墳丘主軸とは15度の開きをもって中段面の延長方向と同一の向きで前方を向いているとされる。破片の散布は2.5×1.7mの範囲にまとまっており、その中央に脚部が遺存していた。脚間の長さは心々で0.5m、幅は前脚間が0.3m、後脚間が0.25mである。中段面での位置は上段墳丘隅から4.1m、中段内縁から1.4mである。中段幅は3.4m前後であるから、中央よりやや内側に配置されたことになる。第48図中段図は破片を取り除いて脚部の位置を確認した点を、下段図は墳丘に残った脚部の圧痕である。脚の中に小礫が置かれていた。

形象埴輪としてはこの他に人物の腕、手（1650・1652・1653）人物に付属する鎌先（1830）、盾（1315・1313）、家（1157）が出土しているが、いずれも原位置をはずれている。

円筒埴輪は原位置から出土したものはなかった。0038は口縁部から胴部の大型破片であるが破片の一部が中段面上T-23区内から出土している。0041・0087は基底部破片であるがこれもT-23区内からの出土である。その他多数の破片が下段墳丘面から墳丘裾部の周囲内ころがり落ちていた。中でも墳裾に位置する土域群からは、第91図の0095～0100の円筒埴輪が出土しており、個体的にもまとまった状況であった。

前方部東側（第三次、前方部東トレンチ・史跡、3・4トレンチ）

第三次調査時に前方部東側トレンチが、史跡整備時にはその北側、V列を横断する3トレンチが設定されている。また、3トレンチの南方10m、X列に沿って4トレンチが設定されている。なお、墳頂部および、これから上段斜面への移行部の状況については別途記述する。

前方部東側トレンチでは中段面上の南北2.0m、東西2.5mの範囲から人物・馬の形象埴輪、円筒埴輪が出土している。人物埴輪（1661）は半身像で頭部から上半身を欠くが、鎌をおびた腰部から基台部が出土しており、エレベーションの記録から原位置で横倒した状態で出土したことが確認できる。これより南方1.4mからは頭部を中心とした馬形埴輪（1757）が出土している。胴部は調査区域外におよんでいると考えられ、頭部を北方向に向けていた可能性が想定される。形象埴輪ではこの他に盾持ち人の耳部分（1722）、人物の顔（1658・1659）、腕の付け根（1662）、耳環（1664）が出土している。

人物埴輪（1661）の東方1.4mからは円筒埴輪がまとまって出土しているが、原位置出土か否かは確認できない。原形に復元ができた資料はないが、胴部破片（0104）、基底部（0109・0111・0113）などが形

状を推定できる大型破片である。

史跡整備時の3トレンチ調査においては、3mの幅をもつ中段面のほぼ中央から馬形埴輪片が集中して出土した。尻部を中心とした大型破片（1762）、鞍から尻蓋部分の破片（1771～1774）、脚上部（1763・1764）、付属品である鈴（1665～1669）などがその内訳である。その他の形象埴輪としては人物の頭へ顔の破片（1663・1665）、盾（1312）、器種不明（1934）が内堀堆積土中から出土している。

円筒埴輪では口縁部（0101）、基底部（0110・0116）が中段面から下段墳丘面にかけて出土している。4トレンチの中段面は崩壊が著しく、埴輪の出土が認められなかった。形象埴輪では前方部墳頂部から転落したと考えられる破片（1161）や器種不明（1935・1407）が出土しているがいずれも小破片である。円筒埴輪も小破片が上段墳丘から下段墳丘面の各所から出土している。

くびれ部東側（第三次、鞍部東側トレンチ・史跡、拡張4区、5トレンチ、11—東、17トレンチ）

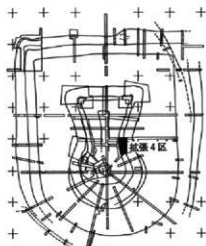
くびれ部東側部分には第三次調査時に鞍部東側トレンチが設定されている。史跡整備時のZ・2A列に相当する位置である。この時点では調査区内から埴輪の出土はみられなかった。

史跡整備時には中段上に円筒埴輪列が確認された。この地点には拡張4区が設定され面的調査が実施された。発掘区の中段面は北側5トレンチのY-22から南側、後円部周辺の17トレンチの2B-22・2B-23に至る長さ12mにわたり検出された。幅は1.5m前後であった。この間に円筒埴輪10本が原位置で認められた。遺存状態は基底部がわずかに残っているものも含めての数であり、決して良好とはいえないものである。

北側から5トレンチ内で0220（基底部～胴部第1段）を検出した。この南側には心々間の距離を32cm保って1862が樹立されている。これはその規模、形状の特徴から形象埴輪の基台部と考えられる。

その次は南方3.9mで0387（基底部～胴部の大型破

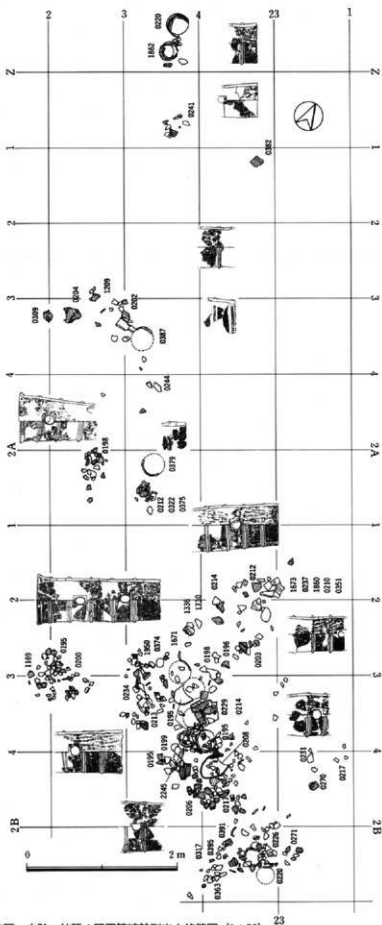
第3章 遺構に関する報告



片)が出土し、近接して0202の胴部破片が出土している。さらに1.65mの距離をあけて0379(基底部の大型破片)が出土している。

2A+3m—22列+3mからは南側に円筒植輪が5本連結して出土した。北側から2本目が0195、次が0214・0195・0208である。この列の南側からも0226・0220の2本の円筒植輪の樹立が確認された。調査時の所見では墳丘への設置は基底部を墳丘中に5cmほど埋め込むのみであり、霜や風雨で表面の土が崩壊すれば直ちに底部が露出するほどのものである。円筒内部の土は墳丘堆積土と同質であるが、0195のように傘大の円礫が1ないし2石入る場合がある。円筒植輪の底径は25~30cmで、1.6mに5本の割合である。つまり口縁を接して圍繞していたことになる。従って本発掘区には本来38本の樹立があったはずであり、遺存率は29%ということになる。

円筒植輪列は中段外縁から0.4m内側に、くびれ部の曲線と相似形に配置される。最もくびれるのはZ+3.5mの位置であり、墳丘のくびれ部



第51図 史跡、拡張4区円筒植輪列出土状況図(1:50)

2. 確認された遺構

が位置する2Aとほぼ一致する。

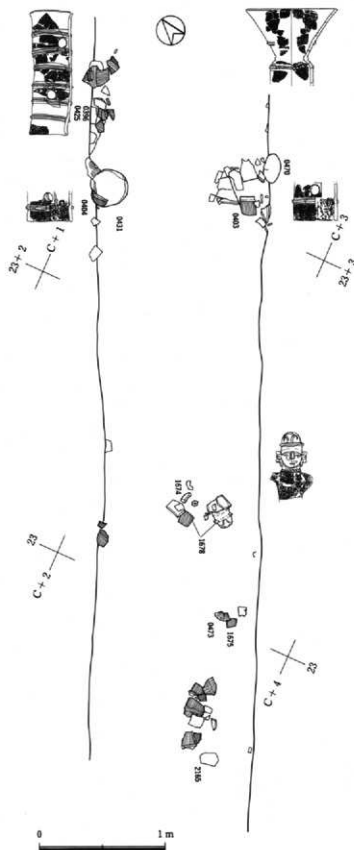
円筒列の内側中段には浮いた状態ではあるが円筒埴輪片のまとまりが2A-22列+3mと2A+2m-22列+2mの2箇所認められる。前者は口縁部へ胴部残存(0198)で鞍部頂からの転落と考えられる。後者は0195・0200と接合しており、中段面樹立の円筒埴輪の倒壊が広範囲にわたっていたことが知られる。

形象埴輪は先に述べた基台部(1862)の他は原位置出土の事例は認められなかった。全て破片である。人物埴輪は、盾持ち人の頭部破片(1728・1729)、盾面の破片(1730)が出土している。1334~1336は器財埴輪の盾、あるいは盾持ち人の盾と考えられる。肩に鍬を担ぐ人物の破片(1670)も出土しているが、これは前方部東北隅出土の破片と接合したものである。その他に1668・1669・1672・1673が人物の破片と考えられるが具体的な形状を想定しがたいものであった。

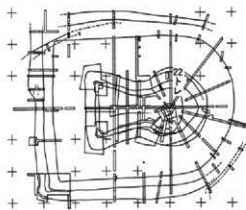
鳥形埴輪の頭部(1853)は中段面の排土中から出土したものである。

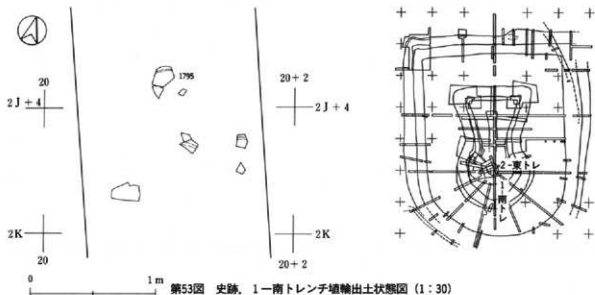
円筒埴輪が5本連続しているその内側2A+4m-22列+4mの位置に平安時代の須恵器の平底瓶(2245)が出土した。

また、墳裾から東側へ約5m、Z+4m-24列+4mの内堀底面から土製品の小像(2107)が出土した。



第52図 史跡、22トレンチ埴輪出土状態図(1:30)





第53図 史跡、1-南トレンチ墳輪出土状態図(1:30)

後円部東側(第三次、後円部東側トレンチ・史跡、22トレンチ、2-東トレンチ、7トレンチ)

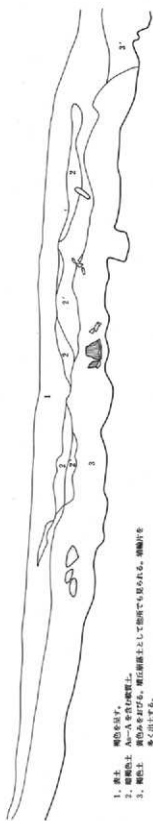
後円部の東側には第三次調査時に後円部東側の下段墳丘裾部を確定するトレンチが設定された。少量の円筒埴輪(1120に代表される)、と器種不明の形象埴輪が出土しただけである。

史跡整備時には、2E-20から放射状に22トレンチ、2-東トレンチ、7トレンチが設定され、それぞれの調査区から埴輪が出土している。22トレンチは2E-20から方向角67度30分後円部の北東方向に延びる調査区である。中段面は2E-20から北東方向16.05mより20.45mまでの幅約4.4mであった。中段外縁寄りには2E-20から19.9mで円筒埴輪列とそれが崩壊した円筒埴輪のままとった破片が出土した。調査区の北壁寄り出土の0404・0431は原位置出土と考えられる。この東側、下段墳丘寄りからは0396・0425が出土した。0403の南側には1.05mの間隔をあけ0403が出土した。これも原位置出土と考えられる。0470は朝顔形埴輪の大型破片である。くびれ部東側の円筒埴輪の樹立状況である1.6mに5本の間隔がこの地点でも踏襲されていれば、0403と0404の間には2本の円筒埴輪が設置されていたと考えられる。また、上段墳丘面上には円筒埴輪片が散見されたが、これらは後円部墳頂から転落したものと考えられる。

これらの円筒埴輪から上段墳丘西方向に約2.7mの位置から帽子を被った男子人物の上半身(1678)が出土している。この位置は上段墳丘掘線の外方0.9mで、中段面直上にあたり、当初の樹立位置をさほど移動していない可能性を示している。近接して人物の美豆具(1674・1676)、人物の帽子の破片(1675)が出土しており1678以外にも人物埴輪が樹立されていたと考えられる。墳丘東側、特にくびれ部から後円部にかかる部分での形象埴輪の樹立は原位置出土例はみられなかったが、本地点の状況からはその樹立が皆無ではなかったようだ。

後円部東側に墳丘主軸と直交して設定した2-東トレンチでは2E-20から東方向に15.6mより5.4mの間が中段面と考えられる。2E-20から17.5mで形象埴輪の基台部を、また、その近接する東側から人物埴輪の腕の部分出土したことが記録されている。資料整理時には行方不明となっており、資料化できなかった。形象埴輪で資料化したものとしては双脚の人物埴輪の上衣裾部破片(1691)をはじめとした人物の破片(1681・1683・1686・1687・1693)、人物に付属する大刀(1688)がある。いずれも中段面付近からの出土である。上段墳丘面からは器財埴輪の破片が出土している。前述の形象埴輪の基台部の外方2.5m、下段墳丘上縁からは胴部破片(0400・0421)をはじめとした円筒埴輪が出土している。あ

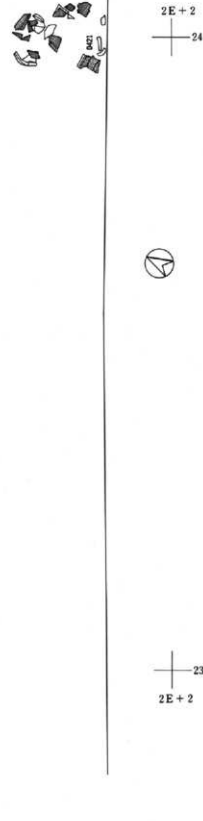
L=76.7m



1. 表土 層位を示す。
2. 砂質土 灰-Aを伴った土。
3. 層位上 灰位を示す。埋土層位として用いられる。埋土層位を多く出土する。
4. 層位上 土質、色調は3層と同様であるが散在する。埋土層位と等とされる。



2. 確認された遺構



第54図 史跡、2一東トレンチ埋出土状態図 (1:30)

まり大型破片は認められなかった。

7トレンチは後円部東南方向に設定された。埴輪の出土量が少量であったが、特に形象埴輪には資料化に値するものが少なく、盾と考えられる器財(1345)、馬の可能性が考えられる破片(1846)、器種不明(1966)だけであった。

円筒埴輪は口縁部破片(0397)、基底部残存(0401)が大型破片であった。

後円部南側(第三次、後円部南裾・史跡、1—南トレンチ、20トレンチ、10トレンチ)

後円部の南側には第三次調査時に墳丘主軸方向の南端を確認するために裾部にトレンチが配置されたが、その時点で円筒埴輪(0482・0485・0488)の大型破片が出土している。

史跡整備時には主軸方向に1トレンチが、南南東方向に20トレンチが、南西方向には10トレンチが設定された。後円部上段墳丘から中段面にかけては中世以降の削平が著しく、墳形が大きく変形していた。埴輪の出土はみたまの原位置出土のものも皆無である。

20トレンチからは形象埴輪は盾の破片(1346)、人物と思われる破片(1702)、器種不明(1976)が出土している。円筒埴輪では基底部の残存(0489)が大型破片である。

1—南トレンチでは下段墳丘面の2J—20区内で円筒埴輪片がまとまって出土しており、第三次調査の南裾トレンチと同様の状況を呈している。

10トレンチ出土の形象埴輪には人物の顔(1694)、腕(1698)、盾と考えられる器財(1355・1366)、家(1277)、家と考えられる破片(1270・1271)器種不明品(1865・2035)などがある。円筒埴輪では大型破片(0476・0478・0480・0483・0486)が下段墳丘面から周堀内に落ち込んでいた。

後円部西側(第I次、B区・C—II区)

後円部西側中段面は第I次調査時にB区、C区、D区の各調査区が設定され、埴輪列の追求がおこな

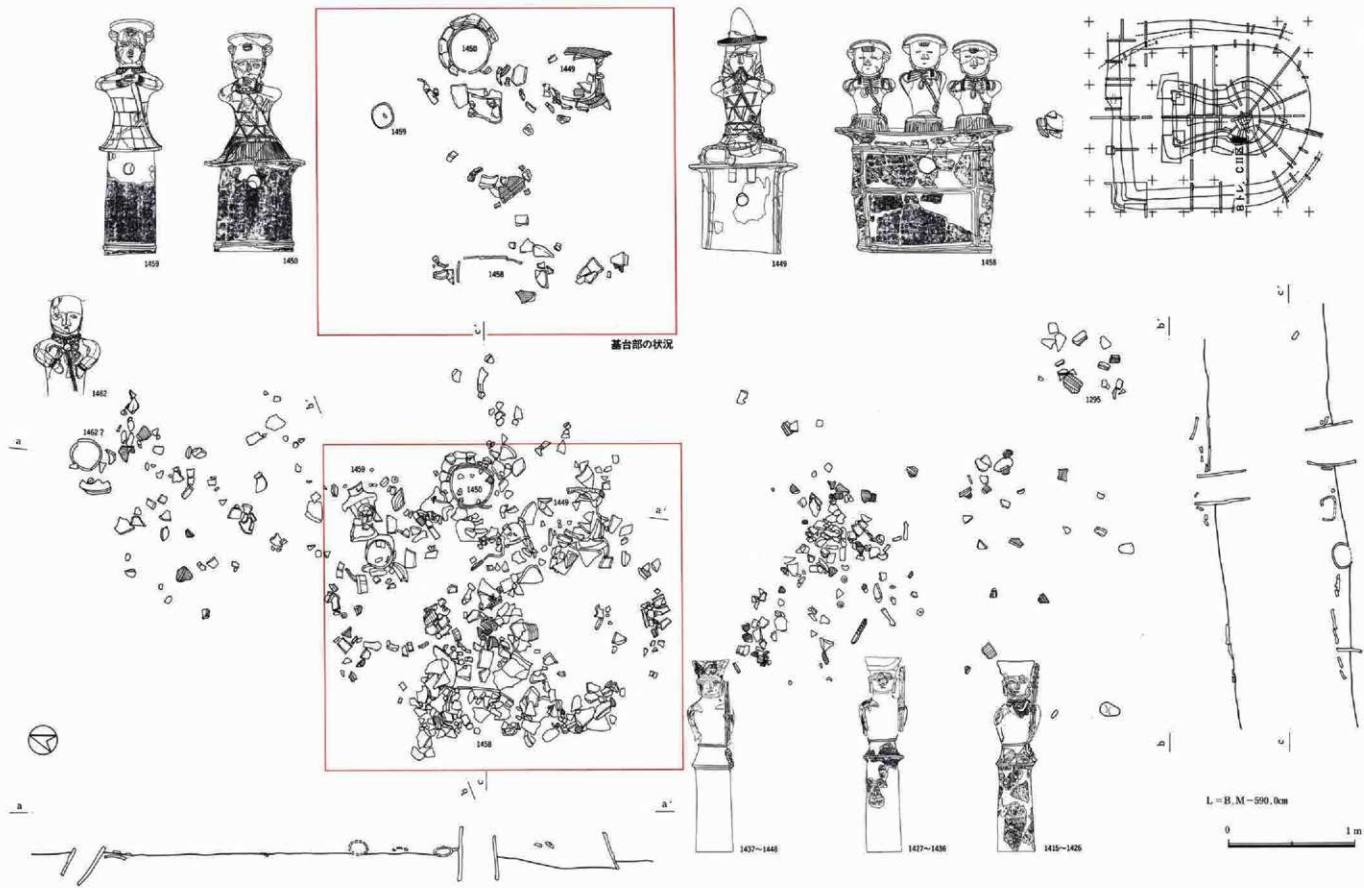
われた。その後II次調査において前方部西側が、III次調査においてC—4区、C—5区と中段面に樹立された埴輪列の検出作業が継続して実施されたため、横穴式石室開口部前から前方部西側トレンチまでの間、のべ約30mにわたり、中段面と埴輪列の位置関係を把握することとなった。

後円部西側中段面上で原位置を確認できた形象埴輪は男子人物(1449)、女子人物(1450)、女子人物(1458)、女子人物(1459)の4体であり、位置が想定できるものに鞆を背負う男子人物埴輪3体、女子人物(1462)がある。この他にも多数の形象埴輪、円筒埴輪が出土しているのでその状況を石室開口部前から順次記してみたい。

Dトレンチの調査において石室開口部前には平面台形状を呈する前庭が設けられ、中段外縁までが約9mを測ることが判明した。この調査区からの埴輪の出土は少量であった。盾の大型破片(1359)が認められた。

B—I区からC—II区は後円部西側に設定された調査区である。ここにはあくらをかいて座る男子人物(1449)が中段面の中央からやや上段墳丘寄りに樹立されていた。本体は基台部から遊離していたが、復元作業により顔をくびれ部の方向に向けて樹立されていたことが判明した。平面四角形の基台部は下端を墳丘中に約0.07mの深さに埋置されていた。その前面が散失していたが他の三面は原位置を保っていた。基台部の周囲には胴部から大帯・上衣裾部の破片が集中していた。

この男子人物から北の方向、0.87mの距離を開けて、台座の上に正座する女子人物像(1450)が検出された。この埴輪も基台部を墳丘盛土中に約0.15m埋込んでおり、原位置からの出土である。人物の座る台座部は接合部分で剥落し、基台部をとり囲む状態であった。頭部から胴部上半はあおむけの状態では基台部の南西側から出土している。周辺からこの個体に付属する破片が多数出土しているが右下腕部は上段墳丘寄り0.6mのところからの検出である。この女子人物は基台部の樹立位置から顔をおおむね男子

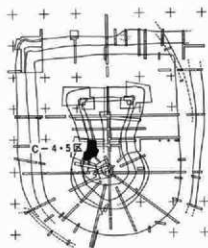


第55図 Ⅰ次、後円部西側（Bトレンチ、C-Ⅱ区）埴輪出土状態図（1：30）

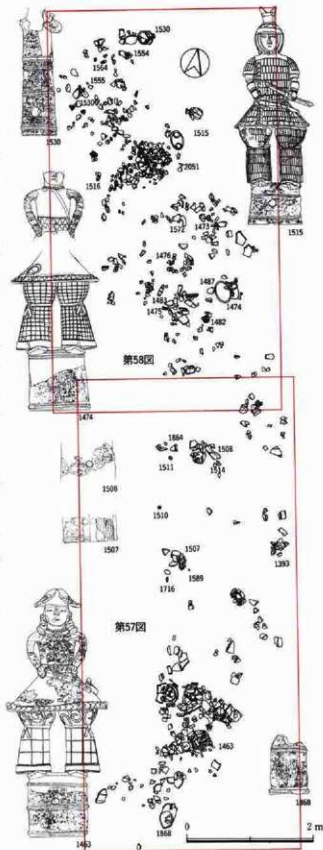
人物(1449)の方向に向けていたことが判明している。

男子人物(1449)からくびれ部方向に1.56mの距離の位置に皮袋を捧げつつ女子人物(1459)の基台部が原位置で検出された。前述の女子人物(1450)からは北東方向0.9mの距離にある。基台部は下端から0.26mが墳丘中に差し込まれており、中位で破損している。この東側には半身像の胴部がうつぶせの状態で検出されたが、既に頭部は離反していた。この女子人物も男子人物(1449)の方向を向いて樹立されており、正座する女子人物(1450)の右斜め後方に位置している。

男子人物(1449)から下段墳丘の方向に1.68mの位置から三人童女(1458)の基台部が原位置で検出された。基台部は背面にあたる西側部分が認められなかったが周辺には1m×0.5mの範囲に大型破片が集中していた。基台部の東側は墳丘中に0.08m入り込んでいた。台座部の上に据えられた3体の女子人物像はこの基台部の東側中段面に2.0×2.0m範囲にわたり広く散布していた。特に頭部から胴部については大きく四散した状態であった。女子人物(1450)の基台部の西側に投して、向かって左側の女子の頭部を欠損した胴部が首を北方向に向けて出土した。基台部からの距離は1.6mである。また、基台部から東方0.9mで中央の女子の胴部が出土している。首を南方向に向けていた。3人の女子人物は



第56図 Ⅲ次、くびれ部西側(C-4・5区)壙輪出土状態図(1:60)



顔を上段墳丘側、男子人物(1449)、女子人物(1450)の方向に向けて樹立されていた。

女子人物(1459)からくびれ部方向に寄った位置に、形象埴輪基台部(1868)が配置されていた。墳丘中に基部を25cm埋込んであり、既に南方向に傾斜した状態で検出された。調査時、西側からは上衣の裾部(1551)が出土している。実測図との照合が完全ではないが注記の表示から女子人物(1462)の出土がこの裾部破片に近接して確認できることから、実測図に図化された破片のいくつかがこの個体の出土状況を記録したものと想定される。

男子人物(1449)の南側約1.5m、石室開口部寄り中段面からはBトレンチの調査に際し2.0×1.5mの範囲に形象埴輪の破片が集中して出土した。これらは髷を背負った男子人物像で、部位の識別から3体(1415~1426・1427~1436・1437~1448)が確認できる。基台部はB1-I-2区から出土しているが、いずれも原位置を確定できなかった。3体は接合関係を基に形状・焼成の状態を加味して個体識別をおこなったが、調査時に作成された実測図からは胴部から分離した腕や脇に携えられていた弓などの個体が小破片となり、錯綜した状況で出土していることが認識できる。

C-2区の調査区内からは人物の髪の一部が多数出土している。1460・1534・1535・1536・1537である。1460と1537は髪の結い方にややふくらみをもたせて表現している。1534は板状の大型品であり、中央に透孔を有するものである。髪部を欠損する女子人物(1450)や女子人物(1458)との接合関係を検討したが同一個体の確認をえることができなかった。

上記の3体の髷を背負う男子人物の他にBトレンチの上段墳丘上から盾形埴輪(1295)が横倒して出土している。出土位置は髷を背負う男子人物群の破片が集中した範囲の東側、上段墳丘寄り後門部墳頂部から転落した可能性が考えられる。

形象埴輪群に混じって円筒埴輪片も多数出土しているが、円筒埴輪列の原位置における確認はなく、これらの大多数が後門部墳頂部からの転落したものと

と考えられる。Bトレンチからは口縁部の一部を欠き6条突帯の大型品に復元できた0584が出土した。ただし、B-1区の南側に設定されたC-1区においては原位置出土の円筒埴輪が検出されたとの調査時の所見がある。

くびれ部西側(第三次、C-4・5区)

前述のように第1次調査時に後門部西側中段面から男子人物(1449)に代表される人物埴輪群の樹立が確認された。後門部北西側からくびれ部西側部分ではこれらの埴輪列の追求を目的に第三次調査時にC-4・C-5区が設定され長さ約13.8mにわたり中段面の精査がおこなわれた。その結果、後門部西側から連続する人物埴輪列が検出された。

調査区の最南端から形象埴輪の基台部(1868)が南側に大きく傾いて検出された。墳丘中に8cm埋められていた。周辺に埴輪の小破片が散乱していたが本体をうかがい知ることはできなかった。列の前後の状況から人物埴輪が樹立されていたものと想定される。

基台部(1868)の北側からは1.85mの距離を保って盛装男子人物(1463)が検出された。基台部は原位置を保っており復元作業により、顔面を周囲側に向けて樹立されていたことが判明した。その東側から上衣の裾部が大型破片となりまとまって出土した。頭部から胴部は基台部の南側にあおむけの状態出土した。

次に男子人物の基台部が縦いて2個体、列をなし樹立されている。南側の基台部(1507)は全周の半分ほどが原位置に残存していた。周辺からこれと共伴すると考えられる破片の出土は認められなかったが、史跡整備時に下段墳丘上で出土した資料がこれと接合したことから1463と同様の盛装男子人物の樹立があったことが判明した。1499から1506の着衣の破片、履が1507と同一個体をなすと考えられる。1463との間隔は約2.1mである。1507の人物基台部の北側、約1.75mからは男子人物の基台部(1514)が検出された。周辺から上衣の裾部、履、鈴等が出



第57図 Ⅲ次、くびれ部西側（C-4・5区）南半墳輸出状況図（1:30）



第58図 Ⅲ次、くびれ部西側(C-4・5区)北半埴輪出土状態図(1:30)

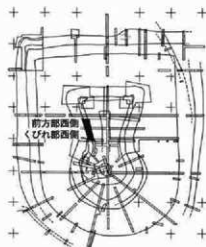
土しており、この基台部は1508～1513の破片を同一個体とする双脚の盛装男子人物のものと考えられる。

1514の人物基台部の北側、2.6mの地点には男子人物の基台部（1474）が検出された。これも先の3体同様盛装の男子人物であることは西側一帯に1.7×1.4mの範囲に広がった破片から判断できた。基台部に接して履、袴が、50cmほど離れて上衣の裾部、美豆良、腕が出土している。胴上部の一部は基台部の北側に散っていた。なお、この個体の襦部分は下段墳丘へ転落したのか、史跡整備時に風倒木痕中から検出されている（第80図、第81図4参照）。

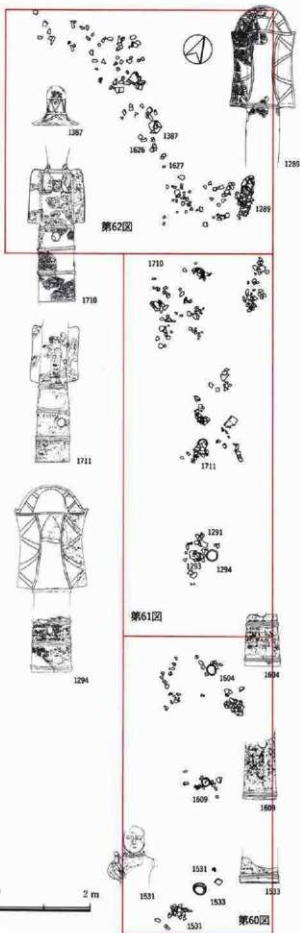
挂甲の装着を表現した人物埴輪（1515）は盛装男子人物（1474）の北西2.5mに基台部に双脚の痕跡を残して原位置を保っていた。胴部～足部は西側の1.5×0.7mの範囲内から集中して出土、頭部は北側0.4mから出土している。

次は頭部を欠損するが左肩に鎌を担ぐ人物埴輪（1530）が出土している。基台部を原位置にとどめており、人物埴輪（1515）からの距離は1.7mである。左肩～腕の部分は中段外縁寄りに本体から離れて出土している。

また、原位置を確認できない個体としてはC-4区出土として、女子人物の鬘（1534～1537）、人物埴輪（1474）の東側、上段墳丘裾部寄り出土の帽子



第59図 II次、くびれ部西側～前方部西側埴輪出土状態図（1：60）



第3章 遺構に関する報告

(1393)がある。C-5区検出の盾(1290)は、基台部(1291)と同一の可能性が高いが、史跡整備時のZ-16、Z-18区内出土破片と接合しており、墳頂部からの転落が考えられる。

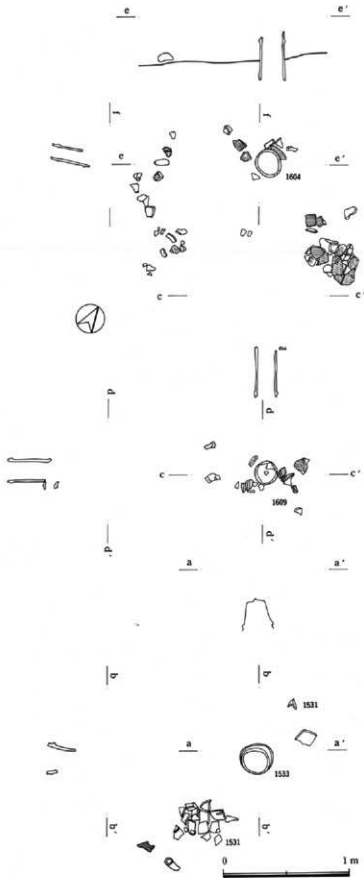
後門部西側同様、本調査区においても原位置における円筒埴輪の樹立は確認していない。その中で盛装男子人物(1463)の東側から0658が横倒して出土している。これは5条突帯の構成で器高73.0cmを測った。

前方部西側 (第II次、前方部西側中段)

第II次調査において墳丘を横断するかたちで前方部西側と鞍部西側にトレンチによる調査区が設定されたが、両調査区に挟まれた中段面には面的調査が展開され、埴輪列の存在が確認された。

第III次調査におけるくびれ部中段面の調査では調査区の最北端から鉄を担ぐ人物(1530)の樹立が確認されたが、これに続く鞍部西側トレンチの中段面では、形象埴輪の基台部(1533)を原位置で確認した。この南西0.6mからは鉄を担ぐ男子人物の上半身(1531)がまとめて出土しており、基台部と同一個体を構成していたと考えられる。鉄は肩からはずれて基台部の北東0.55mの地点から出土した破片が接合した。

基台部(1533)の北北西2.3mの中段面上に基台部(1609)が樹立していた。近接して人物の頸(1605)、上げ美豆良(1618)が出土しており人物埴輪が樹立されていたと考えられる。また、この2つの基台の延長線上2.4mの中段面上には基台部(1604)が樹立されていた。周辺から腰に刀子をさす人物埴輪の上衣裾部～基台部上半が出土している。接合点



第60図 II次、くびれ部西側～前方部西側南側埴輪出土状態図(1:30)

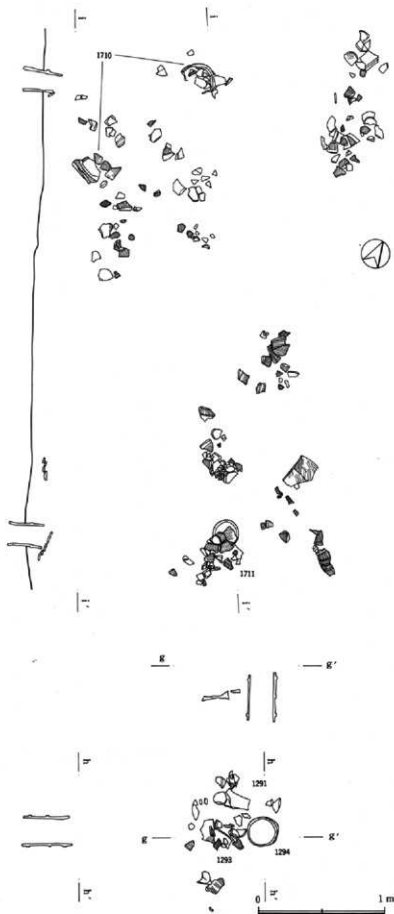
がないが同一個体の可能性がある。他に人物の上衣裾部 (1532・1602・1603・1606・1607・1628)、腕 (1600) などが検出された。

基台部 (1604) から2.35m離れて盾形埴輪 (1292~1294) の基台部が出土している。

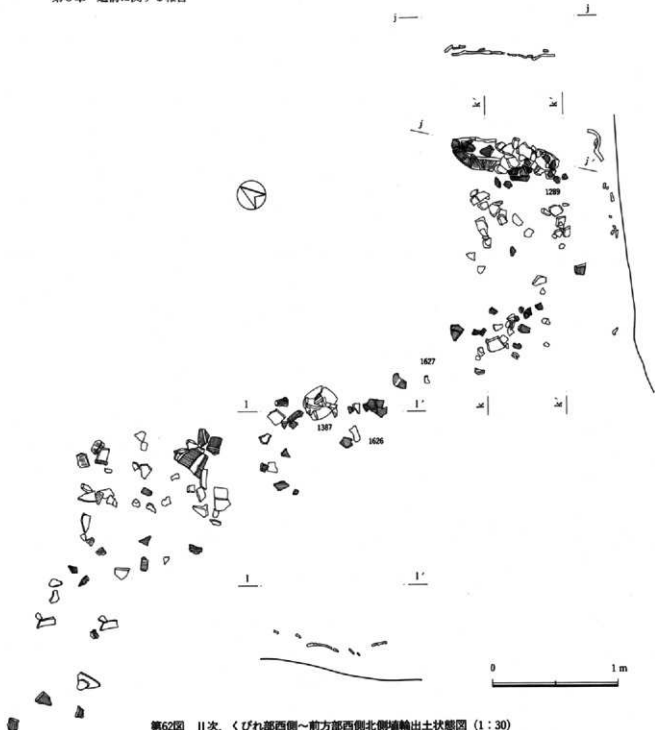
盾形埴輪 (1292~1294) の北北西2.25mには人物埴輪盾持ち人 (1711) の基台部下半 (残高27cm) を原位置で検出した。頭部は欠損するが盾面から基台部上半は原位置周辺にまよっていた。また、この盾持ち人の北北西3.57mの位置において盾持ち人 (1710) の基台部下半 (残高31cm) が原位置を保っていた。盾面、基台部上半は南西側の中段面上1.0m四方に破片が四散していた。

盾持ち人 (1710) の北方向1.9m、これまでの埴輪列の延長線上よりも上段墳丘寄りの中段面から盾形埴輪 (1289) が出土している。頂部を北方向に向けた横倒状態で、中段面から約10cmほど浮いた状態で、出土時に既に基台部の下半を欠失していた。

前方面西側トレンチ寄りの中段面から器財埴輪の帽子 (1387) が出土している。本体に続く基台部が認められないことや、出土位置が前方面西側中段面の埴輪列よりも下段墳丘縁辺に寄っていることから原位置は保っていないものと思われる。その他にも前方面西側トレンチからは原位置出土資料は認められなかったが人物盾持ち人の頭部 (1712) や馬形埴輪の破片



第61図 Ⅱ次、くびれ部西側～前方面西側中間埴輪出土状態図 (1:30)



第62図 II次、くびれ部西側～前方形西側北側埴輪出土状況図(1:30)

(1775～1787)が出土している。馬形埴輪の出土は前方形東側側面部同様状況を呈しており、盾持ち人(1710)に続く埴輪列の存在が想定される。

円筒埴輪は調査区内で原位置における樹立を確認したものはない。形象埴輪基台部(1609)に近接して0843・0851が出土している。盾持ち人(1710)から盾(1291～1294)の周辺中段面からは0844～0847、

0849・0850・0852・0854・0855などの大型片が出土している。このうち0852は鞍部西側トレンチ出土の破片と接合しており、鞍部墳頂部に原位置をもつ個体が中段面へ転落した例と考えられる。

上記のように前方形西側中段面には半身表現の人物埴輪、盾形埴輪、盾持ち人からなる埴輪列が確認された。この他に1292・1330・1331に代表される盾

形埴輪、翻の可能性が考えられる器財埴輪(1374)、器種不明(2083・2086)などが出土した。

くびれ部西側(史跡、調査・拡張1区)

くびれ部西側は、史跡調査時に平面発掘された。前述のとおり中段面は第Ⅰ・Ⅲ次調査で形象埴輪列が検出されており、史跡調査時には抜取穴が四箇所認められたのみである。下段墳丘斜面および、周堀内からは上位から崩落した埴輪が多数出土した。また、2A-16を中心に第63図の風倒木痕が形成され、その堆積土中からも埴輪が出土しているがその状況については第3章2(4)風倒木の項で記述した。

最初に出土位置の確定できたまとまりについて記述する。調査区の北端Y+4m-15+4m下段墳丘傾斜面からは第64図1の盾ち人(1713)、埴輪裾部は15列から西方2.0mにある。頭部は残存状態が良好で斜面下方向に頭頂部を向けて横倒していた。基部下端を欠失するが、中段面にこれに対応する状況がみられず原位置を確定しえなかった。

2A+1m-15+2mの下段墳丘傾斜面からも第64図2にみられるよう円筒埴輪・形象埴輪がまとまって出土した。円筒埴輪(0652)はほぼ完形に復元した資料で5条突帯で器高73.2cm、口径26.9cmを有するものであった。1876は形象埴輪の基台部で復元作業により底面から44.4cmの残高で全周した。円筒埴輪の大型破片(0678)、盾の破片(1318・1319)もこの地点から出土している。

Y+3m-15列の周堀底面からは円筒埴輪片が第64図3の状態出土している。口縁部破片(0742)、胴部大型破片(0808)を資料化した。

Z+2m-14+3mの周堀底面から第64図4のようにまとまって円筒埴輪が出土している。細片の状態であったが、0670は口縁部、基底部を欠くものの残高65.7cmを測り、突帯5条が認められた。0671も胴部の大型破片である。

また、1879はスリット状の透孔を有する形象埴輪の基台部と考えられるが、残高78.8cmに復元ができた。

上記の他に調査区内から出土した主要な埴輪について記述しておくとして形象埴輪としては器財埴輪では盾の部分(1316~1321・1324・1325)、器種不明品(2053・2059)、基台部(1879)が出土している。

人物埴輪では履(1471・1472)、双脚の男子人物(1463)に属すると考えられる。首部(1489)、胴部(1491・1492)、腕(1494)、手甲(1495)、上衣裾(1499)、禪(1501)などの破片は中段面で検出された基台部(1507)にのっていた個体の部分であると考えられる。

また、手甲(1577)、刀(1599)など別個体をなすものも出土している。

盾持ち人には1714がある。多数の破片の状態で中段面上から出土したか、原位置の確定にはいたらなかった。

円筒埴輪は、下段墳丘面から周堀にかけて大量に出土している。

史跡調査時のくびれ部西側部分は拡張1区として平面発掘を実施するにあたり、11・16・18の3本のトレンチが設定され、拡張前の状況把握がおこなわれている。拡張1区と重複する11・16トレンチの下段墳丘、周堀から出土した埴輪の状況を以下に記しておく。

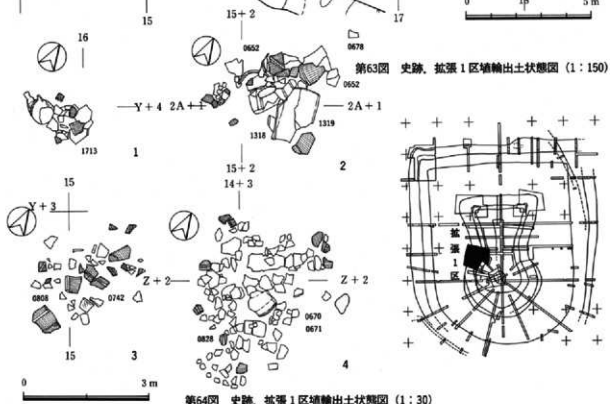
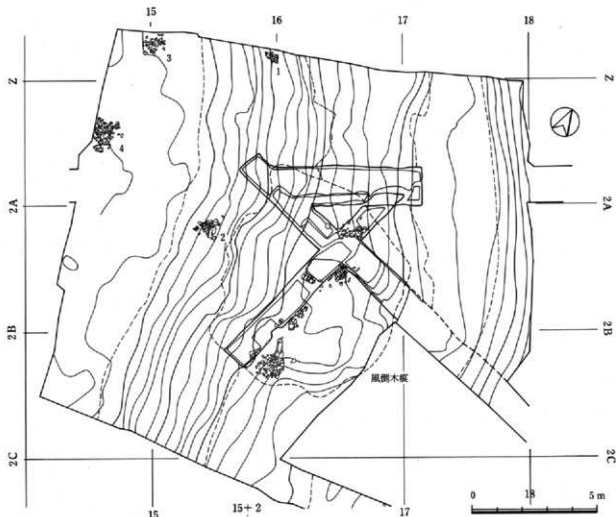
16トレンチからは双脚の盛装男子、人物埴輪の一部と考えられる美豆良(1490)、腕(1493)、上衣(1500)、大刀(1497・1498)、禪(1496・1502~1505)の破片が出土している。円筒埴輪基底部大型破片(0689)が出土しているが、その他は小破片である。

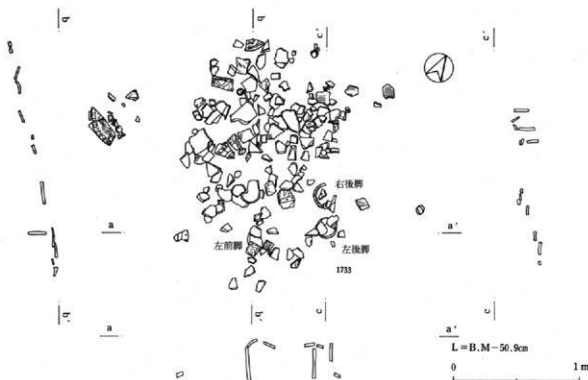
11トレンチはW列に沿って墳丘を横断するトレンチである。下段墳丘面から周堀にかけて人物埴輪の破片を多数出土した。特に挂甲装着の人物埴輪(1515)の破片が多数認められ1526・1528・1529を資料化した。他に人物の顔面(1559)がみられた。円筒埴輪は0683が基底部の大型破片である。

前方部西北隅(第Ⅱ次、前方部西北隅・史跡、拡張2区)

前方部西北隅は第Ⅱ次調査時に前方部中段面の隅

第3章 遺構に関する報告



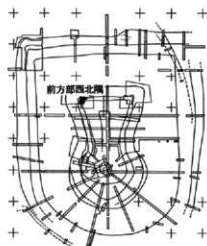


第65図 Ⅱ次、前方部西北隅馬形埴輪 (1733) 出土状態図 (1:30)

部の検出と埴輪列の追求のために幅4m、長さ6m調査区がL字状に設定され前方西北端と呼ばれた。また、史跡整備時には拡張2区が設定され、中段面および、下段墳丘の法面墳裾の状況を把握することがなされた。

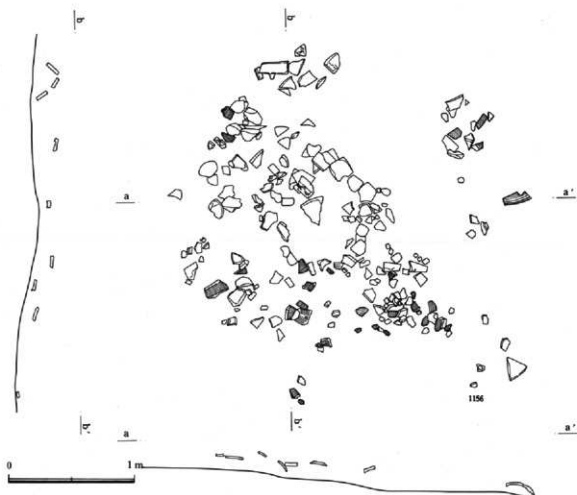
第Ⅱ次調査前方部西北端では、中段面に隅部寄りの前方部前面に樹立された馬形埴輪 (1733) が検出された。その地点は史跡整備時のS-16区内と想定される。馬形埴輪は南北2m、東北2.5mの範囲からまとまって出土した。4脚のうち右前を除く3本が墳丘上に直立する状態にあった。頭部は西側を向いている。左前脚と後脚は約55cmの間隔を保っていた。左右の両後脚の間隔は約20cmである。胴部破片は北側一面にひろがっていた。たがみは西方向にやや離れて出土している。

史跡整備時には中段面が面的に調査された。外縁はS+2m-15+3m付近で屈曲している。前方部前面側は長さ約10mにわたって検出されたが原位置における埴輪の出土は認められなかった。ただし、



下段墳丘から内堀埋没土は数多くはないが形象・円筒埴輪の破片が出土している。

形象埴輪においては器財埴輪の盾 (1303・1304・1306~1308) の破片が出土している。人物埴輪では顔 (1636)・椅座人物の爪先に類する破片 (1641) がある。文様の入った人物の鼻の破片 (1883) は大型でヘラ描きによる文様を加えられている。馬形埴輪は第Ⅱ次調査出土の1733と異なる個体の破片 (1790-1792-1793) が出土している。基台部分 (1856)



第66図 II次、前方部墳頂部家形埴輪 (1156) 出土状態図

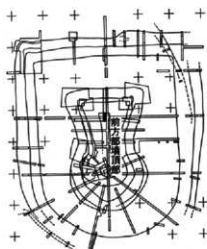
は人物埴輪の基台部の可能性がある。

円筒埴輪は総じて破片での出土が多く、原位置出土のものも皆無である。形状を知ることが可能なものとしては、胴部大型破片 (0926・0927)、基底部大型破片 (0928) がある。

前方部墳頂部 (第II次、前方部中央・史跡、1、3トレンチ)

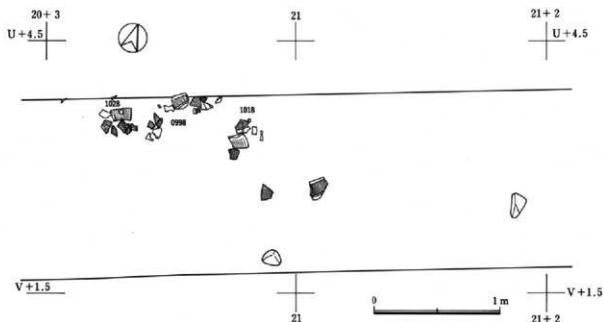
第II次調査で墳丘主軸に則して墳頂部平坦面に調査区が設定された。史跡整備時には主軸上に設定された1トレンチ、V列で1トレンチに直交する3トレンチが設定された。また、X列にも主軸と直交方向に4トレンチが配された。

第II次調査時に墳頂部平坦面上から家形埴輪 (1156) が出土した。約3m×2.8mの範囲に細片状態で検出された。各部位が混じり合っており、緻密



な意味での原位置を確定できない。他に1156とは別個体と考えられる家の破片 (1158・1159)、器種不明品 (1938・1941・1942) が出土した。

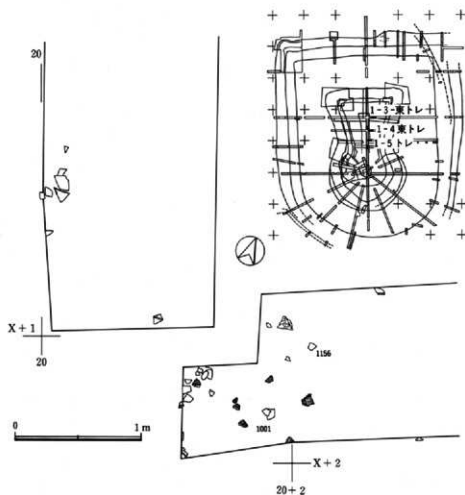
史跡整備時の調査では墳頂部平坦面からの埴輪の出土は少数であった。



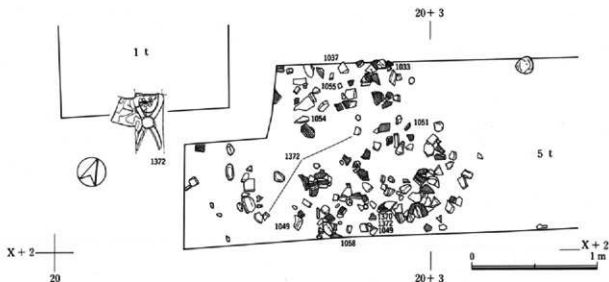
第67図 史跡、3トレンチ墳輪出土状態図

3トレンチの調査では平坦面から東側の上段墳丘斜面にかけて円筒墳輪がまとまって認められた。資料化したものはいずれも破片(0998・1018・1028)である。また、形象墳輪の基台部破片(1863)が出土しており、器財等の樹立が想定される。

4トレンチと1トレンチが交差する地点は墳頂部平坦面から鞍部に向かう傾斜面である。形象墳輪は器財の破片(1373・1402・1940)が出土している。円筒墳輪はX-20・X-21区内から破片(1004・1007・1009・1016・1023)などが出土している。前方部全体をとしてみると、墳頂部

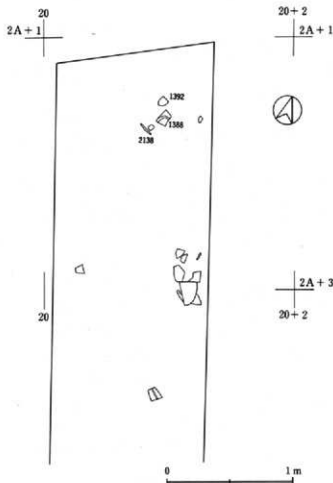


第68図 史跡、1トレンチ、4トレンチ墳輪出土状態図



第69図 史跡、5トレンチ埴輪出土状態図

平坦面に家形埴輪の樹立がなされたことが確認され、この個体が崩壊する過程で四周の上段斜面から中段面に破片が飛散している様子が認められた。また、少量、少破片であるが形象埴輪、円筒埴輪が出土している。埴頂部にこれらの埴輪が樹立されていたことが想定される。



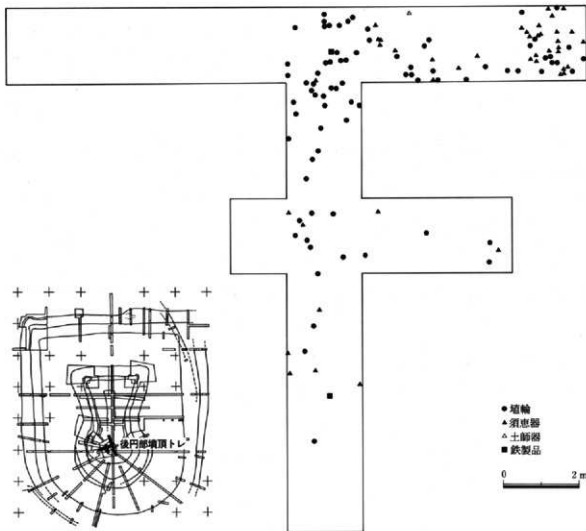
第70図 史跡、1トレンチ埴輪出土状態図

鞍部埴頂部（第Ⅱ次、鞍部西トレンチ・史跡、1、4、5、11トレンチ）

鞍部の頂部から上段墳丘については第Ⅱ次調査の鞍部西側トレンチ、第Ⅲ次調査の鞍部東側トレンチで一部その状況が確認された。また、史跡整備時には墳丘主軸に沿って1トレンチが南北方向に設定されている。この1トレンチと直交して、前方部埴頂の裾間近のZ列には5トレンチが、その南方、Z列には11トレンチが設定された。

5トレンチY+1m-20+2m付近平坦面から上段墳丘面にかかる法面から細片の状態ではあるが埴輪がまとまって出土した。この中から刷（1372・1376）が検出された。1372は今回資料化した刷の中で最も残存状態の良いものであった。他に家（1179・1186）、器種不明（1954）がみられた。円筒埴輪は口縁部破片（1033・1037）をはじめとしていずれも細片であった。

1トレンチでは少量の埴輪が出土したにとどまっている。小破片（1388・1391）は帽子形埴輪



第71図 後円部墳頂部～上段埴輪出土状況図(1:100)

の破片と考えられる。2138は、須恵器横瓶の破片である。

後円部墳頂部～上段（第Ⅱ次、後円部墳頂部各トレンチ・史跡、1、2トレンチ、後円上段）

第Ⅱ次調査時に横穴式石室の調査に先立って、後円部墳頂部に石室の主軸に沿って1本（後円中央トレンチ）石室の主軸に直交して2本のトレンチ（後円部南・北トレンチ、後円部西トレンチ）を設定した。このトレンチより石室を埋覆する土層を確認するとともに後円部墳頂部の埴輪、土器の出土状況を把握された。遺物は墳丘表土下0.5～1.0mから出土している。その後、石室の天井石除去に伴う墳頂部全体が調査対象地（石室上部・石室上部S・羨門北）

とされ、8×10mの範囲に埴輪が散布していることが確認された。原位置を留めたものは一つもなく、すべてが破片であった。その分布範囲は石室玄室上部でやや石室入口方向に寄っている傾向がみられた。器種は円筒埴輪の他に形象埴輪の家、器財、鶏の頭部、器種不明品が認められた。

その中で特に破片数が多かったものは家である。形状などの特徴から複数個体の樹立が想定できる。1つは寄棟造の下屋根の大型破片(1188・1189)に代表される個体である。石室上部の調査区を中心として出土している。この個体は埴輪個々の事実記載の項で記するが庇状に長く延びる屋根(1190～1196)、高床状の床面(1226～1231・1240)、角柱(1208～1215・1218)、基台部を兼ねた円柱(1232～1235・1237～

(4) その他の遺構

墳丘および、周堀の発掘調査の過程で、古墳築造後に営まれた遺構がいくつか発見された。第Ⅲ次調査では前方部東北隅の中段面に石敷面を検出している。史跡整備時の調査においては、墳丘上ではくびれ部西側の下段面から墓塚を、後円部南側中段面からは建物遺構を発見している。周堀および、外堀には溝、井戸、墓塚等が検出されている。発掘区外にもさらに多数の遺構の存在する可能性が想定される。

墓塚1 (史跡、10トレンチ周堀)

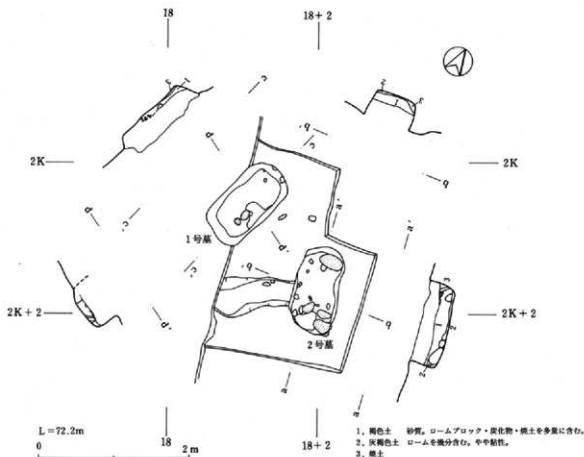
史跡調査時に後円部後方の墳裾から3m離れた内堀内2K-18区内に墓塚が2基検出された。

1号墓は、10トレンチ東壁にその断面をあらわしたものである。掘り込み面は、黒色砂質土層上面からである。同層は、As-Bを主体としている。墓塚

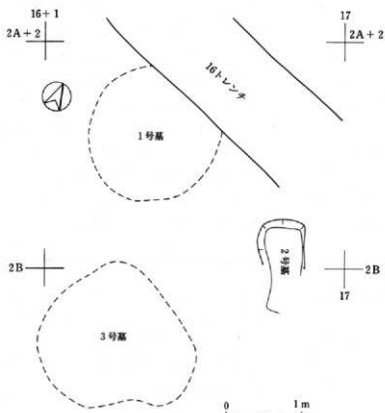
の主軸は、N-14度30分-Eにとり、平面形は、隅丸方形を呈する。上端長1.35m、幅0.60m、短辺の立ち上がりはやや傾斜するが、長側部は直立する。底面長1.10m、幅0.60m、掘り込み高0.37mである。底面には6~10cm厚に焼土と木炭片を多量に含む褐色土が堆積し、これに骨片が散見する。

2号墓は、N-12度30分-Wに主軸をおく。平面形はやや不整の隅丸方形、上端長1.02m、幅0.50m、底面はほぼ平らで長さ1.06m、幅0.52mである。壁面は内傾し高さ0.41mとなる。壁面の一部は火熱を受け焼土化している。下面には木炭片、焼土塊が堆積し、端部には0.2×0.3mほどの円礫が北側に2石、南側に4石配される。規模・形状とも1号墓に類似する内容を持ち、同時代の所産と考えられる。

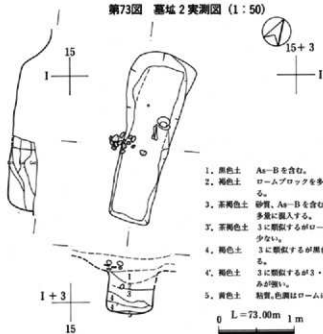
築造時期は、掘り込みの状況からみて、中世以降でかつ周堀が水田化される以前と考えられる。



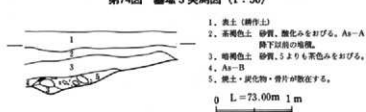
第72図 墓塚1実測図 (1:50)



第73図 墓城2実測図 (1:50)



第74図 墓城3実測図 (1:50)



第75図 墓城4実測図 (1:50)

墓城2 (史跡, 拡張1区)

くびれ部墳丘西側下段墳丘法面に風倒木痕があるが、その上面において3基の墓域が検出された。

1号墓は、風倒木調査のトレンチの交差部分で検出した。径1.7mの円形を呈す。底面は不整であるが、木炭焼土粒が分布し、中央辺から骨片が出土した。

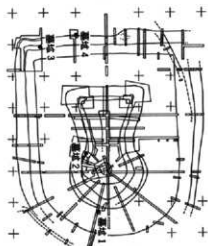
2号墓は、1号墓から南方向に1.2m離れ、2B-17区寄りに所在する。未掘部を残すが短辺0.6m、長辺1.2m以上の規模で隅丸方形を呈す。主軸はN-28度-Wである。20cmほどの壁面を確認した。端部から腰骨片が出土した。

3号墓は、1・2号墓と三角形を構成する頂点に位置し、2B-16区内に所在する。不整円形で径2.1m×1.9mを測る。埋没土は他の2基も同様であるがAs-Aを多量に含む。

このことから3基とも時期は江戸後期以降と考えられる。

墓城3 (史跡, 25トレンチ)

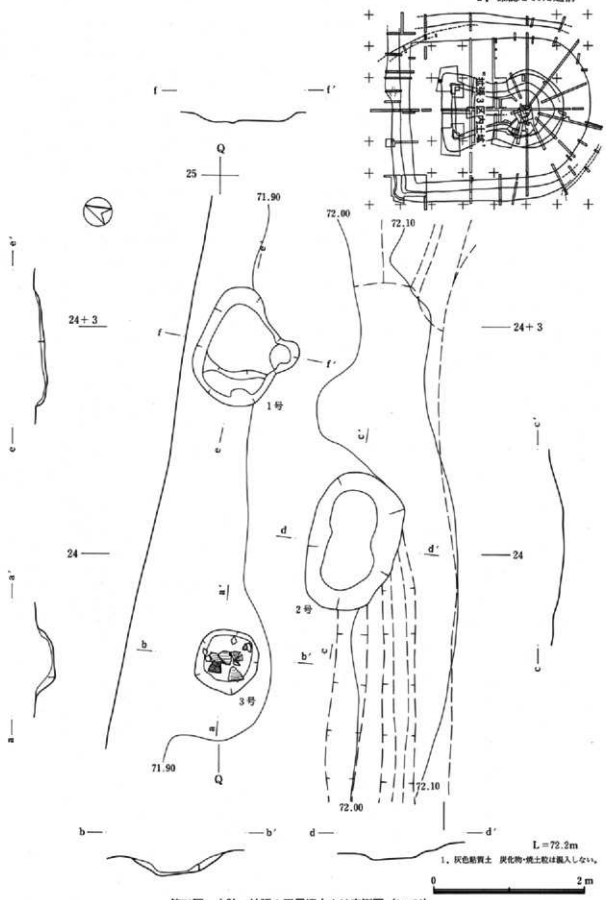
北辺外堀外縁上に墓域が発見された。表土下には10cmほどのAs-Bを含む黒色土層があり、墓域は同層直



1. 黒色土 As-Bを含む。ロームブロックを多量に混入する。
2. 褐色土 砂質。As-Bを含む。ロームを多量に混入する。
3. 茶褐色土 砂質。As-Bを含む。ロームを多量に混入する。
4. 褐色土 3に類似するがロームの混入が少ない。
5. 褐色土 3に類似するが黒色をおびる。
6. 褐色土 3に類似するが3・4より黒色が強い。
7. 黄色土 粘質。色調はロームに類似する。

1. 表土 (耕作土)
2. 茶褐色土 砂質。酸化をおびる。As-A降下以前の堆積。
3. 暗褐色土 砂質。5よりも茶色をおびる。
4. As-B
5. 黄土・炭化物・骨片が散在する。

2. 確認された遺構

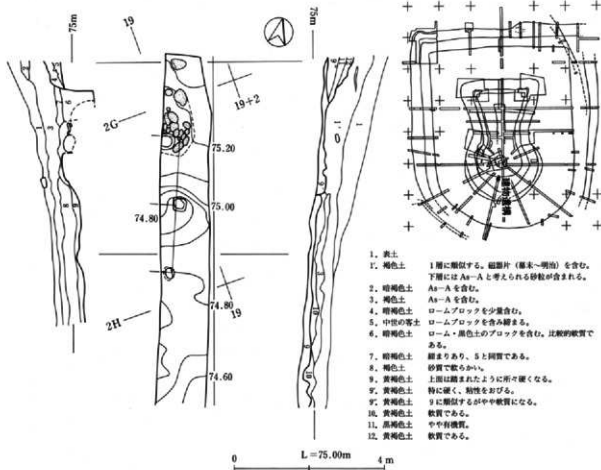


第76図 史跡、拡張3区周堀内土坑実測図 (1:50)

第3章 遺構に関する報告

下から掘り込まれている。長軸をN-14度-Wに向け、狭長な平面形をもつ。上端はやや崩れており、長さ2.3m、端部幅は北で0.8m、南端で0.55mとなるが、底面は、長さ2.04m、北端幅0.48m、南端幅0.46mと整然とした形状を示す。端部は傾斜するが、側部は垂直に立ち上がる。深さは0.56mである。埋没土は下半に暗褐色土、上半にロームを主体とした土層がある。域の中央やや東方に須恵器高台付碗(2218)、貞観永宝、寛平大宝を含む銭4枚、棒状鉄製品5点(2219~2227)が出土した。銭は4枚が重なり、紐で1つに束ねられていた。棒状鉄製品は錆で塊状を呈していた。層位から築造時期はAs-B降下前であり、遺物の示す年代観からは10世紀中頃を中心とした頃と判断される。なお、骨の検出はできなかったが、域の規模と埋没土の状況から伸展位土葬と考えられる。

墓域4 (史跡、拡張5区)



第77図 遺物遺構実測図 (1:100)

外堀の北西K-10区内の土層断面に認めれた。掘り込み面はAs-B層上面で、埋没土は上半にAs-A降下以前の茶褐色土が堆積する。下半は焼土と木炭が主体を占め、径10~20cmの円礫が存在する。焼骨片が出土した。外堀は、内堀より底面が高いため、③層上面は周辺と同一レベルとなり、墓域が掘られた段階では外堀の存在は認識されていなかったものであろう。現長1.2m、深さ0.26mである。

土域 (史跡、拡張3区)

前部東北隅の状況確認のため設定した拡張3区の調査区内で前部前面の墳丘裾部に接したQ-23・24区内に不整形形の土域を検出した。本報告にあたり東側から順次、1号から4号と呼称した。

1号は東面に長軸をもつ長円形の掘り込みを有する。南側の中央部分は煙り出し状に突出する。長径1.57m、突出部を入れた短径1.33mである。確認面からの深さは0.11m、埋没土中に木炭、焼土を含み、

1. 表土
1. 褐色土 1層に類似する。磁器片(黒土-明色)を含む。下層にはAs-Aと考えられる砂粒が含まれる。
2. 暗褐色土 As-Aを含む。
3. 褐色土 As-Aを含む。
4. 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
5. 中位の客土 ロームブロックを含み膠まる。
6. 暗褐色土 ローム・褐色土のブロックを含む。比較的軟質である。
7. 暗褐色土 膠まりあり。5と同質である。
8. 褐色土 砂質で軟らかい。
9. 黄褐色土 上面は踏まれたように所々硬くなる。
9. 黄褐色土 粘に硬く、粘性をおびる。
9. 黄褐色土 9に類似するがやや軟質になる。
10. 黄褐色土 軟質である。
11. 黒褐色土 やや有機質。
12. 黄褐色土 軟質である。

2. 確認された遺構

特に西側部分ではブロック状に残存していた。

2号は東西方向に長軸を有する長円形のプランを有する。1.96×1.16m、深さは0.07mである。木炭、焼土を含んでいる。

3号は0.82×0.80mとほぼ同径の隅丸方形をおもわせる円形を呈する。深さ0.26mである。円筒埴輪片(0099-0100)が多数含まれている。

4号は径0.8m前後を測ると思われるが、焼土や木炭の混入は他よりも少ない。

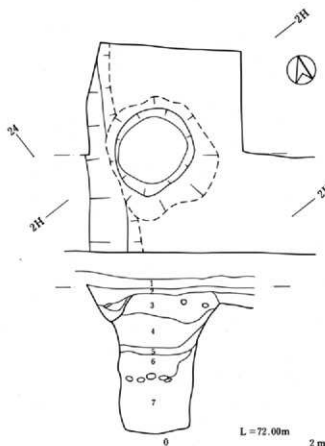
建築遺構(史跡, 10トレンチ)

後門部南方は上段墳丘を削り、排土を下方へ移動することによって広い平坦面を造出している。この上から柱列が検出された。走行をN-10度30分-Wにとり、最南のビットは28×25cm、深さ27cmの方形、中間は35×35cm、深さ35cm、北半は、径40cmの角閃石安山岩をはじめとした円礫が置かれている。柱間は、2間、1.8m等間である。8m西方の6トレンチからは、削平面下ビットに土師瓦皿(2253)が出土している。

本古墳は、南方の普賢寺の所有であった。その南の不動山古墳上の不動堂に対応し、本古墳上に観音堂の存在が想定できる。調査の所見から、本遺構は、削平と同時期の所産で、本古墳名称由来の堂宇と考えたい。

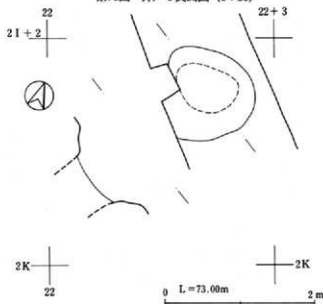
井戸1(史跡, 7トレンチ)

後門部南東方向に設定した7トレンチの調査

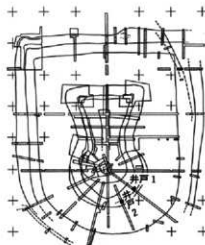


1. 灰土 水田耕作土。
 2. 鉄分沈着物
 3. 褐色土 砂質、礫石を含む。ロームブロックもわずかに混入する。
 4. 黒褐色土 粘質をおびる。
 5. 黒褐色土 粘質をおびる。
 6. 黒褐色土 炭化物・焼土粒を含む。
 7. 褐色土 ロームを主体とする。
- 8を踏み廻石粒をわずかに含む。焼土・炭化物は少ない。

第78図 井戸1実測図(1:50)



第79図 井戸2実測図(1:50)



第3章 遺構に関する報告

時に2H-24区内、墳丘裾部で検出した。

確認面での径は、1.63×1.50m、底径0.93×0.87m、深さ1.73mを測る。底面から0.65mほどの所で埋設土中に径5～10cmの小円礫が多く含まれる。埴輪片を多く出土しているが、その他の遺物が出土していないため構築時期が判然としない。

井戸2（史跡、20トレンチ）

後円部南南東に設定した20トレンチ墳丘裾部、2J-22区内に検出した。出土遺物がなく構築時期が判然としない。確認面での規模は、1.32×1.20m、底径は0.94×0.62m、深さは、0.36mまで確認した。完掘していない上半は、ロート状に法面が傾斜、下位はえぐれている。

風倒木痕（史跡、拡張1区）

くびれ部西側下段墳丘法面に発見された。平面形は、8.5×7.5mの不整形を呈し、2A-16を中心にその四周におよんでいた。下面は、摺鉢状を呈し、最深部の深さは、約2.0mを測る。地山黒色土を貫きローム中におよぶ。11トレンチ、16トレンチによる墳丘盛土および、構築状況を確認する過程で検出された。11トレンチは北側の立ち上がり部分を、16トレンチも北側寄りを短軸方向に横断した。範囲確認後34トレンチを長軸方向に沿って設定し、倒木の状況を確認した。層序は、墳丘盛土がローム、黒色土両者の混土を5～10cmほどの厚さで盛上げているのに対し、倒木内は、それらと疑似する堆積土が、厚さ10～20cmほどにレンズ状に分層することができる。これは、盛土層が倒木によって逆転した結果である。同層中には後述するよう完形に近い円筒埴輪や形象埴輪の大型破片が少量に混入する。このことは風倒木の発生が、古墳築造後であることを示唆している。また、11トレンチのa-a'、34トレンチd-d'断面精査によって、地山面に角閃石安山岩の削屑層が認められた。位置はくびれ部盛土下であり、後円部裾線を鞍部へ延長した場合の端部にあたる。角閃石安山岩は後円墳上段墳丘に所在する横穴式石室の側壁を構成する主要石材であるところから、これの加工が此所でおこなわれた可能性が高い。ちな

みに11トレンチ盛土断面には直法の堅い傾斜面が検出されており、運搬路と考えられる。

本風倒木の位置する下段墳丘法面の上位、中段面からは第Ⅲ次調査の際、人物埴輪が検出されている。従って、風倒木痕内から出土した埴輪は、中段あるいは墳頂部から下段墳丘に転落後、風倒木に巻き込まれたものと考えられ、その出土状態は、原位置を示していない。調査は、部分的なため、取り上げた1～6の埴輪以外にも相当量が倒木痕内に含まれるものと思われる。

第81図1は、16トレンチと34トレンチが交差する地点、遺構確認面から約0.45m下位の土層中から検出したものである。0773（第145図）は円筒埴輪である。1500・1502・1505（第243図）は、いずれも形象埴輪の人物で、盛装男子の上衣裾・裨部の一部と考えられる。

2は、1のやや北側、2mからの出土である。0660・0669（第137図）は円筒埴輪の大型破片、1843（第301図）は馬形埴輪の破片と考えられる。

3は、確認面下1.1mのところ横倒していた円筒埴輪0650（第135図）である。器高69.7cm、5条突帯の円筒埴輪でほぼ完形であった。

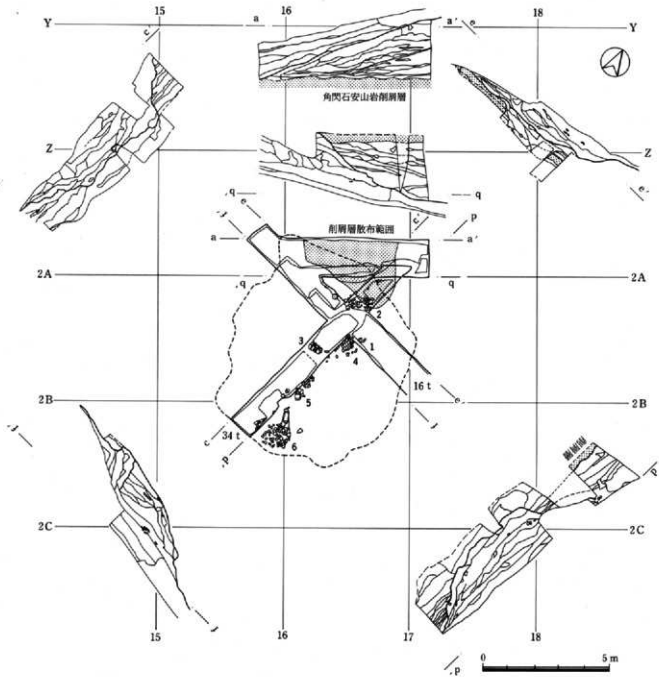
4は、1と3の間から出土した。人物埴輪1474（第238図）の禪下半部の一部であった。原位置は中段面上である。5は確認面上面からの出土である。0654（第135図）0684（第138図）の円筒埴輪大型破片と器種不明の形象埴輪2063（第317図）が出土している。

以上の1から5に対して、6は、平面的には風倒木痕による盛土攪乱範囲にあるが他とはやや埴輪の出土状況を異にしている。2053（第317図）は、形象埴輪の基台部であるが0659（第136図）円筒埴輪に嵌込まれ、図中の上端にあたる部分を円筒埴輪の破片で蓋をされとじられている。この状態が何に起因するのかは断定できないが、近接して墓塚2が検出されており、あるいは同様の遺構があったことも考えられる。いずれにしても、2053・0659の埴輪は二次的利用としての原位置を示している可能性が高い。

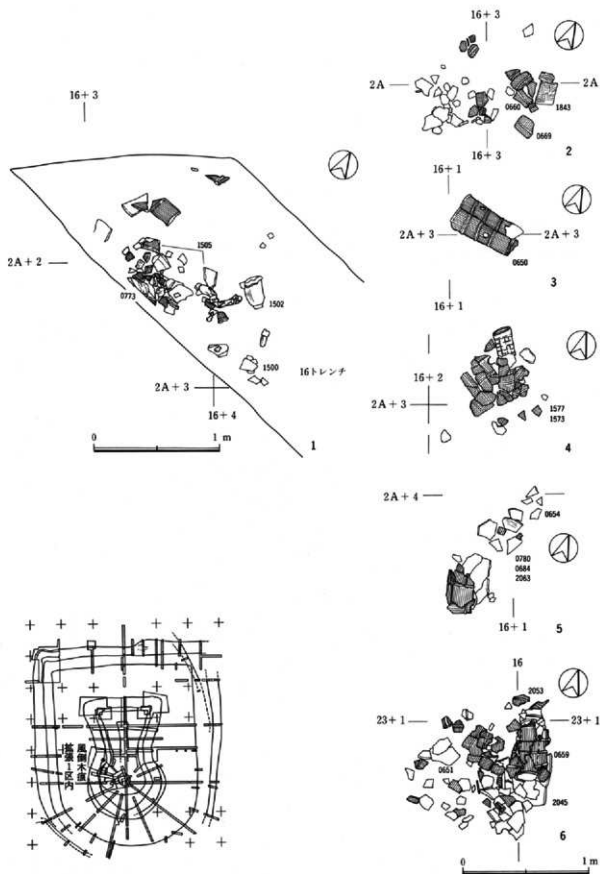
2. 確認された遺構

1. 表土 昭和42年調査時の埋め戻し土。
2. 褐色土
3. 明褐色土
- 3'. 暗褐色土
4. 黒色土
- 4'. 黒色土 やや明るさを増す。
5. 褐色土 ロームブロックを混入する。
6. 黒色土
7. 褐色土 ロームブロックを多量に混入する。
8. 暗褐色土
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土 黒色土・ロームブロックを混入する。
11. 暗褐色土 ロームブロックを多量に混入する。

- A. 黒色土
- B. ローム
- C. 褐色土 黒色土とロームがとけあった状態。
- D. 暗褐色土 黒色土とロームがとけあった状態。黒色みが強い。
- E. 黄褐色土 Cよりもロームに近い土色。ロームブロックを多く含む。
- F. ローム下の黄灰色粘性ローム



第80図 風倒木痕実測図 (1:150)



第81図 風倒木痕内埋出土状態図 (1:30)

第4章 出土遺物について

1. 埴輪

本項には円筒埴輪1155点、形象埴輪952点に通番を付して掲載した。円筒埴輪は普通円筒、朝顔形円筒をあわせ第7表のような調査区別に提示した。形象埴輪は、器種別に集成、家形埴輪、器財埴輪、人物埴輪、動物埴輪、器種不明の埴輪の順に提示、その中で出土調査区の部位にそって掲載につとめた。これらの資料の中には同一個体をなす複数の破片に独立して番号を付した資料もあり、墳丘上に樹立された埴輪個体数とは直接連動していない。

円筒埴輪は器形を実測し、器面の調整については拓本により表現した。形象埴輪のうち家形埴輪(1156)、盾形埴輪(1289)、人物埴輪(1449・1450・1458・1462・1463・1474・1515・1530・1643・1710・1711・1713)、馬形埴輪(1733・1745)の16体は外面の形状意匠について写真実測により素図を作成、これを基に細部の修正、補足をおこない実測図を完成させている。

なお、出土埴輪の量は、第Ⅰ～Ⅲ次調査出土分で事業団が整理作業を開始する以前に復元作業が終了、群馬県立歴史博物館で展示されていた8体の形象埴輪と2点の円筒埴輪を除き収納箱(63×39×19cm)100箱分、史跡整備時が収納箱(62×42×15cm)150箱分であった。

(1) 円筒埴輪

円筒埴輪は、普通円筒埴輪1115点、朝顔形埴輪40(可能性のある資料も含む)点を資料化掲載した。

全体形状を知り得る資料は、0195・0196・0197・0650・0651・0652・0653・0657・0658・0659のわずか10例であった。これは埴輪の出土状態の項でも述べたが、調査がトレンチ調査を主体とし部分的であったこと、墳丘に葦石が施されず封土の移動が激しかったことなどがその要因としてあったようである。

全体形状 形状は2者に大別できる。ひとつは0195に代表されるよう基底部から胴部にいたるまでの直径がほとんど変化することなくずんどうを呈し、口縁部のみ短く外反するものでこれが主体的である。一方、0066や0095は、上半部のみが残存であり、なおかつ復元作業時の影響も若干受けているようであるが口縁部の先端がほとんど外反しないで直線的に立ち上がる形状をとっている。これらは客体的な存在である。

10本の完存する資料から知り得る各部位の法量は、器高61.9～81.9cm、口縁部径26.9～33.0cm、基台部径21.8～35.0cmである。0197は器高61.9cm、口縁部径27.4cm、基台部径23.4cmと小型品で、本古墳で唯一確認された4条突帯5段構成の事例である。0195・0196・0650・0651・0652・0653・0658は5条突帯の事例である。0657・0659の2例が6条突帯である。

各部位の特徴 **口縁部** 口縁部の直径を計測すること、あるいは復元値の推定が可能であった資料は41点を数え、0199の直径26.8cmから0654・0655の直径35.0cmの数値が得られた。直径30.0cmから33.0cmまでに23点が含まれるものであった。

口縁部の立ち上がりを計測できた資料は65点であった。長さは6.8cmから16.4cmとばらつきが大きい。51点が8cmから13cm代であった。総じて全体形状の中で占める割合は短く、上半が外反する形状であるが、0666や0667のように15.0cmを超える長さの事例も存在する。

口縁部は、先端の形状により、単純に外反して立ち上がる形状の口縁(I類)と、先端の外面に粘土帯を貼り付け肥厚させる口縁(II類)の2種に大別される。

I類は0196や0197に代表される。口縁部の先端には平坦面が形成される事例が大半である。先端の断面形状がM字状を呈する資料の中には朝顔形埴輪の口縁部破片が含まれている可能性が大きい。これらと

異なるものに0056や0755のように先端の器内が薄くなり断面形が尖りぎみになるものが少量存在する。

先端は表裏面ともヨコナダが施されることが通例であるが、その調整具合の相違が器形に微妙な差異を与えているが、ここでは細分することなく一括して扱った。

II類の貼付口縁はAからEの5つの要素によりそれぞれ細分が可能である。成形はいずれもI類同様の単純な口縁部を成形、外面は先端にいたるまでハケ調整を施したのち粘土帯を貼付している。

粘土帯の貼付は広い(A1)、やや広い(A2)、狭い(A3)の3種類に分類ができる。A1は0236・0699、A2は0227・0500、A3は0201・0843がその代表例である。A1は下端に大きな段を残すほどの厚みを有している。A3は肥厚部分の断面が突帯状を呈している。

貼付された粘土帯の下端の状況は、段をなすほどの厚みを有するもの(B1)、段を有さず下端にヨコナダを施すもの(B2)、段を有さないがB2と異なり下端にヨコナダを施さず、肥厚部分の下端に粘土帯の下端が波状に残存しているもの(B3)に分類できる。さらに下端の調整はB2と同様であるが、貼付部分中位がくぼむもの(B4)、下端の調整はB3と同様であるが貼付部中位がくぼむもの(B5)に細分できる。

口縁部先端の形状は、特段の変化なく立ち上がる(C1)、内面に弱い稜をなす(C2)、内面に稜をなしこれより上位の器面は内彎する(C3)に3分類できる。C3は先端に強いヨコナダを施した際に生じるものである。

口縁部先端の面の形状については、平坦なもの(D1)、凹面状をなすもの(D2)、先端が主頭状をなすもの(D3)に細分できる。

貼付部分の器面はその調整に相違がみられる。ヨコハケを施すもの(E1)、ナダを施すもの(E2)、ヨコハケ後ナダを施すがハケメを消しきれずその一部が残存するもの(E3)に細分される。

以上の要素をそなえた資料の組合せは90種類にな

り、AからEの関連性については一定の組合せが見出し難い状況にあった。

基台部 基台部の直径を確認しえた資料は63点あり、0481の径21.6cmから、0687の径35.0cmと幅広い範囲の数値が求められた。直径26.0cm前後にそのピークが認められる。0489や0689など直径20.0cm未満の事例は形象基台部の破片が混入している可能性がある。

基底部の器内の厚さは2種に大別される。ひとつは胴部の厚さと変わらないものである。計測値とすると1から2.0cmである。これらの資料の中には自重のためか基底部最下端が外側にハの字状に屈曲している事例が多い。0652・0681などがその代表である。これに対し、0459や0568などは基底が肥厚している。

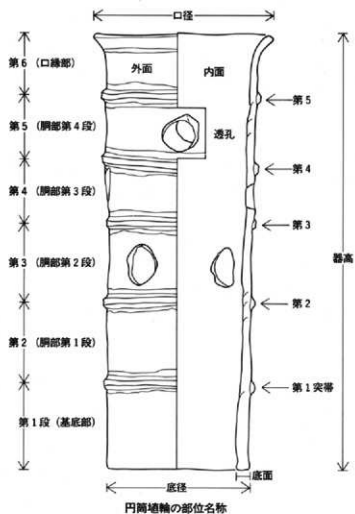
基底部底面には作業台の痕跡と考えられる一定方向の木目圧痕や棒状の植物圧痕が認められる事例の他、比較的丁寧にナダが施されている事例も存在する。

突帯 突帯の貼付は全体形状の項で記したように4条、5条、6条の貼付が確認されている。

貼付の状況は粗雑である。0199や0652を提示するまでもなく円筒本体に対して水平を欠くものや、波打つ事例が多数存在する。貼付後のヨコナダも粗雑で突帯と本体器面の間に隙間が生じている例も散見される。

突帯の断面形状は、台形を呈するもの(台)、中央がくぼむM字形を呈するもの(M)、三角形を呈するもの(三)の3者がみられる。前2者は上側の稜が下側よりも高いもの(1)、上下の稜の高さが均衡するもの(2)、下側の稜が上側よりも高いもの(3)に細分でき、分類は台1、台2、台3、M1、M2、M3、三の7細分が可能である。上端の幅、下端の幅、その両者の割合などに更に細かな相違がみられる。その中で断面台形やM字形の資料が主体を占め、断面三角形の資料は少数である。

突帯の発達度は総じて弱いが、0329や1053のように発達した形状の資料もみられる。0205・0402のように突帯の形状が一個体内の胴部上位貼付の突帯と下位貼付の突帯で異なる事例も認められ、突帯貼付の作業に細かな配慮が必要とされていなかったこと



円筒埴輪の部位名称

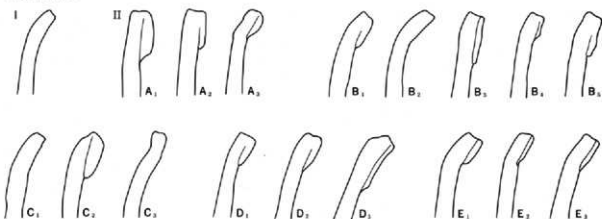
口縁部の形状

- I 単口縁……外反して立ち上がる
II 貼付口縁……外反して立ち上がる
外面は粘土帯を貼付肥厚する
- A 貼付部肥厚の幅
A₁ 幅広
A₂ やや幅広～普通
A₃ 狭小
- B 貼付部先端の形状 (外面)
B₁ 肥厚著しく段をなす
B₂ 肥厚薄く段はない。下端をナゲている
B₃ B₂と同様、ただし貼付部中位が凹む
B₄ B₃と同様、ただし貼付部中位が凹む
- C 貼付部先端の形状 (内面)
C₁ 弧状に立ち上がる
C₂ 内面に横
C₃ 内面強いココナデによる凹面
- D 貼付部先端の形状 (先端面)
D₁ 先端平坦
D₂ 先端凹面
D₃ 先端主頭状
- E 貼付部外面の表面調整
E₁ ココハクを施す
E₂ ナゲを施す
E₃ ココハク後ナゲを施すがハケメを残す

突帯の形状

- 台 断面台形を呈する
台₁ 上縁が突出
台₂ 上下縁が平均的
台₃ 下縁が突出
- M 断面M字形を呈する
M₁ 上縁が突出
M₂ 上下縁が平均的
M₃ 下縁が突出
- 三 断面三角形

口縁部の形状



突帯の形状



第82図 円筒埴輪の部位模式図

第4章 出土遺物について

第4表 全体形状を確認可能な円筒埴輪一覧

番号	構成	器高	口縁部径	口縁部高	口縁分類	基底部径	基底部高
0195	5条6段	77.7	32.2	8.0	II	25.2	16.4
0196	5条6段?	78.7	33.0	8.9	I	29.2	14.4
0197	4条5段	61.9	27.4	12.6	I	23.4	6.8
0650	5条6段	69.7	28.5	9.6	II	22.7	14.0
0651	5条6段	68.7	31.5	10.3	II	35.0	9.9
0652	5条6段	73.2	26.9	12.7	I	24.6	12.5
0653	5条6段	63.5	27.1	11.8	II	21.8	4.8
0657	6条7段	81.9	31.0	9.5	II	21.4	11.0
0658	5条6段	73.0	30.9	8.7	I	26.5	10.9
0659	6条7段	74.7	28.4	8.7	II	28.7	11.6

第5表 円筒埴輪口縁部径一覧

口縁部径	数量	番号
26.6~27.0	2	0199 0652
27.1~27.5	3	0197 0653 0847
27.6~28.0	0	
28.1~28.5	5	0578 0650 0659 0844 0846
28.6~29.0	2	0101 0656
29.1~29.5	0	
29.6~30.0	1	0038
30.1~30.5	3	0039 0660 0662
30.6~31.0	9	0095 0657 0658 0661 0663 0666 0668 0845 1029
31.1~31.5	2	0397 0651
31.6~32.0	4	0040 0198 0664 0667
32.1~32.5	2	0195 0201
32.6~33.0	3	0096 0196 0843
33.1~33.5	0	
33.6~34.0	1	0665
34.1~34.5	0	
34.6~35.0	4	0102 0200 0654 0655

第6表 円筒埴輪基底部径一覧

基底部径	数量	番号
21.5以下 (形象か)	2	0489(20.8) 0689(19.1)
21.6~22.0	4	0043 0481 0487 0653
22.1~22.5	1	0928
22.6~23.0	5	0109 0221 0483 0650 0681
23.1~23.5	3	0114 0197 0686
23.6~24.0	3	0112 0679 0855
24.1~24.5	3	0217 0657 0685
24.6~25.0	5	0116 0215 0222 0486 0652
25.1~25.5	4	0041 0111 0195 0220
25.6~26.0	8	0002 0113 0115 0396 0482 0485 0688 1030
26.1~26.5	2	0214 0658
26.6~27.0	5	0213 0479 0480 0684 1069
27.1~27.5	2	0042 0216
27.6~28.0	2	0218 0403
28.1~28.5	2	0219 0404
28.6~29.0	2	0488 0659
29.1~29.5	2	0196 0651
29.6~30.0	3	0110 0678 0683
30.1~30.5	1	0484
31.1~31.6	2	0001 0003
31.6以上	4	0583(33.0) 0584(33.5) 0682(34.0) 0687(35.0)

がうかがえる。

0651は突帯のみが器面から剝落した状態で検出された資料である。製作工程と器面の乾燥との関係に第一の原因があるものと考えられるが、前・中期の埴輪に突帯のみが剝落している事例が多々知られることとの製作工程の関連性の有無について今後も注視したいと考える。

透孔 透孔は1段に2孔が対向する位置に配置されていた。全体形状の中における各段の配置は完形品が少ないため検討することは困難であった。その中で0195・0197・0652は胴部の各段に配されているのに対し、0650・0651は胴部第1段に無い事例、0659は胴部第2段・4段に無い事例、0653は胴部第3段に無い事例であり、全体

をみわたすと強い規格性は認められないと考えられる。また、0652や0659にみられるような上段の配置関係も、90度ずつ規則性を有して割り付けられるのではなく不規則に配置されたものが多数認められる。

透孔の形状は円形を志向するものの正円形の形状は少なく、縦長、あるいは横長に変形しているものが多数である。穿孔は右回りに器面を切開するものが多数で、その起点と終点に大きなずれが生じている事例も少量でない。工具で切り込まれた面はそのまま特段補整を加えていない。0652は胴部の他段が円形であるにもかかわらず、胴部第1段に半円形を呈する透孔が穿たれていた。半円形の透孔はこれと0155のみである。

器面調整 外面の調整は口縁部先端のヨコナデや突帯貼付後のヨコナデを除いてハケメ調整が主体である。そしてその大半はタテ方向のハケメである。調

第7表 古墳の部位名称と調査区

	墳丘部位	第I～III次調査	史跡整備	
墳丘	前方部中央(前面)	前方部北トレ	1-北トレ	
	前方部東北隅	前方部東北端	拡張3区、12トレ、13トレ	
	前方部東側	前方部東側トレ	3-東トレ、4-東トレ	
	くびれ部東側	鞍部東側トレ	拡張4区、5・11-東・17トレ	
	後円部東側	後円部東側トレ	22トレ、2-東トレ、7トレ	
	後円部南側(後方)	後円部南側トレ	20トレ、1-南トレ、10トレ	
	後円部西側	Bトレ、C-1区、C-2区、D区	6トレ、19トレ、2-西トレ	
	くびれ部西側	C-4区、C-5区、鞍部西側トレ	拡張1区、11-西・16・18・34トレ	
	前方部西側	前方部西側トレ、前方西側中段面	3-西トレ、4-西トレ	
	前方部西北隅	前方部西北端	拡張2区、14トレ、15トレ	
	前方部墳頂部	前方部中央トレ	1トレ、3トレ、4トレ	
	鞍部墳頂部	鞍部トレ、鞍部南側トレ	1トレ、5トレ、11トレ	
	後円部中央、後円部東側トレ、後円部西側トレ、後円部南側トレ、後円部北側トレ北、渡門北、石室上部、石室上部S、BトレV、BトレVI	後円部上段		
内堀	北	辺	Iトレ、XIIトレ、IXトレ、VIIトレ、6区	
	東	北	隅	Xトレ
外堀	東	辺	IIトレ、XIIIトレ、IIIトレ、Xトレ	
	南	東	辺	XIトレ
	南	西	辺	VIトレ、Vトレ
	西	方	IVトレ、VIIIトレ	
	北	西	隅	19・2-西・11-西・3-西トレ
				拡張5区、8・9トレ

整は一定の高さまでの成形をくり返ししながら断続的におこなわれたものと考えられるが、器面にはハケメの開始に伴う工具痕が残存していることはまれであり、その多くは突帯やその貼付に際して突帯の上下に施されるヨコナデと重複しているものと想定される。0887には上下のハケメの重なりがみられる。

ハケメ調整に使用された工具は多様であるが木目の密な木板を使用した事例が大半である。その中、0142や0197は木目の間隔の開く木板を使用したため2cmの幅の中に4・5本前後のハケメが残されるにすぎない。その間隔が大きく開くだけでなく器面に残された凹線も浅い状態である。一個体の調整に複数の工具が使用された事例も少なからず存在する。掲載資料の中では外面のハケメが2種類の工具による事例を36例確認した。0195は外面の基底部の上位

までは2cm幅に13本のハケメを施しているのに対し、それより上位の胴部、口縁部は2cm幅に5本の工具に変わっている。0215や0216も同様の事例であり、基底部製作後の工程の在り方や埴輪製作工人にとっての工具の帰属などを考える上で注意すべき点である。0905・1015は裏面のハケメが2種類認められたものである。内外面で異なる工具が使用されている事例は37例を確認した。

また、二次調整のヨコハケを施す事例も認められるが、このハケメは客体的な存在である。出土位置は墳丘全体におよんでおり、特定の地点に樹立されていたとは考え難い状況である。胴部の2段に調整が加えられた事例が存在するものの、完形品の中にヨコハケ器面調整をおこなっている事例が皆無であるため、全体の中のどの部位にヨコハケが施された

かについては確認できない。0241・0662は口縁部に施された事例であるがこれらは積極的な調整の結果とは考え難いものである。0388は基底部に認められる唯一の例である。

これらの調整はB種ヨコハケのような明瞭な工具の静止痕を器面上に残すものではない。0206のように胴部の一段全体におよぼす胴部中央にのみ施される例が大半で精美な例は少数である。調整は連続的で、突帯貼付後のヨコナデとの重複が確認できる資料はほとんどなく、正確な意味での「二次調整」であることは確認困難な事例が多い。

ナメハケが認められる事例として0283・0763・1050がある。いずれも胴部破片である。いずれもクテハケ後の器面に突帯が貼付される以前の調整である。

0834は基底部から胴部第1段にいたる破片である。内外面ともナデ調整が施されている。0375などともにきわめて限られた事例である。

口縁部外面の調整は、口縁部形状の分類の際記したとおりである。

内面の調整はハケメと指頭によるナデ調整である。製作の進行に則して、その種類や角度が変化している。ハケメを施した上にナデを重ねているが胴部内面には部分的に粘土紐の接合痕が消しきれずに残存している面が多くみられる。

胎土・焼成・色調 胎土については形象埴輪も含めて記述しておく。胎土中には結晶片岩、チャート、長石、石英、輝石、角閃石、雲母、軽石、赤色土粒の混入が顕著である。また、海綿骨針化石の混入を確認することが可能な資料もある。砂粒の混入状況は径1～5mmの小礫を多量に含む(A)、小礫、細砂を含む(B)、礫の混入は少量(C)の3段階に分けられ、大半がBの状況であった。結晶片岩は3～5mmの礫が多数含まれている。10mm前後の礫も10cm²に1・2個存在している。器面調整の為か外面上に表れることは少ないが内面、断面における確認は容易である。形象埴輪の外面での確認は円筒埴輪よりは稀少である。また器面上の観察が容易な夾雑物に輝石、角閃石といった黒色鉱物粒がある。雲母は白色

系の鉱物片が認められ、資料によりその混入の度合が大きく異なっている。0727や0729はその混入が顕著な事例である。これらの雲母を含む個体は胎土全体が細かく、色調も橙色の度合いが高いものである。

焼成は全体的に良好であった。その中、少数例ではあるが0380や0973のように還元焙焼成のようになり、灰色みをおび須恵質となった個体が認められる。これらは0396に代表されるように大きく歪み、変形をきたしているものも1、2例ではない。高温・高熱を受けたためか発砲状態を呈している。これらの事例の存在からは密窯焼成に一部不安定な面があったこと。また、需要との関係からか、円筒埴輪の中には一部に不完全な部分のある製品も成果品として古墳に樹立するための供給ルートによって流通していたことがうかがえる。これに対し、形象埴輪には不完全な焼成品は含まれていない。

色調は明褐色をおびるものと明赤褐色みあるいは赤褐色をおびるものに大別される。これは形象埴輪にも同様の傾向が認められ人物埴輪所持者の1711と1713の相違に代表される。1713の色調は明赤褐色では焼成が良好で硬調であるのに対し、1711は明褐色で焼成は不良と言いが、1713と比較すると硬調さは薄らいている。胎土中の夾雑物とともに結晶片岩をはじめ大きな相違は認められないことから、粘土本体あるいは焼成の相違が色調に影響をおよぼしているのであろうか。

また、器面に黒色の付着物が認められるものが多数ある。製作後の塗布とは考え難いものである。明赤褐色の色調をおびる事例に顕著に認められる。

線刻一へう記号 円筒埴輪の器面にへう状工具により線刻の施された事例は99例を掲載した。そのうち0184・0186は形象埴輪の破片である可能性も考えられる。破片資料が多く、全体の構成を把握することができない資料も多数あった。

線刻の施される位置は口縁部の内外面および、胴部外面が大半である。破片資料が多く、胴部における位置はその傾向を把握しがたいが下半部に施された例は少ないものと考えられる。基底部に施された

事例はみられなかった。

線刻には沈線状の太い線を施すものと、形象埴輪の施文に多用される細線の2種類がある。

構成は直線からなる×印、斜線、横線が施された例が大半である。×印は0079・0197・0814・0883の4例で胴部外面に刻まれている。

斜線では0591が口縁部内面に3条を、0755・0808も口縁部内面に沈線状の太線で3条施した事例である。2条の事例は口縁部内面に施した0231・0268をはじめ6例が確認される。1条の例は0007・0008のように口縁部内面に縦方向に施した事例や0054や0056のように横方向に近い傾斜の事例がみられる。

弧線からなるものは、0103・0183・0186の胴部外面に弧を重ねるものがある。0201や0355も同様の構成になる可能性がある。0103は前上部東側中段出土の胴部2段の破片である。上下両段とも器面には二次調整のヨコハケが施されている。上段には円形の透孔の周位に3重の弧線がめぐり、残存部右端にはこれらと対向する弧線が1条認められる。下段にも上段のそれから右側に位置をずらして3重の弧線が刻まれている。0355もヨコハケの上に太線で線刻された事例である。0433も太描きの弧線の一部が残存している破片である。

口縁部破片の0166・0752は外面に渦巻状のヘラ描きがみられる。0472は朝顔形埴輪の胴部破片であるが外面に渦巻状の線刻がある。

これらの他に、0134は口縁部外面に波状の一部が残存する。0812・0815にも同様の刻みがみられる。0184は頂部を上位に向けた2重の弧線があり、0811にも類似するヘラ描きが残存する。0952の胴部外面には縦位の波状文様が描かれている。

補修復 資料の観察をしていくと円筒埴輪の製作の過程において器面に加えられた補修の痕跡が多数確認できる。掲載資料の中には20例があり、器面調整後の作業が大半である。基底部に縦方向に入ったひび割れを外面から補修した事例が8例あった。その1つは、ヘラ状工具を用いて、ひび割れに対してナナメヨコ方向の角度で刻みを入れているもので

0689に代表される。0222・0827などが同一例である。もう1つは、ひび割れた部分に棒状工具による補修を加えたもので、0380をはじめ0479・0855・0917・1026で確認できた。

ひび割れ部分に粘土塊を貼付し粗雑にナデている例は5例みられる。0097は胴部に施された事例、0111は基底部にみられる事例、0692・0724・0741は口縁部先端の事例である。0724は粘土塊の上面を粗雑にナデている。0741は内外面に粘土の貼付が確認できた。同様の補修痕は形象埴輪の基底部外面でも確認されており、男子人物(挂甲を装着する-1515)や獣をかつぐ男子人物(1530)でも明瞭に残存している。ひびは粘土の乾燥の際生じるものであろう。

また、補修痕とは断定できないが通常の製作工程ではみられない器面上の工具痕が幾つかみられる。0205は胴部外面から刺突がなされ横位に4箇所焼成前の小孔が並んでいる。0632は突帯をはきんで縦位に2孔が穿たれている。0922も底面近くに刺突による穿孔がなされていた。

製作 基底部の成形は粘土板を製作し、これを筒状に丸め基部とすることから開始される。基部の法量については大きなばらつきがみられるものの、今回観察できた基部は0652を除き、一枚の粘土板からなっている。粘土板の高さは10cm前後で低位置突帯の事例を除くと基底部の高さとはほぼ同高である。

基部粘土板の製作は板状の工作台上で行われたのであろうか完成した円筒埴輪の基底部最下端には横方向の木目状の圧痕が残存する事例がみられる。粘土板を筒状に丸める際の相違で木目状の圧痕は基底部外面にみられる個体と内面にみられる個体が存在する。前者は0650に、後者は0214に代表される。

また、筒状に粘土板を重ねる場合も、基底部底面を下方からみて右を上成形するもの、左を上成形するものの両者が存在するが、その相違が器形や器面調整などの要素と連関するような傾向は見出せなかった。

その後の器形の成・整形は、基部を基礎に一定の高さまでの粘土紐の積み上げと器面調整がくり返さ

れているが、全体形状が大形品である為、数回の製作小工程を経ていることが器形に残された歪みや内外面の調整の変化によって確認できる。0652は、器高73.2cm、口径26.9cm、基底部径24.6cmの法量を有す5条突帯6段構成の個体である。本資料は、高さ10.7cmの粘土板2枚を基部とし7回の作業単位を経て口縁部までが製作されたことが内面の観察からみられる。作業単位は、第1突帯、胴部第1段中位、第2突帯、胴部第2段中位、第4突帯、第5突帯のそれぞれの内面にあたる。特に、上位3箇所は明瞭な接合痕を残す。また、第5突帯内面は器形に大きな歪みが生じている。基底部下端は自重の為かハの字状に外反している。

内面の調整は胴部第1段から4段目までタテ方向のナアが施され、口縁部内面のみがナメ方向のハケメ調整である。

また、0659の胴部は中位に最小径をもち、鼓を思わせる形状を呈するが、粘土紐の接合、調整の方向を観察する限り倒立技法は採用されていない。

続いて0652を例にとると、各部位の法量は基底部高12.6cm、胴部第1段の長さ12.1cm、胴部第2段12.1cm、胴部第3段10.4cm、胴部第4段12.8cm、口縁部高12.3cmとなり、5条の突帯はほぼ等間隔に割り付けられて貼付されていることが理解される。他の資料を検討しても、基底部高と口縁部高の割合を除いた胴部の割り付けは、1割前後の相違はあるもののほぼ均等に製作する意図をみることが出来る。

なお最下段の第1突帯は総じて低い位置に貼りめぐらされている。掲載資料の中で第1突帯が残存し、基底部の高さが計測可能な資料は171例であった。第1突帯の貼付位置を1cm単位で集計すると、1cm13例、2cm20例、3cm9例、4cm14例、5cm5例、6cm8例、7cm9例、8cm14例、9cm13例、10cm20例、11cm15例、12cm11例、13cm11例、14cm5例、15cm以上4例となった。高さ1・2cmは突帯が基底に接する、あるいはわずかに間隔を保った状態である。基底面から5cm以内に第1突帯の付く例は61例で全体のほぼ3分の1となる。これらが森田久男、鈴木勝

^{註1}
両氏の定義に従った場合の低位置突帯の範囲に入るものである。10cm以内とすると125例で3分の2を越えることになる。高位置に貼付された例では0088が最高位の16.2cmであるが形象埴輪の基台部である可能性がある。0215の15.1cm、0388の15.3cmは円筒埴輪と考えられる。

以上のような基底部、第1突帯と口縁部の形状との関係であるが、完形品10本の中で貼付口縁を有する6本のうち、0653の第1突帯の位置が4.8cmである他は10cm以上であり、かならずしも貼付口縁の個体すなわち低位置突帯というような関連性は見出し難い。

朝顔形円筒埴輪 全体形状を把握できた資料は皆無であった。後部埴頂に原位置のあったと考えられる1122は、先端を欠損するが口縁部から肩部をへて胴部上位2段までを残存するものである。残存高は73.6cm、胴部径は28.5cmに復元できた。口縁部は頸部から斜め上方に向けて立ち上がり、欠損する先端はやや外反すると考えられる。肩部はあまり強く張り出さず、径は胴部と変わらない形状であった。胴部各段に配された透孔は円形である。外面の調整は一次調整のタテハケである。頸部までの高さが他の普通円筒埴輪と同規模であったと仮定すると基底部から肩部までは5条の突帯貼付による6段構成であることが想定され、全高108.0cm（頸部高81.0cm）が推定される。

先に述べたように、1122の胴径が28.5cmと他の普通円筒埴輪と比較しても同様の法量であることから、朝顔形を呈する資料の基底部から胴部残存資料の場合、普通円筒との識別が困難であり、必然的に資料の提示が口縁部から肩部までの部位に限定されたことになる。

口縁部の形状は0470や0836から知ることが出来る。1122や0470が斜上方に外反するものに対し、0836は外反の度合が弱く、全体形状は受け口状を呈するものである。先端の形状も多様で単純口縁の事例と貼付口縁の2者があり、細部はさらに異なっている。突帯は0470・0645・0836のように中位よりやや下位

寄りに1条貼付されている。頸部には突帯がめぐっている。肩部は、1122同様あまり張り出すことはない。

調整は、口縁部の外面がタテからナナメタテ方向に施されている。肩部は、ナナメハケとナナメタテハケにヨコハケを重ねる事例がある。

各調査区出土の円筒埴輪

以下、各調査区から出土した資料を順次掲載する。整理作業は全点の接合・復元作業をした後、資料化の選定に際しては口縁部・胴部・基底部の各部位ごとに形状・器面の調整・突帯・透孔などの特徴を抽出、総覧観音山古墳の円筒埴輪の最大の特徴であるバラエティー豊かな様相を提示することを第一に考えた。

前方部中央（前面）出土の円筒埴輪（0001～0037）

37点を掲載した。形状を復元できる資料は少なくとも0001が胴部第3段までの1/3が残存している。口縁部は10点を選択、うち0005・0012がI類の他はII類である。II類では貼付幅の狭いA3として0004・0008・0010・0011がみられる。0009はA1、B1で貼付部分に縦方向の線刻が施されている。0007も内面に線刻がみられる。胴部外面の調整は0013・0020・0033にヨコハケが施される他はタテハケである。0033は基底部から胴部第2段までの破片である。胴部2段に施されたヨコハケは回転を伴わない粗雑な調整である。突帯の形状は総じて幅の狭い事例が多い。0028は断面三角形である。基底部は0032・0034・0035が第1突帯を基底面間近にめぐらせている。0036・0037は朝顔形埴輪で、0036は肩部の彎曲を把握できる資料である。

前方部東北隅出土の円筒埴輪（0038～0100）

72点を掲載した。0095から0100は史跡整備時にQ-23区内の周掘部分で検出した土壌中から出土した資料である。形状を復元想定できる資料として0038から0043があるがいずれも部分にとどまっている。口縁部は17点を選定した。0038・0040はII類でA1、B1、E1が共通する形状である。0050もA1の範疇に含まれる資料である。これに対し0044か

ら0048はA3である。0045は先端が大きくくぼむD2の典型的な例である。I類は先端に面をもつ事例が多い中0056は内面に弱い稜をなし先端が細くなっている。0048の外面調整は2cm幅に5本という粗いハケメである。0051は朝顔形の可能性もある。胴部破片では0068の一部にヨコハケが0065にナナメヨコハケがみられる。0074は二次調整のヨコハケを施している。他は外面の調整がタテハケである。0073は表裏でハケメの工具が異なっている。突帯は狭小で、発達度の弱い事例が主体である。0072は特に低平である。0093は突帯に工具があたり形状を乱している。基底部は第1突帯が基底面間近にめぐる事例が多い。0091は底面の器内が肥厚している。0088は形象の基台部の可能性も考えられるか。0040・0043・0054・0056・0077・0079には線刻が施されている。0082は外面の一部に粘土をナデつけている面が認められる。

土壌から出土した0095から0100の中で0095は基底部を欠損するが胴部から口縁部にかけて残存している資料である。口縁部内面に線刻を有する。0095・0100は一部還元状態を呈する大型破片である。

前方部東側出土の円筒埴輪（0101～0194）

193点を掲載した。0194は朝顔形埴輪である。また、0114・0192は形象埴輪基台部の可能性がある。

口縁部径を復元できた資料は0101・0102、胴部中位が0103から0108、基底部は0109から0116の各個体である。口縁部資料はいずれもII類であるが口縁部は16.4cm、13.7cmと高さを有している。破片資料は0118から0129がII類、0130から0140はI類であった。0017に代表されるよう貼付幅の狭いA3が顕著である。0142から0191は胴部破片である。0146・0147・0153・0156・0160にはヨコハケが施されている。0146は胴部2段に二次調整のヨコハケを施す。口縁部のタテハケは胴部と異なる工具によるタテハケがみられる。ハケメの工具が異なる例は0158・0161・0164にもみられる。0142は粗いハケメである。基台部破片には第1段が低位置にめぐる事例も顕著であった。突帯は総じて発達が弱い。0145や0150は丁寧に

第4章 出土遺物について

貼付するが狭小、低平である。0155の胴部2段目の透孔は半円形に近い形状である。線刻の付された資料は0103・0107・0121・0134・0148・0158・0166・0167・0183～0188である。0133は線刻の項でも記述したとおり透孔の周辺に弧線をめぐらす例である。0106・0111には器面の補修痕が認められる。

くびれ部東側出土の円筒埴輪 (0195～0395)

史跡整備時に平面発掘が実施された拡張4区から多量の資料が出土した。0195～0197の全体形状を把握することが可能な3本をはじめ200点を掲載した。このうち0391から0395の5点は朝顔形埴輪である。

0195から0221までの資料は形状についての検討が可能である。0195と0196はくびれ部中段に近接して樹立されていた資料であるが同じ5条突帯であっても口縁部の形状が異なっている。また、0197も前2点と同一の埴輪列を形成する一本と考えられるが器高61.9cmの4条突帯を貼付する形状である。他の口縁部や基底部の形状を比較しても、口縁部貼付の有無、第1突帯の高さ等で規格性を見出すことは困難であり、埴丘全体に認められる多様性は各埴丘部位ごとに共通性の強い個体が樹立された結果によるものではなく、各部位ごとの多様性の集積によるものであることが理解できる。口縁部のII類は貼付幅の狭いA3が多数で、A2と分類したものの幅の狭いものが顕著であった。0241は貼付部分が断面かまぼこ状を呈している。0258はB4、貼付部分の中心がナデによりくぼむ形状である。口縁部I類は0265や0271など先端が強く屈曲して外反する事例である。突帯の形状は、0295や0299・0344のように他の調査区と同様、発達度の弱い事例が多い。その中で0307・0310・0322・0329などは突帯が発達している。また、0203や0206の観察からは、器面調整にヨコハケが施される資料の突帯が特別に発達しているというような傾向は認められなかった。0284の突帯には布目痕がみられる。器面の調整では0203・0206・0325～0328・0355・0388にヨコハケが施されている。ナメハケのみられる0297は朝顔形埴輪の破片か。0283は突帯貼付前にナメヨコハケが施されてい

る。0350も類似例である。0317は工具がケテと、ナメメタテ方向に動く。0375は器面にナデ調整を施しており、本古墳出土の稀少事例である。線刻は0195・0197・0198・0201・0204・0207・0268・0284・0354～0359・0361・0362・0391で認められた。器面の補修痕は、0222・0380に認められる。0205は内面に外側から工具により加えられた刺突痕が4箇所認められる。外面はハケメによりこの痕跡を消している。

後円部東側出土の円筒埴輪 (0396～0475)

掲載点数は79点、うち、0470から0475の6点は朝顔形埴輪である。0401は小径であり形象埴輪の基台部の可能性がある。全体形状を把握できた資料は0396の1点だけであった。6条突帯の構成で口縁部が13.7cmと長い形状が特徴的であるが、大きく歪んでいる。色調が灰色みをおび、還元状態を示していることから焼成時に変形したものと考えられる。口縁部はII類が多数出土しており、その中から資料化の選択をおこなった。くびれ部東側出土と同様、貼付幅の狭いA3が主体であるが多様である。0414はわずかに肥厚が認められるがその幅は広い。器面の調整では0433でナメ方向のハケメが認められる。線刻は0419・0433で認められる。0470は朝顔形埴輪の口縁部大型破片と肩部破片を図上で合わせた資料である。口縁部は斜上方に外反して立ち上がり、先端は単純な成形である。

後円部南側(後方)出土の円筒埴輪 (0476～0577)

101点を掲載した。原位置出土の資料は皆無である。0573から0577の5点は朝顔形埴輪である。口縁部の形状を知ることのできる資料の出土はなかった。基底部は直径が30.0cmを越える資料はみられない。0489は直径20.8cmで形象基台部可能性もある。その0489と0486には補修痕がみられる。口縁部はII類を多く掲載した。A3が主体を占める状況は他と同様であるが0494・0501はA1の分類に入る事例である。胴部の突帯は0521・0523に代表されるよう発達が弱い事例が多く、少量、0534のような発達した事例が含まれている。0539では突帯の器面上に布目

痕が認められる。0549は突帯上に粘土塊が付着している。粗雑な成形、補修の痕跡の両者の理由が考えられる。器面の調整は0518・0519・0542・0545にヨコハケが施されている。0541は2cm幅に5本のハケメの工具が使用されている。0538は礫石をはじめとした鉱物の混入状況が他の資料と異なっており、結晶片岩の混入も認められない。0574は朝顔形埴輪の口縁部下半の小破片である。上端の割れ口には粘土紐の接合を強固にするためにヘラ状工具で切り込みを入れた痕跡が認められる。肩部には0576・0577にみられるようヨコ方向のハケメが施されている。

後円部西側出土の円筒埴輪 (0578~0649)

71点を掲載した。原位置出土の資料は皆無である。0645から0649の5点は朝顔形埴輪である。0578は口径28.2cmに復元された上位破片である。0584は口縁部先端を欠損する。残高は78.8cmで基底部径33.5cmと大径である。11.0~14.0cmの間隔で6条の突帯を貼付する。0583も基底部径33.0cmと大径に復元できた。口縁部資料では0585がII類A1である。器面の調整では外面にヨコハケを施す例が検出されていない。0606は胴部2段の一部に二次的なタテハケが施されている。ナメハケを施す0605は朝顔形埴輪か。ハケメは0596や0600のように2cm幅に5・6本の粗い工具や0588や0637のように15・16本と細い工具のものがある。0606は表裏でハケメの工具が異なっている。0616は外面に線刻が施されている。0632は突帯を挟んで焼成前の小孔が2孔穿たれている。0645は朝顔形埴輪の口縁部である。口径は39.0cmを測る。外反の度合は弱く、先端は貼付口縁となっている。

くびれ部西側出土の円筒埴輪 (0650~0842)

192点を掲載した。前上部、鞍部、後円部の各墳頂部から転落したものと考えられる。0836から0842は朝顔形埴輪である。原位置出土の資料は皆無であることから第3章3(4)で報告した風倒木痕出土の個体もあわせて報告した。

0650~0653・0657~0659の7点は全体形状の把握できる資料である。0657と0659が6条突帯である他は5条突帯である。器高は0657が81.9cmと他と比較

して口縁部の高さの分だけ大型であるのに対して、同じ6条突帯でありながら0659は器高74.7cmで他と同等である。口径、底径は0651が他より一回り大きく、口径31.5cm、底径35.0cmである。口縁部の形状は他と大きく隔たる特徴はみられないがI類では0653や0656のように先端がほとんど立ち上がらない事例が認められる。0729は先端が受口状に内彎している。II類は貼付幅の狭いA3が大径である。その中で0699はA1、0655・0657・0662・0696・0712はA2に分類される事例である。0664は貼付部分の下端が波状を呈しており、B3の特徴を良く表わした破片である。胴部径では0669や0676・0689のように小径の事例も含めて掲載したが形象埴輪の基台部との識別を判断することが困難であった事例である。0681は基底部径23.0を測り、突帯の間隔も15cm強と全体に細みの形状である。外面の調整は大半がタテハケである。ヨコハケが施された事例は0763・0770・0823である。0763はタテハケと異なる工具でナメヨコ方向に施されている。0763・0804が外面に2種類の工具を使用してハケメが施されている。0834はナデ調整が施されている。0681の胴部器面、第3突帯の直下には工具の当たった痕跡が認められる。同様の状況は0670・0671・0688・0810でもみられた。線刻の施されている事例は0665・0684・0701・0711・0751~0755・0758・0767・0775・0786・0811~0821と多数確認できた。製作時に生じたひび割れ等を補修した痕跡は0650・0724・0741・0833で認められる。0650は胴部第4段の透孔に粘土を貼付している。0724・0741は口縁部の補修である。0836は朝顔形埴輪の口縁部破片である。斜め上方に立ち上がる先端はあまり外反しない。貼付口縁である。

前上部西側出土の円筒埴輪 (0843~0925)

82点を掲載した。前上部から鞍部の墳頂部から転落したものと考えられる。0913・0925の2点は朝顔形埴輪であろう。II類貼付口縁の事例を主体にバラエティー豊富な口縁部形状を呈した個体が出土する状況は他の調査区と同様である。II類の貼付幅はA3が多く、0842・0861がやや広いA2である。I類

では直線的に立ち上がる0867が認められる。突帯の発達も総じて弱い。その中で0878・0879は良く発達した部類である。外面の調整でヨコハケを施した事例は認められなかった。ハケメの状況も多様であり、0895・0905は表裏で異なる工具が使用されている。線刻は、0843・0849・0883・0886・0898に認められる。器面の補修痕は、0855・0917の基底部にみられる。0922は小孔が穿たれている。

前方部西北隅出土の円筒埴輪 (0926~0991)

65点を掲載した。前方部埴輪頂部から転落したものと考えられる。0991は朝顔形埴輪である。形状を把握できる資料の復元は少量である。口縁部は小破片で、II類の貼付口縁はA3が多数である。0935・0938・0942は、貼付部分の中心に強いナデが施されてくぼんでおり、B5として分類した。基底部の破片では第1突帯が低位置に貼付された事例が多数みられた。外面の調整でヨコハケが施されているのは0954だけである。0969は表裏面あわせて3種類の工具が使用されている。線刻は0955・0956・0975~0977の5点にみられた。0956は縦方向に波状の線刻が施されている。0967の突帯には布目の痕跡がみられる。

前方部埴輪頂部出土の円筒埴輪 (0992~1028)

106点を掲載した。前方部埴輪頂部を原位置とすると考えられるが、いずれも原状を保ってはいない。形状を把握するに足る資料としては0922・0923の胴部資料があるが他は破片資料である。口縁部II類のうち0997はA3類であるが貼付部分は厚く肥厚している。I類1003のハケメ調整は表裏で使用工具が異なる。1026は基底部に補修痕が認められる。

鞍部埴輪頂部出土の円筒埴輪 (1029~1066)

37点を掲載した。鞍部埴輪頂部を原位置としたと考えられるが、いずれもその原状を保つものではなかった。口縁部II類の資料中の1036はA1に、1029・1034はA2に分類される。I類の1040・1041は立ち上がりが高く先端は強く外反する形状である。胴部破片の1050は、外面調整においてタテハケ後ナメヨコハケ、その後、突帯貼付の手順がとられている。1061はヨコハケが施される。1042は2種類の工具が

使用されている。1053は突帯の発達が良好である。1036・1041・1043に線刻が認められる。1065は朝顔形埴輪の口縁部大型破片である。先端は斜め上方に立ち上がり、粘土帯の貼付はみられない。

後円部埴輪頂部~上段出土の円筒埴輪 (1067~1122)

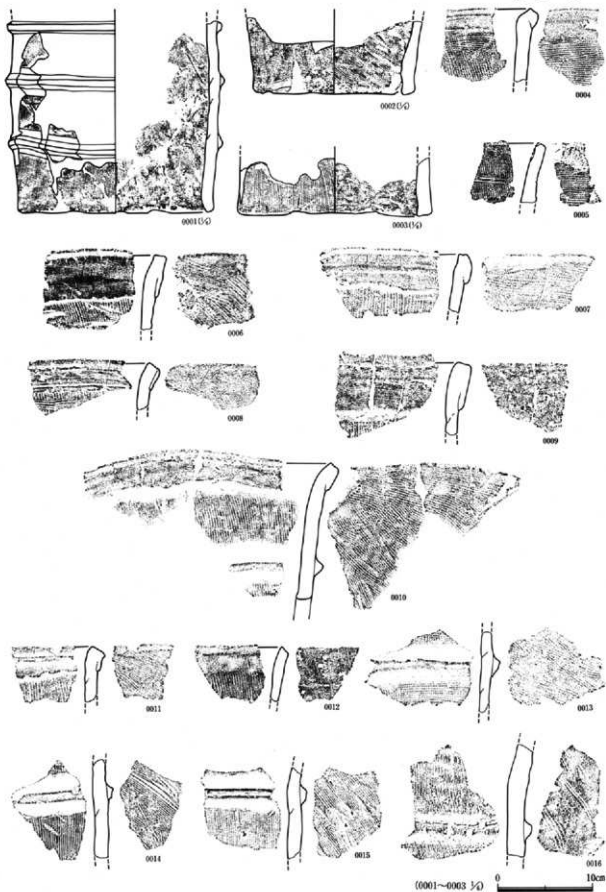
55点を掲載した。後円部埴輪頂部を原位置とすると考えられるが、いずれもその原状を維持するものではなかった。1067から1070は胴部、基底部の外形を把握できた資料である。口縁部資料は小破片である。1072はII類A1に、1073・1074・1075・1078はA2に分類される。胴部破片では1093・1100の外面にヨコハケが施されている。1101・1107・1108に線刻が施される。1061の基底部外面にはヘラ状工具を押しつけたような痕跡が認められる。1122は先にも述べたが朝顔形埴輪の中で唯一、形状を把握するに足る資料である。残高は73.6cmである。口縁部は下半に1条の突帯を貼付、先端は欠損するものの外反して立ち上がっている。胴部は丸みをおびているがあまり強く張らない。胴部下位から基底部も欠損するが、5条の突帯貼付が推定される。外面の調整は胴部上位に一部ヨコハケがみられるがその他はタテ、あるいはナメタテ方向のハケメである。

周埴出土の円筒埴輪 (1123~1155)

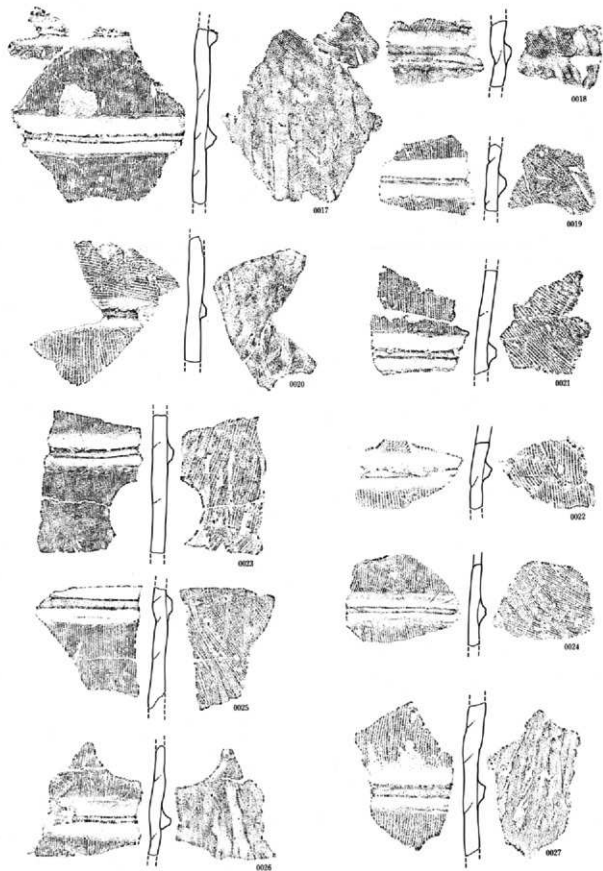
外堀あるいは内堀の外縁寄りから出土した資料である。32点を掲載した。特段、他の調査区出土資料との相違は認められない。出土量は極めて少量ずつである。中堤に円筒埴輪樹立の痕跡が確認されていないことから埴丘上に樹立されたものか何らかの理由で当該調査区中に埋没したものと考えたい。1123から1141は史跡整備調査時の拡張5区、外堀、中堤の前方部北西端方向から出土している。以下、北辺、東辺、西辺各所からの出土である。1123は口縁部II類のA3に、1153はA1に分類した。1151には線刻がみられる。1147は朝顔形埴輪の胴部破片である。

註1 森田久男、鈴木勝氏は「器形の大小にかかわらず、基底面からほぼ5センチ以内に第一段凸帯がつくものをいう。以下これを低位置凸帯埴輪と仮称する。」としている。「栃木県における後期古墳出土の埴輪の一様相」『栃木県史研究』第19号1980

1. 埴輪



第83図 前方部中央(前面)出土の円筒埴輪(1)



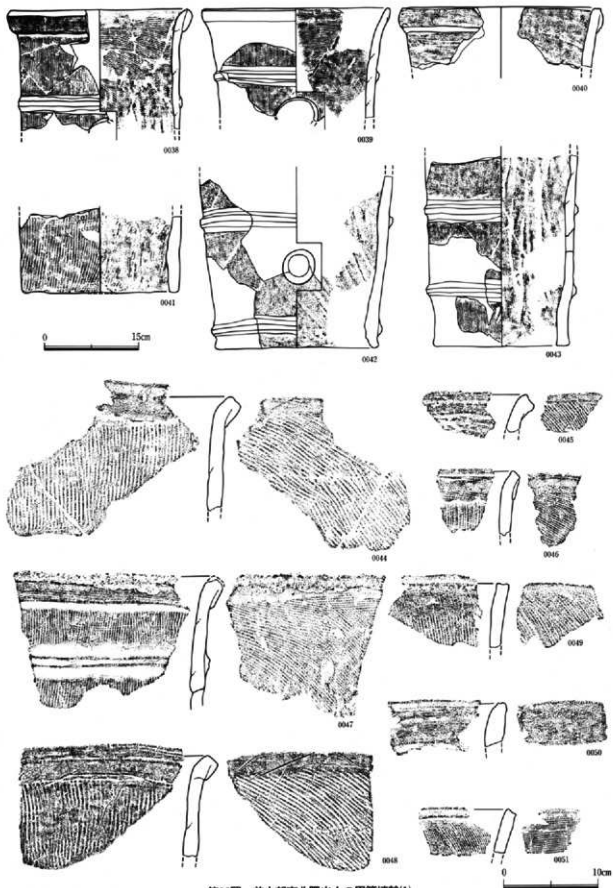
第84図 前中部中央（前面）出土の円筒埴輪②

1. 埴輪

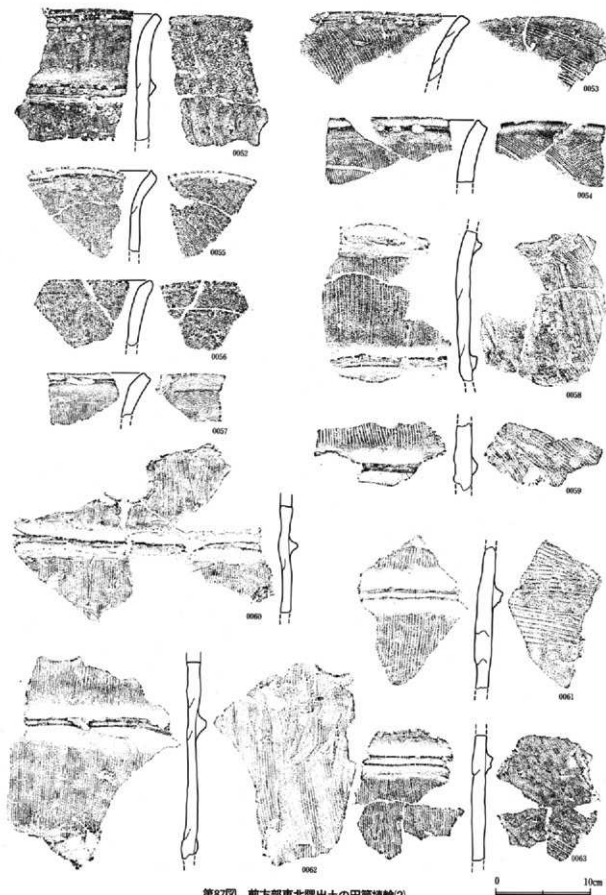


第85図 前方部中央（前面）出土の円筒埴輪(3)

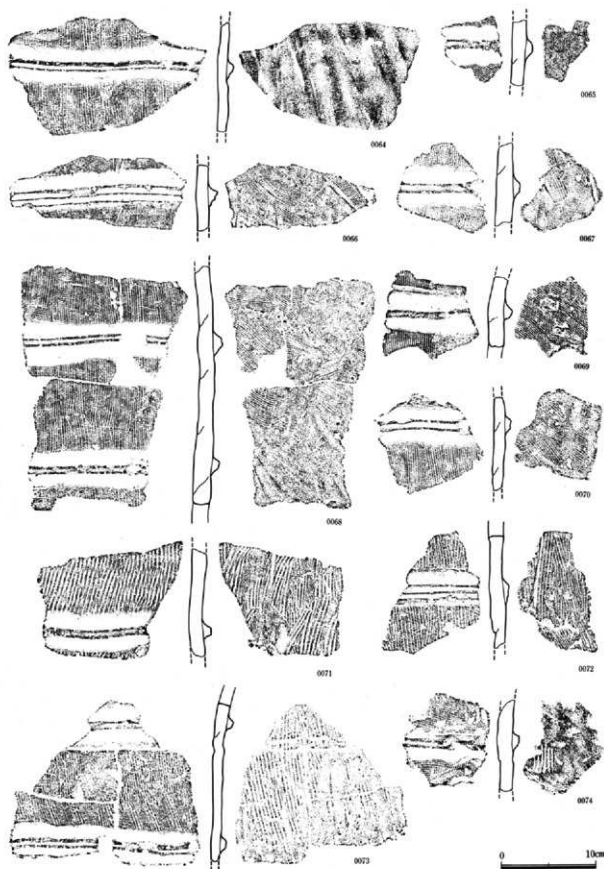
0 0.036 (1/4) 10cm



第86図 前方部東北隅出土の円筒埴輪(1)

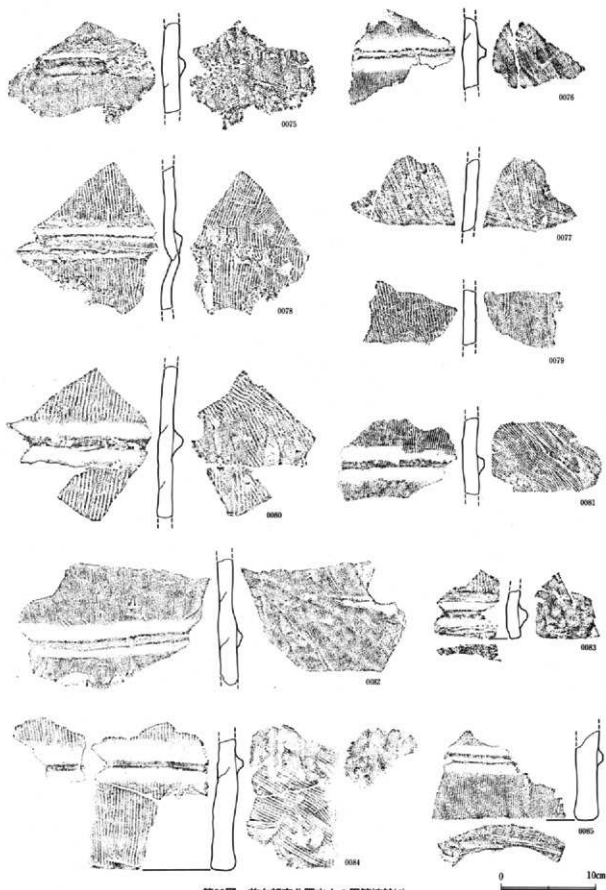


第87図 前方部東北隅出土の円筒埴輪②

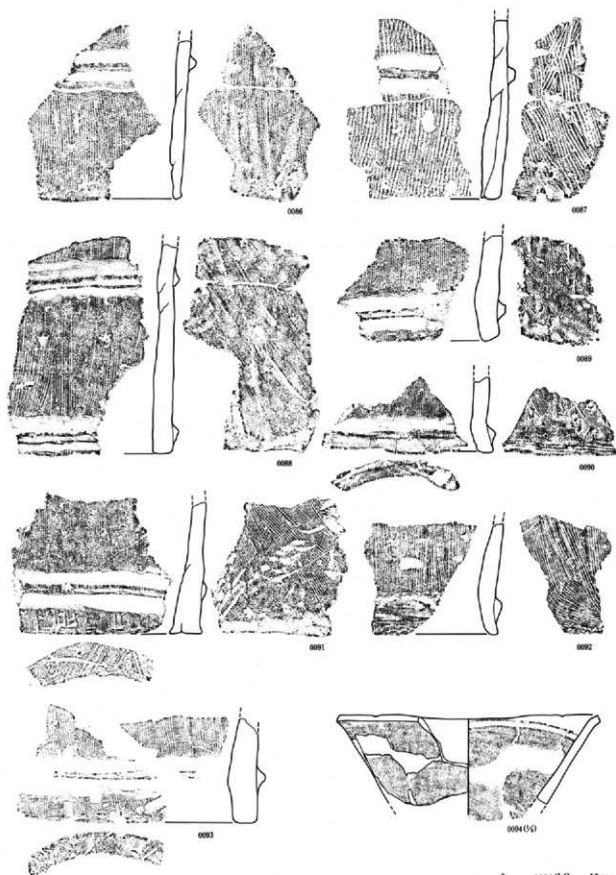


第88図 前方部東北隅出土の円筒埴輪(3)

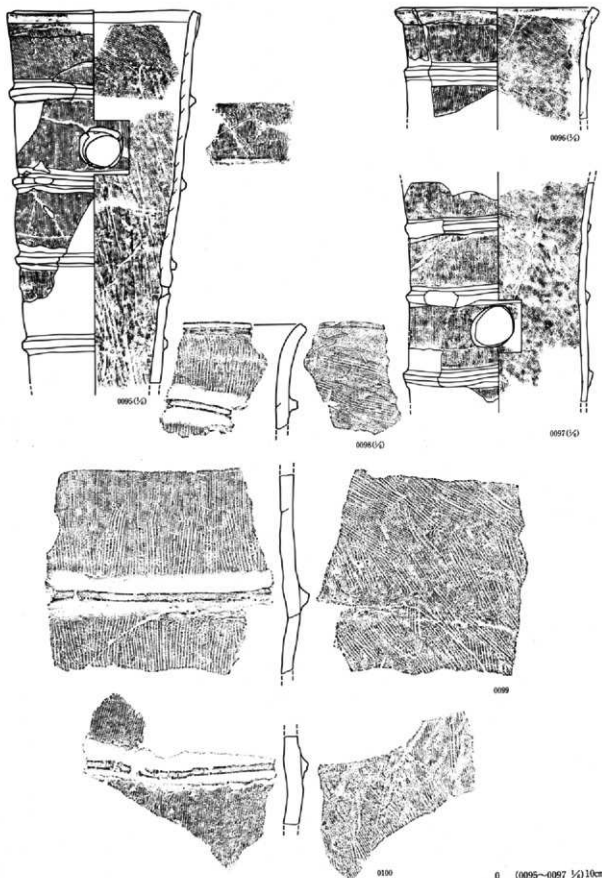
1. 埴輪



第89図 前方部東北隅出土の円筒埴輪(4)

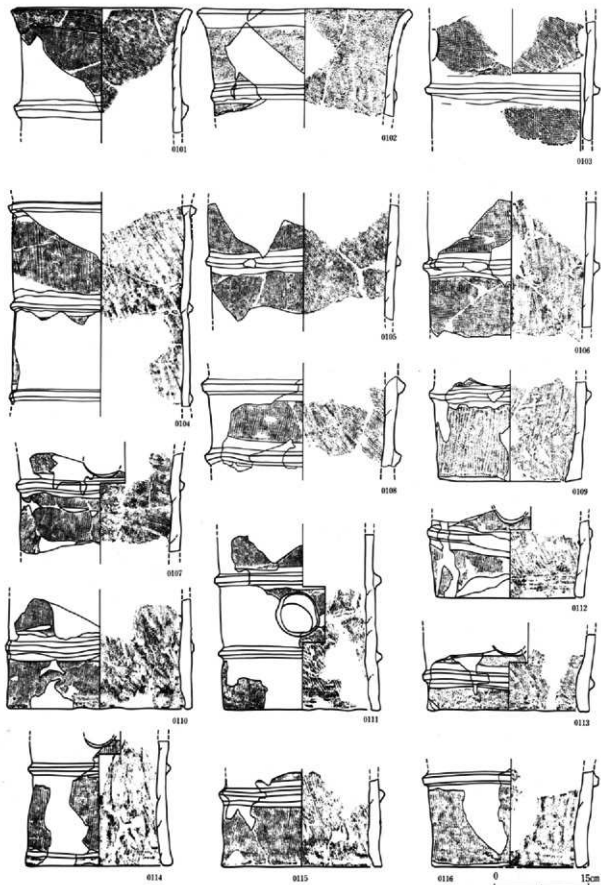


第90図 前方部東北隅出土の円筒埴輪(5)

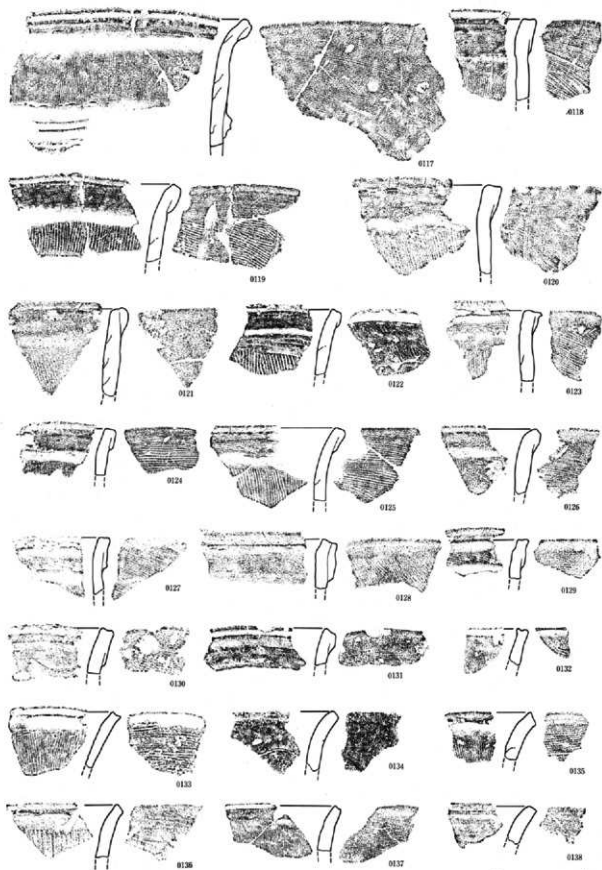


第91図 前方部東北隅出土の円筒埴輪(6)

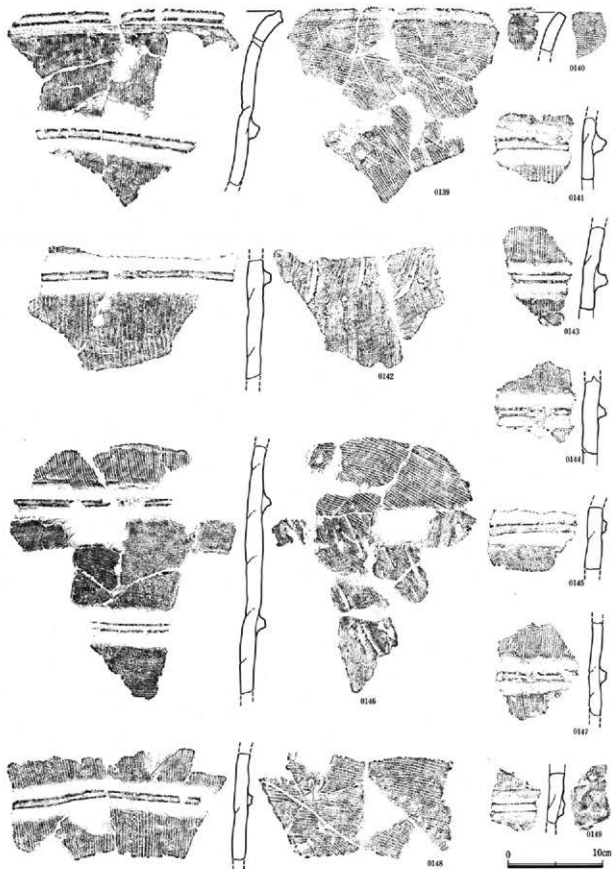
0 (0095~0097 1/2) 10cm



第92図 前部東側出土の円筒輪軸(1)

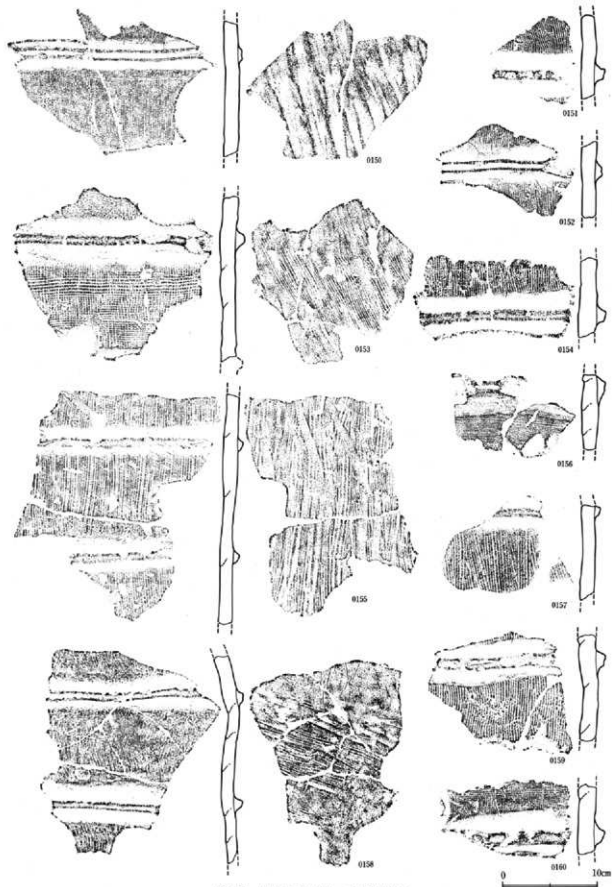


第93図 前方部東側出土の円筒埴輪(2)



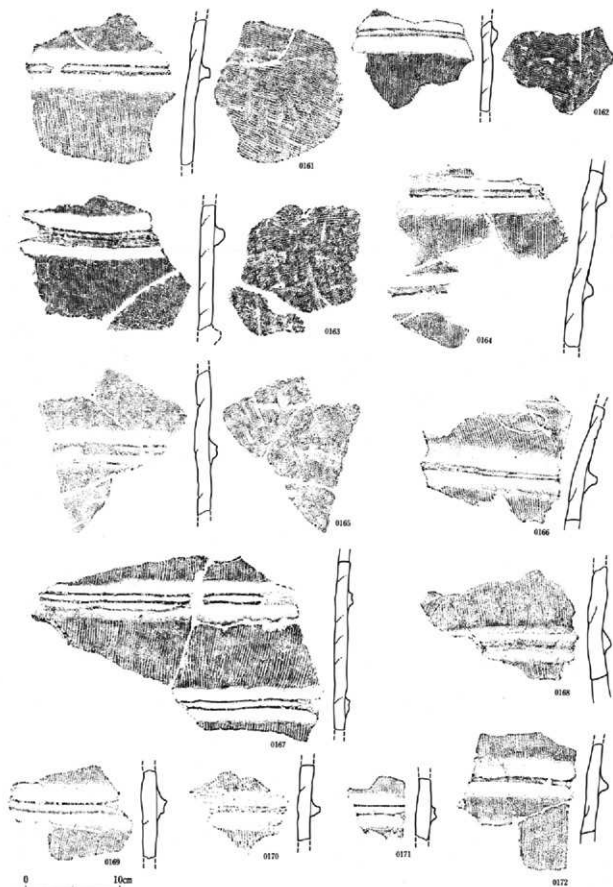
第94図 前部東側出土の円筒埴輪(3)

1. 埴輪



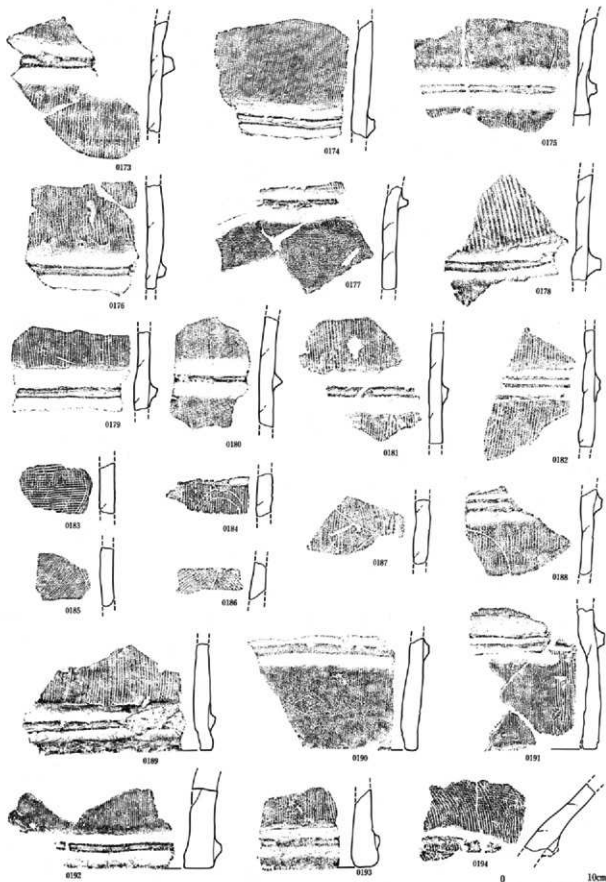
第95図 前方部東側出土の円筒埴輪(4)

第4章 出土遺物について

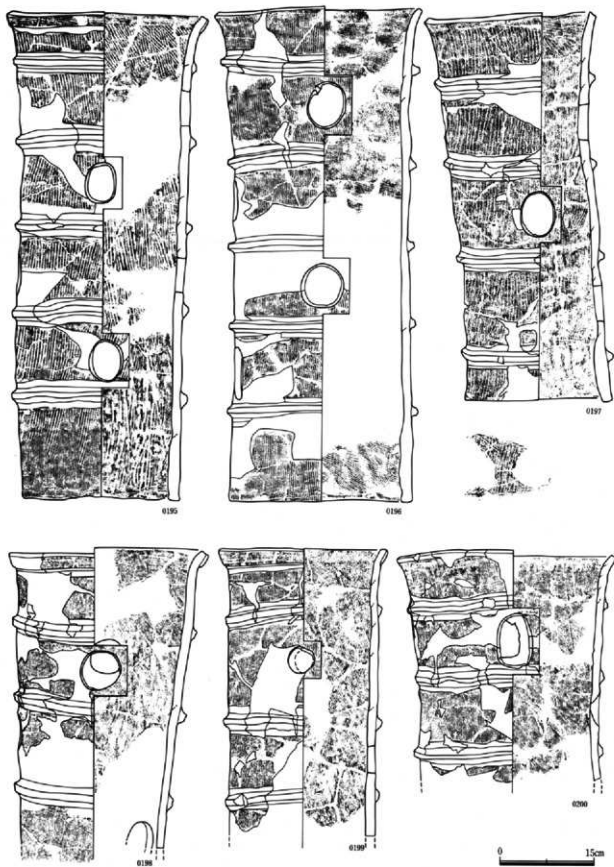


第96図 前方部東側出土の円筒埴輪(5)

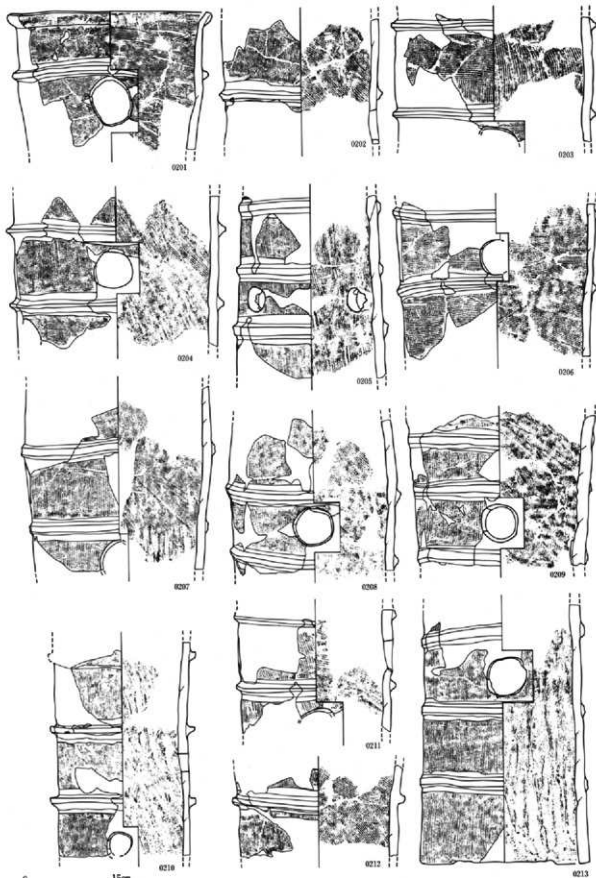
1. 埴輪



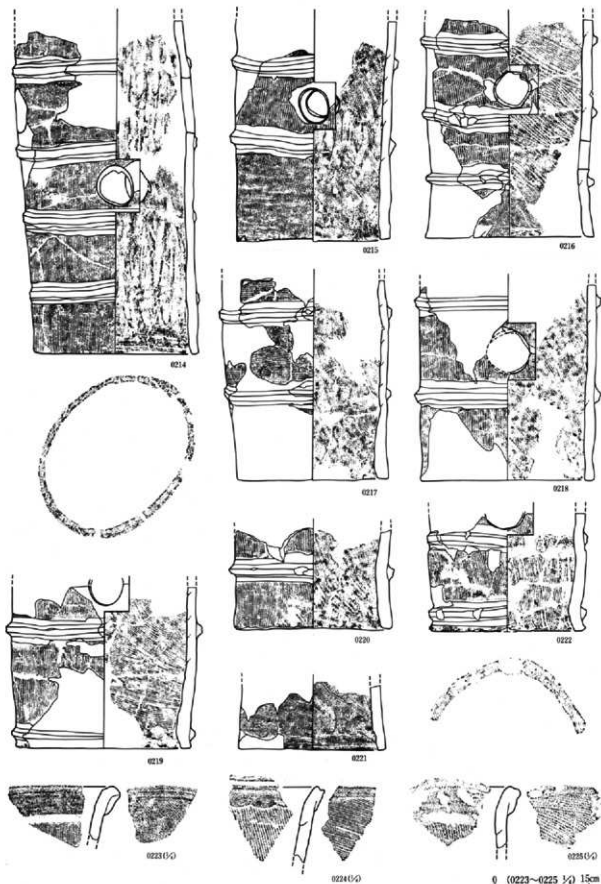
第97図 前方部東側出土の円筒埴輪(6)



第98図 くびれ部東側出土の円筒埴輪(1)

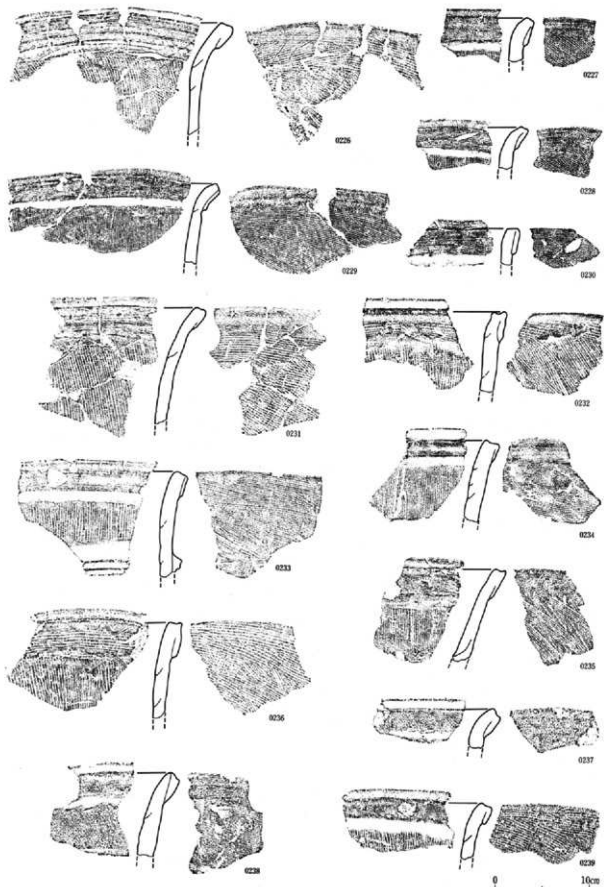


第99図 くびれ部東側出土の円筒埴輪②

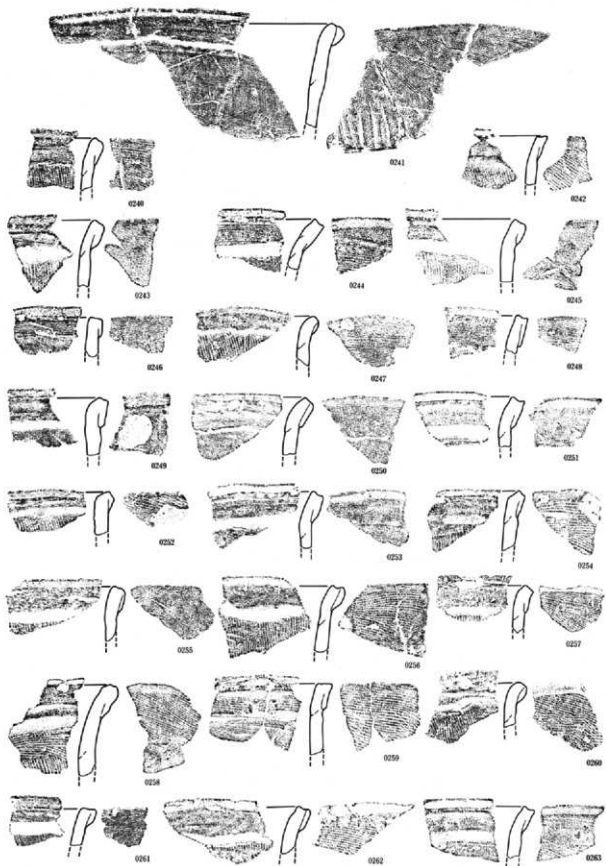


第1000図 くびれ部東側出土の円筒埴輪(3)

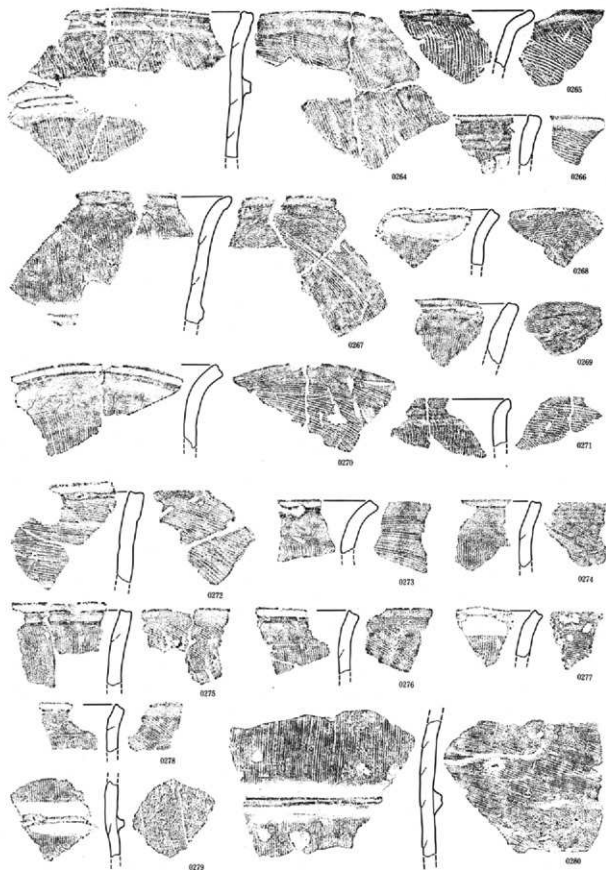
1. 埴輪



第101図 くびれ部東側出土の円筒埴輪(4)

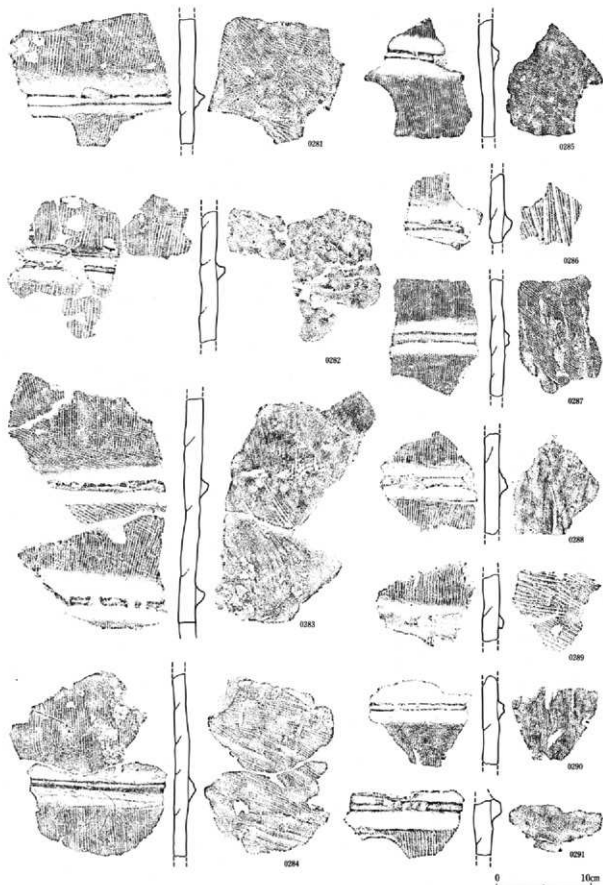


第102図 くびれ部東側出土の円筒埴輪(5)

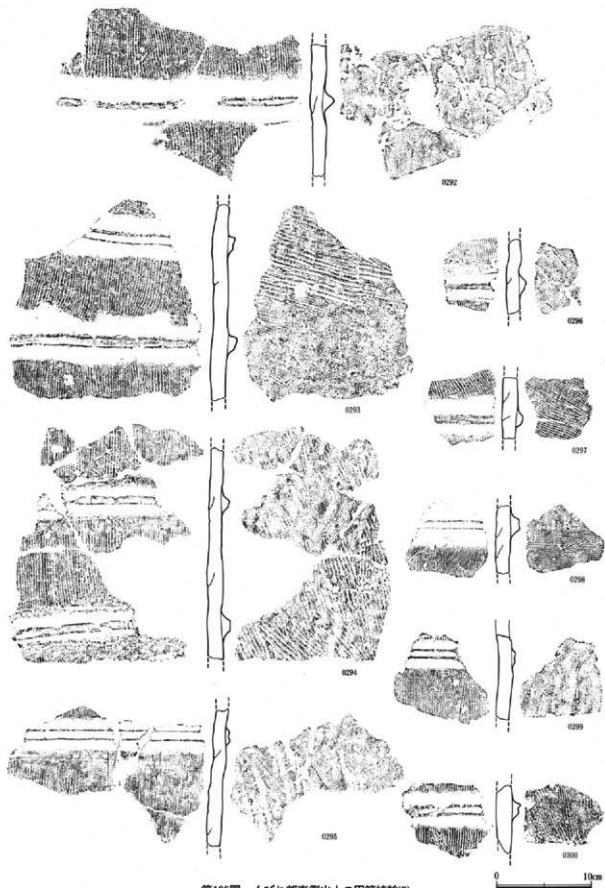


第103図 くびれ部東側出土の円筒埴輪(6)

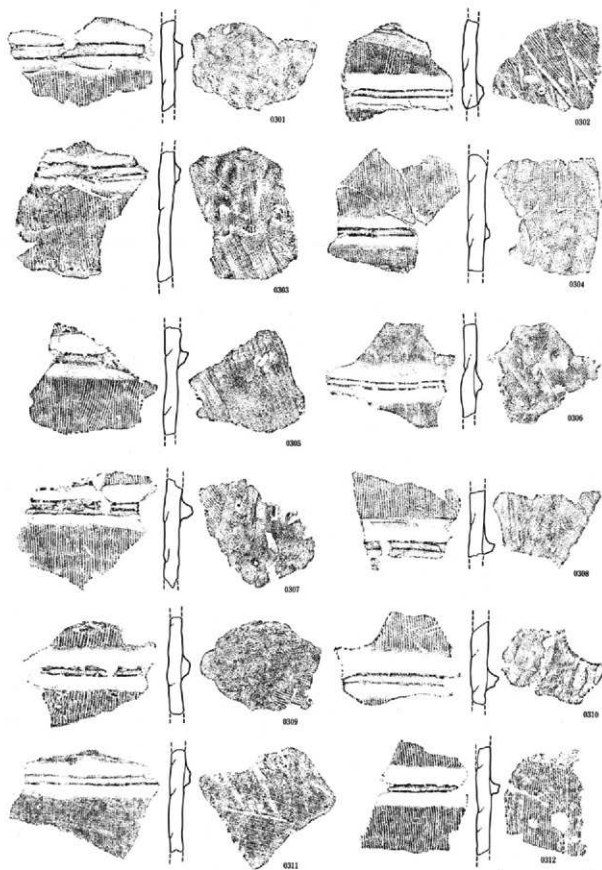
0 10cm



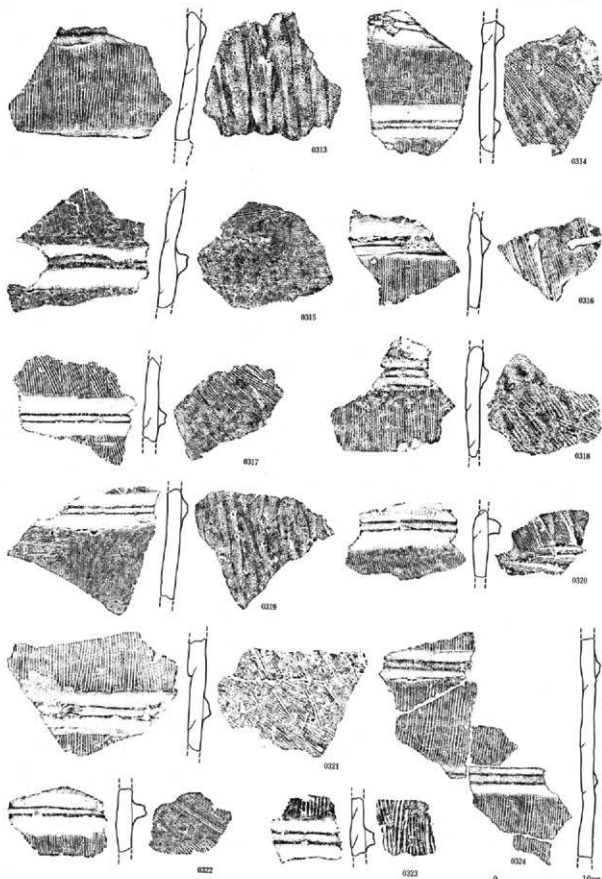
第104図 くびれ部東側出土の円筒埴輪片



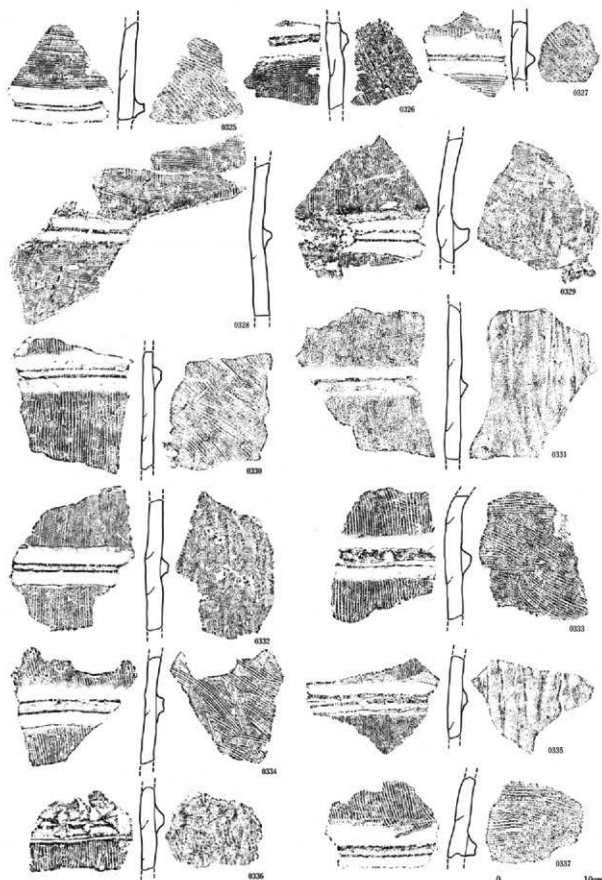
第105図 くびれ部東側出土の円筒埴輪(8)



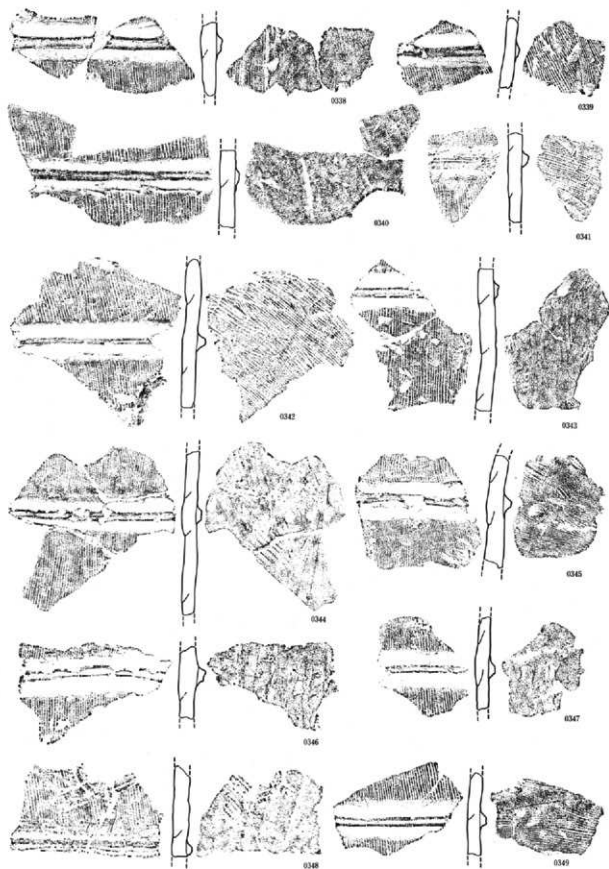
第106図 くびれ部東側出土の円筒紡輪(9)



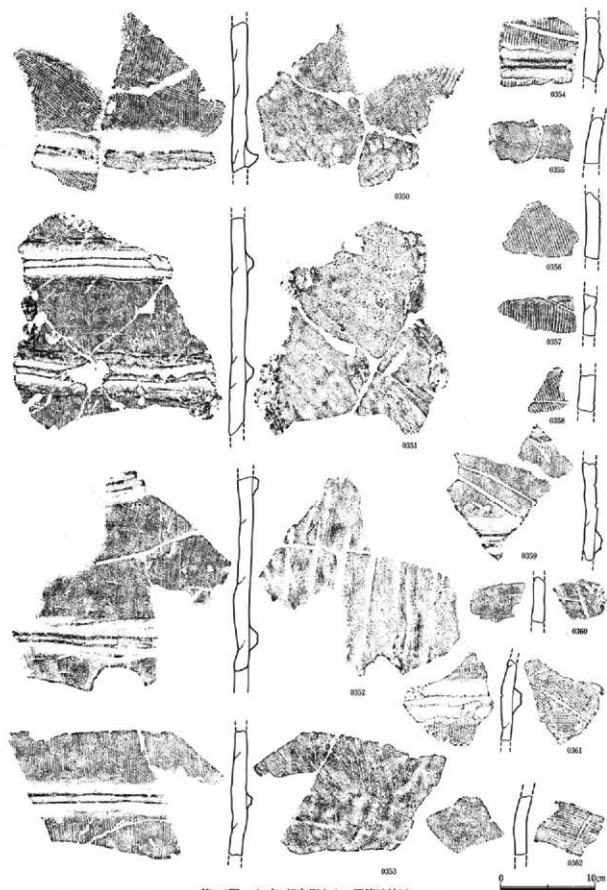
第107図 くびれ部東側出土の円筒埴輪10



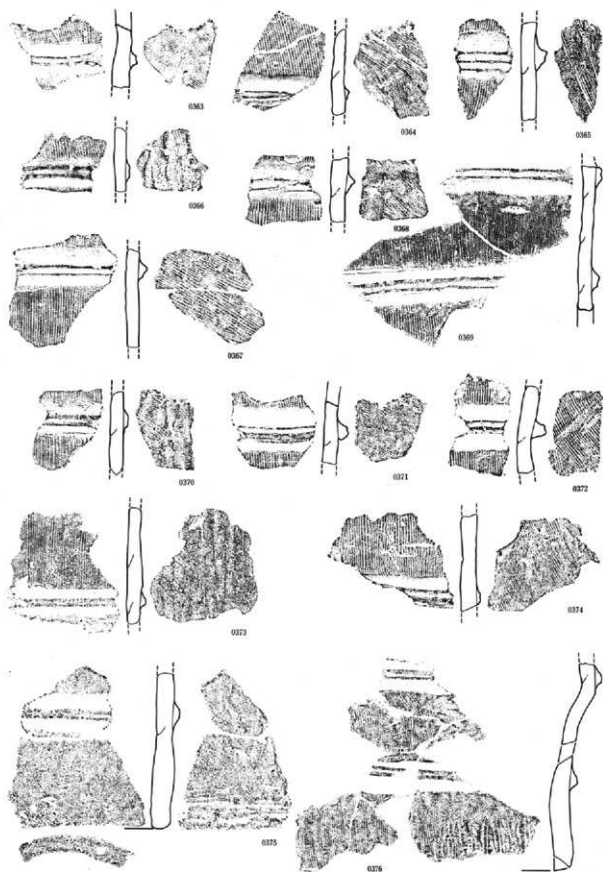
第108図 くびれ部東側出土の円筒埴輪①



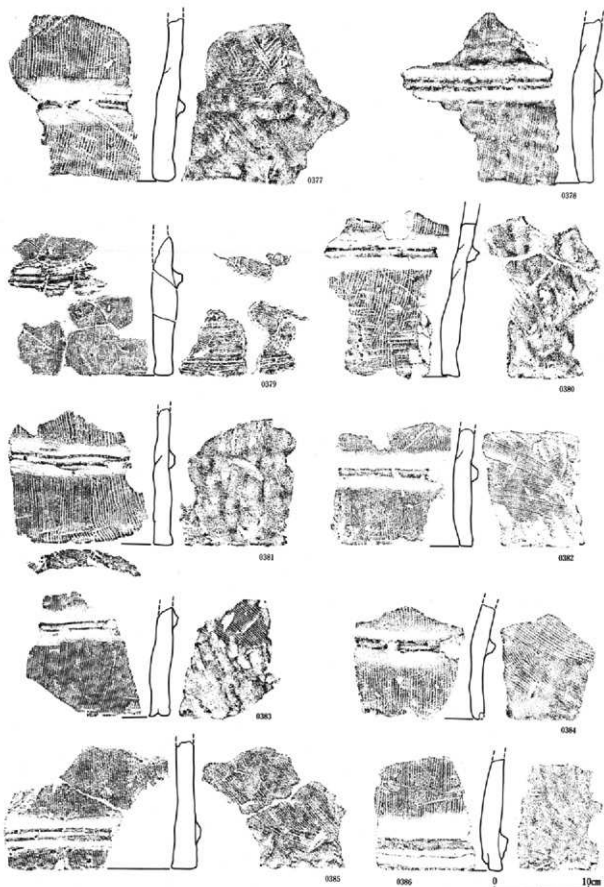
第109図 くびれ部東側出土の円筒埴輪輪辺



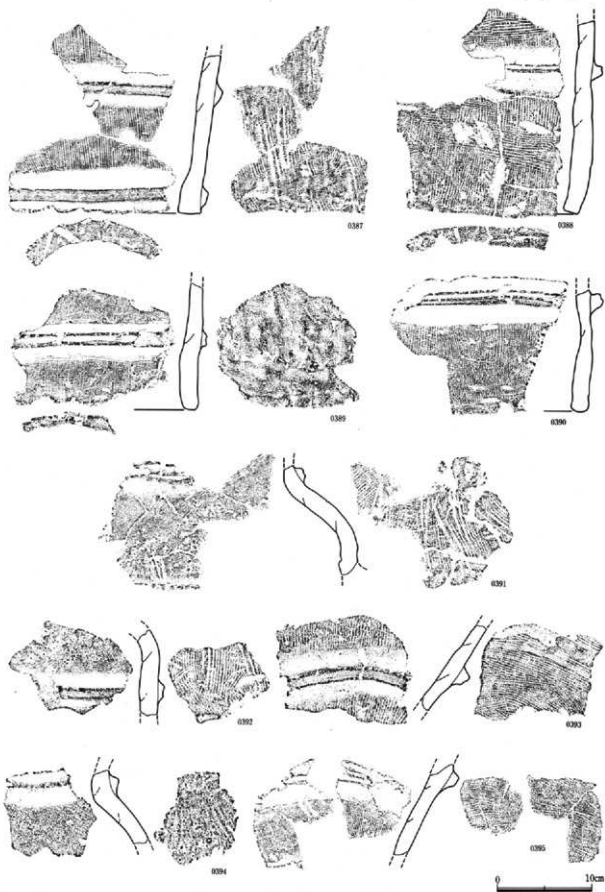
第110図 くびれ部東側出土の円筒埴輪33



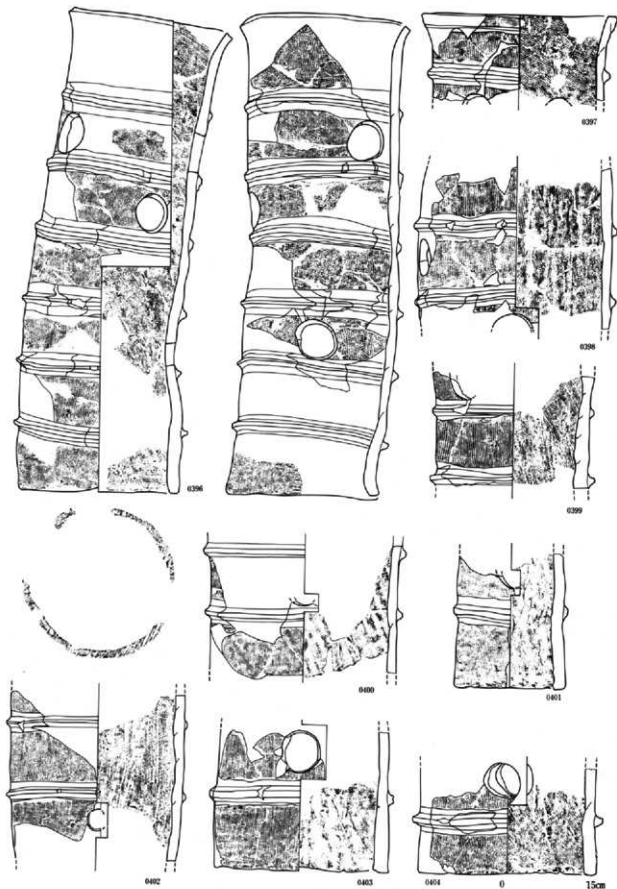
第111図 くびれ部東側出土の円筒埴輪14



第112図 くびれ部東側出土の円筒埴輪片

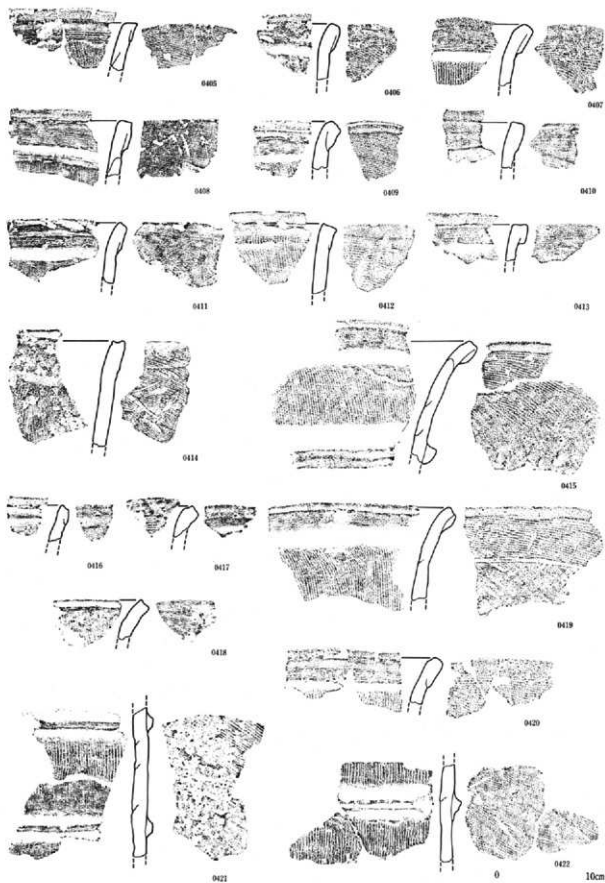


第113図 くびれ部東側出土の円筒埴輪16

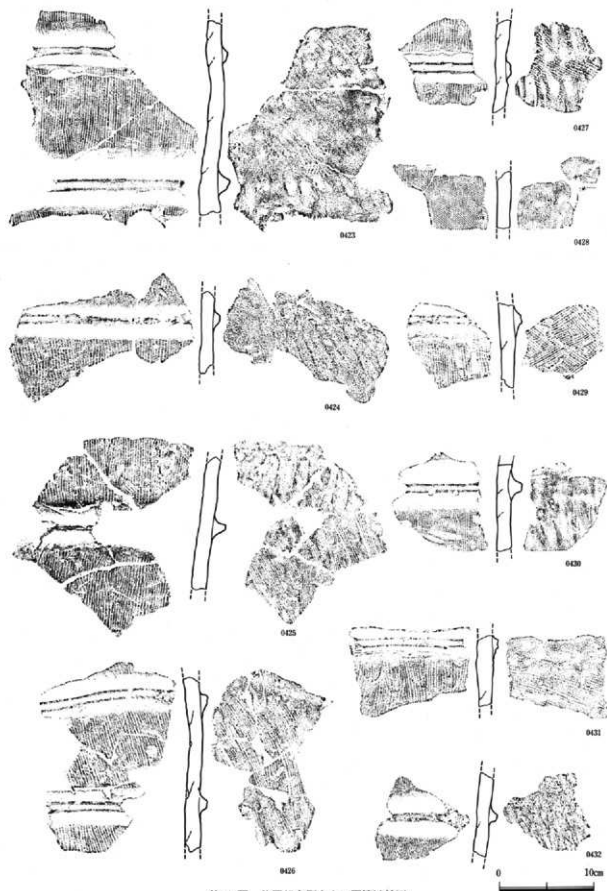


第114図 後円部東側出土の円筒埴輪(1)

1. 埴輪



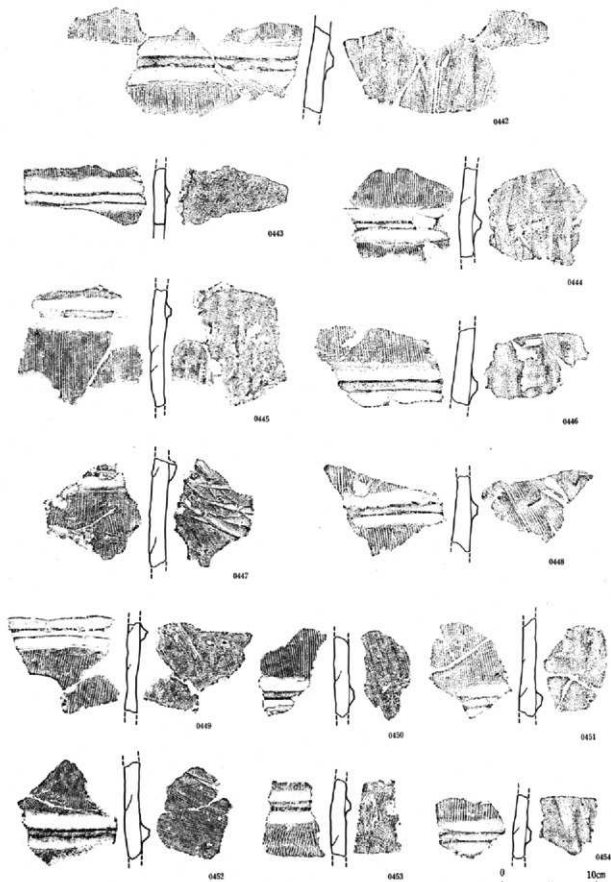
第115図 後円部東側出土の円筒埴輪(2)



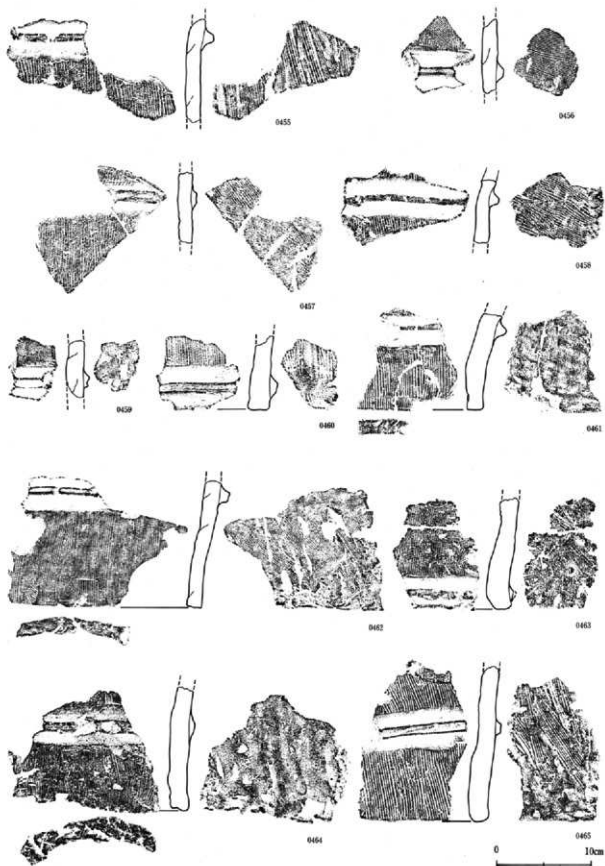
第116図 後円部東側出土の円筒埴輪(3)



第117図 後円部東側出土の円筒埴輪(4)

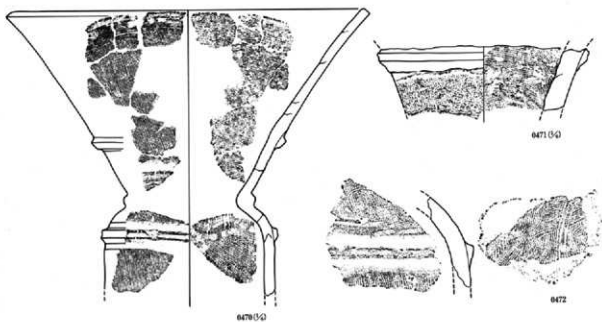
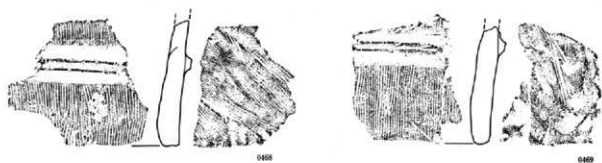
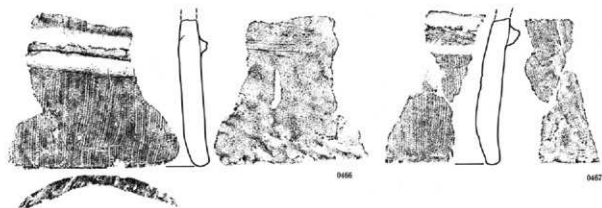


第118図 後円部東側出土の円筒埴輪(5)



第119図 後円部東側出土の円筒埴輪(6)

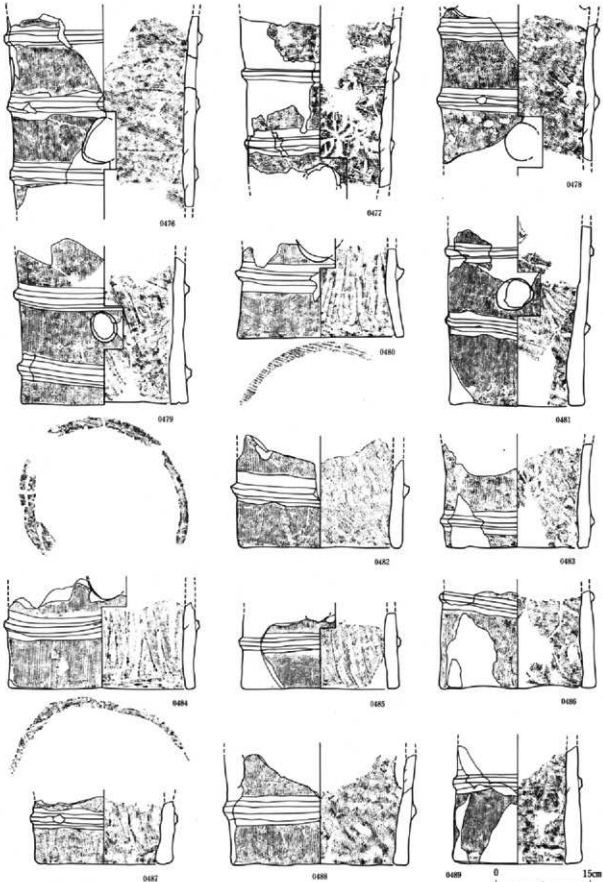
第4章 出土遺物について



第120図 後円部東側出土の円筒埴輪(7)

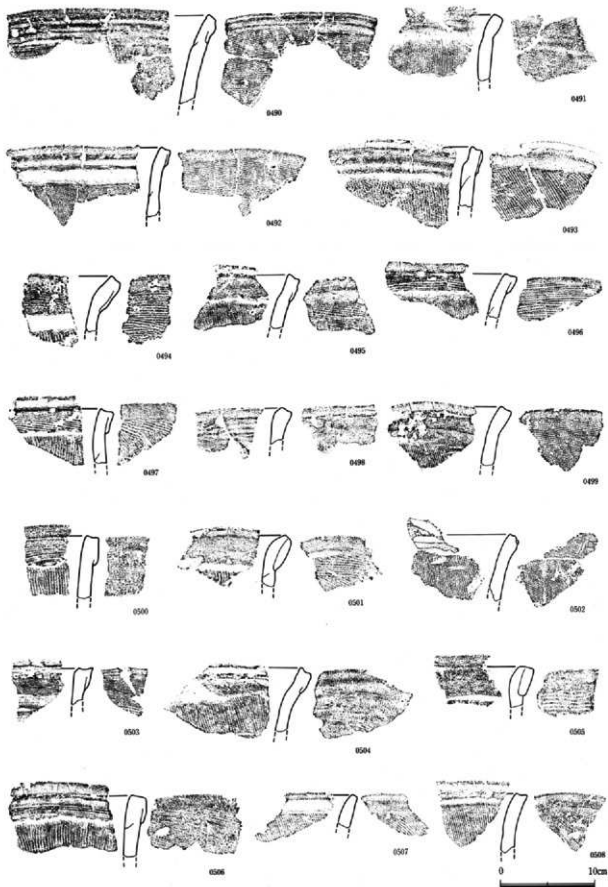
(0470~0471 1/2) 0 10cm

1. 埴輪

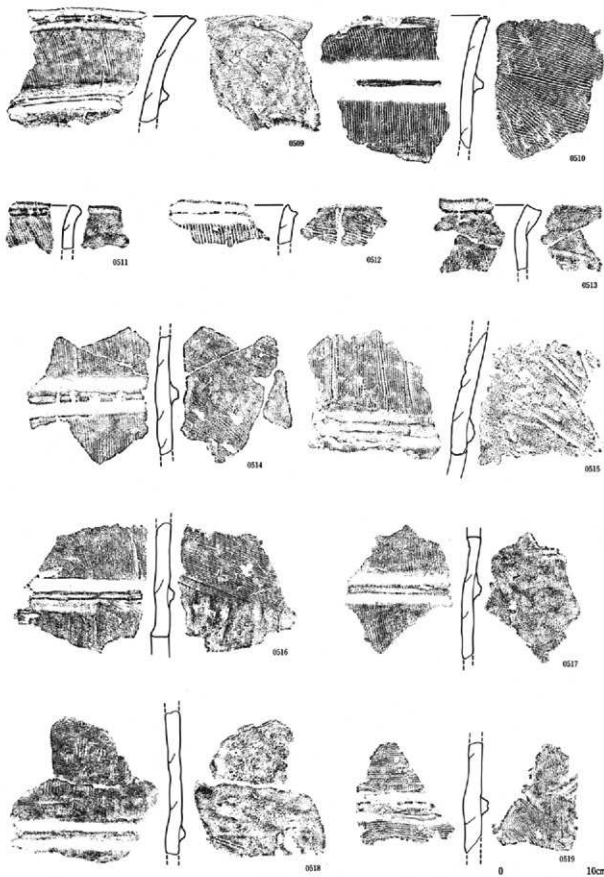


第121図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪(1)

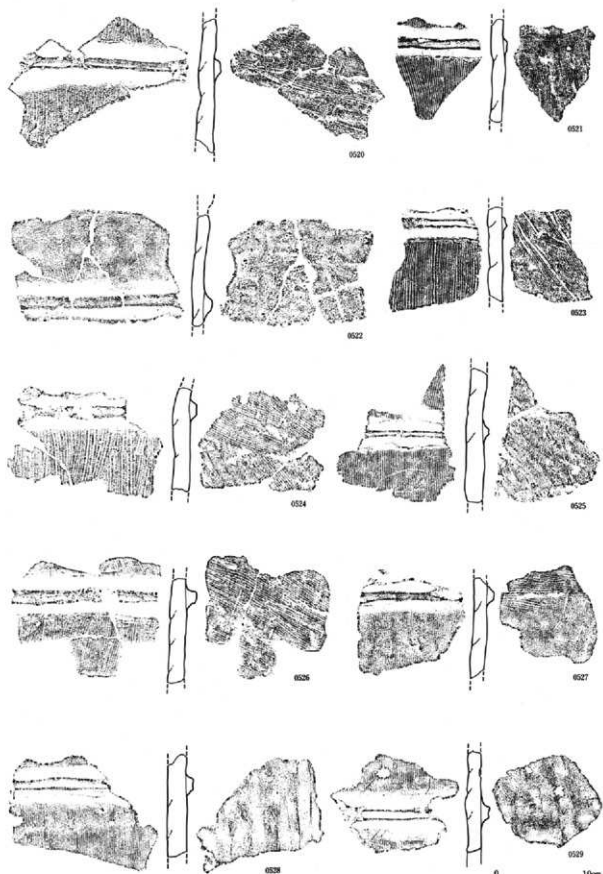
第4章 出土遺物について



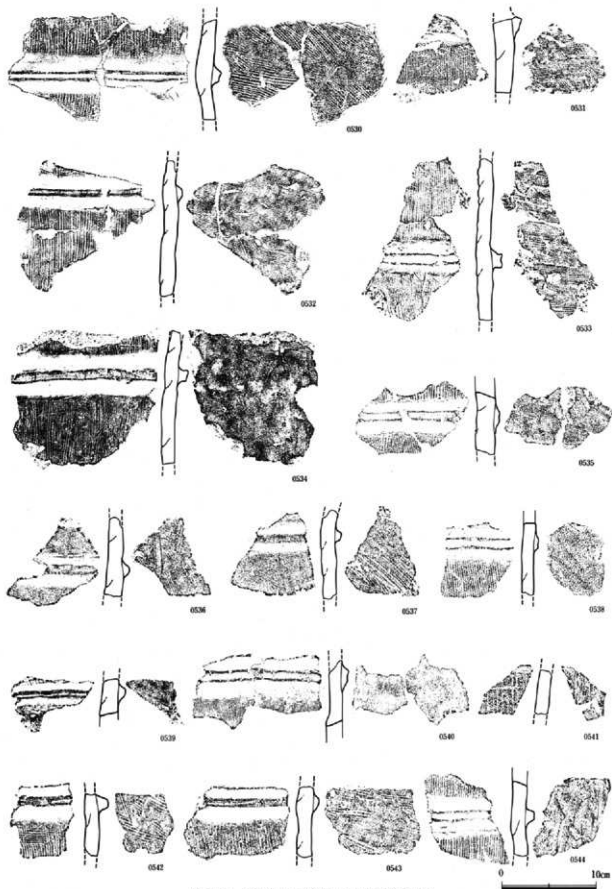
第122図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪(2)



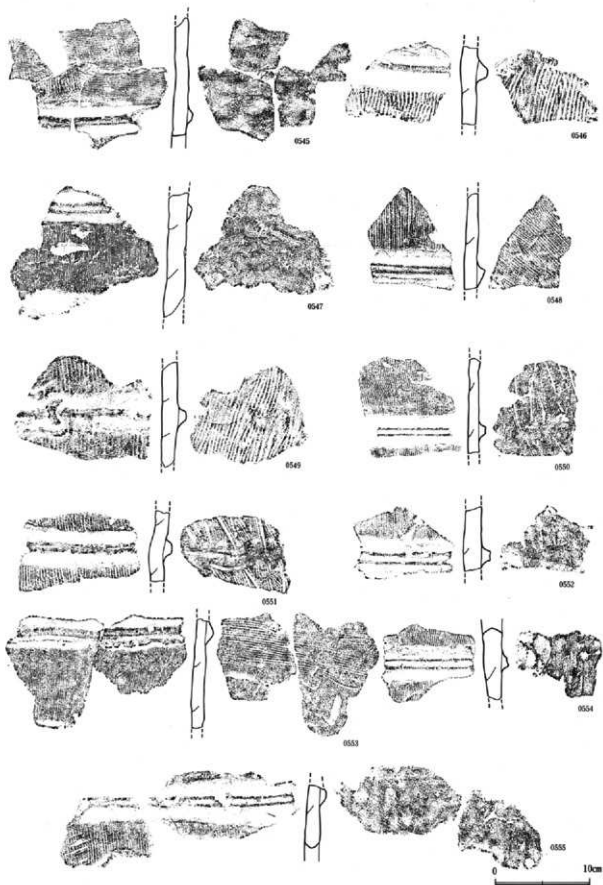
第123図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪③



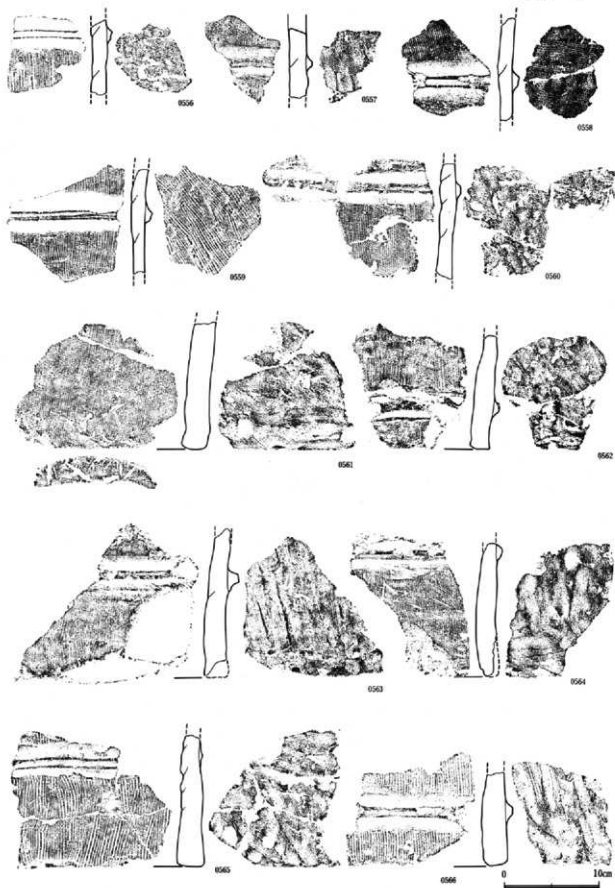
第124図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪(4)



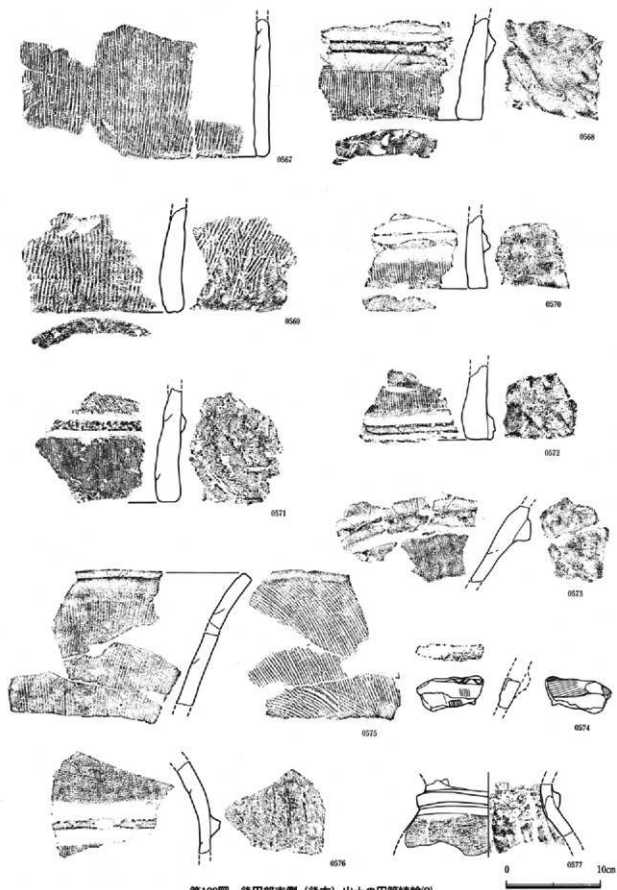
第125図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪(5)



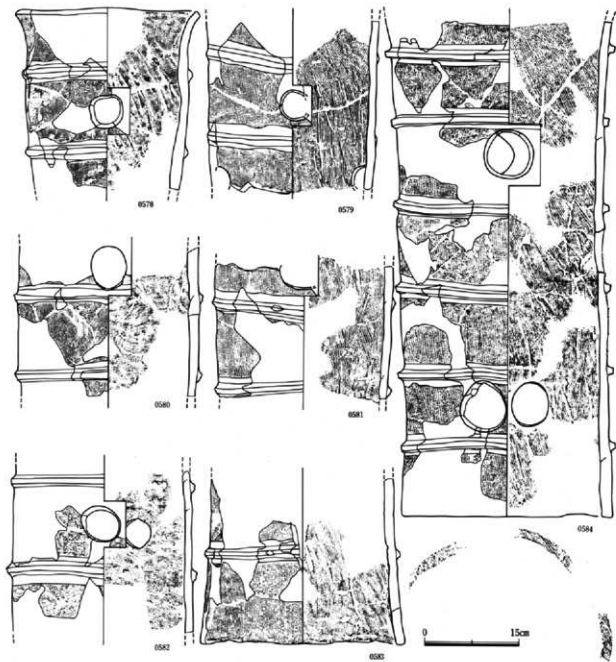
第126図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪⑥



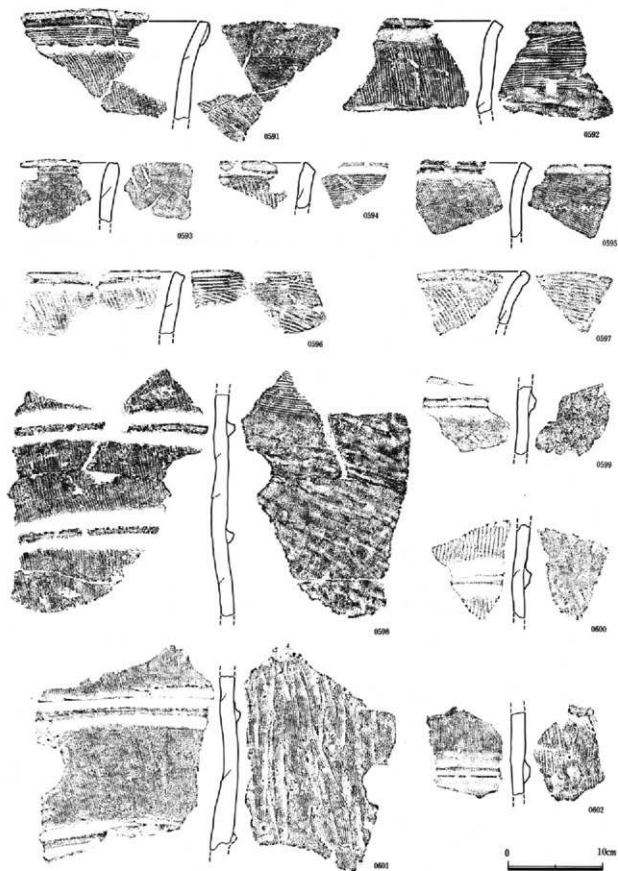
第127図 後円部南側（後方）出土の円筒埴輪(7)



第128図 後門部南側（後方）出土の円筒埴輪②

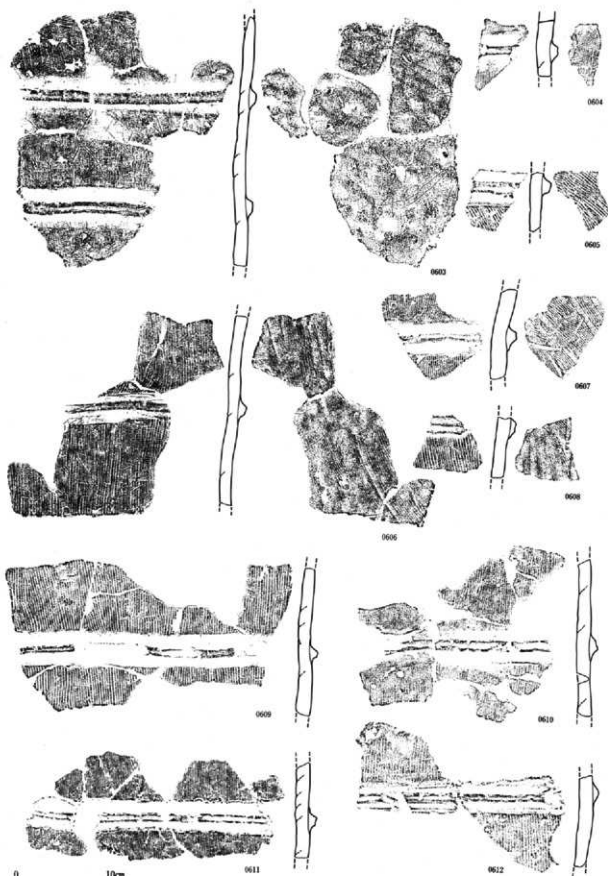


第129図 後円部西側出土の円筒埴輪(1)

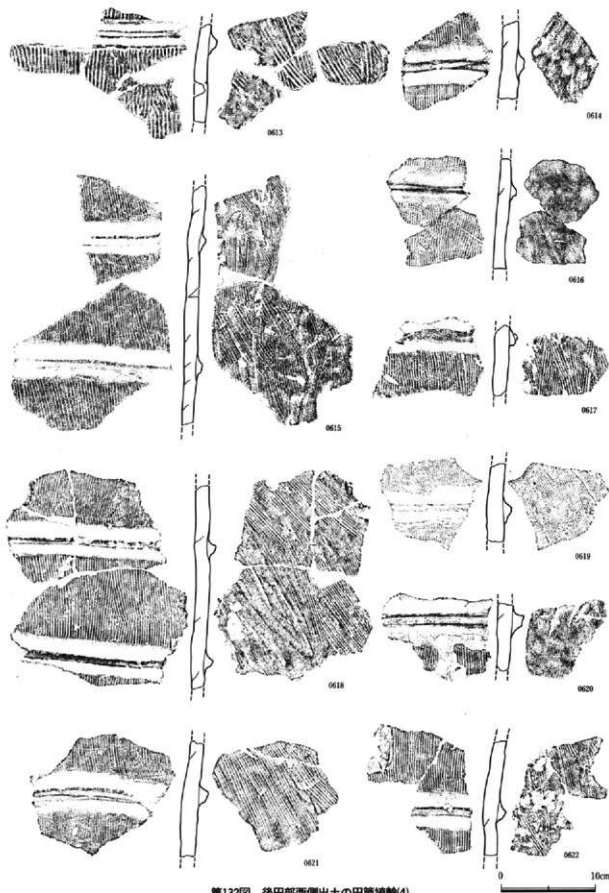


第130図 後円部西側出土の円筒埴輪②

1. 埴輪



第131図 後円部西側出土の円筒埴輪(3)



第132図 後円部西側出土の円筒埴輪(4)